

---

# さよなら僕の、ミス・エマーデイル

谷津矢車

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さよなら僕の、ミス・エマーデイル

### 【Nコード】

N7288E

### 【作者名】

谷津矢車

### 【あらすじ】

この春に「熱血学園高校」などという嘘くさいネーミングの高校に入学した「僕」。けれど、「僕」の前には平凡で抗いがたい日々が待っていた。そんな僕の前に、ある日“ミス・エマーデイル”を名乗る少女が現れる。……「僕」の過ごしたつまらない、けれどもどこか甘酸っぱい日々。

## プロローグ【1】

Goodbye, my Miss Emmerdale.

ミス・エマーデイルが僕の前から姿を消してしまってから、つまりは、全て事が済んでしまってから、僕は様々な外国語辞典を当たってみた。元々歴史以外の勉強、特に英語が嫌いな僕にとって、外国語辞典なんて興味から一番遠いものだったけれど、僕はどうしても知りたかったのだ。“エマーデイル”という言葉の意味を。

学校にある図書館で、色んな辞典をひっくり返してみたのだけれど、“Emmerdale”なる単語は、どの辞典にも載っていないかった。もしかして、造語なのだろうか。そう思い至った僕は、辞典を投げ出そうとしていた。けれど、そんな僕の様子を何処で見ていたのか、僕の担任で英語教師の田村先生が僕に声をかけてきた。

「何を調べてるんだ？」

妊婦さんのようにお腹が張り出した田村先生は、夏とは言えどこまで垂らさなくていいんじゃないか、というくらいに脂汗を滲ませていた。そんな田村先生にちよつと不快感を覚えつつも、僕は“ある言葉の意味を知りたい”という旨を話した。すると、田村先生は、額に滲んだ汗を、既に濡れて色がくすんでしまっているハンカチで拭いてから僕に言った。

「もしかしたら、お前が探そうとしている言葉は、かばん語なんじゃないか？」

「かばん語？」

「ああ、『鏡の国のアリス』の作者、ルイス・キャロル、って知ってるか？」

僕が首を横に振ると、いやに嬉しそうな顔を浮かべて、田村先生

は言葉を重ねた。

「ルイス・キャロルっていうのは、言葉遊びに特徴のある文学者だな。かばん語、っていうのは、ルイスの考えた有名な言葉遊びだ。2個の単語を、単語間で共通する子音か母音で繋いで一つに融合させて意味を重ね合わせる、っていう言葉遊びだ。……お前には、難しかったかな？」

その田村先生の言葉は、僕の“Emmerdale”の意味探しの旅に、ちょっとした指針を与えた。

そう、僕は、エマーデイル、という言葉が、一単語だとばかり思っていたのだ。耳で聞いていた言葉だから、もしかしたら二語で成立している言葉かも知れないという可能性が頭から抜け落ちていたのだ。

そのことを踏まえつつ、また辞書を開いてみたら、すぐに意味が判った。

【emmer】 名詞 エンマ麦

【dale】 名詞 (北イング 詩) 谷 (= valley)

そう、日本語に訳せば、「エンマ麦渓谷」とでもなる。

でも、なんだか釈然としなかった。あの、不思議で奇妙な女の子が名乗った名前の割には、なんだか野暮ったい意味だったから、どうにも納得できなかったのだ。

だから、とりあえずこの調査結果は置いておいて、またもや言葉の海に乗り出していった僕。分厚い辞書をパラパラとめくる僕。もし傍から見たら、きっと僕はガリ勉君に見えるだろうな、と、周りに見えている自分の姿を想像している頃に、ある言葉が目に入った。

【emmerde】

思わず僕は背表紙を見た。「仏和辞典」、つまりは、フランス語らしい。さつき目を通したときには気づかなかったけれど、どうしてこんな“Emmerdale”によく似た言葉を見過ごしていたんだろう？ ……即座に、いや、それは僕がバカだからだ、と一人

突っ込んだ僕は、その単語の意味を目で追った。

【emmerde】 「女」 「話」 うんざりさせること

ああ、ぴったりだ。僕は思った。

これ以上ないくらい、ミス・エマーデイルにはぴったりに思えた。でもなあ、と僕は頭を掻いた。

フランス語の読みだと、どうやら“emmerde”は、エメルド、とても発音するようだ。それに、“ale”はどこに行ってしまっただろう？

そう首を傾げる僕に、田村先生の言葉が浮かんた。

『かばん語なんじゃないか？』

そうか。もしかして、“Emmerdale”というのは、かばん語なんじゃないか？フランス語の“emmerde”と、英語の“dale”に共通する“d”でくっつけた、かばん語なんじゃないだろうか。

そう考えてみると、一本の糸に繋がった。

“emmerde” + “dale” = “Emmerdale”、つまり、

“うんざりさせること” + “谷” = “うんざりさせる谷”

これ以上なく、ぴったりに思えた。

ふと、ミス・エマーデイルの言葉を思い出した。

『私は、ミス・エマーデイル。私は、あなたの倦怠そのもの。そして、あなたを倦怠の底まで誘う者』

そう、まるで古い英国詩を朗読するかのような、あるいは古い魔法の言葉を語るかのような格調でその言葉を語るミス・エマーデイルの顔もまた、僕の脳裏に蘇った。

この結果を以って、僕の“Emmerdale”の意味探しの旅は終わった。

危うく、“エンマ麦の谷”にされそうだった“Emmerdale”という言葉は、“倦怠を誘う谷”という、しっくりくる意味を与えられて、僕の頭の中の辞書に書き加えられた。

本当は、“エンマ麦の谷”のほうが正しいのかもしれない。でも、そんなの、僕には関係ない。だって、僕の目の前に現れた“Emmerdale”は、エンマ麦の香りなんてしなかった。むしろ、不自然なまでに透明で、そして魅惑が潜む、倦怠の香りがした。僕にとつて、“Emmerdale”という言葉は、ミス・エマーデルの振りまくカモミールの香り、引いては、彼女の作りだす“倦怠”の空気を思い起こさせるのだ。なら、僕の頭の中にある辞書でくらい、“Emmerdale”の意味が本来の意味とズレていたつて、問題ないだろう。

ミス・エマーデルが僕の前から姿を消して、もう2ヶ月になる。この2ヶ月、僕はずっと考えた。ミス・エマーデルが何者だったのか。そして、彼女が僕を、何処に連れて行こうとしていたのか。でも、頭の悪い僕がどんなに思いあぐねても、ミス・エマーデルの正体も、目的も、彼女が語っていた以上の事は見当がつかない。でも、そんなバカな僕でも、判ったことが2つある。

一つ目は、ミス・エマーデルは確かに僕の前に現れて、そして僕の前から去って行った、という揺るがしのない事実。そして、二つ目は、きつとある一時期、僕は彼女の瞳に淡い恋心を抱いてしまっていた、という単純な事実。その二つの、きわめてシンプルな事実が、夏風と陽炎が舞うこの時期になっても、僕の心を締め付けるのだ。

だから、僕は語ろうと思う。あの春の日に現れた、不思議な女の子の話を。きつとそうすれば、あの娘の影も、僕の脳裏からも消えてくれるんじゃないか、と信じて。

僕は、彼女への想いを頭から消してしまわなくてはならない。だって、彼女の言うことが全て正しいとするのなら、彼女に心を奪われたら最後、僕は死んでしまうのだから。

僕は、語る。ミス・エマーデルのことを忘れるために、彼女のいた頃の風景のカケラを、言葉で紡ぐ。

春風が、不意に教室に入り込んだ。その風は、教卓の上に置かれた英語のプリントとともに、教室に居座っていたダルい空気を舞い上げる。黒板の方を向いて、ミミズのような文字を書いている田村先生は、あわててそのプリントを拾おうとするけれど、田村先生のお腹が張り出しているせいで、どうにも上手く行かない。まるでゴム鞠が転がるようにしか動けない。それを、教室の後ろの方の生徒が囁すように笑うと、田村先生は顔を真っ赤にして怒った。そして、一番前の席の窓際にいる僕に八つ当たりしてきた。

「おい！　そもそも、授業中に窓を開けておくバカがあるか！」  
僕はその時、英語のノートに単語を書き連ねているところだった。単語、と言えば聞こえがいいけれど、実はそれは、田村先生が授業中に口走った、特に意味の無い言葉たち、もつと有り体に言ってしまえば、先生の口癖の類だった。そんなわけで、僕のノートの右の端っこには、『そもそも』という言葉が既に書かれていた。

ノートから視線を窓の方にやった僕は、ため息をついてから席を立ち、窓を閉めた。窓を閉めるその瞬間、風が僕の顔と長袖Tシャツを撫でていった。窓に鍵をかけるときにふと外の景色を眺めると、男子上級生がハンドボールをしていた。その動きはぎこちなくて、見ているこつちがやきもきするようなものだったけれど、こうやって窓を閉める作業よりは、幾分楽しそうだった。

席に戻った僕は、頬杖をついて、黒板を眺めた。黒板には、右から、『5月7日（土）　日直　斉藤』、真ん中にはこれ以上なく崩されたアルファベットの羅列、そして左には、今年入部人数が少ないと評判の、バドミントン部の入部募集の張り紙がされていた。そして、その黒板を遮るようにして、田村先生が「そもそも」を連呼しながらアルファベットの羅列に意味を与えようとしていた。でも、クラスの皆はもはや田村先生を見ていなかった。みんな、田村先生の頭上にある、丸い以外に目立った特徴のない時計に視線を集中させている。長い針がぐぐぐと動く瞬間。その瞬間を、まるで宇宙が誕生する瞬間に立ち会う科学者であるかのようにして、皆固唾を

呑んで待つ。

ぐぐぐつ。

時計の針が、定時を指したその瞬間、皆が待っていた音が、スピーカーから流れた。

キンコンカンコンコン。

「でな、この“an”はそもそも……、って、あ、もうこんな時間か。よし、今日の授業はこれまで。今日の範囲、しっかり復習しておくように」

「はい！」

教室の生徒たちは先生の言葉に、従順に声をあげる。ただし、僕を含めた生徒達が同意したのは、“今日の範囲をしっかりと復習する”ということではなく、“もうこんな時間”という部分なのだけだ。

そんなことを露も知らない先生は、プリントや出席簿を手早く手元を集めると、まるで生徒達に追い立てられるかのように教室から出てゆく。そして、その先生が出て行ったのを見計らうようにして、皆弁当を出したり、前の時間の休み時間にコンビニで買ってきたおにぎりを出したりしだした。

僕もそんな教室の雰囲気之急かされるようにして、かばんに英語の教科書とノートを突っ込み、そしてその代わりにコンビニ袋を出した。中には朝に買った、焼きそばパンが入っている。

そして、その袋から焼きそばパンを出した頃、背中の方から声が届いた。



## プロローグ【2】

「よお。焼きそばパンとは粗食だなあ」

人を揶揄するような口調なのだけれど、その声の幼さのおかげで毒気がまるでない。それに、この声の主はそもそも毒というものがない、ということを経験的に知っている僕は、言葉にイヤな感じを受けなかった。

「なんだ、マサルか」

僕が振り返ると、やつぱりいつものマサルが立っていた。長袖シャツにジーパン、みたいな僕の服装とは違い、ビシッと決まったシツクなワイシャツに、少なくともジーパンではない、細いパンツを履いている。そして、髪を目にかかるくらいに伸ばして、ワックスが何かでポリウームを出している。染めているのだろう淡い茶色の髪が、彼の薄い顔によく似合った。僕はファッションには疎いけれど、このファッションはきつと見る人が見れば洗練されて映るんだろうな、ってその僕に思わせるくらいに、マサルの格好は彼のキャラクターと合っていた。特に、軽そうな感じが。

「なんだとはなんだよ！ まったく、失礼な奴だな」

軽口を叩くマサルは、僕の隣の席（この席にいた子は、もう既に学校を辞めてしまったらしい。けれど突然のことだったので、席が空いているのだ）から椅子を持ってきて、僕の席の右横に置くかどうかと座った。そして、手に持っていたビニール袋をまさぐった。そうしてマサルが取り出したのも、何の変哲もない焼きそばパンだった。

「なんだ、マサルも焼きそばパンじゃないか」

そう、僕が言うと、手を振ってマサルは反論した。

「バカを言え！ この焼きそばパンは、コンビニの焼きそばパンなんかとは訳が違っただぞ！ 座山駅近辺にある、テレビにも出たパン屋さんの、限定30個のパンなんだぞ！」

「へえ、これがねえ……」その焼きそばパンを、僕は眺める。けれど、どう見てもただの焼きそばパンだ。ただ、コンビ二のものと比べると、ちよつといびつな感じを受けるし、ちよつと紅生姜が多い。「へへん、やらないぞ」マサルは、意地悪い口調で言った。

そう言われた瞬間に、めったに行かない座山の、しかもテレビ取材を受けるほど評判の焼きそばパンが輝いて見えるのだった。

東京新宿から、田舎の方に向かう鈍行電車に揺られること30分、そこにあるターミナル駅が座山だ。一説には、どこぞの県の県庁所在地よりも賑わっているんじゃないか、とさえ言われる駅だ。ちなみに今僕たちがいるのは、その座山から“冥王線”という名前からしてド田舎で怪しいローカル線に乗り換えること30分、平和畑という駅からさらにバスで30分行ったところにある高校……である。え？ 高校の名前を教えろ、って？ いやです。え？ なんでイヤなのか、って？ だって、それは……。

マサルは僕の心を見透かしているのか、カラカラ笑って言葉を継いだ。

「お前、寮生だから、熱血高校近辺から出ないんだろ？ 今食べないと、この焼きそばパン、食べる機会ないぞお？」

あ、マサルが言っちゃった。

そうなのだ。僕が通う高校、その名も、『熱血学園高校』という。数年前までは、『平和畑学園男子高校』とかいう、どこにでもありそうな名前だったという。しかし、理事長が代替わりしてから、名前が変わったらしい。小耳に挟んだ話だと、数年前に就任した理事長が就任早々、こう言い放ったのだという。『平和畑学園男子高校』なんて、ネーミングセンスが無さ過ぎだ。しかも、“畑”なんて、田舎臭いイメージがついているのもイヤだ……そんな、子供のわがままのような主張の結果、さらにネーミングセンスのないというか、履歴書に絶対に書きたくない学校名になってしまった。でも、“履歴書に書きたくない”と思わせるようなネーミングが功を奏したのか、名前を改めてからというものの、ウチの高校の大学進

学率が劇的に良くなった、という、嘘のような本当の話がある。

ぎりぎりで首都圏に入っている、と揶揄される熱血高校の周りには、本当に何にもない。さっき、“焼きそばパンをコンビニで買った”とか言っただけで、その“コンビニ”というのは、ここから10分ほど歩いて行っただけで唐突に一軒立っているだけで、他にはないのだ。ちなみに言うまでもないと思うけれど、その間には、ただ田んぼしかない。本当に、田んぼしかない。時折、道祖神とか地蔵が遭難防止の目印のように立ってはいるものの、基本的には田んぼしかない。

そんな環境だから、座山のパン屋、なんて、僕のような寮生には夢のまた夢なのだ。…たしかに、食べてみたい。そういう気持ちで、僕の中で急速にせり出してきた。

ついに僕は、好奇心に、折れた。

「すまん。謝るから、一口」

「はは、よろしい！」

勝ち誇ったように顔を上気させるマサルが、座山の焼きそばパンをむしろつとした、その瞬間だった。

「こゝら！ マサル！ 意地悪なんて、するもんじゃないよ！」  
という、女の子の高い声がマサルに浴びせられた。そんな声に、一瞬体をびくつと仰け反らせるマサルは、おそろおそろ声の方に振り返った。

最初から、その女の子の姿が目に入っていた僕は、その女の子に挨拶した。

「よ、弥生さん！」

「よー！」

弥生さんは、イーをするような笑顔で、僕の挨拶に応じた。指をくるつと頭の上で回して。

「…お、おう、弥生…」

どこか怯えた口調で挨拶するマサル。そんなマサルを見るや、弥生は大きな口を、さらに広げて叱りつけた。

「まったく、最初から見てたんだからね！　まったく、ああいう意地悪なことばかりするんだから！」

「いや、だって、あれはコイツが……」

と、マサルが僕を指すものの、弥生さんはそんなことを聞いてはいなかった。

「問答無用！」

「ぎゃあ……」

なんだか、いきなりバイオレンスなことになってしまふのだった。弥生さんは見ての通り、なんだか仲間内で「お姉さん」キャラが染み付いてしまっている。同年にも関わらず、僕が彼女のことをさん付けで読んでしまふのには、そういうキャラクター面の特徴が影響しているように思う。どうでもいいけど、「重ね着レイヤードファッションをする女の子は、皆、気が強い」という、奇妙なレッテルが僕の辞書に書き込まれたのも、彼女の影響が大である。……つうか、彼女の印象だけでそうなってしまったのだけれど。

弥生さんは、どこからか椅子を引っ張ってくると、僕の席の右斜め前くらいに置いて、不機嫌そうにどっかりと座った。そして、重ね着が暑いのか、顔を手で扇ぎながらしばらくそのままにしていたのだけれど、すぐに立ち上がり、さっき、授業中に僕が閉めた窓を勢いよく開いた。待つてました、とばかりに風が部屋に入り込もうとする。そうして、弥生さんの脇をすり抜ける風が、彼女の肩まで伸びた、少し癖っ毛な髪を揺らした。

「暑いわね！」

また、どっかりと座った弥生さんは、黒いバックの中からペットボトルのお茶を取り出し、キャップを緩めた。そして、飲み口を唇に寄せて、飲み始めた。

「まったくだね」

僕も同意した。でも、さっき弥生さんにフルボッコにされたはずのマサルは、減らず口を叩いた。

「でもさ、レイヤードファッションをしてる奴が暑いなんて、ムジ

ユンしてねえか？」

「なにおう！」

ペットボトルから口を離した弥生さんは、身を乗り出して凄んだ。そのあまりの剣幕に、マサルはこれ以上の減らず口を挟むのを諦めたようで、焼きそばパンをちぎって食べる。

でも、この二人の、いや弥生さんの一方的な、だけど、口げんかは、まるで子猫がゴロニャンと猫じゃらしにじやれているようで、それはそれで微笑ましかった。

「そういえばさ」

とは言いつつも、いつまでも猫じゃらしが猫パンチに耐えられるという保障はない。場の空気が微妙に悪くなっているように感じた僕は、横から割って入った。すると、今の今までのいがみ合っていた二人は、僕の方に視線を遣った。けれど、どうしたわけか、弥生さんだけは残念そうな顔を浮かべていたけれど。

僕は続けた。

「二人、遅いね」

と、まだ、ここに来ていない二人のことを口にした。

「そういえば、そうよね」

と、弥生さんは首を傾げたけれど、マサルはこう放言した。

「ああ、そのうち来るだろ？」

「……つつか、もう来てるよ」

突然、ここに座っていた三人の声ではない声が、僕らに浴びせかけられた。あまりのタイミングのよさに、僕らは顔を見合わせてから、戸惑い気味の笑顔で四人目の仲間を迎えた。

「よう！ 藤島！」

「……よう」まるで、マサルの口調を真似するように言葉を発した藤島君は、そのトレードマークになっている黒縁のメガネを上げた。

ウチの学校熱血高校は、制服を着なくてもいいという、いわゆる私服校なのだけれど、藤島君は、学校指定の制服をきっちりと纏っている。お世辞にもスタイリッシュとは言いがたい、青っぽいジャ

ケットに紺色っぽいパンツを、それが自分の主張であるかのようにきっちり纏っている。彼曰く、「私服って気を使って面倒だから」とのことらしい。でも、そんな彼にも、人と違う外見的特徴がある。一つは、プラスチックの黒縁メガネ、もう一つは、どこかのDJがしているような、仰々しいヘッドホンをつけているところだろう。きっと、音楽でも聴いているんだろうけれど、そんな藤島君がどんな音楽を聴いているのかは誰も知らないし、彼も彼で語ろうともしない。

## プロローグ【3】

ちよつと辺りを見渡した藤島君。きつと、座るところを探しているのだらう。座るとすれば僕の差し向かいに椅子を持つてくればいいのだらうけれど、面倒くさいのか、さっき弥生さんが開けた窓のサッシに腰を下ろし、落下防止用の枠に体重を預けると僕らに目を遣った。そして、手に持っていたバックバックから、500mlの牛乳を取り出すと、その背中についているストローを差しして、チュー、と吸った。

「藤島君、危ないよ」

僕がそう軽く注意すると、藤島君はさらに一層枠に体重をかけるようなそぶりを見せた。

「……大丈夫。僕の体重くらいで枠が壊れちゃうんじゃ、最初から枠の意味なんて無いよ」

そうつぶつぶ藤島君は、まるで冬の木々の枝のように細い。マサルも結構体が細いけれど、それ以上だ。こう言つてはなんだけど、レイヤードファッションに身を固めて着膨れしている弥生さんよりはるかに細く見える。たしかに、藤島君の体重に耐えられない枠なんて、無用の長物以外の何者でもない、と僕は一人心の中で頷く。

もうそんな風に得心している頃には、藤島君は僕を見てはいなかった。夏の色が少し見え始めた外の景色を、まるで待ちわびていたかのように覗いている。そんな彼の姿は、まるで青春小説の主人公のするような、左足を抱え、右足を下ろして空を眺めるポーズだった。

「……でも、もう春だね」

不意に僕らの方に振り返った藤島君は、感慨深げに言った。

「まったくまったく！」弥生さんが同意した。「一ヶ月前までは、まだまだ寒かったのにね。確か、入学式るとき、雪が降ったもんね。でも、ゴールドenウィークが過ぎた途端これだもん。イヤになっち

やう」

「つつかさ」焼きそばパンをちぎりながら、マサルも口を挟む。「一ヶ月前まで、俺たち中学生だったんだぜ？ それだって、信じられないよ」

「まったくまったく」

ここにいる、みんなが頷いた。

そういえば、と弥生さんが不意に口を開いた。

「サキ、遅いね」

「そういえば」と、僕。「いつも、月本さんは、いの一番に来るのにね、どうしたんだろうね？」

「あれ？ 月本って、何組だっけ？」

と、焼きそばパンをほお張るマサルは、藤島君に声をかける。すると、藤島君は牛乳をサッシ脇に置いてから、顎に指を添わせた。

「…ええと……？ A組だっけ？ Bだったかな？ あれ？ C、D？ E？ F？」

もうもはや、しらみつぶしに言っている感のある藤島君。

「もう！」「ここで弥生さんが口を挟んだ。「あんたたち、同じ部活の部員のクラスくらい、覚えておきなさいよ！ サキはG組！」

ありやりや。藤島君とマサルは顔を見合わせた。実を言えば、僕も月本がどのクラスかは覚えてなかったけれど、弥生さんに雷を落とされるのもアレなので、とりあえずスルーしておくことにする。言うまでも無いけれど、弥生さん、随分と怖い顔をしている。

「なるほど……、G組か。道理で遅いはずだよ」物知り顔で、マサルが言った。どういうこと？ と訊くと「だって、4時間目のG組ってさ、世界史の下川の授業だもん。アイツ、話し方がトロいくせに、やけに時間を延ばすんだよなあ」

確か、A、C、E、G組の世界史の担当の先生が、下川という先生だ。ちなみにその先生、「下ネタ下川」とあだ名がついていることから判るとおり、授業の合間合間に下ネタを挟むという、このセクハラとにかくうるさい現代の教壇からすれば「悪癖のある先生」



とレッテル張りをしなくてはなるまい。まあ、ウチの学校は数年前まで男子校だったから、少々の下ネタもしょうがないのかも知れないけれど。

あれ？ でも、なんでマサルが知ってるんだ？ そんなこと。だって、マサルはB組。下川の授業は受けていないはずだ。ちなみに、僕はH組なので、下川先生なる先生がどういう人なのか、というのは、噂程度にしか知らない。

その旨を訊くと、マサルは笑顔を全開にしてあっけらかんと答えた。

「ああ！ E組に、反町って女の子、いるだろ？ その子に訊いたんだ。“アイツ、下ネタが多くて困っちゃう！ それに、休み時間を潰すもんだから…”ってね」

「え？ 反町さんと話したの！？」僕は驚きを隠せなかった。

反町さん、というのは、入学して間もない僕ら一年生男子の間で、半ば美のアイコンと化してしまった女の子のことだ。ダサすぎて誰も着ていない制服をスタイリッシュにキメ、それこそカモシカのような健康的な足を交互に動かしながら登校する姿は、周囲の度肝を抜いた。しかも、眩しすぎて正視に堪えない笑顔を引っさげて。最初は、その余りのうるわしさに、上級生の女子たちからいじめらしきものを受けたりしい。でも、にわかに結成された反町さんのファンクラブ、“反町さんを守る会”により、そういう連中は撃退されたと聞く。ちなみに、反町さんは陸上部に入部したのだけれど、その効果か、陸上部に入部希望者が殺到したという“伝説”すらある。

「そりゃそうさ」カラカラとマサルは笑った。「だって、“反町さんを守る会”を作ったの、俺だぜ？」

「え！？」

信じられない、という顔を隠さない弥生さん。そして、目だけマサルに向ける藤島君。そして、きつと驚いたような顔を浮かべながら、目だけマサルに向けているだろ僕。その三人が揃えて声を上げたころ、マサルは言葉を継いだ。

「だってさあ、ああいう陰湿な手で人をいじめる奴ってどうかと思  
つてさ。だから、作った。いやあ、入学早々大変だったよ。一年生  
男子にだけ、回覧板を回してさ」

ああ、そういえば、四月の上旬だったか、授業中に、「反町さん  
を、助けよう！」と大書された妙な回覧板が回ってきた。ま、ス  
ルーしたけど。

自慢げに、マサルは言葉を継ぐ。

「んで、三年の、宮林先輩に、話を通したんだよなあ」

宮林先輩、というのは、三年生の先輩だ。この人も容姿端麗な人  
で、周りの女子から「お姉さま」「お姉さま」と呼ばれている。学  
生たちの憧れの的、という意味で、反町さんの“先輩”だ。

「んで、宮林先輩に事情を説明して、お願いしたんだ。“反町さん  
と、友達宣言してもらえませんか？”って。そうすると、宮林先  
輩、にこつと笑って“わかりました。あたしでお役に立てれば”っ  
て」

ふんふん、なるほど。僕は思った。

この学校で一番の美のアイコンである宮林先輩を取り込むことで、  
学校の“世論”を反町さんに有利な方向に向けさせようとしたわけ  
か。そして、事の推移を見るに、その作戦は、見事に成功したのだ  
ろう。

「お前ってすごいな」僕は思わず呟いていた。

「そうか？ あんまりスゲえことをやった、っていう感じはしない  
けど？」「こともなげに、そう答えるマサル。

マサルの横に座る弥生さんは、呆れ顔と寂しげな顔が同居するか  
のような妙な顔をしていたけれど、すぐにその表情を追いやって、  
マサルを小突いた。

「アンタねえ……そういうことにしか頭が回らないんだから」

そんな弥生さんに、気だるそうな視線を向ける藤島君。そして、  
コンビ二の焼きそばパンの包装を開けて、頬張る僕。焼きそばパン  
って美味しい惣菜パンだけれど、でも、退屈さを醸す材料でしかな

い。失敗したくないからいつも選んでしまっけれど、でも、“美味しい”という絶対的な評価すら、むしろ退屈なものでしかない。口に入った焼きそばパンについて、そんなことをやるかたなしに考えていたのは、もしかすると、周りのだるい空気のせいだったのかも知れない。

ぎゃーぎゃーと、言葉を重ねる弥生さんは、不意に言葉を止めて、首を傾げた。まるで、行き先がわからなくなってしまったツーリストのように。そして、その顔を隠さないまま、口を開いた。

「…そういえば、なんで宮林先輩の話になったんだっけ？」

「え？ ええと…、なあ、アレだよな？ アレ？」

マサルは助けを求めるような目を僕に向けた。最後の焼きそばパンの一口を口の中に入れて飲み込んだ僕は、さっきまでの会話を頭の中で遡らせて答えた。ちなみに、ウンウンと唸って。

「月本さんの話からだよ。その話から……」

「ああ、G組の話になって、下ネタ下川の話になって……」

やばい、このままじゃ、せっかく僕が上流に持っていった話が、また下流に流される。そう直感的に感じた僕は、僕が頭の中で辿った道を逆に辿ろうとするマサルを遮った。

「月本さん、どうしたんだろ？」

すると、どうしたわけか、弥生さんが「あら！？」という変な声を上げた。そして、まるでどこかのオバサンのような手を下に扇ぐジェスチャーを見せた。どうでもいいけど、その仕草、どうしたわけか弥生さんによく似合った。

「だったら、探しに行けば？ きつとサキ、喜ぶよ」

「いや、別に探しに行くことはないんじゃない？ だって、面倒だし」

僕がそう答えると、弥生さんはちよつと残念そうな顔を浮かべた。まるで、「ちえ！」とでも言いたげな、不平が籠った顔。もし、弥生さんにこの顔をさせた相手がマサルだったなら、きつとマサルは血祭りに上げられているだろうな、と、僕はふと思った。

そんな頃、教室の前の戸が開いた。

「ごめん、遅くなっちゃって！」

いつも通り、伸びやかな声。歌を歌うかのような、軽やかな高い声。ああ、間違いない。

「ああ、月本さん」

僕は、その名を呼んだ。

「あ、おはよう」

月本さんは、いつも通りの笑顔を僕らに見せた。いつも通りのポニーテール、いつも通りの落ち着いた、けれど女の子っぽい服装。いつも通りのどこか静かな雰囲気。そして、いつも通りのきれいな顔立ち。男の子という生き物には、“女の子の理想像”というものが絶対にあるものだけれど、そんな男の勝手な想像を最大公約数的に凝縮したかのような感じこそ、月本さんの立ち姿なのだ。

## プロローグ【4】

「おう、月本！」

「よ！ サキ」

「…やあ」

皆の挨拶に丁寧な言葉を返しつつ、月本さんは空き机から椅子を持ってきて、僕の向かいに置いた。そして、いつものように僕に聞く。

「ねえ、ここ、座っていいかな？」

異存なんて、あるはずも無い。だからいつも僕はこう答える。

「うん、別にいいよ」

すると、いつものように、月本さんは笑う。しかも、どうしたわけかこれでもか、つてくらいに嬉しそうに微笑む。なんでこんなに嬉しそうなんだろう？ といつも僕は訝しく思ってはいるものの、まだその理由を聞けていない。月本さんは今日も弾けんばかりの笑顔を見せると、僕の席の前に置いた椅子の上に、チョコンと腰掛ける。

「まったく、困っちゃうよ」

まるでくちばしのように唇を伸ばしながら、月本さんはそう言った。手荷物から弁当箱を取り出しながら。

「ん、どしたのサキ？」

弥生さんに訊かれて、月本さんは答える。

「…うん、下川先生がね……」

「ああ、下ネタ下川がどうしたって？」

「もう！」「マサルの言葉にちよつと眉をひそめつつ、けれど月本さんは照れたような笑いを浮かべる。「ま、下ネタ教師なんだけどね。だってさあ、授業中、イキナリこんなことを質問するんだよ？」「どうやったら子供ができるんだ？」って」

「うわ、すげえな、それ」マサルでさえ、ちよつと気が引ける様子

だった。

「しかも」月本さんは四時間目の苦難を語る。「やっぱり皆、そこらへんのことはあんまり話したくないじゃない？ だから皆、下を向くわけ。指されても、判りません、判りません、って。でも一方の下川先生は諦めようとしらないの。列のいちばん前の人が答えられなかったら、その真後ろの人、その人が答えられなかったらその後ろの人……、って指されていくうちに、一番後ろの列の私の答える番になっちゃって」

「ででで、答えたの？」

マサルは、ちよつと鼻息荒げに話を先に促す。『おいおい、下川なんかより、今はマサルの方が変態だろう、大丈夫か、と僕が心配になったところ、マサルの横に座る弥生さんが、僕より一足早くマサルの頭を叩いてくれた。ぱちこーん、という乾いた大きな音が辺りに響いた。』

「いてて、何すんだ、弥生！」

「……いや、今のはマサル君が悪い」藤島君は、ちよつとメガネを上げながら言った。

「むむむ……」

マサルは皆の顔を見渡した。弥生さんも藤島君も月本さんも、みんな一樣な顔をしていた。要は、「今のはお前が悪い」とでも言いたげな非難がこもった顔を浮かべていた。そんな皆の顔を見回したマサルは、まるで助けを求めるかのように僕に目を向けたけれど、諦めたかのように目を背けた。きっと、僕も皆と同じような顔をしていたのだろう。

そして観念したのか、ついにこう言い放った。

「はい！ 俺が悪うわるございました！」

皆、一樣にうんうんと頷いた。もちろん、僕も。

バツの悪そうな顔を浮かべたマサルは、皆のじとつとした視線をかわすように、言葉を継いだ。

「さ！ 全員揃ったんだ！ そろそろ部活のミーティング、始める

ぞ！  
」

「話、逸らした」

月本さんが、笑顔で突っ込む。その突っ込みを聞かないことにしたのか、マサルはパンパンと手を叩いて、皆の視線を逸らそうと必死だ。そして、マサルはそのアウェーな空気のまま、司会進行を続ける。

「今日の議題は…、つうか、この一ヶ月の議題は…、“ウチの部の、活動内容及び部名の決定”だ！」

なんじゃそりゃあ、と思われるかも知れないけれど、この一ヶ月間、僕らはずっとこの議題を繰り返し議論している。

実は、僕が所属した部は、まだ何部かも決まっていなかったのである！説明するとけっこう長いんだけど、説明しないことには話が進まない。だから説明するけど、ウチの学校には“幽霊部”がある。

部としての活動がなく、ただ部員がいるだけの部だ。表向きは適当な名前を名乗っているのだけれど、実際は帰宅部なのだ。そういう“幽霊部”の一つに、マサルが目付けたのだ。入学前、表向き囲碁部を名乗る“幽霊部”部長に、マサルは直談判したのだという。

「先輩、本当は囲碁なんてやってないでしょ？　だったら、僕にその部の枠、頂けませんかね。あ、もちろん先輩達はウチの部員つてことにしますし、部にノートタッチでいいですから」と。そもそも“幽霊部”の部長なんてしている人だから、「あ、別に構わないよ」とばかりに譲ってくれたという。そんな会社乗っ取りのようなことを、マサルはやってのけたわけだ。けれど、そういう風にして部を立ち上げたはいいのだけれど、マサルの頭の中には、部を立ち上げる人間として必ず持っていなければならないはずのアイデアが見事に欠如していたのだ。「そういう部活をやるのかな？」  
「そうなのだ。どうやらマサルは、ただ単に自分で自分の部を作りたいただけで、その中身を一切考えていなかったようなのだ。そんなわけで、僕が入部したときも、この部は“活動内容未定”だった。」

僕がこの部に入部したのは、学校側が配る“部活一覧”というプリントの一番下に書かれた、“部”なる文字に惹かれたからだ。とか、というか、この熱血高校は必ず部に所属するのが決まりになっていて、なにがしかの部には入部しなければならなかったから、とりあえず楽そうな文科系の部活の内、一番適当そうな部である“部”なる部活に入った。活動内容が“未定”なんて、適当そうではないか。そういうことだ。

けれど、この部の、に埋める部分についてみんなの意見が紛糾している。

マサルは最初っから については興味がないし、月本さんは元々お淑やかなので何も発言する気がない模様なのだけれど、意外なことに、弥生さんと藤島君が対立しているのだ。弥生さんは「レクレーション部」を強行に主張し、藤島君は「空跳ぶ円盤研究会」を主張している。どちらも、なんだか昭和の頃の高校にありそうな部活動だ。

そんなこんなで、部活の名前が決まらないまま桜の季節は過ぎ、そしてゴールデンウィークも跨いでしまった。

「絶対、レク部！」

「…空跳ぶ円盤研究会」

弥生さんと藤島君が自分の持論を紋切り型に主張する。もう既にお決まりなので、もはや名前しか主張しないのだ。その様子に、マサルは頭を掻く。

「あのさあ！ いい加減決めないと不味いんだよ！ 生徒会の方から文句が来てるんだ！ “活動内容が未定の部活動に、予算を与えることなんて出来ない。早く決めないと廃部にするぞ”って」

部の内容が未定のまま廃部。いくらなんでも、恥ずかしいことこの上ない。

「だから言ってるでしょ！ レク部！」

「…空跳ぶ円盤研究会」

はあ。思わず僕はため息を吐いてしまった。ずっとこの言い争い



を一ヶ月間繰り返しているのだ。ため息を一つついたところで、誰にも咎める権利はない。

マサルも同じ気分のようなようだ。マサルは僕の机を、まるで裁判官が槌でも叩くようにバン、と叩いた。

「もうしょうがない！ 今日の午後は根をつめて議題について話し合っしかないな！ まったく」

ん？ 午後？ あれ？

僕はマサルに訊いた。

「え？ “午後”って、あれ？ 授業は？」

すると、マサルは半ばあきれ顔で答えた。

「何言ってるんだ、お前。今日、土曜日じゃねえか」

思わず、黒板の日付に目を遣った。黒板の右端には、“5月7日（土）”と書かれている。中学校の頃は土曜も学校が休みだったからどうにも慣れないのだけれど、熱血高校は土曜日も学校がある。ただし、午前中だけ。4月中、ようやくそのサイクルに慣れたはずだったのに、ゴールデンウィークを過ぎすうち、またすっかり忘れてしまったらしい。僕は頭を掻いた。

「っていうかさ」弥生さんが横槍を入れた。「曜日感覚がないのに、どうして教科書とか用意できるの？」

僕は答えた。

「だって、置き勉強してるんだもん」

置き勉強。一般的には、教科書や資料集みたいな、重くかさばるものを教室のロッカーなどに置いておくことを言う。やる気の無い高校生の基本だ。でも、僕はさらにその上に行く。

「つつか、僕、ノートも置き勉強してるよ？」

「はあ！？」僕の言葉に、皆僕に視線をやって恐慌を起こした。

普通、置き勉強というのは、重いものだけを置いておくのが普通だ。ノートを置き勉強したら、宿題なんかも出来ないし、寮に帰って自習も出来ない。きっと、それを言っているのだろっ。僕は続けた。

「だって、予習復習なんてしないし、宿題は学校でやっちゃうし。」

小テストなんかはノリでやつちゃえばいいし」

「はあ！？」「弥生さんが、僕に噛み付いてきた。「じゃあさ、今日の三時間目の世界史の小テスト、どうだったのさ？まさか、ノ一勉強で？」」

一応補足しておくけど、“ノ一勉強”というのは、一切勉強をしないでテストに突入することを言う。高校生にとって、“ノ一勉強”は勇者の勲章である。

僕は答えた。

「うん。ノ一勉強。でも、上手く行っただけ。答えは確か、問1から、“クロマニヨン人、北京原人、エジプト文明、ユーフラテス川、インダス川、黄河、クフ、メソアメリカ文明”だったかな」

「な、なあ……」マサルが弥生さんに訊く。「お前、小テストのプリント、持ってるか？」

バックからプリントと世界史の教科書を出した弥生さん。弥生さんは僕と同じクラスのH組なのだ。そのテストの問題用紙を受け取り、教科書とプリントを交互に見比べるマサル。最初は半ばへらへらと見比べていたマサルだったけれど、そのうち顎をがっこんと開いて、まるで迷える子羊のように、あるいは何かに怯えるチワワのようにカタカタと小刻みに震えだした。その変化に気づいたのか、僕以外の皆がマサルの手にあるプリントを覗き込んだ。

## プロローグ【5】

「うつつ、嘘だろ？」マサルは呟いた。「全問正解……。つつか、最後の問題の答えが分かん」

「それはそうかも」月本さんが歴史の教科書の索引をめくりながら言葉を継いだ。「最後の問題なんて、教科書にさえ載ってないもん……ええと、“アメリカの中部に栄えた、古代文明の名前は何か”？その答えが“メソアメリカ文明”？そもそも古代文明ってアメリカにもあるの？」

「……さあ？」僕を除く、皆が首を傾げた。

あるのだ。アメリカ大陸の中央部にあったその文明のことをメソアメリカ文明という。気の利いた歴史関係の本なら、載っていることもある文明だ。

「……すごいね」藤島君は、ぼそつと呟いた。

「そうかな」僕は空ろに返した。

その僕の返しが、この話の切れ間だった。そのあと、マサルが思い出したように部の活動内容について議論をしよう、と話を振り、そして弥生さんと藤島君が対立するという、デジャヴのような光景が僕の目の前で繰り返される。

僕は思わず辺りを見渡した。左手にいる藤島君が、春の日差しを窓際で浴びながら「……空跳ぶ円盤研究会！」と強い口調で呟いている。目の前にいる月本さんが、皆の様子に困ったような顔をして僕の顔を覗きこんでいる。右斜めにいる弥生さんは「レク部！」と紋切り型に叫ぶ。そして、右横にいるマサルは藤島君と弥生さんの板ばさみにちよつと辟易している。

そんな皆の様子を見かねて、僕は教室を見渡す。さつきまであれだけ煩かった教室が、いつの間にか静かなガランドウに変貌していた。僕ら部の面々しか、人の陰がない。そんな空白を埋めるように、春の穏やかな日差しが差し込み、埃を巻き上げらせる。だけれど、

その日差しも部屋の奥にまでは届かず、廊下側の教室は、イヤに闇が深い。

黒板には、意味の判らないアルファベットの羅列が消されずに並んでいる。けれど、意味が判らないという意味では、こんな時期に黒板の端に貼られた新入部員募集の張り紙だって、こんな時期に「部の活動内容を決めよう」という僕達の行動だって、あのアルファベットたちと似たようなものだ。正直、黒板の右端に書かれている“5月7日（土）”という、何処にでもありふれている情報の方が有意義に思える。

僕は、ため息を吐くと立ち上がった。

「あ、ごめん。帰っていいかな？」

「え？」

皆、僕の顔を見つめた。まるで、『おいおい、なに言ってるんだよ』と僕を非難するかのような視線。その視線を振り払うように、僕は言い訳を即座に考えて、そのまま口にした。

「……ああ、調子が悪いんだ」

すると、マサルが納得したように頷く。

「そうか、調子悪いのか。そういやお前、今日はやけに静かだもんなあ。ああ、いいよ。部長の権限において、今日は早退を認めることにする」

最後の一言だけ、イヤにおどけた口調だったマサル。まるで、校長先生の口真似をする中学生みたいな口調だった。

けれど、そのマサルの言い分に、弥生さんが噛み付いた。

「は！？ 部長！？ いつからアンタが部長なのよ！ 部の内容だつて決まってるのに、どうして部長だけ決まってるのよ！」

「え？ だって、この部を作ったのは俺だしさ……」

「うるさいうるさい！」

「げふっ！ グーは無しだろ！」

そんな皆の会話を、もはや僕は聞いていなかった。それらの言葉を背中に受けながら、僕は何も入っていないバックを掴むとつかつ

かとドアの方に歩いていく。そして、引き戸のドアを開いたときに振り返り、「バイバイ」とだけ言って、ちよいと手を振った。

皆は、僕の手に合わせてるように、手を振り返してきた。

靴という奴は、どうしてこうなのだろう。と、僕は靴箱の中に納まる自分の靴とにらめっこしていた。

靴。それは、人間の従属物としてしか存在できない。その癖に、他の道具類とは違って、人間におもねらない。それが、僕にはおかしいことに思えた。僕が履いてきている靴は、高校進学に合わせて買った黒いコンバースなのだけど、靴擦れが激しい上に、早くも汚れが目立ってきている。僕の使い方が不味いのかも知れないけれど、たかだか一ヶ月でこんなに汚れるか、というくらいに汚れている。未舗装の道も多い熱血高校の高校生ならではの悩みといえよう。

そんなことをああだこうだと考えているうちに、後ろから僕の名前を呼び止められた。

「や」

月本さんだった。持ち前の天真爛漫な笑顔をさらしたまま、廊下から僕のいる靴箱を眺めている。

どうしたの？ と訊くと、月本さんは少し困ったような笑顔を一瞬みせたかと思うと、その顔を元の笑顔に切り替えてから答えた。

「ああ、あたしも調子が悪くて。もう帰ろうかな、って」

ああ、そう。僕は確かそういう類の、そっけない返事をしたような気がする。月本さんはちよつと表情を曇らせつつも、その表情を追いやって、言った。

「ねえ、一緒に、帰ろ？」

うん、いいよ。確か、僕はそういう受け答えをしたと思う。すると、月本さんはこれ以上ないくらいに、にこつと微笑むと、

「じゃあ、靴を取ってくるから、ちよつと待ってて！」

とだけ言い残して、僕の視界から消えた。

途中まで、月本さんの動きを目で追っていた僕は、“でも、月本

さんって、バス通学だよなあ。一緒に帰れないじゃないか”と首をあぐねるのだった。

薄汚れたコンバースのカカト部分をひよいとつまんで、靴箱から靴を地面に落とした。そして、それをぐいっと履いた。紐靴なのだけれど、ちようちょ結びを毎回やるほど、僕は暇な人種ではない。いや、正確には、面倒なだけなんだけど。

「お待たせ！」

靴を履いてから、靴箱前の傘立てなんか置いてある妙に広い空間で待つ僕に、女の子の声が浴びせかけられた。

もちろん、月本さんだ。

「ごめん、待った？」

待っているはずもない。僕は答えた。

「別に？」

「う、うん、ならいいんだ」

そう言ってカカトをトントンする月本さんの顔は、まるでパプリカみたいに赤く染まっていた。けれど、そんな彼女の顔になどさして興味があるわけでもない。

「でもさ、バスは？ 月本さん、バス通学だろ？ でも、僕は寮生だから、自転車だけ……」

さつきからの疑問をぶつける僕。

この熱血高校はド田舎にある、って話はしたと思う。なら、“最寄の駅からバスで30分”という説明もしたと思う。つまり、熱血高校から最寄の平和畑駅まで、車でも30分かかる、ということだ。歩こうなんて、とても考えられるものではない。

すると、月本さんは答えた。

「ああ、この時間だと、バス、無いんだ」

「え？ 無いの！？ 一本も！？」

さすがに僕は驚いてしまった。

確かに、お昼の時間帯ともなれば、どんな都会でもバスの本数は減る。でも、さすがに一時間に一本くらいはあるだろう。けれど、

月本さんが言うには、この時間だと二時間に一本も無いらしい。なんつつ田舎だ。

「それじゃあまさか、歩いて帰ろうって？」

「うん。きつと、その方が早く帰れるからさ」

どこまでも突き抜けて行きそうな笑顔で、月本さんは答えた。

結局、そんなこんなで月本さんと帰途につくことになった僕は、駐輪場に自転車を取りにいった、正門で待つ月本さんの下に向かった。5月の日差しに埋もれるように、白む景色。正門の向こうに広がる田んぼから、5月の太陽が照り返す。そして、少し砂っぽいグラウンド。その間に挟まれる正門前で、バックを両手に抱えて立ち尽くす月本さん。

「ごめ〜ん、待った？」

自転車を押しながら、ちょっと離れたところから片手を上げた僕に、月本さんは手を振り返してきた。少し重そうにしているバックを片手に持つて、まるで異国に行く船にそうするように、ブンブんと手を振る。

「待ってないよ」

目の前に着いてから、月本さんは勿体つけたように言った。そして、不意にくすくすと笑い出した。どうしたの？ と訊くと、月本さんは笑いを挟みつつも答えた。

「だって、あたしがさっき同じ質問したときに“別に？”って言ったじゃない。自分が気にならないことなら、皆だって気にならないはずじゃない？」

どうやら彼女の笑いのツボは、人と違うらしい。と、いつか、脳のネットワークの構造が随分違うようだ。

## プロローグ【6】

僕は連れ立って、学校の正門をくぐった。正門の外にある道を挟んで、ずっと田んぼが続いている。まだこの時期は稲穂はほとんど影も形も無い。あるのは、まるで雑草のように葉を広げる苗くらのものだ。きっと秋になれば、とんでもないド田舎な光景が広がるんだろうな、と、シティ派（死語）の僕ですら想像できるくらいに、広々と、むしろ閑散としている田園風景だった。きっと秋になっても、この風景は空の方が広いんだろうな、と、明らかに陸の方が空よりも狭い目の前の光景に、僕はため息を吐いた。

「どうしたの？　ため息なんて。ため息つくと、幸せ逃げちゃうよ？」

そんな、月本さんの言葉で、今、女の子と連れ立って歩いている、という状況をふと思い出す僕なのだった。

「あ、ゴメンゴメン」

「なにが？」

まさか、“今の今まで、君と連れ立って歩いているのを忘れてて、このド田舎な風景に、一人呆れていた”とは口が裂けても言えない。そこで、表面的にだけ、僕の手のひらを見せた。

「いや、考え事してて、さ」

「そうだろうね」

月本さんは頷いて、続ける。

「なんだか、最近、元気ないな、って。…ああ、“最近”って言い方もおかしいか。だって、出会ったのがこの四月だし、ね。でも、とにかく、元気ないな、とは思ってたんだ」

正直、意外だった。

月本さんって、ちよっとボケっ娘なイメージだった。それは、弥生さんとの関係が、姉と妹みたいに見えることもそうだろうし、彼女の、一拍置いたようなおっとりした喋り方も、彼女のイメージの



形成の一助になった。でも、そんな彼女も、何気にけっこう物事を見渡しているんじゃないか、と、純粹に驚いたのだ。

そんな不測の右フックをモロに食らった僕は、どうしたわけか最近の自分の気分について、喋ってしまっていた。

「なんだか、最近、やる気が起きなくて、さ」

「え？」

僕の引く自転車の車輪が、カラカラと鳴り続けている。その音が、田園風景に溶けていく。僕は、まるで僕のことを笑い飛ばすかのように鳴る車輪の音をかき消すように、言葉を重ねる。

「だってさ、“高校”ってさ、まるで中学校と変わらないんだもん。普通に勉強して、普通に部活やって、中学校の時と変わらない内容の話を友達と喋って、それで中学校と同じように遊ぶ。受験を頑張って、ようやく高校に入っただのに、なんだかそれじゃ、張り合いがないよ」

結局僕は、“高校”に夢を見ていたのだ。漫画とかドラマとかで描かれる“高校”に。ヘタレな主人公が変わるきっかけになる先輩がいて、そして、気が強いけれど主人公に一途な美少女がいて、そして自分と実力が拮抗するライバルライバルがいて、そして自分を慕う後輩がいて……。そんなもの、ありきたりの幻フィクションだというのに。

そして、僕の目の前にあった現実、中学校の頃とまったく変わらない、変わり映えもしない毎日だった。さして面白くない日々を結局は受け入れるしかない日々。

むむむ……と話に聞き入る月本さんは、考えがまとまったのか、こう言った。

「じゃあさ、自分からそんな日常を変えていいじゃない？」

「やってみたんだ」

「変えようとしたんだ？」

「でも」僕は続けた。「ダメだった」

入学してすぐ、僕は高校というものの正体を垣間見た。でも、どこかでそれを認めたくない僕もいた。だから、僕は抗った。例えば、

この熱血高校の名物、アメフト部の仮入部もしてみたし、授業中、先生にマニアックな質問をぶつけてもみた。でも、何をしていても僕のおめがねに合うようなことは起こらなかった。やっぱり僕の行く先には、ありきたりの現実が立ちはだかった。アメフト部の方では、仮入部した途端に先輩風吹かせる先輩に腹が立つたし、質問をぶつけた先生は、“授業中、私語を慎め”と僕を押さえつけた。僕の目の前には、仮入部してきた後輩を優しく指導する先輩もいなかったし、質問によどみなく答えて僕の舌を巻かせる先生もいなかったのだ。もしかすると、僕が部に入部したのは、立ちはだかる現実への諦めの結果なのかもしれないかった。

「て、いうかさ」僕は続けた。「変えようと頑張っても、やっぱり僕はただの高校生。たかが知れてるんだよね。フィクションの世界で行く手を切り開く、すごい高校生みたいには行かないみたいだ」「そうなんだ、でも」月本さんは励ますかのように言葉を継ぐ。

「ただの高校生」なりに、頑張ればいいんじゃないの？」「そんなの、判ってる。“ただの高校生”の僕は、ただの高校生らしく、頑張ればいい。でも、僕が求めていたのは、そんなものじゃないのだ。

自転車の車輪が、カラカラと僕を笑い飛ばした。

そのカラカラという音にめげそうになりながら、それでも歩を進める僕。いやに自転車が重く感じる。そして、横を歩く月本さんは、そんな僕の顔を、なにが面白いのか笑顔で覗きこんでくる。少しイライラしつつも、どうにか押さえ込む。そして、押さえ込んだ結果、それがため息となって春の日差しに溶け込んでいく。

「あ、ため息」月本さんは、頬を少し膨らませて、指を一本立てた。「さっきも言ったと思うけど、ため息をつくと、幸せが逃げてくんだよ？」

「あゝ、はいはい」

面倒になった僕は、適当に流すことにした。

そんなこんなと歩いているうち、ブロロロロ、というレトロな効

果音と共に、後ろからバスが走ってきて僕らを追い抜いていった。バス、と書いたけれど、皆が想像するような、真四角の奴ではない。運転席の前に、まるでビーグル犬の鼻先のようなボンネットが伸びる、いわゆるボンネットバスという奴だ。確か、昭和の頃には日本中を走っていたらしいけれど、今はもうド田舎でしか走らない。なんと、この平和畑近辺は、“絶滅危惧種”ボンネットバスさえ走っているらしい。そのボンネットバスの中には、僕らと同年代の男女がまばらに乗っている。きつと、熱血高校の方から来たのだろう。つつか、さつきから一本道を歩いていて、しかも後ろから走ってきたのだから、そういうことなのだろうけど。

「ボンネットバス…、田舎だな」僕は思わずそう呟いた。

「…え？ あ、ああ、そうだね」ちよつと狼狽したような口調の月本さんだったけれど、僕は華麗にスルーした。

やがて、田園風景だけ続いていた僕らの行く手に、アクセントが現れた。赤と黄色を基調とした、毒々しい看板。きつと今はそれほどではないけれど、秋になればその毒々しさもひとしおだろう。

コンビニ、「激烈屋」だ。

熱血高校の最寄コンビニにも関わらず、歩いて10分、という立地に存在する。でも、その立ち方はとんでもなく唐突だ。激烈屋は十字路の端に立っているのだけれど、その建物と大きな駐車場以外、その十字路には何もない。本当に何もない。あるのはただ、田んぼ、田んぼ、田んぼの海。そう、まさに、田んぼの海に、まるで難破船のようにポツーンと立っている。そんな感じなのだ。

でも、このコンビニが熱血高生たちに愛されているのは、一つには高校の最寄コンビニだという事実。その立地上、寮生の面々もよく使うのだ。そして、もう一つ、このコンビニが愛されている理由、それは…。

月本さんは、毒々しい激烈屋の看板を、苦々しく眺めた。

「ふう、このコンビニが見えた、ってことは、もうお別れか」

この激烈屋は十字路沿いに立っている、という話はしたと思う。

実は（熱血高校から歩いていった場合）、左に曲がると平和畑駅に続く。真っ直ぐ進むと寮がある。つまり、仮に寮生と自宅通学生が連れ立って帰った場合、この激烈屋が見えること、それがお別れのサインなのだ。

「送っていかなくて大丈夫？」

僕は訊いた。ただし、社交辞令だ。だって、ここから駅まで、自転車走らせても20分はかかる。往復40分。正直、そんなことをする暇があったら、とりあえず帰りたい。

僕のそんな思いが通じたのか、笑顔で月本さんは首を振った。

「ううん、平気。その気持ちだけで充分」

「そっか、じゃあ」

「じゃあね。ちえ」

月本さんは、拗ねた子供のような表情を見せつつ、十字路を左に曲がっていった。そんな彼女の後ろ姿を目で追った僕だったけれど、さっきまで押していた自転車が跨ると、ペダルに足をやって漕ぎはじめた。あまり良いものではないにしろ、でもマウンテンバイク、と呼んでいくくらいのスペックを持つ自転車だ。その自転車は、僕の脚力を動力に、走り始めた。

そして、ようやく自転車が安定軌道に乗り始めた頃、突然後ろから声が届いた。

「バカ！」

まるで非難するような口調。思わず振り返ると、僕の視界の隅の方に、見慣れた女の子のふくれつつらが入った。

「バカって言うな！」

僕がそう大声で反論すると、遠くで月本さんが反論し返してきた。

「だって、バカなんだもん！……！……！」

何か言っていたのだけれど、風に隠されて、月本さんの声は半ば途切れ途切れだった。馬鹿馬鹿しいので、僕は大声で返した。

「もう、帰るね！」

僕は、前を向いてペダルを漕いだ。また後ろの方から、「バカ！

「と聞こえたけれど、でも、とりあえず無視を決め込むことにした僕。そして、月本さんって案外口が悪いんだな、と、どうでもいい感想を持つのがあった。」

五月の風が僕の頬を撫ぜる。でも、その風はあまり僕の心を震わしてはくれなかった。

## プロローグ【7】

＊

長い坂道が、僕をいつも辟易させる。マウンテンバイクのギアを、一番大きいものに変えてもなお、漕いで昇るには無理のある急坂。その急坂を、とにかくヒーヒー言いながら登る。木々が張り出して、まるでトンネルのようになっていている坂道。そして、そのトンネルは、行く手の景色のほとんどを隠す。そのせいで、さらに坂が長く感じる。でも、実際に坂道が長いから、どう転んでも坂道に辟易するようになっていく。熱血高校の寮生たちは、とにかくこの坂道に辟易するという仕組みなのだ。つまり、言い換えればそれが寮生の運命なのだ。

そんなわけで、今日も僕は、死ぬほど長い坂道に辟易しつつ、そのゴールを目指した。そして、どうしてこんなところに、という疑問を30回くらい繰り返した頃、ようやく緑のトンネルが途切れ、坂道も終わった。

そのトンネルの出口から、まるで昭和の頃の木造校舎のような玄関と、ちよつとした庭が広がる風景が、目に飛び込んでくる。トンネルを抜け切ると、見切れていた建物の全体像が、5月の優しい太陽に照らされて、その全体像を僕にさらす。

瓦葺の、木造建築。でも、四階もある。窓が整然と並んでいる様子はパツと見た感じだと古い学校のようなのだ。そして、雑草とも花ともつかない植物達が、その建物を覆うかのように生い茂っている。そして、僕のことを見下ろすかのように、建物の鬼瓦の上に、古ぼけた鳩の像がちょこんと乗っている。

ここが、僕が生活している寮、「ハトムネ寮」だ。

ウチの高校、熱血学園高校は、以前は全寮制の男子高校だった。けれど、数年前に就任した理事長が「全寮制廃止・男女共学」を柱とする改革を推し進めた結果、現在のような、男女共学の形になっ

た。でも、さすがに伝統ある寮だけは丸々廃止には出来なかったよ  
うで、「男子のみ・希望者だけは」という条件で、寮が解放されて  
いる。でも、現代っ子で家が近い奴が、寮生活なんて生活、好き好  
んで選ぶわけではない。だから、よほどの変わり者か、家に事情があ  
るヤツか、あるいは家が遠い奴でもない限り、この寮を使う者は少  
ない。

自転車を庭の横にある駐輪場に停めた僕は、ハトムネ寮の玄関の  
戸をガラガラと開いた。すりガラスが揺れて、カラカラと鳴った。  
そんなことをわざわざ気に留めていたら、この寮では生活できない。  
「おや、お帰り」

玄関の横にある、警備員の詰め所のような小さな窓から、おじい  
さんが顔を出して僕にそう言葉を掛けてきた。

「あ、どうも、管理人さん」

僕が頭を下げると、その老人は小さな窓から手を出して振った。

「いやいや、言ったらう？ 俺のことは“じいさん”呼ばわりでい  
いってば」

「そういうわけにもいかないでしょう？ 管理人さん」

かんりにんさん、という所にアクセントをつけて答えると、その  
老人は少し寂しそうな顔を浮かべて、窓から首を引っ込めた。

あの人は、ハトムネ寮の管理人、藤原さんだ。僕は管理人さん、  
と呼んでいるし、今のところ寮に住んでいる一年生のほとんども管  
理人さん、と呼んでいる。でも、二年生および三年生は、あの人の  
ことを「じいさん」と呼ぶ。でも、それはあの管理人さん自身が、  
そうさせているのだ。

「入寮式」というイベントがある。寮の先輩達や管理人たちが、  
新たにハトムネ寮に入ってくる生徒を迎えるイベントなのだけれど、  
藤原さんはこう言い放った。

「俺のことを、一日も早く“じいさん”と呼んでほしい」

変わったじいさんだ、と新生生が思ったのは言うまでもない。

そんな、藤原さんのことを考えながら、僕は自分の部屋に向かう。

学校の廊下のような、真っ直ぐで中途半端に広い廊下を抜け、そして今にも踏み抜いてしまいそうなほどに古い階段を、一步一步上っていく。そして、四階まで上ってから、また一階と同じような廊下を歩く。この廊下は、山側に面しているから、どうしても暗い。だから、いつもこの廊下はジメジメとしている。そのジメジメな空気はきつと、廊下に設置されている洗濯機がもたらしたもののなのだろう、と思うと、脇に置いてある洗濯機が恨めしくなるのであった。

そして、ようやく着いた。

401号室。そう書かれたナンバープレートが、ボロツちい木製ドアに下がっている。その前に立った僕は、とりあえずため息をついた。

僕の部屋だ。僕は、バックから部屋の鍵を取り出した。“401”という刻印のある、RPGゲームにでも出てきそうなくらいにレトロな鍵だ。その鍵を鍵穴に差し込んで、くるっと回した。

ドアを開けると、5月の陽光に包まれた部屋が現れた。三つ折に畳まれた布団。脱ぎ散らかしている服たち。置奥の方にあるテレビ。そして、テレビにつながれているゲーム機。それらすべてが、日差しに押しなべられて、こころなしか優しい輪郭を見せている。日差しが巻き上げた布団の香りが、僕の眠気を刺激する。その眠気に誘われるように、鍵をドア横の棚に置いて、三つ折の布団に倒れこむ。

「うーん！」

僕は伸びをした。まるで水の中でのびをするように伸びをしたあと、平泳ぎでもするように手をかいた。でも、水の中でもない部屋の中では、僕のその動きは何の変化も及ぼしてくれなかった。

古い畳特有の、ざらつとした感触。そして、布団特有の、ふわつとした感触。ああ、日本人に生まれてよかった。うん、本当によかった。本当に…よかった…

「はっ！」

僕は不意に仰向けになって上体を起こして頭を振った。やばいや



ばい、土曜日の、まだ一時じゃないか。昼寝をしてしまうなんてもつたいなさ過ぎる。そう思い至った僕は、リモコンを手にとってテレビをつけた。でも、土曜日のテレビ番組は、正直高校生を客層に見なしていないようだった。かといって、いったいどういう層に対応したテレビ番組なのだろう、と頭をひねるような内容が僕の目の前に展開していた。そんな独善的なテレビ番組に付き合う必要はない、と考え直して、テレビに繋がれているゲーム機の電源をつけて、コントローラーに手を伸ばした。

『はっはっは、フェルゼン、まだまだだな！』  
『なにを?! きさ…』

オープニングムービーを、小気味よくスタートボタンですっ飛ばす。そして、「ギルド・ギガ」と、タイトルが浮かぶ。すぐにスタートボタンを押して、次の画面に進める。

このゲームは、藤島君が貸してくれた格闘ゲームだ。「…このゲーム、けっこう面白いよ。格ゲーだったら最高峰かも…」と太鼓判を押して。

テレビ画面に、使用キャラ選択画面が映し出された。僕はお約束のように、いつも使っているトレンチコートをもとったキャラクターを選ぶ。そのキャラクターにカーソルを合わせてボタンを押すと、『強い男ってもんは、かっこいいもんなのさ』

と、いつものように決めゼリフを言った。

そして、戦闘画面。

げげ、いきなりこいつか。と、僕は画面を見て唖ってしまった。

どうやら、僕の相手は今まで倒したことのない、金髪の主人公キヤラだった。どこから攻撃を仕掛けても、カウンターを決められてしまい、どうにも倒せないのだ。かといって、カウンター狙いに戦略を組み立てても、凶悪なラッシュ技で一気にやられてしまう。

< FIGHT ! > 画面の上で、戦闘が始まった。

やっぱり、僕の使ったキヤラは画面の上でボコボコにやられていた。CPUキヤラが、僕の操るキャラクターに、これでもか、これ

でもか、とばかりにラッシュをかます。僕が操っているキャラの体力を示すゲージが、ガンガン削られていく。そして。

ついに、僕の使うキャラクターは、地面に倒れた。

『私の負ける要素など、最初からありませんでしたよ』

と、勝ち名乗りを上げる敵。ため息をひとつつくと、ゲーム機のリセットボタンを押して、テレビの電源を切った。

僕は、また布団の上に倒れこんだ。そして、木目が目立つ天井を、不意に眺める。

はあ、僕、なにをしてるんだろう。僕は答えの出ない自問を繰り返す。僕は、高校生だ。なのに、目の前に広がる生活は、中学の頃と全然変わらない。ましてや、僕が夢見た、嘘みたいな現実が押し寄せる高校生活なんて、やって来はしなかった。そんな現実に嫌気が差した僕は、代わり映えない日々を、中学の頃と同じ色に塗りとくろうとしている。そして、中学の頃と同じ色に染まっている現実に、さらに嫌気が差す。…悪循環、という奴は、途中で断ち切れないから悪循環という。結局、気づかないうちにスパイラルに落ちている。

なんだか、だるい。やる気がしない。そんな重苦しい感情が、僕の胸に押し掛かる。

僕がその重いものを振り払おうと、天井を眺めながらため息をついた、その瞬間だった。

突然、僕の耳に、笑い声が響いた。

くすくすくす……。まるで、人を小ばかにしたような笑い声。まるで、女の子が友達の失敗談を聞いて笑うときのように、無理矢理声を潜めつつも、口から漏れてしまった、という風の笑い声。その笑い声には張りがあって、その声の主が若いことを連想させた。

おかしい。女の子の笑い声なんて。僕はそう思った。

このハトムネ寮は、男子しか入れない。ここには、男の子しかいないのだ。女の人もいるにはいるけど、それはあんな若さに溢れた澁刺な笑い声を上げるような人ではない。

どうせ、聞き違いだろう。僕はそう結論付けた。きっと、眠いから幻聴が聞こえたんだ。

けれど、その結論を、その声が蹴散らした。

『くすくすくすくす………』

まるで、僕のことを笑っているかのように、迫ってくる声。声だけのはずなのに、これ以上なく存在感がある声が、僕の部屋を包む。

「誰だ！」

上体をばつと起こしながら、僕は叫んだ。けれど、その声の主は、いつまで経っても僕の目の前に姿を現さずに、くすくす笑っている。

「誰だ、って聞いてるんだ！」

辺りを見渡しながら、僕は叫んだ。けれど、僕の目の前には、いつもと変わらない僕の部屋が広がっているばかりで、そこに僕以外の影を認めることは出来なかった。

## プロローグ【8】

くすくす笑うその声は、一瞬その笑いをピタリと止めると、まるで風が囁くかのような優しい声で、言葉を継いだ。

『私が誰かなんて、まだあなたが知らなくて良い話だわ』

これはもう、空耳ではないな。そう思った僕は、その声に会話を試みた。

「まだ？ まだ、ってどういうことだよ？」

すると、その声は答えた。どうやら、空耳の類ではないらしい。

『何事にも、時期はあるの。そして、私が姿を現すには、まだ適切な時期ではないの。だから、私はまだ声でしかあなたに干渉できない。でも、すぐにあなたの前に姿を現すことになる。そのときまでに、育てておいて？』

「育てる？ 何をさ」

さっきよりも平静を取り戻しつつも、僕は訊いた。すると、その声の主は、くすくす、と笑ってから、僕の質問に答えた。

『あなた自身の、エマーデイルを』

「は？ エマー、なんだって？」

『エマーデイル』その声は、まるで噛み締めるようにして、その言葉を繰り返した。『それは、私を生かす力を生むところ。そして、あなたに約束された、安住の地』

「意味が判らない」

『意味なんて、判らなくていいの。だってそうでしょ？ この世界を司る法則の意味なんて判らなくても、この世界はあなたを乗せて回っている。意味なんて要らないのよ。必要なのは、諦め』

「諦め？」

『そういうルールで世界が動いている、という事実。その事実を受け入れてしまうこと。それが大事なの。そして、その法則を受け入れ、諦めてしまうこと。それが大事』

「意味が判らない」

『言ったでしょ？』声の主は、呆れたように声をあげると、続けた。『意味なんて、最初から求めていないの。あなたはただ、リングが地面に落ちるように、粛々と世界のルールに従えばいいだけ』

「判らないよ」

『ええ。そもそもこの話は容易に理解が出来るような生易しい話じゃないはず。でも、そのうちあなたは知ることになる。世の中には理解できなくとも受け入れなくてはならないものがある、という事実に。そして、そのことを知ったとき、私はあなたの前に姿を現すことになる』

それっきり、女の子の声が聞こえなくなった。

5月の日差し。その日差しに包まれた、僕の部屋。自分の部屋のはずなのに、迷子になった子供のような気分に見われた僕は、上体をまた布団に沈めた。ばさ、という音と共に、埃が舞った。その埃は日差しを反射して、キラキラと光った。

カレーライス。

僕は、目の前のカレーライスを眺めた。何の変哲もないポークカレー。眠気に縛られた頭では、どうにも重たい食事だ。

僕はため息をついた。

「なんだい？ あたしの作った料理にケチつけるとはいい度胸だね！ しかも、夕飯に遅れてきたくせに！」

と、僕の横を布巾で拭きながら、寮母さんは言った。がらんとした食堂。その食堂の真ん中で湯気を上げるカレーライスが、いつそ恨めしかった。

僕は慌てて手を振った。

「いや、そんなんじゃないですよ」

「に、しては、浮かない顔してるじゃないか。…学校に慣れないのかい？ それとも、風邪でも引いているのかい？」

「どっちでもないです。…頂きます」

そう答えてカレーライスをほじくる僕に、寮母さんはシワを深く刻みつつ、呆れたようにため息をついた。そして、細長い食卓を拭きながら、僕に声をかけてきた。

「それとも、五月病、ってやつかい？」

図星。

寮母さんは続ける。

「ああ、五月病なんだね？　そうだろうよ。毎年、そういう奴がいるんだよねえ。“ようやく入学したはいいいけど、何もしたいことがなくて苦しい”っていう手合いが。…アンタ、部活には入ってるのかい？」

「あ、はい」僕は、カレーを崩すスプーンを止め、答えた。

「何部？　野球？　バスケット？　サッカー？」

「いや、何部かはまだ決まっていなくて…」

事実そうなのだから、そう答えるしかなかった。一応、文化系の部活になるだろうけど、と申し伝えておいた。けれど、途端に寮母さんはいやな顔を浮かべた。

「そんな、つまらなそうな部活に入っているからダメなんだよ！　もっと、体を動かすような部活に入って、頭が真っ白になるくらい運動してご覧な。そうすれば、五月病なんて吹き飛ぶわよ！」

そうつぶすね、と適当な返事をして、僕はまた代わり映えのしないカレーを食べ始めた。寮母さんは、これ以上ないくらいに顔をしかめ、布巾で食卓を拭き続けた。

そんな頃、不意にこの食堂のドアが開いた。

「…あれ？」

入ってきたのは、藤島君だった。彼も、ハトムネ寮の寮生なのだ。その藤島君は、僕のことを不思議そうな顔で眺めている。

寮母さんが藤島君に歩みよって、彼に聞いた。

「おやおや、やっと来たのかい？　…ええと…」

「…308号室の、一年・藤島です」

「ああ、藤島君、ね。カレー持ってくるから、ちよいとお待ち！」

それだけ言うと、寮母さんは食堂の横にある台所に消えた。それを確認するように目で追っていた藤島君は、ふう、とため息をついてから僕の横の席に座った。

「大丈夫？」

なにが？と訊こうとして、そういえば、僕は仮病を使って早引きしたのを思い出した僕なのだった。そこで、まあまあだね、と適当に相槌を打っておいた僕なのだった。

藤島君は「…なら良かった」と微笑むと、頭を抱えるようなポーズをとって、ため息をついた。そして、ポリポリと頭をかいた。このポーズは、“悩み事がある”という、典型的なポーズだ。

「どうしたの？」

僕は訊いた。

すると、藤島君には珍しく、口を尖らせるようにして僕の質問に答えた。

「…ああ、結局、今日も決まらなかったんだ。僕が“空跳ぶ円盤研究会”、弥生さんが“レク部”、結局平行線なんだよな。…そんなわけで、明日も部活ミーティングをやるんだって」

「…え、嘘でしょ？」

げんなりした声を隠さず僕が訊くと、示し合わせたように藤島君も、

「…本当」

と、げんなりと答え、言葉をさらに重ねる。「…次の月曜までに、部活の活動内容について生徒会に報告しなくちゃならないんだって。今日は土曜だから、あと二日しかないじゃない？ だから、なんとかしても明日決めるんだ、ってマサル君が…」

あいつなら言いかねない。僕はため息をついた。

「…でも、どうする？ 君は。風邪引いてるんでしょ？」

「ああ、うん」曖昧に、僕は頷いた。

「…じゃあ」藤島君は言った。「…明日のミーティングは出ないほうがいい。せつかくの日曜日なんだから、ゆっくりと休んだほうが

「いいよ」

そんな頃、寮母さんがようやくカレーの載った皿を持ってきた。そして、藤島君の前に置いた。

「…美味しそうなカレーだね」

藤島君は、笑顔でそう呟くと、スプーンを手を取った。でも、その手を止めると、僕の顔をまじまじと眺め始めた。

「なに？ 僕の顔に何かついてる？」思わず、僕は訊いた。

「…いや、君、先に寮に帰ったはずなのに、どうしてこんなに夕飯食べるのが遅いのか、と思って」

藤島君は、時計と僕の皿を交互に指した。時計の針は、午後9時を指している。一応、ハトムネ寮の夕飯の時刻は、午後の七時と決まっている。先に帰った僕なら、その七時に食べてしかるべきなのだ。

「いや、実は…」

僕は、事情を説明した。無論、仮病を使ったとか、変な声を聞いたとか、そういう話は伏せたまま。

とりあえず暇だから、とゲームをしたんだけど、どうにも億劫になっちゃって止めちゃった。かといって、他の暇つぶしもない。しかも、窓からはまるで何かの思し召しのように暖かい日差しが入ってくる。その結果…。

「…寝ちゃったんだね」

「うん」

僕は頷いた。

「…それで寝過ぎして、結局この時間、ってこと？」

「そういうこと」



## プロローグ【9】

呆れたようにため息をつく、藤島君はカレーをがつつき始めた。まるで、僕との会話に飽きたかのように。僕もつられて食べようとしたのだけれど、眠気がまだ体を縛り付けているせいで、どうにも手が進まない。

でも、手の代わりに、頭だけは回転していた。

あの声はなんだったのだろうか？ 昼に部屋で聞いた、妙な声。「エマーデイル」とかいう、よく判らない言葉を振りかざす、女の子の声。繰り返すけれど、このハトムネ寮には、女の子はいない。女の人はいるけど、それはあの寮母さんただ一人。あの女の子の醸す声と、まるでその輪郭が異なることは説明するまでもない。じゃあ、あの声はなんだったんだろう？

カレーライスをバクバク食べる藤島君の顔を覗きこんだ僕は、一呼吸置いて、訊いた。

「ねえ、あのさあ、つかぬこと訊くけど…」

「…ん、なに？」 藤島君は、カレーライスに下ろしていた視線を、僕に移した。

「幽霊、って、いると思う？」

僕は、あの声を幽霊か何かだと考えたのだ。けれど、藤島君は、首を横に振った。

「…少なくとも、僕は信じてない」

「UFOは信じるのに？」

僕がそう訊くと、藤島君はちょっと不機嫌そうに顔をしかめ、続けた。

「…わかってないなあ。UFOっていうのは、幽霊とは違って、信じるものじゃないんだよ。肯定するか、否定するか。ただそれだけ。そして、僕はUFOが存在していることを、肯定しているんだ」

首を傾げる僕。藤島君は、珍しく饒舌に言葉を重ねる。

「…幽霊、っていうのは、神道とか仏教とか、そういう宗教の範疇に存在するものなんだ。言い方を替えれば、“幽霊”っていうのは、宗教が作り上げた“物語”なんだよ。死ぬのが怖いから、って人間が作り上げた嘘なわけ。それは、“信じるか否か”の俎上に乗せるべき話だと思う。でも、UFOは違う。UFOは、時折僕らの前に姿を現している。世界中で、確かに目撃されている。それは、“信じるか否か”で済む話じゃないんだな。肯定するか、否定するか。その二者だけなんだ」

「フウン？」

結局藤島君の言わんとすることがわからなかった僕は、曖昧に頷いた。そして、藤島君は、満足したかのようにため息をつく、またカレーのライスを崩し始めた。

「うーん、結局、あの声はなんだったのだろう？　僕が、カレーをカツカツとかき回しながらつらつらと考えていると、不意に藤島君が言葉を掛けてきた。」

「…どうしたの？」

「え？」

「…元気ないからさ」

「いや、風邪、風邪」

「…もしかして、幽霊でも見たの？」

「凶星。」

藤島君は、僕の言葉を待たずに、言葉を継いだ。

「…僕の理屈で言えば、信じるか信じないか、なんだよね。受け入れるか否か。だから、そんなに悩むことはないんじゃない？」

「まあ、ね？」

「…それはそうと」

「ん？」

藤島君は、僕の皿を指した。

「…まだ、食べ終わらないの？」

僕の皿の上には、もてあまし気味のカレーライスが横たわっていた。

一方、藤島君の皿には、もう既に何も入っていないかった。うゝん、早食い。

「……じゃ、僕はもう部屋にあがるから」

それだけ言うと、藤島君は椅子から立ち上がり、皿を出口の脇にある皿返却ブースに置いて、食堂から出ていってしまった。

僕以外誰もいない食堂。きっと、最盛期には300人くらいの学生たちがひしめき合うように利用しただろう食堂。けれど、現在、寮生は80人くらいしかない。だから、この食堂が満席などころを、未だかつて見たことがない。でも、かといって自分ひとりしかない食堂、というものはじめて見た。

目の前のカレーライスもそして食堂に潜む妙な沈黙さえも持て余してしまった僕は、皿を返却ブースに置こうと立ち上がった。けれど。

「もう、食べ終わったかい？ ……あれ！ まだ食べてないじゃない！ まさか、残すつもりかい！？」

寮母さんが、台所から出てきたかと思うと、僕をいきなりなじり始めた。

「食べ物を残したら、どうなるか、判ってるわよね！」

そう語尾強く言いながら、寮母さんは食堂の壁にでかかと張られている、「食堂規則」なる張り紙を指した。

「ほら、詠んでご覧な！」

寮母さんの剣幕に、僕はその食堂規則を足早に読み上げた。

「“食堂では騒がない” “食堂は、食事する以外の用途に使わない”

“寮母さんへの感謝を忘れるべからず” “食事を一切残すべからず”……あ」

「そう！ “寮母さんは勝ち誇ったような笑顔を僕に振りまいて、続けた。 “人様に作ってもらった食事を残すなんて、何様だい！ さあ、食べるまでは食堂から出さないよ！”

なんてこった。ああ、ちくしょう。

このあと、寮母さんの冷たい視線を浴びつつ、小一時間かけて、

なんとかカレーライスを胃に流し込んだことでようやく部屋に帰ることが許された。冷たくなってしまったカレーライスが胃の中で孫悟空並に暴れるのを自覚しつつ、僕は四階へ続く階段を上るのだった。

晴れた空。日曜日はこうでなくちゃな、と、僕は洗濯物を干しながら思う。

どういうわけかは判らないけれど、“日曜日は雨が多い”という印象がある。多分、統計的に見れば曜日別の天気のはらつきなんて特に有意性を感じるものでもないのだろうけれど。

ジーンズをベランダの柵にかけ、そしてTシャツをハンガーにかける。そして、靴下やパンツを、まるで火星人みたいなかたちをしたピンチにかける。洗剤のふわっと宙を舞う香りが、洗濯物がゆれるたび、僕の鼻をくすぐる。

このハトムネ寮、食事は寮母さんが作ってくれる。ただし、洗濯と掃除は自分たちでやらなくてはならない。それは、熱血学園高校の前身・平和畑学園高校創立者で、ハトムネ寮の創立者の方針だという。「さすがに、高校生に食事の支度をさせるのは酷だろう。だが、自立心を養う、という意味で、洗濯と掃除は自分でしてしかるべきである！」と。その志は殊勝だけど、今時の高校生はそんな志に付き合うほど殊勝ではない。訊いた話だと、毎年3月頃になると、三年生たちが大騒ぎを始めるらしい。「部屋を明け渡さなくちやいけないのに、まだ片付いてねえよお！」と。普段掃除や洗濯をやっていないからそうなるのだ。自分だけ泡を食うなら、それはそれで良いのだろうけど、そういう先輩に限って、先輩風を吹かせてこんなことを言うらしい。「おい！ 部屋を片付けるのを手伝え！」と。結局、創立者の志なんて、こうやって踏みにじられるものなのだ。

いい天気。そして、爽やかな風。そんないい天気の中、僕は一週間分の洗濯物を黙々と干してゆく。

けれど、こんないい天気のはずなのに、僕の周りには妙な空気がいつも立ち込めている。爽やかで軽やかな風景。けれど、僕だけがその風景に溶け込めていないように思えてしょうがない。なんだろう、この気分は。

のろのろとした洗濯干しをようやく終えた僕は、部屋に入った。けれど、部屋の中にも、僕の周りに立ち込めている、じとっとした重い空気が立ち込めているように思えた。息をするのも億劫になっ

てしまいうまくないに。最近、いつもこうなのだ。何をしようとしても、どうしたわけか重苦しい空気が邪魔をする。その空気が、何かをしようと伸ばした手を押さえ込み、どこかへ行こうと踏み出した一步を絡め取る。結局、何も出来ずに終わる。そして、何も出来ずに終わった出来事たちが、重石になって肩に乗っかってくる。

中学校までは、そんな気分を味わったことはなかった。高校に入ってからだ、こんな気分が襲われるようになったのは。でも、その理由がわからない。それが、一層僕の手足を縛っていく。

「どうして、こうなっちゃったんだろうな」

思わず、誰もいない部屋の真ん中で、そう呟いた瞬間だった。

『進歩がないのね』

昨日聞いた、女の子の声が、不意に響いた。でも、なぜだろう。不意に飛んできた彼女の言葉も、まるで意外ではなかった。

「なにが、だよ」

思わず訊くと、その声は答えた。

『“どうして”、って訊くのは、やっぱり物事に意味を求めているのよ。でも、私、あなたに言っただけだわ。“意味なんて、最初から求めている”って』

まったく、埒が明かない。意味が判らない。

しょうがないので、僕は叫んだ。

「だから、お前は誰なんだ！」

『言っただけでしょ？』その声は、明らかに僕を小ばかにしたような

口調で続けた。『まだ、私があなたに干渉できるほどに、あなたはあなたの中にあるエマーデイルを育てていない。…でも、大丈夫。もうそろそろ、あなたの前に姿をさらすことが出来る。楽しみよ』

「楽しみ、だと？」

『ええ。当たり前じゃない』その声は、確かな声でこう言った。『

恋人に会うのが楽しみじゃない人なんて、どこにいるのかしら？』

## プロローグ【10】

それっきり、その声は途切れた。

「…なんだったんだ。それに“恋人”って、どういうことだ…」

そう呟きつつ、時計に目を遣った。丸い壁掛け時計は、9時きっかりを指している。まだ、9時か。僕がため息をついた、その瞬間だった。

僕の部屋のドアが勢いよく開け放たれ、その隙間から人影が入り込んだ。そして、イキナリ怒鳴ってきた。

「お前なあ！ 朝の早よからうるさいよ！ まったく、これだから一年坊は！」

入ってきたのは、ゴリラだった。あ、いや、正確には、ゴリラっぽい人だった。むきむきの腕といい、微妙な猫背具合といい、短い足といい、そして黒い短髪にタンクトップにトランクス姿という格好といい、不意にゴリラを連想させるのだ。…あ、でも、ゴリラは服を着ないか、と真面目に自分の想像に対して突っ込みをしている僕に、そのゴリラはがなり続ける。

「おい！ 聞いているのか！ 朝の早くに、大声出すなよ！ まったく、お前のせいで、飛び起きちまったぞ！」

ゴリラの大声に、ようやく僕は受け答えた。

「あ、スイマセン、井上先輩…」

僕の言葉も聞かず、眼の前のゴリラはマイペースに続ける。

「まったく…、おい、今何時だ」

「え？ 今、9時ですけど…」

「なんだとう！！」ゴリラは、僕に怒鳴りかけた。「なんでもっと早く騒いでくれないんだよ！ 今日、9時から部の練習があったのに！」

このゴリラ、もとい先輩は、三年の井上先輩だ。

今年部員不足に悩んでいるという、バドミントン部の部長だ。い

や、この紹介ではちよつと語弊がある。この先輩のせいで、バドミントン部は部員不足なのだ。

井上先輩、どうにも横柄な上、自分勝手なのだ。そんな横柄な人間が、そもそも組織の上に立ってはいけない。にも関わらず、どうしたわけかバドミントン部という組織の上に立ってしまった。その結果……、部員不足。

出来ればお付き合いしたくない人間の一典型なのだけれど、こうやって知り合いになってしまったのは、井上先輩の部屋が僕の部屋の隣だという点が否めない。しかも、井上先輩、どうしたわけか、ハトムネ寮の四階の生徒のまとめ役である、“四階寮長”という役まで拝命している。ま、どっちにしろ、僕は井上先輩と知り合う運命だったのだろう。

井上先輩は、ドアの脇にある棚から、自転車の鍵を拾い出した。

「おい！ 自転車の鍵、借りるぞ！」

どうせ井上先輩のこと、断つても持つていつてしまうだろう。げんなりとしつつ、僕は部屋の真ん中で答えた。

「……どうぞどうぞ、持つてってください」

持つてけドロボー、ってなものだ。

「おう！ そうかそうか！」

それだけ言い残すと、井上先輩は部屋のドアを開けっ放しのまま、出て行ってしまった。

嵐が去った。そして、嵐が去ったあとの部屋には、混乱の空気と、微妙な家具の配置の崩れが残った。

僕は、ため息をついた。そして、井上先輩が開けっ放しのままに出て行ってしまったドアを閉じると、嵐のあとの修復に取り掛かった。井上先輩という一人が立ち回るだけでどうしてこんなにも部屋が汚れるのだろう、と考えながら、僕は井上先輩が触ったことでその位置が少し変わってしまった机の位置を直したり、倒れてしまったゲーム機を直したりして、元の光景に修復した。

「ふう」



僕は三つ折にしている布団の上に倒れこんだ。

「なんだか、疲れちゃったな、朝から」

思わず、こう呟いている僕なのだった。

風が、不意に部屋の中に吹き込んだ。洗濯物の香りが運ばれて、僕の鼻を掠めて部屋の隅に消える。そういえば、この洗剤、カモミールの香りがする、っていう新しい洗剤だ。でも、カモミールという香りがどういう香りか知らなかった僕としては、この寮に入寮するときに、“お、これ安いな”と思って買った。でも、初めてその洗剤で洗濯をしてみて、その若葉っぱい香りにちよっと当てられた。でも、慣れてみれば生活の一部に溶け込んでしまっている。

不意に、眠気に襲われた。どうやら、さっきの風が運んできたのは、カモミールの香りだけじゃなかったのかも知れない。きっとあの風は、僕に眠気まで運んできたのだ。

ふあゝあ。

あくびを一つこくと、やけに瞼が重くなってきた。天井が、いつしか眠気で歪んできた。

眠い瞼をこすりながら、僕は考えた。最近の、僕を包むこの感覚はなんなんだろう。疲れてる？ 違う。病気？ 違う。じゃあ、僕を包むこの感覚はなんなんだろう。

でも、答えは僕の口から流れ出た。まるで、最初から答えを知っていたかのように。

「なんだか、だるいなあ」

そうなのだ。僕は、だるかったのだ。

また風が吹き込んだ。その風は、カモミールの香りを運んできたけれど、今回の風は、僕の鼻先を掠めずに、部屋の隅に走っていく。でも、ここからおかしなことが起こった。

部屋に入り込んだ風が、部屋の隅にぶつかると、つむじになった。でも、おかしなことに、そのつむじは、何も巻き込んでいないのに、も関わらず、僕の目に見えるのだ。…つむじというのが僕らに見えるのは、つむじが埃とかあるいはゴミといった不純物を巻き込んで

いるからなのだ。僕の部屋には、つむじを見えるようにする埃もないし、プリントみたいなゴミ類も落ちてない。

そのつむじは、まるで漫画のそのように、明らかな存在感をもつて渦を巻いている。

「なな、なんだ!？」

奇妙なつむじに気づいて上体を起こした僕は、そのつむじを注視する。そのときの僕は、きっとアホ面を下げてそのつむじを見ていたことだろう。

僕の視線に気づいたのか、そのつむじは少しその位置を変えた。

そして、そのつむじの回転が、どんどん上がっていく。

もうこの時点で、僕はなんとなく気づいていた。

きつと僕の身に、何かおかしいことが起こる、ということに。

そしてその回転がぐぐぐ、っと上がって、もう最早つむじっていうレベルじゃない状態になったころ、そのつむじが一気に膨張した。

「うわあ!!」

そのつむじのビッグバンに巻き込まれた僕は、一瞬目を閉じてしまった。服なんかもパリパリと音を立ててはためいているから、もしかすると部屋中がつむじに巻き込まれてしまったかも知れない。いや、それどころじゃなさそうだ。紙類が風にはためいている音がする。もしかすると、読んでいた文庫本とか、ゲームの攻略本、取り扱い説明書なんかも巻き込まれてしまったかもしれない。あゝあ、せつかくキレイに保っている部屋が汚れちゃったなあ、また掃除しなきゃ、と、意外にも呑気に物を考えている僕なのだった。

そんな僕に、声が浴びせられた。

「やってきたわよ」

あ、あれ? この声、もしかして…。

「なにを呆けているの? もう、風は止んでいるわよ? 目を開けたら?」

その声の言う通り、風は既に止んでいた。それが証拠に、さっきまで吹いていた頬をなぜる風も消えているし、服がたなびく音も消

えている。そして、紙類が風に飛ぶ音たちも消えている。

恐る恐る、僕は目を開いた。ぱあっと、一瞬僕の目の前が開けた。僕の目の前には、女の子がいた。

白い、ノースリーブのワンピース。オリーブのような、という形容があるけど、その形容に一番ふさわしいかのような、スレンダーな肢体。そして、昔の人だったら亜麻色、と形容しそうな茶色の髪を、肩くらいまで垂らしている。そして、不自然なくらいに整った顔の造型。でも、彫刻みたいに近寄りがたい雰囲気はなくて、むしろ可愛らしい印象のある顔だ。

でも、僕が一番見入ったのは、その目だった。

まるで、世界中の色を混ぜ込んだかのような深い黒。白目もあるのだけれど、その黒目のせいで、目全体が黒く見える。そして、その黒い目を覗き込んでみると、どうしたわけか、眠くなる、というか、何事に対してもどうでもよくなってしまうそう、と投げやりな気分誘われそうなほどに、深い黒だった。

『どうしたの、私の顔、何かについているかしら』

まさか、“君の瞳に見とれてたんだ”とは、意味が違うとはいえ、とても言えない。僕は首を横に振った。すると、その女の子は僕に微笑みかけた。

『はじめまして。いえ、“はじめまして”じゃないか。むしろ、お待ちせ、かしら』

「お待ちせ？ ってことは、昨日から僕に話しかけているのは、君？」

僕は、昨日から聞こえた声を思い出した。僕の頭のメモリーに残る声は、目の前で格調高く喋る女の子のそれとピタリ一致した。

『本当に、あなたに会いたかった』

するとその少女は、僕の首に両腕を絡めてきた。

「え！？ え！？」

イキナリのことに、僕は戸惑ってしまった。女の子に抱きつかれるなんて体験が無かった僕は、とにかく戸惑った。でも、とにかく

その少女から、カモミールの香りがした。

「ね、ねえ、人違いじゃないの？　だって、僕は君のこと、知らないもの！」

「あなたのこと？　知ってる。名前は……」

そう前置きして挙げた名前は、間違いなく僕の名前だった。

## プロローグ【11】

「でも、少なくとも、僕にイキナリ抱きつくような関係ではないはずだよ！」

カモミールの心地よい香りと、細腕の甘い感触に少しぼーっとしながらも、僕は抗弁を試みた。でも、少女はそんなこと、まるで気にしていない様子だった。

『そうね。でも…』少女は笑った。『そのうち、そういう関係になるわ』

「どういうこと?!」

頭が混乱している僕は、とにかく叫んだ。すると少女は、くすくすと笑った。

『だって、きっとあなたは私のことを好きになる。そしてあなたは、エマーデイルの底に沈む』

まったく意味がわからない。

「何を言ってるんだ？　そもそも君は、誰なんだ？」

僕の目の前の少女は、僕の首に両腕を絡めたまま、思わせぶりな笑顔を、僕の顔にくつつけるばかりに近づけた。彼女の吐息が僕の頬にぶつかって、なんだか心地いい。

『“何を言っているのか”なんて、どうでもいいじゃない』と、彼女は言った。『そんなもの、そのうちわかるもの。でも、教えてあげる。私の名前。…私は、ミス・エマーデイル。私は、あなたの倦怠そのもの。そして、あなたを倦怠の底まで誘う者』

まるで古い英国詩を朗読するような、あるいは古い魔法の言葉を唱えるような口調で、彼女は名乗った。

「ミス・エマーデイル？」

聞きなれない、まるで漫画のキャラクターのような奇妙な名前に困惑する僕。その困惑のままその言葉を口にしたせいで、咽喉の奥でゴロゴロとその言葉が動き回った。

『そう。覚えてくれたみたいね。私は、ミス・エマーデイル。…あなたの倦怠が、形になったものよ』

「ケンタイ？」

硬質な“ケンタイ”という言葉に漢字を当てられない僕は、むむと唸った。それを嗤うかのようにミス・エマーデイルは言葉を継ぐ。

『倦怠。つまりは、うんざりした状態。あるいは、億劫になっている状態』

「ああ」

最近の、僕そのものじゃないか。

ミス・エマーデイルは続ける。

『私は、あなたの強い倦怠が生み出した、魔なの』

「魔？　つまりは、悪魔？」僕は聞いた。

『悪魔、とは違うわ。悪魔、っていうのは、悪であることを生まれながらに規定された魔のこと。“魔”っていうのは、あなたたちと別のものっていう程度の意味でしかないわ』

「でも」僕は抗弁した。「魔だか悪魔だか知らないけど、そんなものの、居るわけない！　それに、僕の倦怠が形になる？　馬鹿馬鹿しい！」

『あなたは信じてくれないかもしれないけれど、人間の感情というもの、具現化するものなの。怒り、悲しみ、喜び、楽しい。これらの感情も具現化するの。そのことをまだあなたたち人間は認知していない、それだけのこと。…でも、認知してなくても、法則というものは、この世界に生きる者に制約を強いる。そういうものでしょ？』

ミス・エマーデイルはニコツと笑った。そして、言葉を重ねる。まるで、念押しのように。

『だって、アインシュタインが生まれるずっとずっと昔から、この世界は相対性理論のくびきに従って動いているじゃない？　アインシュタインの頭の中に相対性理論のアイデアが浮かんだ瞬間に、こ

の世界を支配する法則が相対性理論に支配された、ってわけじゃないでしょ？ …法則は、認知されようがされまいが、確かに、そして既に存在するの。そして、その法則が明らかになるうがなるまいが、この世界にいるモノたちは、その法則に従うしかないの』

たとえばよく分からないけれど、でも言わんとすることは分かる。つまり、今僕の目の前にいる、ミス・エマーデイルなる少女は、僕の倦怠が形になったものなのだ。そしてこの世界に生きる僕は、そのことを認めるしかない、ということだ。

ため息をひとつついて、僕は訊いた。

「で、なんで僕が、君と恋人関係になってしまうのかな？」

『“君”なんて他人行儀、やめてくれる？ じゃないと、答えない』  
「わかったよ」僕は一瞬間を置いて、言った。「ミス・エマーデイル」

すると彼女は、これ以上ない笑顔を僕に向けた。その笑顔はあどけない少女のようだった。その笑顔に心臓を鷲掴みにされるかのような衝撃を受けた僕だったけれど、どうにかこらえようと我慢するでも、そうして我慢しているときに限って、首に回された彼女の細い腕や、ぐいぐい押し付けられている小ぶりの胸、それに彼女の髪から溢れるカモミールの香りに緊張してしまう僕なのだった。…僕ってば、やっぱり高校生なんです。

「じゃじゃじゃ、じゃあ、教えて、くれるよね」

ちよつとどもりながら、僕は、彼女に話の先を催促する。それに応じて、ミス・エマーデイルは続ける。僕の心臓を鷲掴みにした、あの超弩級の笑顔のまま。

『恋人関係になってしまっ、ってわけじゃないわ。このままだったら、恋人になれるんだけどね』

「どついつ……」

僕の言葉を遮って、ミス・エマーデイルは続けた。

『私は、あなたの倦怠そのもの。あなたの倦怠が形になったものなの。つまり、あなたの倦怠と私は一心同体。あなたの倦怠が大きく

なればなるほど、あなたは私に歩み寄る。あなたが億劫だ、と思えば思うほど、あなたは私のことを恋焦がれるようになる。あなたが退屈だ、と感じれば感じるほど、あなたは私に骨抜きになってしま  
うの。』

別にこの娘になら、“恋焦がれても骨抜きになってしまってもいいや”と、もう既にミス・エマーデイルに取り込まれそうになっている僕。そんな僕の心中を察したのか、ミス・エマーデイルはちよつと翳のある笑顔を僕に晒した。そして、口角を上げて、続けた。

『でもね、もし、私に決定的に恋焦がれてしまったら、あなたは死ぬの。』

「しししし、死ぬ!?」

意識したことのない“死”という言葉に、動揺する僕。

あくまで無表情にミス・エマーデイルは言葉を重ねる。

『そうよ。言っただでしょ？ 私はあなたの倦怠そのもの。私を愛した、ということは、倦怠に魅入られたってこと。それは、死と同じだわ。』

「…死にたくないんですけど」本音をポツリと言った。

『それはそうよね』少し寂しそうに、ミス・エマーデイルは言葉を重ねる。『ちなみに言っておくわ。私の唇を奪った瞬間、あなたは死ぬ。それが、決まりよ。』

「ええと」僕は訊いた。「それは、“法則”なの？」

ミス・エマーデイルはかぶりを振った。そして、僕の目を覗き込むようにして続ける。

『いいえ。これは……法則よりも一段劣るもの。ルールよ。私たちの言葉に言い換えるなら、“魔法”とでも訳せるかしら。“これこれこうするから、なんとかしてください”っていうのは、法則とはちよつと違う。それは、ゲームのようなもの。あなたと私とのゲームみたいなものよ。』

ゲーム。ミス・エマーデイルは、“ゲーム”と言った。

『私が勝ったら、つまり、あなたが私の唇を奪うようなめぐり合わ



せに至つたら、あなたは死ぬ。でも、もしあなたが勝つたら、つまり、あなたが私に振り向いてくれなかったら、あなたは死なない」

まだ、死にたくない。僕は思った。まだ、15歳、花の15歳だ。そんな若いみそらで死にたくない。そして、ミス・エマーデイルの言うことが事実だとするなら、僕の取るべき道は一つだ。

「ってことは、僕がミス・エマーデイルの唇を奪いさえしなければ、僕はとりあえず死なないんだね？」

『そうということよね』

ふふん、と彼女は鼻を鳴らした。そして僕は胸を撫で下ろしつつ、ミス・エマーデイルに、今浮かんだ疑問をぶつけた。

「でもさ」

『なによ』

「どうして、僕にそんな話をしたのさ？　だって、その話をすれば、当然僕はミス・エマーデイルのことを警戒して、キスなんて出来なくなるよ？」

すると、ミス・エマーデイルはくすくすと笑った。まるで、僕が今言ったことの全てがナンセンスであるかのように。そして、僕のことを哀れそうに見やっってから、言葉を継いだ。

『それはないわ』

「ど、どうして？」

『だって、よく考えてみて？　あなたはもう、私に魅入られているのよ？』

首を傾げる僕。その僕をあざ笑うかのように、さらに言葉を重ねるミス・エマーデイル。

『繰り返すけど、私はあなたの強い倦怠が形になったものなのよ？　つまり、最初からあなたは倦怠を感じている、そして、その倦怠に魅入られつつあった、ってこと。その倦怠が、私なんだから……』  
「つまり」信じがたいことだけど、という一言を口の中で空転させつつ、言った。「僕は既に、ミス・エマーデイルに親近感くらいの感情は抱いてる、ってことだね？」

『そういうこと。つまり、私の方が既に有利なのよ。あなたは別に、嫌いな相手を好きになるわけじゃないんだもの。あとは、私が一押しするだけ、それだけの話』

これまでのミス・エマーデイルの言葉を総合すれば、僕はどうかから割に合わないゲームに参加してしまっただけらしい。そして、そのゲームに負けると僕は死ぬことになるらしい。にわかには信じがたい話だけれど、でも、ミス・エマーデイルという“にわかには信じがたい”存在が目の前にいて、そしてその彼女が語る言葉には妙なりアリテイがあった。

## プロローグ【12】

『実はね』

ミス・エマーデイルはさらに言葉を継いだ。

『喋るのが、条件だったの』

「は？ 意味がさっぱり判らないんだけど」

『“あなたに、このゲームのルールを教えること”、それがルール発動の決まりなの』

まったく意味のわからない僕は、首を傾げた。そんな僕の首をミス・エマーデイルは絡めていた腕でぎゅっと締めて、続けた。

『たとえば、野球ってスポーツがあるじゃない？ あれって、本来はどうとでも動ける人間に、行動の制約を課しているルールがあるわけ。例えば、ダイヤモンドは反時計回りにしか回っちゃいけないって。でも、人間は、時計回りにもダイヤモンドを回れるはずだし、そもそも、回る必要がなければ回らなくてもいいものはずよ。そういう、自然において必然性のないルールは、どうしても“法則”より一段劣るものになってしまう。だから、例えば成文化したり、あるいは言葉にしないと発動しないのよ』

むむむ、難しい。いや、それ以上に、ミス・エマーデイルの吐息やら、胸やら、太ももやらの感触が僕に迫ってくる。そのせいで、僕の頭はショート寸前で、論理的にものを考えるということができない。でも…。

僕は言った。

「…つまり、僕はあの話を訊かなければ、そもそもこのルールに従わなくて良かった、ってこと？」

ミス・エマーデイルは頷いた。そして、ものすごく嬉しそうな笑顔を僕に向けて、続けた。

『そうね。でも、訊いちゃった以上は……』

「従わなくちゃいけない、ってことだね」

『そういうこと』

急速に、体から力が抜けていくのを自覚する。こんな負け率の高い、割に合わないゲームに従う。しかも、負けたら罰ゲームじゃ済まない罰が待っている。負けたら命を頂く、なんて、お前それ、昭和の任侠モノかよ、と突っ込みたくなるような展開に、ため息をついた。

僕は訊いた。

「でもさ、ゲームってことは、僕が勝てる可能性も、あるんだよね？」

『もちろん。簡単よ。私を、いや、倦怠を振り払うこと。それが出来れば、あなたの勝ち』

「どうやって？」

『それは、あなたの考えることよ』体をぴったりとくっつけてくる、ミス・エマーデイル。そして、甘い声をあげて、僕の耳元で囁く。

『でも、そんなもの、どうでもいいじゃない。倦怠だってあなたを幸せに出来る。永遠に無為な時間を私と過ごすの。それはそれで良い人生なんじゃないのかしら？ ……私のこと、好きになっちゃいなさいよ』

ミス・エマーデイルの声色はいやに眠気を誘う。いや、この感覚は眠気、と形容するものではない。この感覚は……。だるいのだ。億劫なのだ。何もしたくない。そして、僕を抱きしめるこの少女とダラダラしたい。そういう気持ち。そうか、この感覚は……。倦怠感だ。

そんな、圧倒的な倦怠感に襲われている丁度そのとき、不意に部屋のドアが、盛大な音を立てて開かれた。ノックのない、無遠慮なドアの開閉。一瞬のことに、僕は思わずドアの方を向いた。

「……はあ、まったく、ついてねえよ」

井上先輩だった。げんなりと肩を落として、ドアの前に立っている。視線は下に落としている。

井上先輩は一人で続けた。

「まさか、体育館の予約が取れてないなんてなあ。で、しかも、だ

れも居ないなんて…ああ、まったくついてない！　ってわけで、お前の部屋に遊びにきてやった！」

そう宣言して、顔を上げた井上先輩は、僕の方に目をやった瞬間、まるで、ツチノコを発見した小学生のような顔をして、僕を指差した。

「おい！お前…！！」

ああ、しまった。僕は、首に絡み付いているミス・エマーデイルの可愛らしい顔を眺めた。

このハトムネ寮は、女人禁制なのだ。

ハトムネ寮の入り口にでかかと掲示されている（つつか、屏風仕立てになっていて、筆書きで大書されている）「ハトムネ寮五禁制」に、こんな一文がある。「ハトムネ寮、それは、女人禁制の香り」。…正直意味が判らないが、でも、この文言は「女性はハトムネ寮に入することを禁ず」ということなのだろうし、先輩からそう言い含められた。きつと、風紀上マズイのだろう。「そういえば、寮母さんはいいのか？」という向きもあるだろう。でも、大丈夫。寮母さんは、ある意味別格なのだ。…いやいや、「寮母さんは女に含まない」って言っているわけじゃ、天に誓ってない。

とにかく、女の子であるミス・エマーデイルが僕の部屋にいて、しかもその女の子が僕といちゃいちゃしている（ように見えるだろう）状況を、あの井上先輩に見られたわけだ。あの井上先輩の事、「おいおい、女の子を連れ込んで良いと思ってるのかよ？　一年のくせによ？　…ああ、管理人さんたちには黙っついてやるから。その代わり…」とばかりに、無理難題を吹っかけられるに決まってる。ああ、なんて僕は不運な星の元に生まれたんだろう。イキナリ負けたら死ぬ、なんて剣呑なゲームに巻き込まれるわ、井上先輩に弱みを握られるわ。

最悪だ。

けれど、井上先輩はこう叫んだ。

「おい！　あのゲーム！　確か一週間前に発売した、『幕末無双』

じゃないか！？」

え？ 僕は思わず井上先輩の顔を見た。いや、井上先輩、突っ込むところはそこじゃないでしょう？ 僕、女の子といちゃいちゃしてたんですけど…。そんな僕の心のモノローグが聞こえるはずもない井上先輩は、僕の顔を横切つて、ゲーム「幕末無双」のディスクを手に取ると、それをハードに差し入れた。

「やらしてもらうぞ！ いいだろ！」

もう既に、ゲーム機の電源を入れてから宣言する井上先輩。

「いや、別にどうでもいいですけど…」

「けど！？ なんだ！」

井上先輩は、僕の顔をものすごい形相で睨んだ。その視界に、ミス・エマーデイルが引つかからないはずはない。だって、先輩と僕の間には、体中を押し付けるようにして僕にひつついている、ミス・エマーデイルがいるのだから。

「…あのう、いいんですか」

「だから、なにがだよ！？」

僕は思い切つて言った。

「『ハトムネ寮五禁制』の一つ、『ハトムネ寮、それは、女人禁制の香り』、違反してますよね、僕」

「は？ 何言ってるんだ？」

井上先輩は、僕の部屋を見渡した。さっきのミス・エマーデイルの登場の際に起こった風で、本やら紙類やらがかなり散乱してしまつた部屋を、井上先輩は舐めるように見渡す。僕にあからさまに抱きついている、ミス・エマーデイルが目に入らないかのように。そして、井上先輩は視線をテレビに向けてから、言った。

「こんな、女つ気のない部屋で、なにが『女人禁制の香り』だ。夢でも見てるのか、お前」

「え？」

ミス・エマーデイルは確かに目の前にいる。なのに、井上先輩の目には見えないらしい。

どういうこと？ という視線をミス・エマーデイルに向けると、彼女はくすくすと笑ってからその答えを、まるで密やかな秘密を交換するかのような口調で言った。

『私の姿は、あなたにしか見えないの。いいえ、私の姿も、私の声も、私の香りも、私のあらゆる痕跡も、あなたにしか見えないの。あなた以外の人間には、私は存在しないの』

だから、と、ミス・エマーデイルは体をぐいぐい寄せてきた。

『こっやって、人前でいちゃいちゃしても、大丈夫』

まるで、マシユマロのような、ミス、エマーデイルの肌の感触が僕に迫る。でも、妙な気恥ずかしさに襲われた僕は、

「バカ、やめろ！」

と、叫んでミス・エマーデイルを引き剥がした。

この声に、井上先輩は僕の方を振り返った。

「おい、なに一人で寸劇をやってるんだよ。うるさいよ」

「あ、スイマセン」

僕が頭を掻いて謝ると、井上先輩は画面に視線を戻した。

テレビ画面の中では、キャラクター選択画面が現れていた。「幕末無双」っていうのは、明治維新あたりの人物を操って数々の仕掛けのある戦場を駆け回るというコンセプトのアクションゲームで、これまで三国志や、日本の戦国時代をテーマにしたシリーズが出ている。けれど、それらの時代と比べると、「幕末」という時代はさほど戦争がない。というわけで、本来は戦争ではない「寺田屋事件」や「池田屋事件」、「三条高札事件」なども戦争みたいな描かれかたをしてしまった、という歴史ファンから見れば噴飯モノのゲームだ。

井上先輩は、キャラクターを選ぶようにしてカーソルを動かしていたけれど、そのうち“井上源三郎”というキャラの前にカーソルを止め、ボタンを押した。画面の中でそのキャラクターは、「ワシもまだまだ現役じゃわい」と叫んだ。井上源三郎、というのは、新撰組の幹部の一人だ。とは言っても、沖田総司や斉藤一ほどメジャ

「な人ではないし、特に目立った人ではないのに、どうして『幕末無双』で使用可能キャラになったのかよく判らない、という、まあ、それ程度の紹介しか出来ない人物だ。きっと、井上先輩は、自分と苗字が同じ、という馬鹿馬鹿しい理由でキャラを選んだんだろう。」

ゲームが、何の前触れもなく始まった。

遠景に会津の城が見えるから、きっと会津戦争をプレイしているのだろう。でも、この面は、とんでもなく難しい。斉藤一ストーリーモードの最終面にあたるこの会津戦争は、初めて『幕末無双』をやる人間がプレイしていいような簡単な面ではない。しかも、玄人好みのする攻撃モーション、言い換えれば扱いにくい攻撃モーションの井上源三郎で挑むなんて、無鉄砲もいいところだ。



## プロローグ【12】（後書き）

このお話に出てくるゲーム「幕末無双」ですが、実在しません（キツパリ）。ただし、モデルは存在します……。って、あえて元ネタを指摘するまでもない気がしますのでこれくらいにしますが、一応注意喚起ということで。

## プロローグ【13】

もちろん、画面の上の井上源三郎は、ぼっこぼこにやられていた。銃に撃たれ、弓に射られ、維新政府側の雑兵に小突かれ、どんどん体力ゲージが削られていく。画面の上の井上源三郎は、うめきを上げつつ後退している。

でも、この光景って、僕自身なんじゃあるまいか、と画面を見ていた僕はふと思った。

ほとんど勝てる見込みのない面に、いきなり放り込まれる。しかも、戦い方も判らないままに、どんどん体力ゲージが削られていく。そして、結末は…。

「あゝあ、負けちまったよ！」

ゲームのコントローラーを投げて、井上先輩はそう呟いた。

画面の中の井上源三郎は、地面に突っ伏して倒れていた。けれど、その画面はすぐにリセットされた。

「なんの！まだまだ！」

コントローラーを取り直した井上先輩は、キャラを変えずに、また同じ会津戦争でプレイし始めた。負けず嫌いなのだ、井上先輩は。画面に、さっきと同じ会津若松城の遠景が写し出された。そして、さっきと同じく、井上源三郎が出撃する。けれど、さっきまでとは違い、画面の上の井上源三郎はさっきまでとは違う行動を見せた。

「ええと、ここに確か伏兵がいたから…このコースは外して…で、井上は全包围攻撃が出来ないからな、仲間と一緒に行動しなきゃな」画面を食い入るように見ている井上先輩は、そう呟いた。意外にも戦略を立ててゲームを進めていた。その先輩の呟き通り、画面の上の井上源三郎は味方と一緒に行動し、伏兵がいたというコースを外して行動していた。そして、少しずつではあるけれど行軍している。

「ダメですよ、井上先輩」僕は言った。

「え？ 何がだ」井上先輩は、画面から目を放さずに、訊いてきた。「だって、この先には、有名武将がいます。大村益次郎だったかな？ とにかく、今の井上源三郎のレベルじゃ勝てませんよ」

すると、画面には、僕の言ったとおり、維新志士側の有名武将、大村益次郎が現れた。確か、歴史上では上野戦争で活躍した軍師さんらしいけど、このゲームの中ではガトリング速射砲をまるでハンマーのように振り回す、コンセプトがよく判らないキャラになっていた。

画面の上の大村益次郎は僕の言ったとおり、とんでもなく強かった。

味方を必殺技で一気に減らした上、井上先輩の操る井上源三郎なんだかややこしいの体力を半分くらいに削った。

けれど、画面の上の井上源三郎は、いや、画面の前に座る井上先輩は諦めなかった。

ちくちくと、井上源三郎が反撃を試みているのだ。元々、井上源三郎というキャラは1対1の状況にめっぽう強いし、大村益次郎というキャラクターが1対1にめっぽう弱い、というキャラ付けがされているから、たとえ井上のレベルが低かろうと、けっこう良い勝負が出来るのだ。

けれど、やっぱりレベルが違いすぎる。大村益次郎は、井上源三郎のゲージをズドン、ズドンと削っていく。そして、井上は、大村益次郎のゲージをチクチク削っていく。やっぱり、そのダメージに開きがあった。

「ええい！ 必殺技！」

不意に、井上先輩は叫んだ。

画面の上で、井上源三郎は武器を縦横に振り、目の前にいる大村益次郎をぼっこぼこに叩いていた。これをもし現実に行ってしまったら、マジでヤバイだろうな、っていうくらいの攻撃を。大村の体力ゲージが、どんどん減ってゆく。そして。

ついに体力ゲージが0になった大村益次郎は、「認めんぞ、西郷

のような英雄は……」と呻いて、倒れた。そして、大村を倒した井上源三郎が、「敵将、討ち取ったべえ！」と勝ち名乗りを上げていた。

「どうだ！」

井上先輩は、ガッツポーズを決めた。

それを見た瞬間、僕の心に、何かが目覚めるのを自覚した。

その瞬間、僕は通学用のバッグを手に取った。

『え？ どうしたの？』

ミス・エマーデイルは困惑気味に、僕に言葉を掛けてくる。けれど、その質問に答えず、僕は井上先輩に言った。

「井上先輩！ ちょっと学校に行つて来ます！」

井上先輩は、画面から、視線を僕の方に向けてきた。戦場の音楽が止んだことから考えて、ポーズボタンを押したのだろう。不思議そうな顔を隠さず、井上先輩は言った。

「は？ お前の部活、ほとんど活動してないんだろ？ 学校に行く理由がないじゃねえか」

一方の僕も、不満の色を隠さずに答えた。

「活動してますよ。まだ、活動内容は未定ですけど」

「は！ それを“ほとんど活動してない”って言うんだよ！ ……そんなやる気の無い部活に入っているくらいなら、ウチのバドミントン部に来ないか？ 今なら新入部員大歓迎だぞ？」

井上先輩の申し出を「遠慮します」と一蹴してから、僕は続けた。「とにかく、この部屋の留守番頼みます！」

「おうよ」

すこし顔をしかめて、井上先輩は視線を画面に戻した。

『ねえ、どういうこと？ 説明してよ』

僕の腕を掴んで振り回すミス・エマーデイルを無視して、僕はドアの方に向かう。そして、ドアの前に立ったとき、あることに気づいた。僕は振り返り、井上先輩に声をかけた。

「あのう、井上先輩！ さっきお貸しした、自転車の鍵はどうしま

した！？」

画面を向いていた井上先輩は僕の方にまた視線を向け、しばし固まった。見たところ、頭の中で、カチカチカチと歯車が回っているような、あるいはメモリーをさらっているような顔をしていた。そして、しばらく経ってから、「ああ！」と声を上げて、教えてくれた。

「まだ、自転車にさしたまんまだ！スマン」

満面の笑みだった。そんな井上先輩に呆れた僕はため息をついた。すると、井上先輩は僕を睨んだ。

「なんか、文句あるのかよお？」

「いいえ、ないです！」

井上先輩に因縁をつけられるのがイヤだった僕は、ドアを開け、速やかに外に出て、ドアを閉めた。閉めた瞬間、井上先輩の、「うわあ！」という叫びが聞こえた。きっと、ポーズせずに僕と会話して画面から目を離れた結果、ゲームオーバーになってしまったのだろう。

「ねえ、どういうこと？　これから学校に行くって、どういうことよ？」

ミス・エマーデイルが唇を尖らせて僕に訊く。どうでもいいけど、その仕草、すごくかわええ。

僕は、答えた。

「決まってる。ミス・エマーデイルとのゲームに、勝つんだ。悪いけど、僕はまだ死にたくないんだ」

『そう』

ミス・エマーデイルは、ちょっと不機嫌そうに頬を膨らませた。かわええ。

「お！　どうした、お前、今日休むんじゃないかったのか？」

教室に着くなり、マサルが僕に声をかけてきた。

「風邪、大丈夫なの？」

と、月本さんは僕の顔を覗きこむ。僕は自転車を必死で漕いで学校まで来たので、汗が体中からあふれ出ていた。きつと、顔も真っ赤だっただろう。そんな僕の様子はきつと、熱に浮かされた病人の姿に見えただろう。でも、実際のところ仮病だったので、僕は首を横に振った。

「で、決まった？ 何部になるか」

すると、マサルは首を横に振った。そして、月本さんが今日のミーティングの経緯を教えてくれた。

「いつもどおりの展開なの。弥生ちゃんがレク部、それで藤島君が空飛ぶ円盤研究部。どっちもそれで譲らないのよね」

やっぱり…事態は何も変化していないようだ。

思わず、あくびが出た。

『あらあら、やっぱり、つまらないことになっているのね』

僕の後ろで、ミス・エマーデイルがいやに嬉しそうな声を上げた。振り返って、僕はミス・エマーデイルをたしなめる。

「あのさあ、そういうこと言うの、やめてくれない？」

『だって、本当の事じゃない』

そう言って、この教室の空気をもてあまし気味に、カカトをとんとんやるミス・エマーデイル。かわええ。

急に後ろを振り返った僕に疑問を感じたのか、マサルが僕に訊いた。

「おい、誰と話してるんだ？」

しまった、ミス・エマーデイルの姿や声は僕にしか見えないし、聞こえないんだ。これからは、ミス・エマーデイルと人前で話すときには、小声で話さなくちゃいけないな。そう気づいた僕は、適当に誤魔化した。

「そつえば、弥生さんと藤島君は？」

ちよつと怪訝な顔を浮かべながらも、マサルは答えた。

「ああ、とりあえず、頭冷やしてこい、って命令しておいた。きつと二人とも、屋上で頭冷やしているころさ」

「でもさ」月本さんが心配気な表情で教室の天井を見やっただ。「あの剣幕じゃ、もしかしたら、二人、屋上でも言い争いしてるかもね…」

## プロローグ【14】

その言葉を、マサルは笑った。

「ははは…、そんなわけ、ないじゃないか、月本さんも…冗談きついな……」

最後の方に行くにつれ、やけに自信がしぼんでいくマサル。いつしか視線を天井からマサルの顔へと移していた月本さんは、キリッと真面目な顔をしていた。そして、まるで脅しをかけるかのようにポツリと言った。

「…冗談言っているように、見える？」

「ごめん、見えない」

そう呟くと、マサルは走り出した。それに続いて、月本さんも走り出す。

僕は一瞬混乱してしまったのだけど、とりあえず月本さんのあとを追うことにした。教室のドアを抜け、がらんとした廊下を走り抜ける。いつもは人でごったがえしている廊下も、普段は開けっ放しになっていて生徒達のうるさい声が聞こえてくる教室のドアの向こう側も、今日は本当に静かだ。僕達が走る音だけが、がらんとした廊下に反響していた。

『あら、またもや、つまらなそうな事態になってるわね』

「だから、嬉しそうに言うなよ！」僕は、僕の横にいるミス・エマーデイルに突っ込んだ。

『ふふ、でも、私の思惑の通りよね』

ミス・エマーデイルは真っ黒な瞳を僕に向けた。

そういえば、と、僕はここで思い至った。

ミス・エマーデイルって、どうやって走ってるんだ？ つうか、

僕、ほとんど全力疾走に近いスピードで走ってるはずなのに、ミス・エマーデイルは僕に併走するようにいついてきている。どういうこと？

そう思い至った僕は、視線を彼女の足に落とした。



見なきゃよかった、と僕は思った。

てつきり、ミス・エマーデイルはこの世のものじゃない走り方をしているんじゃないだろうか、と予想してたのだ。具体的には、歩いているような拳動で、まるで氷の上を滑るようにして移動しているんじゃないかと思ったのだ。あるいは、宙に浮かんで移動してるんじゃないだろうか、と想像してたのだ。だってミス・エマーデイルは人間じゃないのだから、それくらい奇妙な走り方をしてるんじゃないかと思ったわけだ。

ところが、ミス・エマーデイルの実際は、僕の想像の一步上を行った。

ミス・エマーデイルは、歩幅としては歩いている。けれど、そのピッチが半端じゃなく早いのだ。僕が一步出す間に、きつと十歩は出しているだろう。なんというか、傍で見ると、シャカシャカ、と音を立てそうな感じた。ゴキブリを連想するような走り方だ。ていうか、競歩の選手になったら、オリンピックでメダル確実だ。

『なあに、どうしたの？』

シャカシャカと音を立て（ているように見え）つつも、ミス・エマーデイルは息一つ乱さず、訊いてきた。

『いや、なんでもない。気分悪くなってきた』

『運動不足んじゃない？』

絶対に、こいつの唇は奪わんぞ、そう決心した僕なのだった。

そんな寸劇を挟みつつも、僕は屋上までやってきた。

屋上は、いつもの通り、空が広がった。青い空が、まるで屋上にやってきた僕らを包み込むように、雄大に広がっていた。その空の真ん中に、太陽が鎮座して、僕らを照らす。そして、そんな雄大な空の下で、ものすごく小さな小さい言い争いをしている二人組を見つけた。もちろん…。

「…空飛ぶ円盤研究部！」

「レク部！」

当然、弥生さんと藤島君だ。

その余りに子供な様子に、さすがのマサルも顔をしかめて頭をかいたあと、二人の仲裁に入った。

「おいおい、こんなところで喧嘩するなよ、子供じゃあるまいし！」

「

そのマサルの言葉は、二人の言い争いに油を注いでしたったようだ。二人とも、マサルに食って掛かる。

「もう、うるさいわね！ もう時間がないんでしょ！？ アンタみたいのにのんびんだらりとはしてられないの！」

「マサルくん、黙ってて」

僕と月本さんはダメだこりゃ、とばかりに頭を振った。そんな僕の横で、ミス・エマーデイルはなにが面白いのかくすくす笑っている。

仕方がないので、僕は叫んだ。

「シャラップ！！」

なぜ英語。心の中で、自分の言葉に突っ込みを入れた。

けれど、効果的だったようだ。皆、口を噤んで僕の方に視線をやった。

「なに！ まったく、こんなときに遅れてきて！」 弥生さんは口を尖らせた。「で、しかもシャラップ？ 何様よ！ もう！」

あまりの弥生さんの剣幕に、思わずたじろきそうになりつつも、どうにか踏みとどまる僕。

『どうするつもり？』

「まあ、見ててよ」

ミス・エマーデイルの質問に小声で答えたあと、僕は大声で言った。

「実はさ、部の活動内容について、ちょっと考えてきたんだ」

「え？」

皆、僕の顔に視線を集中させた。

『初耳だわ。いつの間に？』

そんなミス・エマーデイルの質問をスルーしつつ、僕は続けた。

「“調査部”ってというのはどうだろう？」

みんなの顔が、一瞬にして曇るのが手にとつて分かった。

「つつか、つまらなそう……」マサルのその一言が、皆の心情を代弁しているようだった。めげそうになりながらも、僕は屋上で必死にプレゼンをする。

「案外そうでもないさ。だって、事実上、レク部にもなり得るし、空飛ぶ円盤研究会にだってなり得る」

「……どうということ？」

藤島君が食いついてきた。心の中でガッツポーズを決めつつも、僕は続ける。

「僕の考えた、“調査部”の概略はこう。まず、部員の皆が、自分の調べたいことをプレゼンする。それで、一番面白そうなネタを、部として調査するのさ。あるいは民主的に、皆が持ってきたネタを、代わりばんこに調べる、っていう形式でもいいんじゃないかな？とにかく、そういう形式」

「……ふん、悪くないな」

藤島君は、腕を組んで唸った。

けれど、弥生さんが噛み付いてきた。

「でもさ！“調査部”じゃあ、レク部の活動内容みたいにはならないんじゃない？確かに、陰気な空飛ぶ円盤研究部みたいなことはできるだろうけど、ハイソでハイカラなレク部は出来ないわよ！」

「

レク部のどこが“ハイソでハイカラ”なのかは分からなかったけど、僕はそこを捨て置いて、弥生さんへの説得を試みた。

「いいや、なり得るよ」

「……どうということ？」

ずずいつと身を乗り出す弥生さん。よし、弥生さんも興味を持ち始めた。心の中でガッツポーズをかましつつ、僕は続けた。

「例えば、弥生さんが部活動の一環として、ハイキングに行きたいとするじゃない？そしたら、“山の生態系について調査する”っ

ていう、適当な理由をつけてプレゼンすればいいのさ」

「ふうん？ でもさ、仮に、“バスケがしたい”ってときはどうしたらいいの？ レク部、って、色んなことするじゃない？ レク部の活動内容を、全部その理屈でカバーできる？」

弥生さんの言葉に、頷く僕。

「どうやって？」「弥生さんとマサルは、同時に声を上げた。

僕は答えた。

「バスケがしたいんだったら、“体育館の痛み具合を、実際に運動してみることで調査する”って言えばいいし、仮に野球がしたくなったら、“グラウンドに潜む危険を、実際に運動することで調査する”って言えばいい。理屈が浮かばなかったら、最悪、“そのスポーツが、なぜ面白いのか調査する”って言えばいい」

「なるほど、無敵の論法よね」半ば呆れ気味に、弥生さんは言った。「無敵の論法、ってより」僕は頬を掻いて続けた。「ほとんど詭弁だね。でも、結局その論法は、学校側に向けての言い訳みたいなものだから」

「言い訳？」

「そ、言い訳。だから、実際はどうだっていいのさ」

「なるほど」弥生さんも、アゴに人差し指を乗せるようなポーズで考え込んだ。

よし、これで、二人とも丸め込んだな。僕は、マサルに声をかけた。

「マサル、僕の案、どう？」

「どどどど、どう？ って言われても…、なあ？」

マサルは、困ったような顔で月本さんの顔を覗きこんだ。月本さんは、持ち前の笑顔のままで、こくりと一つ頷いた。きっと、僕の案に賛成してくれているのだ。けれど、なおも困ったような顔を浮かべるマサルに、僕はもう一押しした。

「マサル！ じゃあ多数決だ！ 僕の案、賛成か、反対か。その決を採るんだ！」

そんな僕の言葉に促されるように、マサルは叫んだ。

## プロローグ【15】

「よ、よし、多数決だ！ 今出た案、“調査部”に、反対の人、手を挙げて！」

マサルの声が、屋上に響き渡った。その声は、五月のうらかな空気を揺らし、溶けていく。けれど、その声に呼応する人は、誰一人としていなかった。皆、手を挙げようとはせず、どこまでも続きそうな空を見やっている。ただ、僕の視界のはじっこでは、ミス・エマーデイルだけが手を挙げていた。恨めしそうな顔をして。

「じゃ、じゃあ！ 賛成の人、手を挙げて！」

すると皆、天に向かってパーを繰り出した。まずは月本さんが。それにつられるように、弥生さんが。しぶしぶとした様子の藤島君が。そして、僕が。

「有効票4票、満場一致で、“調査部”に決定！」

マサルが、そう宣言した。瞬間、妙な安堵感が屋上の空気に溶けていき、僕らを優しく包んだ。ようやく僕らは高校生らしく過ごせるんだ、という、安堵感なのかもしれない。その安堵感を感じているのは僕だけではないようで、皆ほっとした顔を浮かべている。

『二つ、質問させてもらえる？』

ミス・エマーデイルが不意に呟いた。僕が促すと、指を一つ立て、彼女は僕に問うた。

『いつ、あんな詭弁を思いついたの？』

「詭弁？」

僕が聞き返すと、ミス・エマーデイルは続けた。

『“調査部”うんぬんの話よ』

「ああ。さつきさ。自転車を漕ぎながら、延々と考えてたんだ。弥生さんと、藤島君の意見を、どうにかドッキングできないかな、ってさ」

『ふうん、そう。じゃあ、二つ目の質問』そう言って、彼女は二つ

目の指を立てた。『そのドッキングに、あなたにとって利益はあるの？』  
インセンティブ

ミス・エマーデイルの亜麻色の髪が、風にゆれてキラキラと光った。まるで、僕のことを非難するかのように鋭く。髪の毛の反射光に促されるように、僕は小声で答えた。

「悪いんだけどね、ミス・エマーデイル、僕は死にたくないんだ」  
ちよつと眉をひそめるミス・エマーデイル。僕の言葉に潜む意味に気づいたらしく、傍から見ても不機嫌そうだった。始末におえないことに、不機嫌そうに佇む姿さえ、ものすごく可愛い。なんて怖い女の子だよ、まったく。

ミス・エマーデイルはその立ち居姿のまま、僕に訊いてきた。

『へえ、もしかして、私から逃れるために、こんなことを皆に提案したわけ？』

僕は頷いた。

すると、ミス・エマーデイルは口角を上げて、まるで僕のことを嘲笑うかのように言葉を重ねた。

『ふふ、私から逃れるなんて、できようはずも無いわ。だってそうでしょ？ 私はミス・エマーデイル。あなたの倦怠そのものなの。私がここにいてるってことは、あなたは今、ものすごい倦怠に襲われているってこと。その倦怠を振り払うには、ちよつとやそつとの出来事<sup>ベント</sup>じゃ果たせないのよ』

わかつてるさ。そんなこと、僕が一番分かってる。

だって、こうやって“調査部”について力説していたその瞬間だって、僕の体は四月から染み付いていた倦怠に蝕まれていた。“あ、家に帰ってゲームしたいなあ、ダラダラしたいなあ”っていうモノローグを無理矢理に押さえ込んで肘島君を説得して、“家の掃除しなきゃなあ”という憂鬱な気分を引きずりながら、弥生さんにトンチを披露した。そう、僕はどんどん倦怠に支配されつつあるのだ。

でも、僕は…。

僕は言った。ミス・エマーデイルにかけた言葉だったけれど、むしろその言葉は自分に言い聞かせるかのようだった。

「楽しくやりたいんだ。ようやく入った高校なんだ」

その僕の独り言を、ミス・エマーデイルは嗤った。

「勝手にしなさい。でも、それでもあなたは私のことを好きになるわ。だってそうでしょ？　だってあなたは私だもの。それに私、あなたのことが大好きだもの」

そう宣言して、天国から舞い降りた小悪魔のように、超然と微笑むミス・エマーデイル。

そうなんだ。これは、ゲームなんだ。

ミス・エマーデイルと僕の。ミス・エマーデイルにとってどうかは知らないけれど、僕にとっては勝っても負けても利益のないゲームに。けれど、負けてしまうと失うものが大きいという、非常に馬鹿馬鹿しいゲームに。けれど、負けて失いたくない。だから、僕はこのゲームに乗るしかない。そして、勝つしかない。

今更ながら、その事実思い至った僕なのだった。

「おい！」

僕を不意に呼ぶ声。振り向くと、その声の主がマサルであることが分かった。マサルたちはもう既に屋上の出入り口に歩き出していた。藤島君と弥生さんなんか、もう既に校舎内に入ってしまったらしく、僕の目には入らない。月本さんとマサルが、出入り口近辺で僕の顔を見ている。僕が手を挙げると、月本さんが言った。

「なにしてるの？　もう行っちゃうよ？」

「あ、うん！　今行く！」

僕は二人の下に駆け出した。

僕の横で、ミス・エマーデイルが囁く。

「負けないわよ」

カサカサと足を動かして、走る僕に歩調を合わせるミス・エマーデイル。足をカサカサ動かすような、不気味な奴に籠絡されてたまるか。と、決意を新たにした僕は、ミス・エマーデイルに微笑みか



けた。

「負けないよ、僕も」

五月の空が、輝いていた。まるで、僕のことを祝福するように。  
あるいは、僕のことを嘲笑うかのように。

## プロローグ【15】（後書き）

これにて、ようやくプロローグ終了です。

## UFOの見える丘【1】

どうして黒板は黒い板と言っのだろう？ と、僕は、眼の前の黒板を胡乱に眺めながら思った。

「黒板」と名前がついている割に、僕の前、つまり教室に掛かっている黒板は、黒いというよりは草色に近い。仮に、昔の黒板が黒かったとして、ではどうして現在の黒板は草色なのだろう？ そういう、取り留めのない疑問が頭に浮かぶ僕。結局答えの出ない疑問を、僕は真剣に考える。

今のシチュエーションだと、そういう「答えの出ない疑問」を考えていると、時間を効果的に潰せるからだ。正しく、K I L L T I M E。

調査部の面々も、きっと僕と同じことを実践しているのだろう。皆、田の字に並べた机の前に座りつつどこかに視線を泳がせながら、何か物思いに浸っているようだった。

思わず僕は、窓の外を見た。窓の向こうの景色は、5月の陽光に照らされて、その輪郭を失っていた。まるで、今の僕の心境のようだ。馬鹿馬鹿しくなった僕は、また視線を元に戻す。

けれど、ミス・エマーデイルだけはいやにご機嫌そうだった。僕にしか聞こえない声で、不思議な節回しの鼻歌を歌っている。

「なんでこんなにご機嫌なのさ？」

小声で訊くと、鼻歌を中断してミス・エマーデイルは答えた。

『だって、あなたが退屈すればするほど、私が元気になるのは道理じゃない？ だって、私はあなたの倦怠が形になった存在なのよ？』

髪をフアサつと掻き揚げたミス・エマーデイル。その瞬間、カモミールの香りが僕の鼻腔をくすぐる。そのカモミールの香りは、どうしたわけか眠りを誘う。さらに、奇妙に音が飛んでいる鼻歌が、

僕の思考に割り込んでくる。ふと両手を組んで、眼の前に突っ伏したい気分になった。でも…。

「…ねえ、聞いている！？」

黒板の前に立つ藤島君の鋭い視線が、眠りの世界に落ちるのをよしとしてくれない。

「う、うん、訊いてるよぉ」

半ば、寝ぼけ気味に言葉を返すと、藤島君はコホンと咳払いをしてから、彼とは思えないほどに饒舌な言葉を重ねる。

「…さて、どこまで喋ったっけ？ …あ、ああ！ ケネス・アーノルド事件だね！ これまで話してきたような、幽霊飛行船とか、空飛ぶ幽霊帆船とかいうフォークロアが、ケネス・アーノルド事件によって一気に様変わりしたんだ。アメリカ空軍パイロット、ケネス・アーノルドが、空で見た飛行物体について、“空飛ぶ円盤”と表現して以降、“空飛ぶ妙なものは、“空飛ぶ円盤”に収斂していくんだ………！ ……」

そう、どうしたわけか僕らは、こんなうらかな昼休みに、藤島君のUFO講義を受けるはめになっているのである。藤島君にとっては面白いイベントなのだろうけど、僕ら一般人にとっては苦痛でしかない。

なんでこんなことになったのか。それは、藤島君以外の調査部の面々の怠慢がもたらした結果なのだから、僕ら調査部員は自分たちの怠慢に泣くしかない。

日曜日、僕の提案によって急転直下に決まった我らが“調査部”。次の日の月曜の昼休み、つまり今日の昼休みには、マサルの手によって、生徒会に活動内容届けが出された。けれど、そこで生徒会の方からあるお達しがあった。二年生の、町田先輩という生徒会書記の人が、こう切り出してきたのだという。

“あ、君？ 一年生だよな？ ってことは、部活の「5月査定」を知らないね？”

え、それ、何スカア？

きつとマサルのことだ。こんな調子で訊いたのだろう。町田先輩は丸いメガネをくいつと上げて、ちよつと不機嫌そうに言葉を重ねた、という。

“我が熱血学園高校は、全校生徒が必ず入部する決まりになっているのは、一年生の君でも知っているだろう？でも、中には不屈きな部もあつて、表ではもつともらしい看板を引つさげつつ実はまるで活動をしていない”幽霊部“が時折見受けられる。そういう部を取り締まるため、生徒会の方では5月と11月に、部の査定という作業を行なっている”

サテイ？　そんな馬鹿馬鹿しいこと、どうやってやるんス力？

きつと、マサルはこんな調子で訊いたのだろう。いよいよ、町田先輩はいやにぴりぴりとして話を続けた、という。

“運動部の場合、各種大会への出場の証拠となるようなもの、例えば大会エントリーの際の領収書なんかのコピーで事足りる。それは、吹奏楽部や演劇部のように、対外試合に当たるようなものが存在する文化部も同じだ。だが、そういったものが存在しない部、つまり君のような部の場合は、ちよつと事情が異なる”

あのう、どうかの売れっ子司会者みたいに、話を先延べにするの、やめてくれませんか？　で、結局、ウチの部は何を提出すればいいんス力？

きつとマサルのことだ。そういう類の、相手を揶揄するようなことを言つたのだろう。「町田先輩、どうしたわけか顔を真っ赤にして怒り出しちゃつてさあ」とはマサルの弁だけど、生徒会の書記まで勤める町田先輩なる人が、理不尽に怒るはずもない。きつと、マサルの言葉に町田先輩が怒るだけの理由があつたものと思われる。とにかくも、町田先輩は顔を真っ赤にしてこつ怒鳴つたという。

“お前たちみたいな部の場合、活動した内容について、レポートを提出しろ！　いいか、もし少しでもそのレポートに不備があつたら、おまえらの部、なんとしても潰すからな！”

しかも、町田先輩、思い出したようにこつ付け加えたという。

“期限は5月11日、つまり明後日までだからな！”

え、査定の期限って、5月の20日じゃなかったっけ？という、いかにもトロそうな生徒会の女の子の口を塞ぎながら。

え！

とにかく、マサルは走った。僕ら調査部が屯している僕のクラス、1年H組の教室に駆け込んできた。そして、事情を説明された僕らは、とにかく混乱した。

だって僕らは、部の活動内容を決める、というただそれだけで一ヶ月をかけた奴らなのだ。実は、「とりあえず活動内容も決まったら、のんびりとやりましょうよ」的な空気が流れていたのだ。かく言う僕自身、この部活動に文字通り命が懸かっているにもかかわらず、のんびりモードだったのである。

そんな奴らだから、皆調査するようなネタを持っていなかった。

弥生さんは、「え？ そんなに早く！？ ああ、しくったなあ…」とか言って少し癖のある髪のを掻き揚げた。マサルも、「いや、そもそも俺、わざわざ調査したいような不思議なものなんてねえし」と、“調査”部の部長あるまじきことを又ケ又ケと言つてのけた。頼みの月本さんさえ、「ごめんなさい…」と下を向いてしまった。

そんな、みんなの頭の中で「あ、こりや、廃部決定かも」と諦めモード満載の言葉が躍ったころ、さっきまでつまらなそうにパンをかじっていた藤島君がヘッドホンを外してこう言つたのだ。「…僕、部として調査したいことがあるんだけど」

皆“渡りに船”とばかりに彼に飛びついた。そして、その雰囲気のまま彼のプレゼンが始まった。だけど、どうしたわけかUFO講義が延々続いている、というわけなのだ。

さて、そんな藤島君の講義も、ヒル夫妻とかいう人たちのUFO誘拐事件とか、グレイタイプの宇宙人の台頭とか、ロズウェル事件とか、とにかくそういう部外者にはよく分からない単語が一通り並んだあと、もうそろそろ佳境に入ろうとしていた。

「…とにかく、UFOの歴史はざっとこんな感じなんだけど…」藤

島君はとりあえず、といった趣で言葉を切った。

「で」マサルは訊いた。「どうということなんでス力？」

「…どうということ、って？ この話をした意図の話？」藤島君はマサルの顔を見やった。マサルが頷くと、ちよつと言いつい訳気味に言葉を継ぐ。「…いや、やっぱり何事も、基本が大事だから」

月本さんも口を挟む。ちよつと困ったような声音を隠さずに。

「ええと…、もしかして、調査したいものって、UFOの歴史？」  
かぶりを振る藤島君。

「…違うよ。これはあくまで前提になる話、基礎知識さ。だから実は、けっこう端折っちゃった話もあるよ。たとえばMJ-12文書とかミステリーサークルとか…」

話がまた、UFOウンチクに向かいそうだったので、とりあえず僕が口を挟んだ。

「でさ！ 藤島君が調査したい話って、どういう話なの？ ほら、時間がないからさ」

時計は午後12時50分を指していた。午後1時きっかりから午後の授業が始まるから、あと5分くらいでこの話を切り上げる必要があるのだ。

「…ああ！」

ようやく思い出したように、藤島君は頷いた。

「早くちゃっちゃかやっちゃってよねー」

手をヒラヒラさせて、ちよつと背中を丸めながら、不機嫌そうに弥生さんは言った。

「…うん」弥生さんの不機嫌に引きずられるように声を唸らせると、藤島君は続けた。「実はね、小耳に挟んだんだけどね」

そう前置きして、藤島君はまた喋り始めた。

「最近、ウチの寮の三階生の間で、噂になってるんだ」

「“三階生”ってなによ」弥生さんが、面倒そうに聞く。

あからさまに嫌な顔をした藤島君の代わりに、僕が答える。

「ああ、ハトムネ荘って四階まであって、各階ごとに自治会がある

の。だから各階ごとに、なんとなく区別があつてさ。だから、僕は“四階生”、藤島君は“三階生”なんだ」

「…続けるよ」あからさまに面倒そうな口調で、藤島君は続けた。

「…最近三階生の間で、噂があつてね。“UFOが見える丘がある”って」

さつきまでダルそうにしていたマサルも、身を乗り出した。そして、藤島君の言葉に頷く。

「ああ、俺も小耳に挟んだことがある。たしか、あれだよな？ ハトムネ寮の近くにある、ってヤツだろ？ 確か、反町さんもそんなことを言つてた気がする…」

一応復習だけれど、“反町さん”というのは、一年生の、とびきりかわいい女の子の名前である。この頃にはもはや学校のアイドル化していて、会話なんかでの登場の仕方、友達というよりはむしろテレビの向こうのアイドルのような感じになっているのだった。



## UFOの見える丘【1】（後書き）

一応明記しておきますが、章の名前になっている「UFOの見える丘」には元ネタがあります。矢車が敬愛するバンド“スピッツ”の同名曲が元ネタです。

…「だからどうした」と言われても困るんですが。

## UFOの見える丘【2】

ことがここに至って、ようやく弥生さんが背筋を糺した。お、どうしたんだ？　僕がそう思うのが早いか、弥生さんは隣の席のマサルを言葉で小突く。

「まったく、反町さん反町さん、って、アンタ、オタク？　うるさいわよ！　もう！」

そして、弥生さんのグーが、マサルの右頬に突き刺さる。

「痛い！」　もはや状況説明しかしないマサルであった。

そんな状況に呆れたように顔をしかめて、藤島君は言葉を継ぐ。

「…うん、ハトムネ寮って、山の中腹くらいにあるんだけど、ハトムネ寮までの道って一本道じゃないんだ。実は、一箇所だけY字路になっているところがあってさ、学校から行くとすると、左に曲がるとハトムネ寮、右に曲がるとその丘へと続くんだ。…だよな？」

藤島君に同意を求められた僕は、反射的に通い慣れた道を思い出す。

そう、帰り道、唸ってしまうような長い坂道の途中に、一箇所分岐がある。ハトムネ荘のほうには申し訳程度にせよ街灯が灯っているのに、もう一方のほうは明かりらしきものさえない。ハトムネ荘のほうの道は手入れもされているし往来もあるから、木も切りそろえられて陽光が入り込んで明るいし、未舗装の道にせよしっかりと道になっているのに、そちらの方は半ば獣道のように、ところどころ雑草が倒れているだけで、雑草やら木々やらで鬱蒼としている。いつもその道を意識するのは夕方ごろだからしょうがないのかもしれないけれど、いつもすごく薄暗い。まるで、僕を飲み込もうとしているかのように、ぽっかりと口を開けている。その口の近くには、入ってはならん、と警告するように、いかめしい顔をした地蔵が立っている。

「うん、確かに、あそこは分かれ道になってるけど…」　僕はあの分

かれ道を思い出しながら言った。「そんな丘に続いてるなんて初めて聞いたよ」

その僕の言葉に納得したのか、藤島君は続ける。

「…とにかく、あの道の奥には、開けた丘があつてね、そこで夜待つてると、時折動く光点が見えるらしいんだ」

「でも、光点、っていうけど、ここらへん、けっこう飛行機が飛んでるじゃない？　もしかしたらその光なんじゃないのかな？」

控えめに自己主張する月本さん。けれど、その可能性を藤島君は封じた。

「…僕も最初はその可能性を考えたんだ。ここらへんには、飛行場もあるしね。それに、他の可能性も考えたんだ。例えば、惑星の誤認とか。意外にあるんだ、火星をUFOに見間違える、っていうのは。でも、違うみたいだ」

「なんで？」

まるで非難するようでもなく、かといって急かすようでもない月本さんの言葉。彼女、案外聞き上手なのかも知れない。

藤島君はメガネを光らせて続ける。

「…でもね、動き方がおかしいらしいんだ」

「おかしい？」

「…うん。ものすごい勢いで急旋回するらしいんだ」藤島君は、指を一本たて、Uの字を横倒しにしたような軌跡を頭上に描いた。「…こんな感じに、ね。三階生の先輩が言うには、だけど」

「あ、そっか」月本さんは納得した様子で言った。「飛行機はそんな動きは出来ないし、かといって、火星みたいなものはそのもそも動かない。そんな急旋回、私達が考えるようなものじゃありえない、ってことよね」

「…そういうこと」

藤島君が頷いた。

「つまり」僕が訊いた。「今回の調査対象は、その謎の飛行物体の調査、ってこと？」

「…そういうこと」と、藤島君は頷いた。そう、藤島君が頷いた瞬間、時計の針が動き、長針が11を指した。その時計の針に連動するようにして、予鈴がなった。

「もう予鈴か」

誰とも知らない生徒の呟き。その呟きを合図にしているかのように、教室の中にいるクラスメイトたちが次の時間の準備を始めている。たしか、僕らが今いる教室、つまり僕のクラスは、次の授業は生物のはずだから、教室を移動しなければならないはずだ。

「んじゃまあ」弥生さんにさっきまでボカスカ殴られていたマサルが、あわただしいクラスの空気に押し出されるようにして、締めめの言葉を発した。「第一回調査、“謎の飛行物体を調査”ってことで、どうすか？」

「異議なし！」

皆、口ではそう言った。けれど、約一名だけは明らかに納得していないような声色を発していた。もちろん、弥生さんだ。

けれど、時計の針に支配されている僕ら高校生は、そんな少々の不協和音に付き合っているほど暇ではない。僕らには時間がない。生徒会に提出するレポートの期限も、そして、弥生さんの放つ不協和音に付き合っている暇も。

こうして、調査部の栄えある第一回調査の内容が決まった。

カタカタカタ…。

“通称、” UFOの見える丘“デ目撃サレルトイウ、未確認飛行物体ヲ調査セヨ！”

バキーン！ パラッパラッパラッパッパ、てなものだ。

「ねえ？」

廊下を歩く僕に、ミス・エマーデイルが訊く。

「なにさ」

時間にせつつかれている僕に、ミス・エマーデイルの緩やかな口

調に付き合っている余裕は無かった。だから、ちよつとつつけんどんな受け答えになつてしまった。

次の時間の使われる生物室というのは、僕のクラスからものすごく離れている。それこそ、校舎の端から端まで、といった感じなのだ。だから、僕はちよつと早足で歩いている。

『あなた、どう思う？』

「なにが？」

やっぱりつつけんどんな対応になつてしまった。けれど、ミス・エマーデイルはどうしたわけかそんな僕を嬉しそうに見やっている。そして、僕に寄り添うように、早足でついてくる。まるで、飼い主にじやれる子犬のようだ。

『あの、なんだっけ？ ダボダボした服を着ている女の子』

ダボダボした、レイヤードファッションに命を懸けている彼女にそんなことを言つたら、きっと小一時間は怒られるんだろうなあ、と苦笑いしてから、僕は答えた。

「ああ、弥生さん？」

『あの子、不満がくすぶっているわね』

「そうだね」

半ば受け流し気味に言葉を返す僕。ミス・エマーデイルはそれでも笑顔で言葉を継ぐ。

『つまらないことになりそうね？』

「どうということさ？」

すると、ミス・エマーデイルはくすくすと笑つた。そして、僕の耳近くに唇を寄せ、まるで恋人同士がする耳打ちのようにして続ける。

『だって、あなた、少し気を揉んでる。“気を揉む”ことは、倦怠への近道の一つよ？ そんなことで、エマーデイルを振り払えるかしら？ …もつとも、振り払って頂かないほうが、私にとってはありがたいんだけどね』

ミス・エマーデイルの言葉は正しかった。

僕は確かに、気を揉んでいる。藤島君と弥生さんの“反目”だ。いや、反目、と呼ぶべき性質のものじゃないのかもしれないけれど、二人の間には微妙な緊張が漂っている。マサルのように無視を決め込めばそれはそれでいいのだろうけど、あまり気分のいいものじゃない。そういうことに気を揉みたくない僕としては尚更だ。確かに、このままでは面白い方向には行かないだろう。物事も、僕の行く先も。

むむむ…と物思いに浸るうち、後ろから僕を呼び止める声が出た。「もう！ 歩くのが速いんだから！ 追いつくのが大変だったわよ！」

ダボダボの…もとい、レイヤードファッションに身を包んだ、弥生さんだった。どうやら走ってきたらしく、少し癖のある髪の毛が乱れていた。

「ねえ？ 廊下を走るのは禁止だよ？」

壁に貼り付けられている“廊下を走るな”というポスターを指す僕。ウチの学校の美化委員が作成したポスターには、最近男子学生の間で流行っているというラブコメマンガのヒロインが、「ダメだかね！」「とばかりに指を立てている姿が描かれていた。僕の指したポスターをまじまじと見た弥生さんだったけど、すぐに視線を僕の顔に戻した。そして、フン、と鼻で笑った。

「規則なんて破るためにあるものよ！」

なんてパンクな発言だろう。さらに彼女は続ける。

「それに、この絵、下手だし」

ごもつとも。確かに、ポスターに描かれているヒロインは、実物と比べて描線が乱れているし、なんというか、ある意味で黄金率が崩れている。確かに、全体の雰囲気はあのヒロインなのだけれど、すんでの所でデッサンが狂ってる、そんな感じなのだ。

「まあ、下手だね。でも」

「でも？」

弥生さんの問いに、僕は言った。

「僕は今、こんなポスターに構ってる暇はないのかもしれない」  
時計を示す僕。弥生さん、すごい顔で僕の腕時計を見やっ  
て、きつと見たくもないような時間なだろう。

### UFOの見える丘【3】

「……ないわね」

弥生さんは頷いた。

「そして」僕は続けた。「このポスターの精神に付き合ってもらえるほど、僕らは暇ではないのかもしれない」

僕の言わんとすることが判ったのか、弥生さんはニヤツと微笑む。そして一瞬の間を置いて、まるで息を合わせたかのように僕らは廊下を駆け出した。

「まったく」

廊下を駆け出す弥生さんは、僕の横で嘆息した。どうしたの、と訊くと、弥生さんは続ける。

「意外にアンタって、アナーキーよね」

「そうかな？」

とぼける僕に、弥生さんは畳み掛ける。

「だって、自分から“廊下を走るな”って言うておいて、その舌の根が乾かないうちに、走るようにけしかけるなんて」

僕は笑った。「僕は、“理由なく廊下を走るな”って言いたかったんだよ」

「へえ、じゃあ」少し息を弾ませながら、弥生さんは言った。「私には、明確に走った理由があったわよ。アンタに追いつくため、って」

廊下の風景が後ろに流れていくのを目で追いつつ、僕は訊いた。

「じゃあ、なんで僕に追いつこうとしたの？」

「な、なんで、って……？」

しばらく、弥生さんは口を閉ざしてしまった。僕らはしばし、黙々と廊下を走る。「おわっ！」とばかりに僕らの姿に驚く生徒達。そして「廊下を走るな！」と叫ぶ先生。それらの風景を、僕らはどんどん後ろに追いやっていく。筆箱がカラカラと鳴って、教科書



がパタパタと鳴る。そして、たたたつ、たたたつ、という足音が、まるで僕らのことを馬鹿にするかのように廊下にこだまする。

いくら待っても弥生さんが口を開く様子がないので、僕から口火を切った。

「藤島君のこと？」

すると、前を向いて思案していた様子だった弥生さんが、顔を向けてきた。そして、ニパツと微笑んだ。この笑い方をするときの弥生さんは、「凶星」のときだ。

「凶星でしょ？」

重ねて訊いて、ようやく弥生さんは答えた。

「……まったく、アンタには敵わないなあ、もう」

いや、バレバレだよ、と言いたい僕だったけれど、そんなことを言ったら、彼女の右手にある教科書でバシバシ叩かれるんだろうなあ……と、彼女がマサルにしている普段の行動を思い出して、あえて口にしない。代わりに、訊いてみた。

「どうして不満なのさ？」

「……いや、不満、ってわけじゃないんだけど……」

「だけど？」

「なんていうかね、理解できないんだよね」

出来るだけ軽い口調で言ったのだろうけれど、その言葉自身に棘があるせいで、どうにも胸が苦しくなった。でも、その胸の痛みを我慢しつつ、僕は訊いた。

「なにが、理解できないの？」

「うん、アイツ、なんか絡みづらい、っていうかさ、私とは違う世界の人間みたいだな、って感じ。ああいう風な、あんまり自己主張しないタイプって、あんまり好きじゃない」

眉をひそめる弥生さん。

弥生さんらしい。僕は唸った。

弥生さんは眉間にシワを寄せつつ続ける。

「で、ああいう風に、自分の興味のあるときだけはああやってしゃ

しやり出てくるわけじゃない？ なんだか、腹立たしくて」

ふんふん。僕は曖昧に頷いておいた。きつと、彼女の言う“自分の興味”云々の話は、今日決まった調査部の活動のことだろう。

「で、さ」弥生さんは僕の顔を、まるで嵩でも測るようにして覗き込んできた。「アンタは、藤島のこと、どう思う？」

思わず僕は、ため息をついてしまった。

弥生さんの性格からして、“反藤島”の輪を作って追い詰める…みたいな馬鹿馬鹿しいことをするのはないだろう。きつと、自分の遣る方ない気持ち、誰かと共有したいだけなのだ。つまり、この場面において僕は、ただ相槌を打っておくのが正しい。

でも、相槌を打つわけにはいかない。だって、藤島君は大事な部員だし、弥生さんと同じく、大事な友達なのだから。

だから、僕は藤島君のフォローに回った。

「いや、きつと、弥生さんは藤島君を誤解してる。あいつはいいヤツだよ。ちょっと変なヤツだけど、悪いヤツじゃない」

すると、弥生さんは強い口調で噛み付いてきた。

「そんなの判ってる！」

その言葉の勢いに、思わず僕は戸惑ってしまった。そして、僕の戸惑いが伝わったのか、弥生さんはちよつと声のトーンを落として続けた。

「アンタやマサルと仲良くしている様子から見て、悪いヤツじゃない、っていうのは判ってるよ。それに、絡みづらい、っていうのも結局のところ、私とアイツの相性なんだ、っていうのも判る。でもさ…、やっぱり釈然としないのよね」

きつと、バツが悪くなってしまったのだろう。僕から顔を背けた弥生さんは、「…先、行くね」とだけ言い残して、先に走っていつてしまった。後を追うわけにもいかないうなので、彼女にスピードを合わせるようなことはしない。

また、僕はため息をついた。人間の相性。こればかりは、正直どうしようもないことだ。いくら仲良くしたいと望んでも、相性と

いうものはそういう人間の願いを無視する。そして、頑張れば頑張るほど苦しくなる。そして、相性の悪い人間同士は、どんどん相性が悪くなってしまふ。そういう様子をかつて間近でつぶさに見てきた僕は、今日食べたクロツケパンが胃からせり出してくるような不快感に襲われた。

『本当に、つまらないことになりそうね』

ものすごく嬉しそうに声を弾ませて、死ぬほど可愛い笑顔を僕に向け、声をかけるミス・エマーデイル。しかし、走っている僕に併走する形になっている彼女の走り方はもちろん、例のあの力サカサ走りだ。

胃の内容物がせり上がりそうになるのを我慢しつつ、僕は思った。なんとかしなきゃな。藤島君と弥生さん。せつかく一緒に部に入って、せつかく知り合ったのに、このまま反目したままなんて、絶対に変だ。

『嬉しいわ』ミス・エマーデイルは言った。『あなたがつまらない生活を送れば送るほど、あなたはどんどん私のことを好きになってくれるんだもの』

そう。藤島君と弥生さんの反目は、僕にとって無関係な話ではない。この件で倦怠に取り込まれたら、僕は死んでしまうのだから。そういう芽は、摘んでおくに限る。

「ふん、何を言ってるんだ」僕は反論した。「つまらない生活なんて、クソ食らえだ」

『あら残念』

バカにするような口調のミス・エマーデイル。彼女の髪から、カモミールの香りが流れ出る。そして僕は、そのカモミールの香りに心を奪われかけつつも、それを振り払うように生物室へ急いだ。

授業が終わり、だるいホームルームが終わった後、僕はハトムネ荘に戻った。

と、いうのも、今回の調査におけるリーダー、藤島君から指令が

飛んだからだ。

「…あの、UFOが見える丘について、それとなく管理人さんとか寮母さんから情報を得てくれない？ あの人たちはきっと学生たちより詳しいはずだから」

いや、藤島君がやればいいじゃないか、と僕が言つと、藤島君は反論した。

「…いや、だつて君、僕より聞き上手じゃないか。こういうときは適材適所でしょ？ それに、僕はこれから公民館に行つて地図とかを借りてこなきゃいけないんだ。マサル君と月本さんとでね」

あれ？ 弥生さんは？ 僕が訊くと、藤島君は興味無さそうに言い放つた。

「…さあ、知らない」  
むむむ。

どうやら僕は、藤島君に買われているようだ。少なくとも、“聞き上手”という風には評価されているらしい。でも、そんなこと以上に、「知らない」の一言で片付けられてしまった弥生さん、そしてその一言で片付ける藤島君の方にむしろ注意が向かってしまった。そんな面倒な問題を、ああでもないこうでもないと思案して自転車を漕いで、ハトムネ荘の前までやってきた僕は、とりあえず、といった感じでため息をついた。

「…とはいうものの、どうしたもんかねえ」

『どうしたものかしら？ 何もしない、っていうのもアリなんじゃない？』

と、僕の耳元で囁くミス・エマーデイルを無視しつつ、自転車を置き場に停めて玄関に入った。

やっぱり、午後のハトムネ荘は静かだった。ウチの学校は全校生徒が入部する決まりだから、ホームルームから一時間しか経っていない今の時間に、ハトムネ荘に帰ってくる寮生は少数派なのだ。だから、いつもは寮生でこつた返している玄関も、そしてその先に広がるロビーも、まるで埋まりきらない空間の余白を持て余すように

して広がっている。そして、靴から内履きに履き替えたのにも関わらず、足音がカッン、カッンと反射した。

## UFOの見える丘【4】

『へえ、いいわね、こういう感じ』

どういうことさ？ と訊くと、ミス・エマーデイルは長い亜麻色の髪をかきあげて続けた。

『こういう何にもない感じ、私、好きだわ。あなたもでしょ？』

『そんなわけあるか！』

『あら残念』

ミス・エマーデイルは、まるでバカにするような口調でそう言っていると、真つ黒な瞳を僕に向けた。その瞳に射抜かれた僕は、思わず目を逸らしてしまった。僕の心が、彼女に見透かされそうな気がしたから。

そう、有り体に言えば、僕はこういう“だれもない空間”が大好きだ。

誰にも干渉されない。誰の指示も受けない。誰のことをおもんばかりでもない。人と関わることで得てしまう衝突よりも、一人で過ごす倦怠感の方がいくぶんか我慢できる、っていう思いもある。藤島君と弥生さんの反目に巻き込まれている僕にとって、確かにこのロビーの空虚は魅力的なのだ。

でも、そんなことを、となりにいるミス・エマーデイルに感づかれてはいけない。だって、彼女は僕の倦怠なのだ。きっとそれを話してしまえば、彼女を勢いづけることになる。そして、彼女が勢いづけば、きっと彼女は僕を更なる倦怠に導く。そして、最後に僕は死んでしまうのだろう、という予感のようなものが、僕の頭の上に躍った。

ミス・エマーデイルは不意に言った。

『無理しなくて、いいのよ？』

『え？』

もはや、え、という発音をしていなかった。きっと、まどろみか

ら現実に戻されたときのような、間拔けた声を出してしまったのだろ。彼女は、そんな僕に微笑みかけると、言葉を継いだ。まるで、子守唄を歌う母親のように。

『いいじゃない。あなたが生きている世界って、そんなに楽しいものじゃないわ。だって、あのメガネ君とダボダボちゃんのケンカ。あれ、見てて楽しい？ 楽しくないでしょ？ …いいじゃない、無理して楽しむとしなくても。いいじゃない、投げ出しちゃえば。そして、倦怠の世界で生きていきましょ。』

ミス・エマーデイルの、この世の全ての色を混ぜ込んだような黒い瞳が、僕を捉えた。目を逸らしても逃れられそうもない、大きな瞳が僕の顔を捉えて離さない。そして、完璧なほどにキレイな造型の顔が、僕に微笑みかけている。

ふらふらと、見えない糸に操られるように足が動く。そして、ロビーの真ん中に、まるでスポットライトでも浴びているんじゃないか、って程に存在感がある一人用ソファーに向かっていく。このソファー、普段は三年生が使っていて、一年生にはとても座らせてもらえないソファーだ。座ったものの話によると、「クッションがすごいやわらかくて、座ったら二度と立ち上がりたくなる」ほどの代物らしい。

そして、僕が、そのソファーの手すりに触った、その瞬間だった。「おやあ？ 君い？ 早いね」

間延びした声が、僕の背中の方から浴びせかけられた。はっとした瞬間に初めて、自分が正気を失いかけていたことを思い出した僕は、ミス・エマーデイルを睨んだ。ミス・エマーデイルは、すごく残念そうな顔をして、本当に地団駄を踏んでいた。そんな彼女を無視して、僕は声の方を向いた。

「やあ」

僕に声をかけてきたのは、管理人の藤原さんだった。きっと床掃除でもしようとしていたのか、作業着に身を包み、バケツとモップを手に持って、禿を隠すようにほっかむりをしている。

「あ、管理人さん」

僕がそう言つて頭をチヨコンと下げると、藤原さんはちつつち、と指を振つた。

「だから、俺のことは“じいさん”でいいって」

「いや、それはさすがに…」

まずいでしょ、と言おうとして、今のこの状況つて例の目的を達成するにはもつてこいだ、とようやく気づいた僕は、藤原さんに訊いた。

「…管理人さん、お聞きしたいことがあるんですけど…」

「断る！」

「ななな、なんで！」

そう訊くと、藤原さんは拘ねるような口調で答えた。

「“じいさん”つて呼んでくれなきゃ教えない！」

なんて人だ。そういうえば、入学前にもこういう一幕があつて、そのときにも思つたような気がするけど、“じいさん”つて言葉は蔑称のはずだ。いや、蔑称じゃないのかもしれないけれど、とにかくあんまり口にしちゃマズイ言葉のはずだ。それを、自分から“呼んでくれ”つて哀願する人つてなんなのか。そういう疑問が渦巻く僕だったけれど、ここは言うしかない、と覚悟を決めて、ちよつと後ろめたく思いながらも言つた。

「ええと…“藤原のじいさん”…」

「うん！ よし！」

藤原のじいさんは、よしよし、と頭を上下に振っている。そして、ようやく僕の話を読んでくれる体勢に入つたようだ。その様子を確認した僕は、それとなく訊いた。

「あのう…、このハトムネ荘に来る道の途中に、分かれ道があるじゃないですか？ あれつて、どこに続いてるんですか？」

「分かれ道？」 藤原のじいさんはあごをポリポリと掻いたあと、ああ、とばかりに目を見開いた。「あの、地蔵様が立っている所かねえ？」



「ああ、そうです！」

「あの先には、何にもないぞ？」

「そんなはずはない。あの先には……」

「なにかあるでしょ？ 道があるのに……」

すると、藤原のじいさんは意地悪にニヤツと笑って言葉を継いだ。

「あの先に、UFOが見える丘がある、って言いたいのかねえ？」  
ぎく。見抜かれてる……。

僕の戸惑いまで見透かしているかのように、藤原のじいさんは言葉  
を継ぐ。

「いやあ、最近、三階生の皆がよく聞いてくるもんで、ちよつと不思議に思ってたねえ。で、三階生に聞いてみたんだよねえ。“その先には丘があるけど、それがどうかしたのかい？”って。そうしたら、“その丘でUFOが見えるんだ”って言うもんだから、たまげてねえ。ってより」

藤原のじいさんは、手に持っていたバケツやモップを長椅子に立てかけ、腰も落ち着けた。そして、頭に巻いていたほっかむりをシユツとほどいてから続けた。

「話を訊いてみると、どうやらそのUFOとやらは夜に出るそうじゃないか。ってことは、うちの寮生たちは、夜遅くに寮を抜け出る、ってことになるわいなあ。でも……」

まるで、僕を促すように視線を屏風に向けるじいさん。金で縁取りされた屏風には、達筆すぎてもはや何が書いてあるかわからないといった風の書が書かれていた。でも、寮生はそこに何が書いてあるか承知している。なにせ、その内容は寮生を縛る法律、「ハトムネ寮五禁制」なのだから。

「その第二に“じいさんは、だるそうに言葉を続ける。“深夜徘徊、それは不良の香り”っていう一文があるからねえ。こちらとしては、深夜徘徊を取り締まらなくちゃならないんだけどねえ……」

そう。「ハトムネ寮五禁制」の一つに、深夜徘徊を禁じた一文がある。正確には、午後6時以降の外出を禁じるものだ。確かに、U

FOを見に行くということは、その禁制に反しているのは明白だ。UFOが見える丘の話进行いさんに喋ってしまった頭の回らない寮生に、なんだか腹立たしいものを感じ始める僕なのだった。

けれど、じいさんは悪戯っぽい微笑みを浮かべ、続けた。

「でもまあ、若いうちには少しくらい無茶をするのが丁度いい。それに、やんちゃをしたくなる年頃だろうから。だから、管理人としては、見なかったことにするよ」

「え?!」

なんて物分りのいい大人だ。と僕は思った。

けれど、藤原のじいさんはさらに言葉を継いだ。さっきまでの眠そうな目を、鋭い教育者のそれに替えて。

「…ただし、責任は持つてくれないと」

「責任?」

「そう、責任」藤原のじいさんは、まるで子供をあやすように、けれど、まるでベース音のようにどっしりと重く響くものを声に絡ませながら、続ける。「君たちはまだ子供だ。それは、事実だね。…子供っていうのは、大人と比べてルールが多い気がしないかい?」

僕は頷いた。すると、じいさんは続けた。

「例えば、タバコを吸っちゃいけない。酒を呑んじゃいけない。車の運転が出来ない。…なんで、大人より子供の方が、ルールが多いか判るかい?」

僕はかぶりを振った。じいさんは続ける。

「それは、子供、っていうのは、自分に責任が持てない、って見なされているからなんだね。だから、子供っていうのは、大人の手のひらの上で生活するように強要される。大人が責任を引つかぶれる範囲で遊ぶ、ってことだね。そう、「ハトムネ寮五禁制」もそう。

あれは、ワシみたいな管理人が、“ここから先は大人の世界だから、子供は行っちゃいけません”って立てている柵みたいなものさね。ワシのような管理人は、その柵を踏み越えない生徒なら十中八九助けられる。だって、それが仕事だから。でも、その柵を飛

び越えてしまった子供を助けるのは、きっと五分五分だろうね。ワシだってただの管理人だもの、出来ないことはあるさ」

何も言えない僕に、じいさんはさらに言葉を重ねる。

「ワシは、その柵を飛び越えるな、とは言わない。だって、“柵を飛び越えること”が子供の成長だから。だからワシは、柵を飛び越えようとする子供にこう言うようにしている。“その柵を越えたら、お前の両肩に、お前自身を守る責任が覆い被さるんだよ”って」

## UFOの見える丘【5】

「引き止めたいんですか？」

僕がそう訊くと、じいさんはかぶりを大げさに振った。

「違う違う！ 責任を持てる、って断言できる子供を止める気はまるでない。でも、少しでも責任が肩にのるのがイヤだったら、まだ柵の中に居ればいい、まだ君は、この柵の中に居る権利があるんだから、ってアドバイスするだけのことだよ」

ようやく僕にも、じいさんの言わんとすることが判った。つまり、じいさんは僕に訊いているのだ。柵を越える勇気があるか否かを。そして、柵を越えると決めるからには覚悟を決める、と、まるで子供をあやすような優しい口調で、不良を叱り飛ばすかのような激情でもって怒鳴りつけているのだ。

じいさんの優しい剣幕に負けないように、僕も腹に力を入れて、じいさんの問いに答えた。

「うん。僕、柵を越えるよ」

僕にとって、柵の内側には退屈と倦怠しかない。だから僕は、飛び越えるしかない。そういう気持ちで、言葉に乗せたつもりだった。すると、じいさんは全てを了解したようにウンウン、と頷いた。

「そうかい。……あゝあ！ 年を取ると説教臭くなっていかなんねえ！」

そう言っただげさな伸びをしたじいさんは、椅子から立ち上がった。そして、バケツとモップを拾い上げた。そして、足を数歩踏み出してから、まるで何かを思い出したかのように、僕の方に振り返った。

「あ、そうそう。資料室、って部屋に、ここら辺の地図とか卒業文集とか、つまるところ、この寮に関する資料が置いてある。その部屋に、もしかすると例の丘について資料があるかもしれないねえ。…一階の、管理人室のさらに奥、どんつまりだよ。…鍵は開いてい

るから。そうそう、地図なんかは持ち出しOKだよ、ただし、ワシに一言言ってな」

「はい！　ありがとう。じいさん！」

じいさん、と何の屈託もなく言われたのが嬉しかったのか、藤原のじいさんは、元々シワシワな顔を、さらにクシヤ、と歪めて微笑んだ。そして、ほっかむりをまたかぶると、踵を返して、午後の影に沈む廊下に消えた。

『あら、良かったじゃない』

とか言いつつ、ミス・エマーデイルは不機嫌そうだった。

資料室のドアは、とんでもなく重かった。

他の部屋のドアは木製なのに、“資料室”と書かれてはいるものの、半ば消えかかったプレートがかかるドアだけ、どういうわけか鉄の扉。しかも、他のドアは引き戸なのに、資料室のドアだけは蝶番式のものだ。さらに言えば、この資料室の位置は、光が一日中差さないとところらしく、ちよつと湿っぽい。だから、資料室の扉が、RPGなんかで定番の、“魔王の城”みたいなラストダンジョンの門に見えなくもない。

ちよつと息を吐いて、僕はノブを回す。そして、えいや、とばかりに引いてみる。さすがは鉄の扉、少しくらいじゃびくともしない。今度は、オラア！　とばかりに引いてみる。けれど、そんな僕の声に反応する様子もなく、鉄の扉は体勢を崩しさえせず、僕の前に佇んでいる。ふと、僕の隣から、くすくす、という笑い声が響いた。もちろん、ミス・エマーデイルだ。なにがおかしいんだ、コンチクショウ！　でも、彼女に付き合っている暇はない。僕は、思いっきり扉を引いた。

一人でてんわわんやだった僕だったのだけれど、その展開を、あの声が破壊した。

「おや？　こんなところで何してるんだい？」

思わず僕が振り返ると、そこには、ハトムネ寮の紅一点、寮母さ

んが立っていた。

「あ、資料室に入りたいんですけど…」

「え？ 資料室？ 藤原さ…管理人さんからは了解を取っているのかい？」

「はい！」「僕は扉を力一杯引きながら頷いた。

すると、寮母さんは、ソバージュ、と形容した方が気が利いていいのか、それともオバサンパーマ、と形容した方が適当なのかよく判らないパーマ頭をポリポリと掻き、もう一方の手をあごに遣って首を傾げた。そして、僕に訊いてきた。

「…あんた、何してるんだい？」

僕は、ドアの戸を思いつき引きながら続ける。

「見れば判るでしょ？！ ドアを開けようと、引いてるんです！  
すると、寮母さんはガツハツハ、と腹から笑い飛ばすように笑った。そして、僕にこう言った。

「…その扉、押して入るんだよ」

「え？」

僕は耳を疑った。そんな僕にこれ見よがしにため息をついた寮母さん。

「だから。この扉、入るときは押すんだよ」

そうだったのか。そんなベタな失敗をしでかしていたとは。そんな間抜けたキモチと一緒に、今度はドアを押してみた。すると、さつきまで強情だったドアが、ふわっと開いた。

「ね？」 寮母さんは、その様子を後ろから眺めつつ、続けた。「

…アンタ、不器用なヤツだねえ」

「不器用？」

「ああ。押してだめなら、引いてみればいいんだ。引いてもダメだったら、横にスライドさせてみればいい。アンタ、若いくせに、そういう柔軟さがないね」そう言って、寮母さんは笑った。

とにかくも、資料室に入った。

やっぱり、資料室は想像通りの趣だった。全体に、空気が埃っぽ

い。10畳くらいの部屋に、本棚が部屋の三方を占めている。どうやらその本棚が窓を潰してしまっているようで、さらに空気が淀まず一因になっている。そして、その本棚に押しつぶされんばかりに、長机と、椅子が二つ置かれている。きつと、ここにあるものを閲覧するためのものだろう。

『汚いわね』

ミス・エマーデイルがそう呟いた。

「うるさいな」

僕がそう反論すると、僕の後ろから声がかかった。

「……ん？ あたしは何も言っていないけど？ 何を独り言言ってるんだね！」

どうしたわけかまだ僕の後ろにいる寮母さんが、勘違いしてしまったのだ。寮母さんに、適当に誤魔化し笑いを浮かべたあと、僕は隣にいるミス・エマーデイルに小声で抗議した。

「……悪いんだけどさ、周りに誰かいるときに話しかけるの、やめてくれないかな？ 皆を混乱させるし」

すると、ミス・エマーデイルはふふふ、と笑った。

『別に、無視したいなら無視していいのよ？ 私は別に、あなたに無視されたっていいし。ま、私の事を無視出来るか、っていうのは別の話だけど』

そう言つて、ミス・エマーデイルはその細い腕を僕の腕に絡めてきた。彼女の腕の柔らかい感触が、僕の脳髓を刺激する。恥ずかしいので、その手を振り払おうとしたのだけど、寮母さんの目があるので出来ず、とりあえず我慢することにした。

「ここに、なんの用なんだい？」

寮母さんが僕に続いて資料室に入る。そして、部屋を見渡して言った。

僕は答えた。

「寮母さんは、“UFOが見える丘”ってご存知ですか？」

僕の言葉にしばし考え込む寮母さん。けれど、すぐに何か思い至

つたのか、落としていた視線を僕に向けて、頓狂な声を出した。ああ！　みたいな声だ。

「……ああ！　確か、卒業文集に、皆で丘でUFOを見た、とかっていう内容を書く生徒が、毎年数人いるみたいだねえ。確か、98年度の卒業文集には書いてあったはずだねえ」

そう言つて、寮母さんは本棚に並んでいる卒業文集を指した。僕は指された卒業文集を手に取り、部屋の割にはキレイな机の上に置いて、そして開く。どうやら、熱血学園高校の卒業文集は、卒業アルバムと一体化している形式らしく、前半と後半で紙質が違う。半分は劣化しづらいだろう厚紙のはずなのに、パラパラとページをめくるたびに、古い紙特有の香りが鼻につく。けれど、僕の眼の前にはそんな紙の香りとは裏腹に、まるで経年を感じさせない卒業生の笑顔があった。あるものは笑顔で。あるものは小難しそうな顔で。あるものはピンクレディの「UFO」のポーズをしている。そして、またあるものは、これ以上なく眉を上げて、変な顔を演出している。

「そこじゃないよ」

寮母さんの言葉に促され、文集を持つ手を動かす。そして、文集のところにもで持つてくる。

「B組の子だよ」

またもや寮母さんに促されるがまま、僕はまたページをめくる。そして、B組の生徒の文集のページになった辺りから、少しめくるスピードを緩める。一枚一枚、腕を振るようにめくる。その作業を覗き込んでいた寮母さんは、あるところで叫んだ。

「そこ！　」

あまりに大きな声に、思わずのけぞってしまった。そのおかげで文集を取り落としそうになりつつも、なんとか耐える。

「確か、そのページに“UFO”云々の話があるはず」

確かに、あった。

大学に通うようになったらとにかく遊ぶと親不孝な宣言している文章と、将来は画家になつて身を立てたいと誓う文章、そして、高



校生活が楽しすぎて卒業したくねえよ、卒業したら家業の農業生活だし、あゝあ、楽しい仕事が出来ないあ、とやさぐれている文章と同じ見開き上で同席していた。

## UFOの見える丘【6】

そこに描かれていた文章の筋はこんな感じだ。

“この夏、俺は高校生活の締めくくりに、”ハトムネ寮五禁制“を破ることにした。でも、その五禁制の内、破れそうなのは深夜徘徊禁止の項目だけっぽいので、それを実行することにした。けど、一人で深夜徘徊しても面白くないし、そもそも平和畑学園高校の周りには夜に遊べるところが一切ないのは周知の通り。そこで、友達の藤島、宮原、丸目の三人と連れ立って、肝試しをすることにした。場所はみんなご存知、ハトムネ荘へ続く道の途中にある分かれ道。俺たち四人は、懐中電灯片手に闇に沈む獣道を歩いた。怖くない、って言えばウソになるけど、皆がいたから心強かった。

そして、その獣道を抜けた先には、丘があった。どうしたわけか木が一切生えず、雑草だけが生い茂っている変な丘だった。そして、その丘を避けるようにして、丘の両側に木々が生い茂っていた。僕らは寝そべって星を見た。そして、鬼ごっこなんかをして遊んでいた頃、突然宮原が叫んだ。

「おい、あそこ！なんか飛んでるぞ！」

見ると、北側の真つ暗な空の斜め45°くらいに、変な光が浮かんでいた。赤い色と、白いビームが見えた。そして、その光は、“つ”の字を描くように旋回しながら、どんどん下に降りていった。その様子を、俺たち四人はアホ面下げてずっと見ていた”

「へえ……」

思わず僕は唸ってしまった。

なるほど、この話、確かにUFOの目撃譚だ。しかも、この話は“UFOが見える丘”のプロトタイプに当たるものに違いない。だって、この文章内に、まだ“UFOの見える丘”という、丘の称呼が見られない。それに、この先輩達の目的は「肝試し」だった。つまり、当時まだ件の丘は、“UFOが見える”という評判が立って

なかったのだろう。つまり、この先輩の卒業文集が書かれた辺りから、“ UFO の見える丘 ” という寮生の間に広がる “ 民話 ” が生まれたのだ。

「どうだい。判ったかい？」

寮母さんが、僕の開いている卒業文集に目を落としている。まるで楽しげに。

「え、ええ……」

考え事をしていた僕は、ちょっと反応が遅れて曖昧な返事をしてしまった。でも、寮母さんはそんな僕を咎めるような表情を見せず、むしろ嬉しげだった。

その嬉しげな顔を不思議に思っ、卒業文集から目を離して顔を覗きこんでいると、その視線に気づいた寮母さんは照れたような顔を見せて、言い訳めいたことを言い出した。

「いやあね、心配してたんだよ」

「心配、って、何のですか？」

僕が訊くと、寮母さんは寂しそうに目じりのシワを寄せて、続けた。

「いや、アンタ、この寮に入ってきてから、私に一回も楽しそうな顔を見せてくれなかったからさあ。なんだかポケーっとして、つまらなそうにご飯食べてるもんだから、心配だったのさ。…時々居るんだよ。入学してきたはいいけど、学校に馴染めなかったり、やりたいことが見つからなかったりして、悩んでる子。アンタだって、そうだったんだろ？」

僕は頷いた。

「それで、今は楽しいんだろ？」

楽しい？ いや、どうだろう？ 心の中で首を傾げる僕。正直、心が躍る、っていう感覚ではない。子供の頃行った夏祭りの高揚感とか、海に行く前日のワクワク感とか、そういう感じを “ 楽しい ” って定義してしまうなら、今僕の心に芽生えつつある感覚は “ 楽しい ” ものではないだろう。でも、そうやってズッパリ切り捨ててし

まうには、僕の今感じている気持ちが惜しいように感じる。“楽しい”っていう感情に含めていいのか、それとも別の感覚なのか。その判断が、頭の中でついていない感じた。

答えあぐねている僕に痺れを切らしたのか、寮母さんは言った。

「アンタの顔を見れば判るよ。アンタ、楽しそうだよ」

それだけ言っただけ息を一つつくと、寮母さんは資料室のドアを開いて出て行ってしまった。

一人残された僕は、ふと頬を撫でた。

「僕、嬉しそうな顔をしてるんだろうか」

頬を撫でたところで、判るはずもない。っていうか、僕は、自分の“嬉しそうな顔”ってヤツを見たことがない。だから、たとえ今、鏡の前にいたところで、僕は自分の顔がどういいう感情によって変化しているか、感知することは出来ないだろう。

そこで僕は、となりのミス・エマーデイルの顔を見た。

たった一日の付き合いだけど、もうそろそろミス・エマーデイルの行動パターンが読めてきた。ミス・エマーデイルは僕の倦怠そのもの。ってことは、僕がつまらなそうにしていると嬉しげな顔をするし、逆にアクティブに行動するとぷりぷり怒り出す。

そう、ミス・エマーデイルの顔は、僕にとって天邪鬼の鏡合わせなのだ。

ミス・エマーデイルは、唇をきゅっと伸ばして、僕の顔を覗きこんでいる。細い眉を寄せて、そして少し恨めしそうに目を細めて。

『何よ』

ミス・エマーデイルは今の今まで僕の手に絡めていた腕を突き放した。

「いや、別に」

まさか、“君の顔を、僕の感情のパロメーター代わりに使ったんだ”とは口が裂けても言えない。言葉を継がない僕に痺れを切らしたかのように、ミス・エマーデイルが口火を切る。

『なんだか、楽しそうね』

言葉自体に棘はない。でも、言葉の調子に、とんでもない棘が隠れている。まるで、一時間待ちばうけにさせた恋人の発する第一声みたいな。…ま、生まれてこの方、彼女っていうものがいない僕だから、今のはあくまで想像、もののたとえだけだ。

「楽しそう、なの？　僕？」

僕は思わず訊いてしまった。すると、何かを思い出したかのようにはっとしてから、ミス・エマーデイルは言葉を継いだ。

『いや、いいわ。なんでもない』

そう言っただけ、ミス・エマーデイルは拗ねて横を向いてしまった。かわええ。

さて、拗ねたきりのミス・エマーデイルを放っておいて、僕は資料室にある卒業文集を漁った。近隣の地図なんかもあったのだけど、それは藤島君たちが集めてくれているはずだ。僕がやらなくてはならないのは、あくまで藤島君たちが集められない情報を収集することなのだ。

そう思い至った僕は、片っ端から卒業文集を読み漁った。

やっぱり僕の想像通り、寮母さんが教えてくれた98年度の文集が、“UFOの見える丘”の初出らしい。その後、99年度、00年度、01年度と立て続けにその話題が出るものの、02年度以降はぱったりと出なくなる。そして去年の卒業生の文集にも、“UFOの見える丘”について、何も書かれていない。

このことが何を示すのか。

98年度ころには、既に例の丘からUFOが見えたのだ。間違いない。

そして、99年度、00年度、01年度の卒業生の間では、例の丘は“UFOが見える”と信じられていて、事実見た人もいるようなのだ。けれどその後、そのUFO騒動は鎮静化して、現在に至っている。そして今年、三階生の間で“UFOの見える丘”という物語が再び囁かれるようになった、ということだ。

しかも、どうやらUFO騒動の鎮静には、学校側の圧力があつた

らしい。

文集に載せられている文章にも、年度が新しいものには“先生の目をかいくぐってあの丘に行った”とか、“理事長が決めた五禁制のせいで、夜に外出できない”などの文言が並んでいるところを見ると、UFO騒動によって深夜寮を抜け出す生徒が跡を絶たなかったので、学校側がその生徒たちを取り締まったようだ。

そして、外出できなくなった生徒たちは、やがて“UFOが見える丘”という物語を忘れてしまった。高校、というところは、人間の回転が速い。きっと、特定の世代にだけ流通した情報だってあったはずだ。

そして、そうやって忘れられた物語が、今年、復活したのだ。

「すごい」

思わず、僕は唸ってしまった。

『何がすごいよ』

ミス・エマーデイルがぷりぷりと頬を膨らましている。きっと、放っておいたのが不味かったのだろう。さっきよりも明らかに不機嫌そうだ。

「…ああ、ごめんごめん」

『何がごめん、よ。お詫びする気があるんなら、態度で示してほしいわね』

「じゃあ、何をすればいいのさ」

そう訊くと、ミス・エマーデイルは小悪魔な笑顔を見せて言った。  
『ぎゅってして』

「は!？」

もし、僕が牛乳を口に含んでいたら、きっとミス・エマーデイルに向かって吹き出していただろう。聞き間違いかと思った僕は、もう一回訊いた。すると、ミス・エマーデイルはもう一度、はつきりと言いつつ放った。

『だ・か・ら。ぎゅ・って・し・て』

間違いない。ミス・エマーデイルはぎゅってして、と催促してい

る。しかも彼女、僕の目の前で、腕を回す仕草をこれでもか、とばかりに見せている。しかもその目、マジだ。

むむむ。僕は生唾を飲みつつも悩んでしまった。

## UFOの見える丘【7】

いや、正直なことを言えば、僕は、ミス・エマーデイルを抱きしめたい。これでもか、つてくらい、ぎゅっと抱きしめたい。ミス・エマーデイルのカモミールの香りと、柔らかい腕に、まるで飼い猫のようにまどろみながら包まれてしまいたい。それが、偽らざる本音だ。

でも、そんなことをされてしまったら、僕はどうなってしまうんだろう？

「な、なあ……」

僕は、僕の瞳を見据えるミス・エマーデイルに言った。

「仮にさ、いや、仮にだよ？ ……僕が、ミス・エマーデイルをぎゅっとしたとして、僕の体に何か影響があるのかな？ 死んじゃうとかさ」

すると、ミス・エマーデイルは悪戯っぽくふふふ、と微笑んで、僕の質問に答えた。

『言わなかったかしら？ あなたが死ぬ条件、それはあくまで“私とキスをすること”。別に、ぎゅっと抱きしめたからって、死ぬことはないわ』

「ぜぜぜ、絶対に？」

『絶対に』

ミス・エマーデイルの黒い瞳に、嘘は映っていなかった。

不意に、眠気に似た気分が襲われた。もう、どうでもいいや、みたいな気分。世界中が僕を中心にぐるをまいて、ぐるぐる回っているような感じ。僕だけは立っているのに、周りだけが魚眼レンズで覗き込んだ景色みたいに歪んでいる。そして、その景色の真ん中に、僕の瞳を覗き込んで笑う、ミス・エマーデイルの姿。

たおやかに細い腕、カモシカみたいに細い足。汚れを知らないかのように、真っ白な肌。そして、いい香りがするだろう亜麻色の髪



の毛。歪んだ景色の中にあってもなお、彼女のきれいさだけは格別だった。

そんな僕に、ミス・エマーデイルは手を伸ばした。

冷たくはないんだけど、かといって暖かくもない彼女の指先が、僕の頬を撫でる。まるで、僕を誘うように。その指の柔らかい感触に誘われるように、僕は顔を前に突き出していた。そして、唇を……と、この瞬間に至って、初めて自分がヤバイ状況におかれていることに気づいた僕は、頭を振って眠気に似た感覚を振り払った。

『ち』

案の定、ミス・エマーデイルは、僕の顔の前で、キスの体勢に入っていた。あと刹那遅れたら、きっと彼女にキスされていただろう。あと刹那で僕の唇を奪うはずだったミス・エマーデイルは、恨めしそうな目を隠さなかった。

「……キスしないんじゃないかったっけ？」

僕が訊くと、彼女はしれっと言ったのけた。

『ああ、でも、行けそうだったから狙ってみた』

意外にもミス・エマーデイル、アグレッシヴなのであった。

この件で、僕は学んだ。

“ミス・エマーデイルに少しでも気を許したら、きっと僕は、彼女に心を奪われちゃう”

そう、キスにだけ警戒してはいけない。彼女の言うこと、彼女の仕草、彼女の表情。その全てが、僕をキスに導く罠なのだ。そして、それらの罠のどれにかかっても、僕は死んでしまうのだ。

そう心に刻み込んだ僕は、机の上に広げた卒業文集をボタン、と閉じ、元の棚に戻す。

『あら、もう調査は終わり？』

面白そうに訊いてくるミス・エマーデイル。

「うん、終わり」

『で、結局』ミス・エマーデイルはさらに訊いてくる。『私のことを、ぎゅってしてくれないのね？』

もう既に扉の方に足を向けていた僕は、机の前に立つ、ミス・エマーデイルの方を振り返った。彼女の黒い瞳が、僕を見据える。その視線を振り払うようにして、僕は言った。

「もう、夕飯の時間だよ、いつの間にか」

僕は腕時計をかざした。時計は午後の5時半を指していた。気づけば、数時間もここで卒業文集と格闘していたことになる。

『それは』ミス・エマーデイルは抗弁した。『抱きしめない理由にはならないわ』

「そうだね」そう相槌を打ってからしばし考えて、僕は次に継ぐべき言葉を吐き出した。「だって僕は、ミス・エマーデイルのことが好きじゃない。そういうことは好きな人とするものだから、しないそれは、理由にならないのかな？」

そう。僕は、ミス・エマーデイルのことなんて好きじゃない。そのはずだ。いや、そうに違いない。…と、彼女の顔を眺めながら僕は心の中で反芻した。

そんな僕に、ミス・エマーデイルは抑揚を込めずに言葉を返してきた。

『そう、それは残念』

抑揚のない声が、資料室にこだました。けれど、その声が資料室のひんやりとした空気にかき消されたころ、彼女は元の、英国詩のような格調のある声で続けた。

『まあ、急ぐ必要はないわ。このゲーム、勝つのは私なんだもの』  
そう宣言すると、彼女は僕の脇をすり抜け、外に出た。そして、そこから僕の方に振り返って、僕の顔を覗きこんだ。

『さあ、早く行きましょう？』

外の夕方の赤い逆光に隠されたミス・エマーデイルの姿は、僕の目からは神々しくさえあった。本当に可愛い。でも、この可愛さに負けてはいけない。

僕は言った。

「負けないよ」

『あら残念』

ミス・エマーデイルは小悪魔みたいにキュートな笑顔を僕に見せた。その笑顔から視線を外すようにして、僕は部屋のスイッチを目視確認してからそれを切り、ドアノブに手をやって、ドアを閉めた。

その日の夜、皆が寝静まった頃、僕は遊戯室に向かった。

一階の管理人室の隣にあるから、藤原のじいさんにバレないようにしなければならぬ。けれど、夜に遊戯室に行くのは日々の日課なので、もはやあまり気に留めなくても大丈夫だ。唯一の心配はミス・エマーデイルだったのだけれど、夕飯のあと、『なんだか眠いわ…』と、早々に眠りに落ちた。好都合なのは言うまでもない。

遊戯室は、もう既に電気が消されて、闇に沈んでいた。消灯時間前には先輩達が占領しているビリヤード台も、麻雀卓の代わりに使われている雑談用の机や椅子も、皆一様に、夜の黒に押しつぶされて真っ黒になっている。けれど、月明かりで浮かび上がったそれらの輪郭を、手探りで探り当てるようにして、遊戯室を歩く僕。時折足がものにぶつかるけれど、あまり気にしないのがコツだ。

机や椅子の角にぶつかること数回、ようやく僕は遊戯室の一番奥の、パソコンの前までやってきた。昼の間は先輩達が占領しているので使えない、ハトムネ寮唯一のパソコン。

僕が寮に入ってから一番難儀したのは、パソコンがない、という事実だった。持ち込んでしまおうか、とも思っただけけれど、おなじみ「ハトムネ寮五禁制」に、こんな項目があっただけで頓挫せざるを得なかった。“里心、それは学業の敵”。それだけじゃ意味が判らないけれど、要は、学校外のものとの恒常的な接触を禁じるものだ。だから、手紙を出すのも、管理人さんの許可を得なくちゃいけないし、今時ケータイ電話も持たせてもらえない。さらに言えば、インターネットだって無断禁止。けれど、遊戯室に置かれているパソコンだけは、唯一の例外なのだ。

典型的なデスクトップ型。そのパソコンの前に座ると、パソを立

ち上げ、インターネットに繋いだ。闇の中に、パソコン画面の青い光が浮かび上がった。そしてその青い光が、少しずつ部屋に入り込んでいた月光を駆逐していく。

検索画面が画面に映し出された。僕は、いつものように、愛用しているWEBメールに繋ぐ。

メールアドレスとコードを打ち込んで、ようやく僕のメールボックスまでやってきた。

そして、メールボックスの様子を確認しようとクリックしたけれど、どうやら今日は一件もメールが来ていないようだった。

メールボックスには、熱血学園高校からの合格通知も入っていた。これを開いたのは2ヶ月前。まだ3月の頃だった。そして、その合格通知の前後に、僕の名前を冠した件名のメールが、うんざりするほど届いていた。最初は嫌な思いをすることを承知しつつも逐一目を通していただけけど、今はもうそれさえも億劫になってしまつて、4月ごろに届いたメールはまだ開いてすらいなかった。

インターネットを切り、パソコンの電源を切った。すると、さっきまでの月光が、部屋に戻ってきた。

ため息を一つついた僕は、遊戯室を後にした。

「…ふうん、なるほどね」

次の日の朝、藤島君と連れ立って学校に向かう途上、僕は昨日知った、“UFOが見える丘”についての情報を話した。

僕と藤島君は、両方とも自転車を持っている。だから、横に並ぶようにして長く急な下り坂を、しゃーっと滑り降りていく。緑のトンネル、そして風がどんどん後ろに流れていく。

「どう思う？ 10年前のUFO目撃譚」

藤島君は右手をハンドルにやったまま、左手をあごにやった。

「…偶然にしては、出来すぎてるよ。その先輩の目撃証言、僕が聞いたUFO目撃譚とほとんど変わらないもの。つの字を描くようにどんだんに降りていく、独特の動きだ」

「ってことは」僕は訊いた。「十年前のUFOと、今見られるUFOは、同一の原因による現象だ、ってことだね？」

僕を乗せた自転車は、緑のトンネルを抜けた。その先には、夏に向かつて気張る太陽の姿があつた。夏に負けなくらいにギラギラと輝いて、僕らの頬を照らした。太陽光に目を焼かれたのか、目を細めてから、藤島君は続ける。

## UFOの見える丘【8】

「…そういうことだね。本物にせよ、偽者にせよ、とにかくそのUFOは、現象としては存在してるんだ」

その藤島君の言い方に疑問を持った僕は、思わず訊いた。

「結局さ、藤島君ってUFOを信じてるの？」

すると、藤島君は不意に笑った。

「…前にも言わなかったっけ？」藤島君は言った。「…UFOは、信じるか否かの論議をするものじゃなくて、肯定か否定かの論議をするものなんだ」

そつえば、そんな話を聞いたような気がする。でも、その時にはまるで意味が判らなかった。その旨を話すと、藤島君は“困ったやつだ”と言いたげに顔をしかめて、続けた。

「…だって、UFOってヤツは、“未確認飛行物体”っていう意味でなら、確かに僕らの目の前に現れている。UFOは、確かに実在するんだ、“未確認飛行物体”っていう意味でならね。だから僕らの前には、UFOが“宇宙人の乗り物だ”とか“プラズマだ”っていう説に対して、肯定か否定をするしか道が用意されてないんだ。そして僕は、UFOが宇宙人の乗り物だ、っていう説を肯定している立場なんだ」

よくわからない。

唸る僕に、横を走るミス・エマーデイルが納得顔で唸った。外人がするような、「アハーン？」「みたいな唸り方だった。ちよつと腹立たしい気分になった僕は、小声で彼女に訊いた。すると彼女は、こつ説明した。

『あなただつたら、私のことを引き合いに出せばわかりやすいんじゃない？』

「ミス・エマーデイルを？」

すると、ミス・エマーデイルはふふふ、と意味深に微笑んで、言

葉を重ねる。

『私は、あなたの前には存在している。それは、あなたにとって織り込み済みの事実のはずじゃない？ “私が存在する” っていうのは、信じるか否か、っていうレベルの話じゃないでしょ？』

僕が頷くと、ミス・エマーデイルは言葉を重ねる。

『でも、あなたが私をどう解釈するかは、別問題よ』

「どうということさ」

『例えば、あなたが私のことを、“ただの、妄想の産物” と解釈するのも自由。あるいは、私の言った言葉通り、“あなたの倦怠が形になったもの” と受け取っても自由。つまりあなたには、私の存在を“信じない” 権利は持っていないけれど、“私が何者なのか” を規定する権利はある、ってことなのよ』

つくづく意味が判らない。

首をひねりながら自転車を走らせる僕の横を、分かれ道がすり抜けていった。もちろん今日通ることになる、“UFOが見える丘” へ続く道だ。朝だというのに、その入り口は鬱蒼とした林に光を阻まれ、暗く口を開いている。入り口に立つ地蔵が、僕らを睨む。

「…楽しみだ」

その、闇が待ち構える道に目をやった藤島君は、呟いた。けれど、僕の側からは、藤島君がどんな顔をしてその道を眺めているのかは判らなかった。

「そうだね」

僕は、曖昧に頷いておいた。

僕らに乗せた自転車は、ようやく舗装路に入った。腕に伝わるオフロードの感触が、ようやくオンロードのそれに変わった。その感触を確認してから、ようやく僕はペダルを漕いだ。足の力が後輪に伝わり、ぐんぐんスピードをあげていく僕の自転車。

『ふふ、楽しみ？ 本当かしら』

嬉しそうに、僕の横でミス・エマーデイルは言った。言うまでもないだろうけれど、彼女、僕の自転車に、例の力サカサ歩きで追い

すがっている。その、ゴキブリみたいな仕草に、朝食べた目玉焼きがせり上がるような感覚に襲われつつも、僕はさらに自転車を漕いだ。

「…速いよ！」

藤島君の言葉に、振り返って言葉を返す僕。

「学校まで競走しようよ！」

「……………」しばし考え込む藤島君。けれど。「…やろう！」

藤島君も自転車のペダルを、がしつと音を立てさせて漕ぎ始めた。藤島君の青いマウンテンバイクも、ぐんとスピードを上げた。

半ば暴走気味の自転車二台は、五月の太陽の下、里に降りていった。そして、その二台に追いつがるように、カサカサ走りをする女の子。なんだか、頭を抱えなくなる僕なのだった。

その日の授業が粛々と消化されていき、気づけばもう放課後になっていた。一日って経過が早いなあ、と僕は窓の外にふと目をやると、外の運動場では、女子バレー部が陸上部を超える勢いでもってダッシュ練習をしている。なお、陸上部の方は、一人の周りをドーナツ状に他の部員が取り囲んでいる。きっと、あのドーナツの輪の中心にいるのが、熱血学園高校のアイドル・反町さんなんだろう。

「おい」

僕の隣に座るマサルが、つんつんと僕の脇をつついた。おもむろに振り返ると、マサルもつまらなそうな顔を浮かべて、ため息をついた。

マサルは、小声で言った。

「お前だけ、反町さんを見てるなんてズルイぞ」

僕も、小声で返した。

「バカ言え、こんなところから反町さんが見えるはずないだろ？」  
「嘘をつけ！」マサルは続ける。「反町さんは、遠くから見ても可愛いに決まってる！ 反町さんを見ていないんだったら、席を替われ！」



僕は思わず、窓の外の反町さんに目をやった。でも、僕の目に映るのは、ドーナツに自由を奪われた、陸上部員の姿でしかなかった。これだけ離れていては、あの陸上部員がきれいかどうかなんて、興味も持てなければ確認も出来ない。

「へえ」丁度前の席に座る月本さんが、ひょいと顔を出して、僕に訊いてきた。「ああいう人が好みなんだ？」

「いや、わからない」

「え？」マサルと月本さんは、ほぼ同時に声を発した。

「だから、わからないんだ」

すると、月本さんが聞いてきた。

「え？ まさか、反町さんの顔を知らない、なんてことはないよ、ね？」

「そのまさか」僕は小声で白状した。「皆、反町さん反町さん、つて騒ぐんだけど、反町さんの顔を拝んだことが一回もないんだよね。だから、噂程度に知っているだけ。美人だ、とは聞いているけど」

そう。僕は、反町さんという人物を、噂でしか知らない。元々興味がないから調べもしないし、すれ違っても気づかないだけなのかも知れないけれど。

マサルはため息をついた。まるで、そんな僕を“非男民”と言いたげに。ま、そんな言葉、ないけど。

「お前、変わってるなあ」

「うん、変わってる」月本さんまで、マサルの言葉に同意した。「だって、けっこう目立つ人なんだよ？」

「うん、目立つってことだけは知ってるよ。“ダサすぎて誰も着ていない制服をスタイリッシュにキメて、それこそカモシカのように健康的な足を交互に動かしながら”歩く人なんですよ？」

と、いつだったかマサルに訊いた言葉をそのままオウム返しにする僕。

「うん、それはその通りだけどさ」月本さんは言葉を継ぐ。「でも、それだけじゃ、彼女の紹介には足りないよ、マサル君」

月本さんは、マサルに目をやる。するとマサルはバツが悪そうにおどけてみせた。サルみたいだった。

「あの人さ」月本さんは続ける。「本当にキレイなんだ。キレイ、っていう紹介もどうかと思うちゃうくらいキレイなの。美術室に、女の人の胸像あるじゃない？ 美人度でいったら反町さんの方がはるかに上」

美術室に入ったことのなく、当然引き合いに出された胸像のことも全く知らない僕は、曖昧に頷いておいた。

月本さんは続ける。

「それで、とんでもなくスタイルがいいの。ちよつと表現は古いけど、“ぼん、きゅっ、ぼん”を地で行く感じなんだよね。あゝあ、ああいう風に生まれたかった」

と、月本さんは自分の胸に視線を落とした。

むむ、確かに。そういつた感じで、マサルは月本さんの胸付近に視線を集めて合点する。それは果たして、“反町さんはスタイルがいい”という部分への合点なのか、それとも“月本さんの胸がペタンコである”という事実に対する合点なのか、あるいはその両方なのかはわからなかった。

「それで」マサルの視線に気づいた様子のない月本さんは、さらに続ける。「なんていっても、あの髪の毛かな、あれがすごく特徴的」

「髪の毛？」

僕の問いに頷いてから、月本さんは続ける。

「地毛らしいんだけど、彼女、明るい茶髪なの」

「ふゝん」

僕はまた、ドーナツの中心を眺めた。けれど、その中心にいる人の髪の色なんて、ここからは一切わからない。

「その髪の毛を揺らして、200mを走る彼女の姿、ものすごいキレイなの。女の私から見たって、嫉妬とかよりも、むしろ見ほれちゃうようなキレイさなの」

「へえ」

けれど、今運動場に立っている反町さんらしき人は、ドーナツに阻まれて走る気配を見せない。そんなところに、ジャージ姿の陸上部顧問が現れて、ようやく反町さんの周りを囲んでいた連中が、「蜘蛛の子を散らすように、という形容はこういうときに使うんですよ」と国語の先生が引き合いに出しそうなくらいに完璧な“蜘蛛の子を散らす”を僕にみせつつ、彼女から離れていった。

## UFOの見える丘【9】

「まあ、あれよね」月本さんは言った。「でも、あれじゃあ、反町さん、可哀想よね」

同感だった。ドーナツの穴、っていうのは、ドーナツをドーナツたらしめる大事な要素だ。けれど、ドーナツを全て食べ終わってしまった後には、何も残らない。ただの空白が残るばかりだ。

その空白の役割を負っている彼女は幸せなのだろうか。と、ふと思った。

「そういえば、さ」月本さんは、空いている定席に目をやった。「藤島君は？」

小声で、マサルは答えた。

「ああ、“ちょっと図書室に行ってくる”って言ってた。で、なんだけとさ…」

マサルは、前の席の様子を伺いながら、恐る恐る、といった感じで訊く。

「なんで弥生、あんなプリプリしてるの？」

そうなのだ。部員が全員揃わない時間帯というのは、皆でダラダラと喋るのが高校生らしいパターンだ。なのに、今日に限ってこんなに喋りにくい空気なのは、いやに弥生さんが押し黙っているからだ。実は、弥生さんがやってくるまでは、けっこう和気藹々とした空気で話していたのだ。

「ああ、いい女いねえかな」

「何言ってるんだよ、いつもそればかりだな、マサル」

「っていうか、こういう女が“いい女”なの？ 後学のために知りたいんだけど」

「うーん、そうだな。…ぼん、きゅっ、ぼん、じゃね？」

「サイテー！」

「…むむむ、でも、一理あるかも」

「ええ！ マサルくんならいざ知らず、君までそんなこと言うの？」

「」

「いや、大きいほうが…ね？ 大は小を兼ねる、って言うし」

「そうなんだ…」

そんなバカ会話を、放課後の誰もいない教室で、僕とマサルと月本さんでやっていたのだ。ところが、そんな教室の空気を、弥生さんがぶち壊した。教室に入ってきた彼女は、ありえないくらいやる気のない顔をして入ってきた。いつもは表情に感情がこもる人だから、そのやる気の無い顔は皆に動揺を与えた。そして、いつもよりも無遠慮に音を響かせて椅子に座った弥生さんは、何も言わず机に突っ伏してしまったのである。

僕ら三人は、顔を見合わせた。

「…どう思う？」

「弥生ちゃん、すごい機嫌悪い…」

「じゃあ、触らぬ神にないとやら、だね」

とばかりに、放置しておくことに決めたのだ。

そして、そのまま10分、ずっと突っ伏したままだ。

「でも、弥生ちゃん、何があっただらう？」 月本さんは、横で突っ伏す弥生さんの方を少し見やりながら、誰にともなく訊く。

「さあな…」マサルも、遠慮がちに弥生さんの方を見る。「でも、弥生の機嫌が悪くなる時があるなんて、けっこう意外だな。アイツ、いつもやかましいし、けっこう大人だからさあ」

どうやら二人とも、藤島君と弥生さんの間に横たわる軋轢に、一切気づいていないようだ。あるいは、薄々感づいているけれど、どうアクションを取るべきか悩んでいるのかもしれない。つまるところ、藤島君と弥生さんの件は、当人同士で解決するという理想的なコースを除けば、僕がアクションを起こさなくては解決しない、ということだ。

まったく、なんて損な役回りだろう。

僕がそうやってため息をついたころ、教室の戸がガラガラ開いた。

「…遅くなつてごめん」

放課後の教室に用があるやつなんて、そうそういない。いるとすれば、その教室を部室代わりに使っている部の部員くらいのものだ。もちろん、この1年H組の教室を部室代わりに使っている調査部の部員、藤島君だ。

藤島君は、手に幾つかの本や紙類を抱えていた。そしてそれを、教卓に置いた。

それを合図にしたかのように、マサルは立ち上がった。

「よし！ 班を作れ！」

小学校の頃からの号令、“班を作る”。これは、近隣の机を田の字型に集めることで、まるで会議室の長机のような感じに連結させることだ。小学校や中学校のときは、弁当の時間とかディベートの授業なんかでよくやったけど、高校に入ってから部以外るときにやった覚えがない。

でも。

「あいあいさー！」

まるで、船長に従う船員のように、僕らはマサルの号令通りに“班を作った”。僕はもちろん月本さん、それどころかさつきまで机に突っ伏していた弥生さんも同様だ。まるで、何かの生体反射のようだった。なんと、“班を作る”という言葉は、機嫌の悪い人間間で動かす力があるのだ。やつぱり、小学校の6年、中学校の3年間の習慣というのは、そんな早くに抜けるものではないものらしい。恐るべし、義務教育。

そんなことはさておき、“班を作った”僕らの机に、藤島君は本や紙類をばさつと置いた。見ると、どうやらUFO関係の本や、ここら近辺の地図らしい。

「…遅れてごめん」

そう謝りながら、藤島君もまた“班を作った”。そのおかげで、すっかり田の字だった“班”に、ちよつと余計な島が加わってしまった。

席に座った藤島君は、右斜め前のマサル君に目を遣った。まるで、何かの合図を送るように。

もちろん、それは合図なのだけど。

その合図に気づいたマサル君は、まるで藤島くんの視線に押し出されるように宣言した。

「よし、じゃあ、調査部ミーティング、始めるぞ」

その宣言に一瞬遅れて、みんな自分の居ずまいを糺す。しゃきーん、てな感じに。けれど、弥生さんだけは心底つまらなそうな顔をして、ダルそうにしている。そんな弥生さんを視界の端にとどめているのか、明らかにやりにくそうにしているマサルは、早々に司会を藤島君に譲った。

「よし、じゃあ、始めるよ」

そう言った藤島君は椅子から立ち上がり、田の字に集められた机の真ん中に大きな地図を置いた。自然に丸まってしまつのを嫌ったのか、地図の端っこに重そうな本を置く。へえ、あの重そうな本つて、文鎮代わりだったのか、と僕は一人合点する。

「さて、今日の調査の手筈だけど」

そう前置きして、藤島君は説明を始めた。

彼の説明を要約するとこうだ。

今日の夜七時半、コンビニ「激烈屋」にて、皆で落ち合う。寮生は寮で夕飯を食べてから寮を抜け出し、通学組は激烈屋で夕飯を食べておくこと。そして、皆で坂道を登り、“UFOの見える丘”に続く道に入る。そして…。

「…“UFOの見える丘”で、UFOを待つ」

そう言つて、藤島君は地図の一点を指した。きっと、その点が、“UFOの見える丘”なのだろう。地図を覗き込むと、その丘は、正確には丘ではないようだった。地図を見る感じだと、丘、というよりは、切り立った崖のようだ。そして、その崖の下には川があり、その川を挟んで、ヘアピンカーブ、って形容していいくらいに曲がりくねった国道が通る山が控えている、というロケーションらしい。

きつと、昼に行けばなかなか見栄えのするロケーションだろう。

「質問！」

月本さんが手を挙げた。

「…何？」

「あのさ、地図を見た感じだと、丘の前に山があるじゃない？ っ  
てことは、例のUFOはその山と丘の間を飛んでいる、っていうこ  
とでいいのかな？」

すると、藤島君は腕を組んだ。

「…うん、そこなんだけど…」藤島君が、僕を指した。「…彼が調  
べてきてくれた情報から考えて、そういう理解でいいんだと思う。  
確か卒業文集に、そう書いてあったんだよね？」

問われた僕は、手短に答えた。

「丘から“北側の空に”見えた、って書いてあったよ」

地図を見た。位置関係としては、山は丘から見て北に立地してい  
る。そして、その卒業文集を書いた人は、北にある山の方を見てい  
たときに、UFOを目撃したらしい。つまり、件のUFOは、山と  
丘の間の空間に存在する物体だ、ということだ。

「…ってことは」藤島君は言った。「月本さんの理解で、いいんだ  
と思う」

ちよつと顔を誇らしげに赤く染めた月本さんは、手を下ろした。

「…他に、質問は？」

「あ、質問」マサルが手を挙げた。

「…何？」

「いつごろ出てくるんだろ？ 例のUFO。ほら、だって俺たち通  
学組じゃん？ だから、少なくとも終電までにはケリをつけたいん  
だけど…」

そんなマサルの言葉を、藤島君は一蹴した。

「…正確な時刻については判らない。…文集には、なんて書いてあ  
った？」

問われた僕が、質問に答える。





## UFOの見える丘【10】

すると、藤島君はふつと笑った。

「大丈夫。通学組の皆は、終電までには帰らせてあげるから。それ以降は、僕ら寮生組が調査するから」

げげ、「僕ら」「寮生組」ということは、僕も最後まで付き合うことになっているらしい。

一方、最後まで付き合う必要はない、とハンコを押された格好になったマサルは、納得したように手を下ろした。

「他に、なんか質問ない？」

藤島君の言葉が、教室を駆け巡る。

けれど、他の皆は、“質問なんてあるはずないだろう”って顔をして、藤島君の顔を見ている。約一名を除いては。

そして、藤島君が満足したようにため息をついたころ、その約一名が、胡乱に手を挙げた。

その約一名、さっきまでは明らかにだるそうに突っ伏していたのに、手を挙げた瞬間だけは、まるで挑みかかるかのような強い視線を、藤島君にくれている。

もちろん、言うまでもない。弥生さんだ。

その挑みかかられるような表情に押されて、

「あ、ああ」

と、藤島君は適当な反応を見せた。

弥生さんは言った。

「じゃあ、私から質問、いい？」

「うん、なに？」

つつけんどんに訊く藤島君。そして、つつけんどんに、弥生さんは答える。

「ていうかさ、その調査、面白いの？」

あんまり感情がこもっていない彼女の言葉だったのだけれど、そ

れゆえに冷たい響きを持っている言葉だった。元々がらんとしている教室の空白が、さらに広がったかのような錯覚さえ覚えた。

さすがに、マサルが割って入った。

「あゝ、はいはい！ 質問は以上ね！ はい、以上！ 楽しい調査、始めましょ！」

っていうか、ごまかすことにしたらしい。マサルらしいけれど、今日に限って言わせて貰えば、マサルの軽さがこの場の空気をさらに陰険な方向に持っていつてしまっている。

そんな、「うわあ、ここに居たくねえよ」と思わずばやきなくなるような空気の中で、弥生さんは立ち上がった。

「ど、どこ行くんだよ」

マサルが訊くと、弥生さんは手短に答えた。

「トイレ」

そう吐き捨てると、弥生さんは教室から出て行ってしまった。

しばし、沈黙。

「…弥生、本当にどうしたんだろう」

「さあ？」

マサルと月本さんは首を傾げている。けれど、藤島君だけは、伏し目がちにして、いつもよりも深く黙り込んでいる。きっと藤島君は、弥生さんの不機嫌な振る舞いの原因が自分にあることを理解しているのだ。きっと、藤島君も弥生さんも、自分でどうアクションを取っていいものか判らないでいるのだ。

『ふふ、つまらないことになりそうだね』

まるで、キャサリンからパーティーのお誘いを受けたの、みたいな口調で僕に語りかけるミス・エマーデイル。さすがに僕は叫んだ。

「うるさいよ！」

すると、皆が僕の顔を覗きこんできた。怪訝な、いや、もつと言え、恐る恐る。しばしの沈黙ののち、控えめに月本さんが口を開いた。

「…どうしたの？ 機嫌、悪い？」

続いて、マサルも訊いてきた。

「すまん、うるさかったか？」

僕は慌てて首を横に振った。いやいや、違うんだ。って連呼しながら。

「じゃあ、どうした、っていうんだ？」

マサルの至極もつともな疑問に、僕は言いよどんでしまった。まさか、「実は僕、皆には見えない女の子の姿が見えて、その子が今人をからかうようなことを言ったもんだから声を荒げたんだ」とは言えない。きつと、そんなことを言ったものなら、次の日から皆との間に妙な隔たりが出来てしまうだろう。

そこで、僕は言った。

「ああ、今の？ “思い出し怒り”だよ」

「は？」

マサルと月本さんが、同時に声をあげた。そして、どういうこと？ 思い出し笑いなら知ってるけど、っていう二人の至極もつともな質問に、僕はでまかせを並べることで応じた。

「思い出し笑いの怒りバージョンさ。みんなだってあるでしょ？」

とんでもなく腹立たしい出来事が、不意に脳裏をかすめるとき。そういうときにやっちゃうのが、思い出し怒りさ」

「でさ」月本さんは訊いてきた。「今のは、どういう思い出し怒りだったの？」

僕は答えた。

「いや、少し前、空気を読めないことを言った女の子がいてさ。その子に対する思い出し怒り」

嘘ではない。だって、僕に「思い出し怒り」の声を出させた女の子は実在するし、その子が「空気を読めない」ことを言ったのも本当。しかも、それを「少し前」に言ったのも本当だ。ただし、「少し前」っていう言葉には、かなり広い幅がある。たとえ、聞き手がその幅を聞き間違えたとしても、それは話し手の責任ではない。…と、思う。

『相変わらず、方便を使うのが上手いのね』

ミス・エマーデイルが僕の顔を覗きこんで、ニコッと笑った。僕はその顔を見返す。

「嘘も方便だよ」

僕は、彼女にそう言った。すると、やっぱりマサルたちが不思議そうな顔をして、僕の顔を覗きこむ。

「おいおい」マサルはちよつと呆れ気味に言った。「また“思い出し怒り”か？」

あわてて頭を振った僕は、口からでまかせを言った。

「そうだよ。“少し前”、例の女の子が皮肉を言ったもんだから」  
繰り返すけど、“少し前”というのも、嘘ではない。

ミス・エマーデイルの顔を睨んだ僕は、ため息をついた。ミス・エマーデイルは不思議な笑顔を僕に向けている。そして彼女は、カモミールの香りを振りまきながら、髪の毛をかきあげた。

「案外お前、不満が多い人間なんだな」マサルは、伸びをして言った。

なはは…、曖昧に苦笑いした僕は、弥生さんが出ていったドアの方に目をやった。そして、横の藤島君の顔を見やった。

「あ、ごめん」

僕は立ち上がった。

「ん？ どうした？」

マサルの言葉に、僕は嘘で返した。

「あ、トイレ。長くなるかも」

「ってことは、“ビッグベン”か」にししし、とマサルは笑った。

あんまり補足する必要もないだろうし、補足するのもイヤなのだが、  
「ビッグベン」というのはトイレの“大の方”の謂いだ。  
ただ、男というのはトイレの構造上“大か小か”が関心事になりやすい。具体的には、“大の方”に興味が行き易い。だから、イギリスの時計台の名前にかけられた別称があるのだ。

「…あのさあ」月本さんは、ため息をついた。「汚い！」

「ああ！　ゴメンゴメン！」

そんな二人の会話を背に、僕は教室をあとにしようとして、一瞬だけ藤島君の顔色をうかがった。やっぱり、藤島君は、まるで眠気と必死で戦う受験生のように、眉間にしわを寄せて歯噛みしている。きつと、眠気と戦っているわけではないのだろ。むしろ戦っているのは…。

がんばろう。そう思った。

『ふふ、つまらないことになりそう。…そんなこと放っておいて、私と遊びましょうよ』

そう誘惑してくるミス・エマーデイルのことを無視しつつ、僕は廊下をつかつかと歩いた。

「やっぱり、ここにいたんだ」

屋上へ続く長い階段を上りきり、ちよつと息が上がってしまった僕は、その言葉を掛けた。けれど、息が上がっているんだから、もちろん絶え絶えな声だった。でも、「後ろに誰かがいる」という事実だけは分かってももらえたらしい。屋上にいるその人は、振り返った。

「なんだ、君か」

弥生さんだった。

レイヤードファッションの服と癖毛を風に揺らして、屋上の手すりの前に立っていた。そして、足元にはタバコの吸殻が幾つかもみ消されて落ちていた。

「なあんだ」努めて呑気な口調で、僕は言った。「ニコチンの補給タイムだったのか」

「ちよつと違うかな」弥生さんは笑った。「正確には、ニコチンと、タールの補給タイム」

弥生さんは、パンツのポケットからタバコの箱を取り出した。男の人がよく吸う、水色のよく見る箱だ。その箱からタバコと100円ライターを取り出すと、火をつけた。風に負けないように、ライ

ターを手で覆いながら。

## UFOの見える丘【11】

「まったく、損しちゃったわよ」と、弥生さんはくわえタバコのま  
ま言った。「もしかして、サキとかマサルが様子を見に来たんじや  
ないか、とか、先生が来たんじゃないか、って思っ、点けたばか  
りのタバコをすぐもみ消しちゃったじゃない」

見ると、彼女の足元には、確かに一本だけ異様に長いタバコの吸  
殻があった。

「ああ、ゴメンゴメン」

ふっと弥生さんは微笑んだ。「冗談。アンタも吸う？」

差し出されたタバコの箱から、僕は一本タバコを取った。

「頂くよ」

「ほら、火」

弥生さんはライターを僕の前にかざした。慌ててくわえたタバコ  
に、弥生さんは火を点けた。僕が嚙んでいるタバコが煙をくゆらせ  
始めた。それに合わせ、煙を肺の中に充満させるイメージで吸い込  
み、そして、深呼吸するイメージで吐き出す。僕の口から出た煙は、  
きれいな空気に溶けていった。そして、その煙と一緒に体から疲れ  
が抜けていく感じを味わった。

「ああ、やっぱり、一口目が美味しいよね、タバコって」

「まったく」弥生さんは苦笑した。「その台詞、とても高校生とは思  
えないわよね。本当に、アンタってつくづく変なヤツよね」

「何が？」

「可愛い顔して、けっこう悪<sup>ワル</sup>じゃない？」

「悪、なんて、今時言わないよ。それに、僕の通ってた中学じゃ、  
タバコを吸って初めて一人前だったんだ。特段珍しいもんじやない」  
「でも、よくそんなんで、ウチの高校に入れたよね？」

ウチの高校、熱血学園高校は、そのネーミングセンスもさること  
ながら、ある校風で付近の中学校で知られていた。「潔癖なまでの



品行方正」、まさにその言葉に集約される。完全寮制だったところと比べればまだその品行方正さは薄らいだ感があるとはいえ、でも、僕が受験をしたときにも、「あの学校はとんでもないカタブツ校だ」というのは噂になっていたし、実際、中学の先生にもそう言われた。噂だと、品行方正に足りない生徒には、熱血高校への入試を諦めさせていた、とも。きっと、その状況は僕の中学だけではなく、弥生さんの中学校もそうだったのだろう。だから、「よくそなんだ、ウチの高校に入れたよね？」なのだ。

僕は言った。

「先生に見えるところでタバコを吸うなんて、不良のやることさ」  
「はっはっは、違うな」タバコをくわえたまま空に顔を向けた弥生さんは笑った。「ってことは、家で吸ってたんだ？」

「そ」僕は短く答えた。「いかに学校の先生とはいえど、家でやっていることに文句は言えない。治外法権、ってヤツ。それに、家には誰もいないから、文句を言う人間は誰もなし」

「でもさ」弥生さんは訊いた。「アンタ、寮生でしょ？ どうやってタバコ吸ってるの？ 吸う場所ないでしょ？」

「だから、ここで吸ってる」僕は白状した。「こうやって、弥生さんから一本恵んでもらってね」

実は、弥生さんと僕は、ただの同じ部の部員、という関係ではない。見ての通り、「タバコの呑み仲間」なのだ。

まだ、マサルと出会う前だから四月の頭頃だったか、ハトムネ寮の禁欲生活に、ふとタバコのこと が恋しくなつて、僕は屋上に向かった。屋上とトイレと言えば、タバコを吸う生徒たちの定番のたまり場だからだ。もしかしたら、禁欲生活を送る僕に、誰かが一本くらい恵んでくれる、そう思ったのだ。

ところが、屋上には誰もいなかった。中学の頃の屋上には必ずいた、ボンタン穿いた悪そうな兄ちゃんもいなかったし、パンツが見えそうなくらいに短いスカートの女の子もいなかった。さすが、噂に名高い熱血高校、そういう手合いはいないのか。

そう肩を落としていた僕に、頭上から声がかかった。

『君、一年生？』

見上げると、屋上の出入り口の上に、女の子が立っていた。レイヤードファッションに身を包んで、癖のある髪の毛を風に揺らして、僕のことは見下ろしていた。

僕が一年生である旨を説明すると、彼女は聞いてきた。

『え？ 何組？』

H組である旨を答えると、その女の子は首を傾げた。

『え！？ 私と同じクラスじゃん！ あれ？ 君みたいな人いたっけ？ 名前、なんていうの？』

その言葉、そのままお返ししたかった僕だったけれど、さすがにそこまで失礼なわけではないので、名前だけ名乗っておいた。

『…みんなの自己紹介、聞いたはずんだけどなあ…記憶にないや』  
どうせ僕は陰が薄いよ、とさすがに噛み付いた僕は、噛みつきついでに女の子の名前を聞いた。

『私？ 私は綱見弥生』

つなみやよい。じゃあ、“つなみさん”って呼べばいい？ と呼び名を確認する僕に、彼女は首を横に振った。

『苗字で呼ぶの、やめてくれない？ 私の苗字って、波の津波っぽくて、あんまり好きじゃないのよ』

違うない。僕は笑った。じゃあ、弥生さんでどう？ 笑いを抑えながら訊く。

『…なんで皆、ちゃん付けで呼んでくれないのかな』

いや、キャラのせいでしょ？ と僕は突っ込んだ。そんな僕の言葉にちよつと顔をしかめた弥生さんは、僕に言葉を掛けてきた。

『で、どうして君は屋上なんかに来たわけ？ まさか“四月の風が爽やかだから”っていう見じゃないでしょ？』

まさにその通り、と、アメリカンコメディの男の子のように下らない無駄口を叩いてから、実は、タバコを吸いに来た、でも、タバコを持ってない。だから、誰かに一本恵んでもらおうと思ってここ

まで来た、という旨を説明した。

すると、彼女は懷をまさぐり、懷にあったものを僕に投げ寄越した。僕の手が届いたそれは、どちらかっていうと女の子に人気のあるメンソールのタバコの箱だった。中には、タバコと一緒にピンク色の100円ライターが入っていた。

『一本、恵んであげる』

やい！

これが、僕と弥生さんとの出会いだった。だから、仮に僕が調査部に入っていないなくても、知り合いだったのだ。だから、調査部（この当時はまだ、部に名前はついてなかったわけだけど）の初顔合わせの時には驚いたものだ。

『あれ？ 君も入ったの？』

こっちの台詞だ、と言い返したけれど。

だから、同じ部員となつてからも、時折二人でタバコを吸う。その習慣は、名残として残っているのだ。

「でさ」タバコの煙をふう、と空に噴き出して、僕は本題を切り出した。「なんで、そんなに機嫌が悪いのさ？」

僕の吐き出したタバコの煙を、弥生さんは見つめていた。寂しそうな目で。

弥生さんは言った。

「別に、機嫌が悪いなんてことない」

「そうかな？」僕はタバコを吸って、鼻から煙を吐き出した。「さつきまでの態度、あれで機嫌がいいようには見えないんだけど」

「はっはっは、ああ、あれ？ あれは、ニコチンが不足していたからよ」

「え、どういふことさ」

口を尖らせる僕に、弥生さんは種明かしをした。

「実は、今日家に母さんがいてさ。母さんの手前、朝一番のタバコ、吸えなかったの」

弥生さんは、母子家庭だという。4月の中旬頃、タバコを呑みな

がら彼女はそう教えてくれた。そして、彼女は自分の母親について、いつもこう言う。きまってヤニの煙に当てられたように、はにかんで。『あんまりキャラじゃないけど、母さんの泣くようなことは、したくないんだよね』と。

「そうなんだ」

僕が訊くと、弥生さんは力強く頷いた。

「でも」僕は言った。「周りはそう見てはくれない」

「どうということよ？」

僕はこれ見よがしにため息をついてから、続けた。

「皆、弥生さんが変だ、って言ってる。月本さんも、マサルも。さつきまでは僕もそうだった。皆、“弥生さんの機嫌が悪い”って思ってる。もちろん、藤島君だって」

“藤島君”という言葉に、弥生さんはくわえタバコのまま、眉だけを反応させた。僕は続ける。

「藤島君、どう思うだろうね。だってそうでしょ？ イキナリ、“それって面白いの？”って質問された上、あんな風に席を立たれたら」

「悪かった、って思ってる」弥生さんは頭を振った。

「言う相手が違うよ」僕はわざと抑揚を込めずに続ける。「僕に言うんじゃない。言うべき相手は、藤島君なんだから」

一瞬、僕らの間に沈黙が滑り込んだ。気まずい沈黙だったけれど、その沈黙を破る気にはならなかったし、破ってはいけない気がした。そして、僕が沈黙を破る気がないのが判ったのか、弥生さんは重い口を開いた。

「でもさ、そういう問題なの？」

「そういう問題だよ」

と、僕が言くと、弥生さんはタバコを地面に落とす、忌々しそうに足で火を踏み消した。そして、かぶりを振りながら続けた。

「……だって、私、藤島のこと好きじゃない。それは譲れないんだもの」

僕はため息をついた。「だから、それは誤解だつて言ってるじゃないか。藤島君はいいヤツだよ」

「誤解かどうかなんてどうでもいいのよ。少なくとも私にとって藤島は馬が合わないヤツなの！ それ以上でも以下でもなく！」

## UFOの見える丘【11】（後書き）

念のため。

高校生の設定である「僕」や「弥生さん」がタバコを吸うシーンがありますが、未成年の方は二人の真似をしないようにお願い致します。また、老婆心ではありますが、成年の方も、タバコは控えめに。

## UFOの見える丘【12】

そう叫んだ弥生さんは、僕から視線を外し、走り出して行ってしまった。一人屋上に残された僕は、手すりに寄りかかりながら空を眺めた。どこまでも続く空。その空は、僕のタバコからわきあがる煙のせいか、少しくすんで見えた。不意にタバコの事が憎憎しくなった僕は、タバコを地面に投げ捨て、踏み潰した。

『つまらなそうね』

ミス・エマーデイルが、僕の横の手すりに寄りかかった。春の風に頬を赤く染めながら、空を眺めている。きつと、僕が弥生さんと話している最中も、ずっとこうして待っていたのだろう。

僕は思わず、認めてしまった。

「ああ、つまらないよ」

ミス・エマーデイルは、ニコツと微笑んだ。そして、僕の腕を抱きしめる。

『物事を面白くする、っていうのは、どうしてこう大変なのかしらね？』

彼女の桃色の唇から出し抜けに出た言葉が、どうしたわけか僕の胸を捉えた。ぎゅっと胸を締め付けられるような、奇妙な痛みに、僕は戸惑った。

その戸惑いを見透かすかのように、彼女は続ける。完璧な笑顔のまま。

『あなたもわかっていてでしょ？ 物事を楽しい方向へ持っていくためには、どうしても犠牲が必要なの。例えば、労力。例えば、時間。例えば、精神力。でも、それら貴重なものをどんな湯水の如くに使ったって、楽しい方向へ行かないことだってあるのよ。あのダボダボの服の子を見なさいよ。あなたがこうやって説得しても、のれんに腕押し。効果がないじゃない』

「そ、それはそうだけど……」

ミス・エマーデイルの言葉に頷きそうになるのを必死で抑えつつ、僕はなんとかごまかし笑いを浮かべた。けれど、彼女はさらに続ける。

『“いつかは僕の思いが通じる”とでも言いたいのかしら？　いつかはあの二人が手に手を取るかも、って？　バカバカしい話ね。世の中の動きに対して、あなたの思いなんて何の力も持たないわ』

その言葉を聞いた瞬間、僕はまるで糸の切れたマリオネットのように、ずるずると地面に腰を下ろしてしまった。肩にかかる空気が重くなったように感じた。そのせいで伏し目がちになってしまい、屋上の緑色の床を胡乱に見つける僕がいた。

それでも僕は反論した。でも、か細い声で。

「僕は別に、世の中を変えたいわけじゃない。僕はただ……」

『あの二人の関係を、どうにか変えたかった、でしょ？　』そう言うってから、ミス・エマーデイルは鼻で笑った。『でも、それが“世の中を変える”ってことだわ。だってそうでしょ？　世の中、っていうのは、人と人との関係、その積み重ねじゃない。逆を言えば、世の中の最小単位は、人と人なの。…判ったかしら？　あなたは、世の中を変えようとしてたのよ。』

…でも残念。人間の思いには、世の中を変える力なんて、ありはしないのよ』

ミス・エマーデイルは、きっぱりと言い放った。

「違う」

僕は何とか抗弁した。でも。

『何が違うと言うの？　』

ミス・エマーデイルは純粋な瞳で僕を包み込んだ。純粋だけに、嘘とかロジックとかが通じそうにもなかった。だから、僕は結局認めるしかなかった。

「…何も、違わない」

僕の気持ちを積んだくらいじゃ、弥生さんと藤島君の反目を晴らすことなんて、出来ないんだ。いや、ミス・エマーデイルの言葉を



借りるなら、『人間の思いには、世の中を変える力なんて、ありはしない』んだ。僕の思いをいくら積んだところで、世界は回らないんだ。

僕にミス・エマーデイルは微笑みかけた。どんな女の子の笑顔よりも眩しい笑顔。どんな女の子よりも、魅力的な笑顔だった。そして、その笑顔に魅了されている僕の首に、まるで覆いかぶさるようにして腕を絡ませてきた。昨日だったら払いのけていたはずの彼女の腕を、この時ばかりはどうしても払う気になれなかった。

ミス・エマーデイルは僕の瞳を覗き込んで、言った。

『ようやく、判ってくれたのね。…そうなの、あなたの思いなんて、ちっぴけなの。あなたがどんなに心を痛めたって、どんなに己を犠牲にしたって、この世界は粛々と流れていくだけ。この世界は、あなたに対して優しくはないのよ』

反論しなかった。でも、返す言葉が浮かばなかった。

彼女は続ける。詩を諳んじているかのような格調で。

『いいえ、誰に対しても優しくはない。この世界は、誰に対しても無関心なの。あなたに対しても。私に対しても。あなたの友達にも。空を飛ぶ鳥に対しても。道端を歩く犬猫たちにも。この世界に生きとし生ける、全ての生き物に対しても』

そうなのかも知れない。

そんな、僕の心の振り子の振り幅を見極めたかのように、ミス・エマーデイルは僕に語りかける。まるで、振り子の振れる方向を、自分の方へ手繰り寄せるかのように。

『じゃあ、どうして、あなたはこんな思いをしているのかしら？』

「ど、どうして、って…」

僕の心の振り子が、確かにミス・エマーデイルの方へ振れた。

ミス・エマーデイルは、僕に吐息を吹きかけた。その吐息は、カモミールの香りがした。そして、僕の耳を刺激して、髪の毛を揺らした。彼女の吐息に身を震わせた僕に、子供をあやす母親のような顔を見せてから、彼女は続けた。

『判らないの？ あなたがこんなに打ちひしがれている原因』

「それは…」

この先が言えなかった。なんとなく、予感があつたからだ。もし、ここで何かを言ってしまうえば、きっと僕はミス・エマーデイルに落とされてしまう、という予感が。

そうして黙る僕に、ミス・エマーデイルは答えをぶつけてきた。

『ふふ、判らないなら教えてあげる。』

あなたがこんなにも打ちひしがれているのは、“楽しい思いをしたい” っていう気持ちのせいよ』

「どういうことだよ？」

『簡単な話よ。あなたは、私を振り払おうとして、“調査部” なるものを作った。そして、あなたは調査部の不協和音を取り除こうとしたわ。それも、私を振り払うため。つまり、あなたは倦怠を振り払おうとしたわけよね』

胡乱に頷く僕。彼女は、僕の顔を覗きこみつつ続ける。まるで、説得するように。

『確かにそうなの。倦怠を振り払うには、何か楽しいことを見つければいいの。それは正しい。でも…、楽しいことを見つけるためには、色々な傷を覚悟しなきゃならない。“眠り姫” の、王子様のようにね』

“眠り姫” の王子様は、姫を助け出すために、茨に包まれた城に乗り込んだ。絵本には書かれていなかったけれど、きっと王子様も途中でかすり傷を負ったことだろう。

ミス・エマーデイルは続ける。

『でも、訊くわ。あなたに、その傷を我慢できるだけの強さがある？』

「…」

答えることが出来なかった。でも、押し黙ってしまった、というその事実こそが、僕の答えを代弁していた。

『…そう。あなたに、その強さはないわ』

「なんで、そう言いきれんだよ」

ようやく出た僕の反論に、彼女は何が面白いのか笑顔を湛えつつ答えた。

『よく考えてごらんなさいよ。私は、あなたの倦怠が形になったものなのよ？ あなたにその力が無かったから私は生まれたのよ？』

頭を振る僕。彼女は続ける。

『どんなに否定しても、それは事実なの。』

…それよりも、どうしてあなたは“自分が弱いこと”をそんなに卑下するの？ と、いうか、強いこと、ってそんなに重要なことかしら。さらに言えば、“楽しい”って思うことって、そんな大事な何かしら』

下を向いていた僕は、ミス・エマーデイルの顔に目を遣った。きつと、その瞬間の彼女の黒い瞳には、雨の中で震える子犬のような顔をした僕が映りこんでいただろう。

『最初から、楽しい、なんて気持ちを諦めちゃえばいいじゃない。そうすれば、世界にそっぽを向かれる悲しみに耐える必要なんてない。強さなんていらんないじゃない。それに比べれば、倦怠っていうのは人を傷つけない。だって、倦怠っていうのは、あなたの心の中だけで完結している出来事なんだもの。確かに、楽しい、っていう思いも無くなる。でも、悲しみも一切無くなる。強い弱いなんて関係ない。ただ、あなたと倦怠がいるだけ。あなたと、私がいるだけ』

「でも…」

『楽しい気持ちっていうのはプラスの感情だ、って皆思っているわ。それに、退屈っていうのはマイナスの感情だ、とも』と、ミス・エマーデイル。『でも、そのどちらにも良い悪いなんて価値判断を押し付けるのは間違ってる。皆が良し悪しで理解しているだけで、実際のところそれらの気持ちは、“感情の一形態”でしかないんだから…。あら、納得してくれないのね。じゃあ訊くけど、“怒る”って感情と、“悲しむ”って感情、どっちの方がプラスの感情かしら？』

やっぱり、答えられなかった。僕にはどうしても、“怒る”と“悲しむ”、どっちの感情にも目盛りを見出すことが出来なかった。そして、それら感情というのが、彼女の言葉を借りるなら「感情の一形態」でしかないと思いつてしまった。だから、彼女の質問に答えることが出来なかった。

## UFOの見える丘【13】

そうして黙る僕のことを見て、彼女は口角を上げた。きっと、僕の心の動きを見透かしているのだらう。彼女はさらに続ける。

『そう。別に、楽しかろうが、つまらなかりうが、結局一緒。だつたら倦怠の中で私と過ごしましょうよ……』

まるで悪魔が囁くかのような、ミス・エマーデイルの声。そして、うららかな春の日差し。その二つが、僕を眠りの世界へと誘い出していた。

その眠りに抗う僕。けれど、僕の中にいるもうひとりの僕が、耳元でこう囁く。“確かに、倦怠に包まれるのも悪くないんじゃないか”と。

遂に、僕は負けた。

すっかり重くなった瞼を閉じた僕は、まるでそれが決まりであるかのように息を整えた。そんなことをつらつらと考えているうちに、ものを考えるのさえ億劫になってきた。そして、僕の前には、不思議な沈黙がまるで忠実な飼い犬のように佇んでいた。

『さあ』

ミス・エマーデイルは、確かにそう言った。

『行きましょう』と。

その瞬間、沈黙という名の飼い犬が僕に襲い掛かってきた。もはや僕に、反撃する力は残されていなかった。その飼い犬に飲み込まれた僕は、完璧なる沈黙の世界に落ちていった。

ふと気づくと、周りは真っ暗だった。

何が起こったのか、というか、今、自分がどこにいるのかさえ判らなかった僕は、まだ寝ぼけた頭を振って、ふと周りを見渡した。けれど、右も左も真っ暗で何も見えない。背中に鉄格子のようなものがぶつかっているような感覚があった。足元にはタバコの吸殻が

二つ落ちていて、緑色の地面が広がっていた。

「あれ？　ここ、どこだろう？」

目をこすりながら、さっきまでの状況を思い出そうとする。けれど、寝ぼけているせいで上手く頭が回らない。まるで、目視確認をする電車の運転手のようにして、僕はさっきまでしていたはずの行動を逐一思い出そうとする。

「ええと…弥生さんとタバコ吸いながら話して…、それで、弥生さんが行っちゃって…。そのあと…、そうだ、ミス・エマーデイルが…僕を倦怠に誘い込んだんだ！」

瞬間、思わず立ち上がってしまった。少し足がもつれたけれど、そんなことに構っている暇はない。体を立てたのがよかったのか、僕の頭にどどん血がめぐってくる。それと同時に、正確な思考が戻ってきた。

そうだ。ミス・エマーデイルが、「楽しいこととつまらないことは同質」とか何とか言って、僕の心をくじかせた。さっきの彼女の行動とともに、ここがどこなのかも判ってきた。それは、僕がふと上を見たからだ。

頭上には、星たちが輝いていた。見知らない星座ではなかった。典型的な、春の星座たちが頭上に輝いていたのだ。そう、つまりどこか知らないところに飛ばされたわけでなければ、巨大な生物の腹の中に入ってしまったわけでも無さそうだ。

と、いうことは、ここは…。ほとんどクリアな思考に戻っている僕の頭は、今ここがどこなのかという基本的な疑問に対する答えをはじき出そうとしていた。

そうだ、ここは…、屋上だ。学校の、屋上だ。

そう気づいてみれば、ヒントはそこかしこにあった。例えば僕の足元。そこには僕と弥生さんが吸ったタバコの吸殻が落ちている。そして、その吸殻が落ちている緑色の地面、これは屋上の床ならではの色だ。僕の背後に佇む鉄格子は、屋上にある手すりだ。

でも、さっきまでとは屋上の様子が違う。べらぼうに辺りが暗い

のだ。だから、気づくのが遅れたんだ、と心の中で言い訳をし始め  
てはじめて、僕はあることに気づいて、つい叫んでしまった。

「しまった！ もう夜じゃないか！」

慌てて腕につけているデジタル時計を見ると、19時43分を示  
していた。

確か…、藤島君が、「夜七時半に、コンビニ「激烈屋」にて集合」  
とか言っていた気がする。けれど、もう既にその約束の時刻は過ぎ  
てしまっている。

慌てて駆け出した、その瞬間だった。

『あら、ようやくお目覚め？ ねぼすけさん？ 』

ミス・エマーデイルが手すりに寄りかかって、僕のことを嗤って  
いた。くすくす、と。

「ミス・エマーデイル…」

僕は足を止めてしまった。

『でも、残念だわ、ねぼすけさん。もう、間に合わない。約束の時  
間は過ぎちゃった。今から追いかけたって、無駄じゃないの？ 』

「いいや」

首を横に振る僕に、彼女は続ける。

『そんな意固地になってるあなた、私、嫌いだよ』

まるで、10年の月日に分かれた恋人に掛けるような言葉を、  
彼女は呟いた。しかも、これ以上なく悲しそうな瞳を湛えて。彼女  
は続ける。

『いいじゃない。楽しいことを諦めちゃえば。そうすれば、悩むこ  
とも傷つくこともない。今まであなたは、さんざん傷ついてきたじ  
やない。私の言うことが判らないはずはないでしょう？ 』

彼女の言葉は、僕の心に残る古傷をつついた。けれど、その心の  
古傷を庇いながら、僕は言葉を返す。

「いいや、意固地でいいんだ」

『なぜ？ 』

「だって」

僕は、ミス・エマーデイルから目を逸らした。僕になぜ？ と訊いてきたときに見せた彼女の目が、あまりに色々な言葉を語っていて、見るに耐えなかったからだ。けれど、僕は続けた。

「僕は、死にたくないんだ」

倦怠に巻き込まれる、つまり、ミス・エマーデイルに魅せられたら死ぬ。その、僕と、ミス・エマーデイルの間で戦われているゲーム。そのルールに従って、答えたのだ。

しばらく思案をするかのように上を向いていたミス・エマーデイルは、まるで恨み言を言うかのように、僕に言葉を投げてきた。

『ま、そうやって今は突っ張ってるがいいわ。でも、そのうちに判る。あなたは、いつか必ず、倦怠に引き込まれるわ』  
「言ってる」

ミス・エマーデイルの予言めいた言葉にちよつと戦慄しつつ、それでも軽く反論した僕は、下の階に続く階段に向かって走り出した。

屋上を抜け出した僕は、駐輪場においてある僕の自転車に跨り、全速力で漕いだ。街灯さえない田舎のあぜ道を、立ちこぎして走る。まるで、風になったかのような気分だった。でも、隣を走るミス・エマーデイルが、『どうせ間に合わないわよどうせ間に合わないわよ』と、こちらのテンションを下げるようなことを連呼してくださったおかげで、とても奇妙なテンションになってしまった。しかも例のカサカサ走りが目に入ってしまう、どうにも気分が悪くなってしまった。

そんなこんなで、コンビニ「激烈屋」までやって来たはいいのだ（いや、良くないのかも知れない）けれど、もう既に、みんなの姿はなかった。腕時計に目を遣ると、19時55分を指していた。集合時間の30分遅刻。もしこれがデートだったら、きっと待たされたほうは激怒して帰ってしまうんじゃないか、ってくらいの遅刻ぶりだ。一応、コンビニ「激烈屋」に入ってみたけれど、人影はない。あるのは、レジの中で暇そうに雑誌を読んでいる店員さんだけだ。



その暇そうな店員さんに、高校生の一団がさつき来たと思うんですけどご存知ないですか？ と訊いてみた。すると、店員さんは雑誌から目を離して、教えてくれた。

「ああ、七時半ころに、ここを出て行っただよ」

「七時半？」

「ああ。きっかり七時半。男の子二人に女の子二人だろ？ 確か、その子達が出て行っただ頃、タバコの納品が来たからなあ、間違いないよ」

「ありがとうございます！」

そう手短に言っただ、出て行こうとしたとき、店員さんは僕に言った。

「……おいおい、ここを待ち合わせに使っておきながら、何も買わない、っていうのはルール違反じゃないのか？ ここは、ハチ公前じゃないんだけどな」

その言葉に、棘はなかった。むしろ、まるで僕のことをからかうような口調だった。

「え、じゃあ……タバコを一つ。あと、ライター」

「おいおい」店員さんは言った。「お前、平和畑学園高校：あ、今は熱血学園高校、って言うんだっけか？ とにかく、その学生さんだろ？ 未成年にタバコは売れないんだよ。……お前、ハトムネ寮の寮生だろ？」

「バレたか」僕は舌を出した。

「バレバレ」20歳代の後半くらいだろうが、若い、とまではいかないまでも、かといってオジさんと言いつてしまふのにも後ろめたさが残る店員さんは、顔をほころばせた。「タバコを買うのは、十年早いよ……あ、正確には、あと4〜5年ってどこか？」

「でも、かといってタバコ以外に欲しいものはないし……」

「はっは、構わないよ、別に」店員さんは雑誌をパタンと閉じた。

「お前、いつも朝に焼きそばパンを買ってくれてるだろ？ それで、充分だよ」



## UFOの見える丘【14】

「え、僕のこと…」

「ああ、コンビニの店員なんて仕事してるとな、ついお得意様の顔を覚えちゃうもんなんだ。暇だからな」そう言って、店員さんは僕以外誰もいない店内を見渡した。そして、言葉を継いだ。「んで、こうして暇な時間に、お得意様が来店なさったら話しかけることにしてるんだ。そうやって、折り合いをつけてるのさ」

「折り合い？」

「ああ、何せ暇だからな。どうしても、形而上学的な疑問が浮かぶわけだ」

「ケイジジヨウガク？」

「そのアクセントのつけ方じゃ、人名になっちゃってるよ。…形而上学。要は、どうしてこんなところにコンビニが立ってるのか、っていう疑問だ。自分で立てといてなんだけど、こんなニーズがあるのかわからないコンビニ、働いていてむなしくなるのは当たり前さ。だから、夜に、浮かない顔をして入ってきた高校生を、軽口で慰めてやる。それで、その高校生の気持ちが少しでも明るくなれば、俺の折り合いがつくわけだ」

「そういうもんですか」店員さんの言葉ではじめて、自分が浮かない顔をしていたことに気づいた。

「ま、とにかくだ」店員さんは言った。「引き止めて悪かったな。こちらもいい暇つぶしになったよ。少なくとも、この雑誌よりは」

店員さんは、その雑誌を持って雑誌コーナーの棚に向かった。きっと、この店の売り物なのだろう。案の定、店員さんはその棚の一番上の段に、手の雑誌を挟みこんだ。

その店員さんの背中に会釈して、僕はコンビニ「激烈屋」を出た。そして、また自転車に跨って、ひたすらに漕いだ。そのうち、緩やかな上り坂にかかった。でも、僕は漕ぐ。さらに進むと、すこしず

つ傾斜がキツくなっていく。けれど、僕は自転車から降りず、ひたすら漕いだ。横を行くミス・エマーデイルの歩調を見るに、もう僕の自転車は歩くよりも遅いようだった。

『歩いちゃったほうが速いんじゃない？』

「そういうことじゃないんだよ」

『変なの』

くすくす、と、ミス・エマーデイルは笑った。

そうやってやせ我慢しながら昇っていくうち、遂に三叉路に差し掛かった。左を登れば、ハトムネ寮。右の道を行けば、UFOの見える丘だ。

右の道の前には、まるでここに踏み入ることなかれ、とでも言いたげな、苦悶に満ちた表情を浮かべる地蔵様が立っていた。暗い中でも、地蔵様の、赤ん坊のしているような前掛けだけが、赤く浮かび上がっていた。そして、そのすぐ横に、ピカピカの黒いマウンテンバイクと、いやに古いママチャリが置かれていた。確か、黒いマウンテンバイクは、藤島君のものだ。じゃあ、このママチャリは？ そんな疑問はさておいて、自転車を降りた僕は、藤島君の自転車の横に、自分の自転車を停めた。こんな田舎に泥棒はいないと思うけど、念のため、と誰かに言い訳するように呟いて、鍵もかけた。

僕の眼の前に続く道は、真っ暗だった。僕のことを窺うかのよう、闇がぼつかりと口を開けている。一瞬、僕のことを威嚇するかのよう、森が鳴った。

ゴクン。

思わず固唾を呑む僕。

『あら、怖いのか？ だったら…』

「いや、行くよ」

ミス・エマーデイルの言葉を一瞬で封殺する。そして、闇の中を果敢にも踏み出す。

けれど、ここが大変だったのだ。屋上で居眠りをしてしまう、なんてミスを計画に織り込んでいなかった僕は、懐中電灯とか、カン

テラとか、そういう明かりになるものを一切持ち合わせていなかった。こういうとき、ケータイ電話の液晶画面が意外にも照明になる、って聞いたことがあるけれど、僕はケータイ電話を持っていない。「ハトムネ寮五禁制」のせいで、ハトムネ寮の寮生は誰一人としてケータイ電話を持たせてもらえないのだ。

まったく、散々だった。

木の枝にかすり傷を作ったのは一度や二度ではない。それどころか、太い幹に頭をぶつけたり、まるで何かのトラップのように足元に倒れる木に、足を引っ掛けられたり。多分、明かりがあれば、しなくてもいいような痛い思いを散々してしまった。

けれど、そんな僕の暗中探索にも、終わりのときがやってきた。行く手に、明かりが見えたのだ。最初は何かの錯覚だと思った。

でも、何度か目を凝らすうち、それが筒状に伸びる光、つまりはピームであることがわかった。そして、やがて、それが懷中電灯の光であることが判った。さらに決定的だったのは、風向きが変わることに聞こえてくる、声だった。

「がキレイだね 君も来れば良かったのに」

「  
いうか、アイツ、どうして  
」

最初の、可愛らしくて高い声は、月本さん。次に続いたお調子者っぽい低めの声は、マサルだ。風に遮られて、あるいは風に流されてくる声は所々虫食いのように抜け落ちていたけれど、その声の主くらいはわかった。

僕は走った。その声たちの下へと。視界を妨げる、木々たちを後ろに追いやつて、僕は声の元に急いだ。そして、最後の木々を後ろに追いやつた瞬間、一気に視界が開けた。

僕の目に映ったのは、まさに丘だった。

少しだけこんもりとしている丘。けれど、どうしたわけか、その丘には背の低い雑草の類しか生えていない。それこそUFOが森の一部をすっぽりと略奪して行ったかのように、ほぼ完璧な円形にその広場は広がっていた。僕としては、UFOが出る云々よりも、こ

の地形がどうして出来たのか、という方が興味深かった。

さて、僕の登場によって、UFOの見える丘にいた面々は、大騒ぎになった。

最初は、熊でも来たとでも思っただろうか、ぎゃあ！化け物！とか死んだ振り死んだ振り！とか皆が皆、言いたいことを言っていた。きつと、逆光か何かで僕の姿が見えないのだろう、と判断した僕は、自分の名前を名乗った。すると現金なもので、UFOの見える丘の騒ぎは、一瞬で収まった。

そうして落ち着いたUFOの見える丘には、調査部の4人がしっかり居た。弥生さんも、丘の真ん中にある岩に腰を落としている。とりあえず、良かった良かった、と、うんうん頷く僕。

「あれ？ どうしたんだ？ 具合は？」

「…来ないものとはかり思ってた」

マサルと藤島君が、僕の顔を見るなりご挨拶なことを言うものだから、僕はため息をついて、そんなわけないだろ！と反論した。すると、月本さんが変な顔をした。

「え？ どうしたの？ その顔は何？」

「いや、だって」月本さんは言った。「教室の前に、置手紙があつてさ。“調子悪いから帰る”って。…具合、大丈夫なの？」

いや、そもそも具合は悪くないし、そんな置手紙をした覚えもないよ、と答えた僕の顔を、月本さんはまじまじと見つめる。

「じゃあ、あの手紙はなんなのかしら？」

その月本さんの疑問に答えることが出来る者は誰もいなかった。僕を除く皆は正解を知らないからだし、僕は立場上その答えを口にできないからだ。

そう、僕には、その疑問に対する見当がついていたのだ。

なので、僕は声を潜めて、訊いてみた。

「君の仕業だろ？ ミス・エマーデイル」

『あら、何の話かしら、ピ〜ピ〜』

口笛まで吹いている。どう考えても怪しい。何度か重ねて訊くと、

ようやく彼女は罪を認めた。

『ええ、そうよ。だってあなた、あのまま目覚めそうに無かったから、気を回して手紙を書いたのよ。“調子が悪いから、帰る”って調子が悪いのは嘘じゃなかったんだし、いいじゃないの』

「っていかさ、ミス・エマーデイルって、僕にしか見えない存在なんだろう？ そんなあやふやな存在のくせに、手紙なんか書けるの？」

その質問に、ミス・エマーデイルはフン、と鼻を鳴らした。まるで、父親に自分の可愛さを誇る幼女のようなうだった。微笑ましいし、かわええ。

『確かにそうよ。私、って存在は、きわめてあやふやな存在。でも、私はあなたの一部なの。だから、あなたと縁が深いものなら触れるわ。…具体的には、あなたの体や、あなたの所有物。例の手紙は、あなたのノートの切れ端と、鉛筆で書いたのよ。ほら、だってあなたが突然姿を消したら、お友達が心配するじゃない？ だから、気を回して書き置きしてあげたのに…』

「そんな気ばかり回さないでくれるかな」

『…知らない』

ミス・エマーデイルはそっぽを向いてしまった。そして、僕はそんな彼女の動作を何かの合図にしたかのように、目を真つ暗なUFOが見えるという空に向けた。

「っていかさ」岩に腰を下ろしていた弥生さんが、僕の顔を覗きこんだ。「じゃあ、こんな時間までどこにいたの？」

この質問には、正直に答えて良さそうだ。僕は答えた。

「ああ、屋上で居眠りしちゃって」

「は？」僕を除く皆が、声を揃えた。

皆、僕の顔を覗きこんでいる。しかも、皆呆れ顔だ。呆れ顔に囲まれているこの状況、そうそう味わえるものじゃありませんぜ、と心の中でどうでもいい感想を呟いていると、しみじみと月本さんが言った。

「あつ  
きれた」



## UFOの見える丘【15】

「うん、あきれた」

「…呆れた」

「呆れた」

月本さんの言葉をきっかけに、残りの三人が、まるでドミノ倒しの要領で順番に「呆れた」と呟いた。

「呆れたね」

そして、五人目の低い声が、僕の耳に入った。

当然、僕の声ではないし、ミス・エマーデイルの麗しい声音とは最初から比べるべくもなかった。でも、ここには僕とミス・エマーデイルを除けば4人しかない。あれ、ということはこの声は…！

「ゆ、幽霊…！」

そう叫んだ僕に、その声は反論した。

「おいおい、幽霊とは挨拶じゃないか」

そう言つて、丘の雑草からひょいっと人影が顔を出した。きつと雑草生い茂る丘に寝転んでいたのだろう。

ウチの高校の制服を藤島君よりもはるかにびしっと着こなしている。床屋で、「適当にお願いします」ってお願いして刈られたような髪型をしていて、黒縁の大きなメガネをつけている。なんだか、顔だけの印象だったら、銀行員、って思わず信じてしまいそうな雰囲気だ。そして腕には“S”とあしらわれた腕章をつけている。…ん、待てよ？ “S”のついた腕章って…。

「ええと、生徒会の方、ですか？」

僕は聞いた。

ウチの高校、熱血学園高校の生徒会、というのは、ちょっと他の高校のそれとは違った特徴がある。それは、生徒会という組織が部活動化していることだ。普通、高校の生徒会というのは、部活動とはちよつと一線を画したものとして認識されている。普通、他の学

校だと、生徒会の下に部活や同好会、各種委員会が設置されている仕組みになっている。普通の高校だと、生徒会が一番偉くて、その生徒会に、各種部活動や各種委員会が従っている、というピラミッド構造になっているのだ。

けれど、ウチの生徒会は他所とは全く違う。

あくまで、ウチの生徒会は、“部活動の意見をまとめ、そして委員会などの整備で以って、生徒の活動のフォローをする会”という建前になっている。建前上、生徒会と各種部活動とは同格。では、誰に最高責任があるかという点、選挙で選ばれる、会計、副会長、会長の三役だ。そして、その三役の下に、生徒会を初めとした各部活動が位置する、という建前になっている。

しかも、会計、副会長、会長のいわゆる三役を除き、生徒会のメンバーは選挙が行なわれない。生徒会は、他の部活動のように、部員を勧誘する要領で生徒会メンバーを勧誘するのだ。そして集まった「生徒会部員」たちは、生徒会の下にある各種委員会の運営をさせられる。そして、その中で実力のあるものが生徒会の本部へと戻る。そうして、学校という組織の自治を学ぶ。「生徒会という組織が部活動化している」とは、そういう意味においてだ。だから皆、生徒会三役と“生徒会”を区別するために、後者を「生徒会部」と呼んでいる。

そして、「生徒会部」は腕章を作っている。「学校の自治を司る」という「生徒会部」の特殊性から、「生徒会部」に所属する学生たちは赤地に黄色の“S”を染め抜いた、オリジナルの腕章をつける決まりになっているらしい。

そう。僕の目の前にいる銀行員風の人は、その腕章を身につけている。つまりは「生徒会部」の部員なのだ。

僕の質問に、その人は答えた。

「ああ。そうだよ。俺は生徒会だよ。しかも、役つきなんだけどなまるで、俺の顔を見たことないのか？ とでも言いたげな口調だったけれど、僕にはその人の顔に見覚えがなかった。だから黙って

いるしかなかったのだけれど、その様子にやきもきしだした月本さんが慌ててフォローした。

「生徒会書記の、町田先輩だよ！」

ああ。この人が。僕は心の中で手を打った。

隣室の井上先輩から、町田先輩について話を聞いたことがある。

曰く、「あいつを敵に回してはいけない」。

井上先輩の謂いはこうだ。

あいつは、学校最大の権力者だ。ウチの学校は、選挙で選出される生徒会会長が一番の権力者ってことになっている。確かに、生徒会会則を見ると、「会長は部の解散や懲罰、予算の配分等を最終決定する権利を有する」って書かれてはいるけど、生徒会の会長には、ほとんど発言権がない。実のところ、「部の解散や懲罰、予算の配分」を決めてるのは、三役の下、書記を始めとする「生徒会部」の面々だ。あいつらには、実は何の権利をも有していない。会則を読むに、「生徒会は、三役の補佐に当たる」としか書かれていないからな。でも、結局三役の連中は実務派の「生徒会部」に取り込まれてるんだ。「生徒会部」の意向が、そのまま通る仕組みなんだよ。その「生徒会部」のトップ、町田。アイツはすごいやり手なんだ。元々、「生徒会部」に入部するようなヤツだからな、きつと野心みたいなものがあつたヤツなんだろう。真面目に「生徒会部」に勤め上げて、「生徒会部」のトップである書記にまで登りつめたみたいだな。

でも、アイツ、書記になってから、本性を出しやがった。

気に入らない部を、会長の名の下に懲罰し始めた。活動実態のない部活動を潰したり、予算の計上が不透明な部にペナルティを課したり。やりたい放題さ。ウチの部も、“予算が不透明だ”ってイチヤモンつけられてさ、予算減らされたんだよ全く！

とにかくだ。町田、アイツは…。

敵に回しちゃいけない。僕は、心の中で井上先輩の言った言葉を反芻した。

「で、町田先輩は、どうしてこんなところに？」

恐る恐る、けれどその色悟られまいと声を張って訊く僕に、町田先輩は丸いメガネをくいつと上げてから、答えた。

「何、UFOを見にきたのさ」

「え？」

少し困惑気味の僕に、町田先輩は続ける。

「勘違いしないでくれないか。君たちのように、物見遊山でここに来たわけじゃないさ。…ハトムネ寮で、昔から、ある言い伝えがあるってね。“UFOの見える丘がある”っていう…」

「え、言い伝え？ 噂じゃなくて、ですか？」

「ああ」町田先輩は頷いた。「ハトムネ寮の三階生の間に伝わる、言い伝えだ。どうやら、この秘密を三階生たちが共有することで、三階生の間の結束を強める、という意味合いが強かったらしいけどね。…どうやら、他の階の寮生たちも、似たような秘密を抱えているらしいが」

苦々しげに、そう言う町田先輩だったが、話がそれたことに気づいたのか、話を元に戻した。

「他の階の秘密はこの際どうでもいい。とにかく、今は三階生の秘密、UFOが見える丘について、調べているわけだ」

「なんで、そんなことを？」僕は訊く。

「風紀を害するからだ」と、町田先輩。「生徒会としては、寮生の秘密なんて正直どうでもいいことだ。だが、その秘密が学校の風紀を害する恐れのあるものならば、糺す義務が生徒会には生じる」

「風紀？」「すわりの悪い言葉に、僕は少し戸惑った。

「ああ。部活動と称して、一年生の男女が深夜徘徊している。これを“風紀を乱す”と見なさずして、何が生徒会なんだ？」

た、確かに…僕は顔を見合わせて苦笑いする。

けれど、その苦笑いの輪からマサルが外れた。怪訝な顔を町田先輩に向け、口を開いた。

「先輩、まだ九時前ですよ？ それを“深夜徘徊”って表現するの

は、ちよつと言葉の意味を拡大解釈しすぎじゃないっスカ？」

普段ノホホンとして、しかもヘラヘラとしているマサルにしては、明らかに挑戦的で、攻撃的な物言いだった。有り体に言えば、ケンカ腰なのだ。

そのマサルを持て余しているのか、町田先輩はやれやれ、と言わんばかりのポーズをとって大げさなため息をつく、マサルの言い分を一蹴した。

「そもそも、君の“まだ九時前”っていう物言い自体がおかしい。高校生が暗い時間帯に徘徊するという習慣は、ロクでもない誘惑に巻き込まれる可能性を増すものだからな」

いや、確かに町田先輩の言い分は正しい。きっと、都会の座山ななかでこの時間に徘徊していると、ケンカに巻き込まれたり、妙なクスリを売りつけられたり、犯罪に巻き込まれたりする危険性は増すのだろう。でも、ここは熱血学園高校近辺、平和畑なのだ。きっと、人よりも野生動物の方が多いいし、ビル群よりも苗の方が多い。きっと、ケンカを吹っかけてきたりクスリを売りつけてくる人よりも、激烈屋の店員さんみたいな気持ちのいい人の方が多いだろう。一般論、というヤツが通用するのは、その一般論を考え出した人間が想定しているシチュエーションの中でだけなのだ。そのことを何とはなしに知っている僕は、町田先輩の言い分に苦笑いするしかなかった。

そんな、白けた空気を出したのは僕だけではなかった。マサルも弥生さんも、藤島君も完全にしらゝつとしていた。“いや、こんなところに誘惑は落ちてないだろう”ってなものだ。

月本さんに至っては、

「こんなところにある、若い人を誘惑するようなものって何なんだろうね？」

と、僕に囁きかけてきた。

“そうだな、女の子じゃない？”と言いたい僕だったけれど、その質問をぶつけてきたのが女の子の月本さんだったので、とりあ

えず、

「さあ？」

と、曖昧な受け答えをするに留まった。

とにかく。

町田先輩はバツが悪そうに咳払いをすると、続けた。

「……とにかくだ。君たちのように、UFOなんてありもしないもののために、こうやって徘徊しているのは、生徒会としては見過ごせないわけだ」

けれど、この一言が不味かったのだ。この町田先輩の一言が、ある人間の逆鱗に触れてしまった。僕ではない。意外にも、マサルでもない。月本さんでもなければ弥生さんでもない。なんと、藤島君だった。

## UFOの見える丘【16】

彼は、眉を少し上げて、口を開いた。けれど、しばらくは唇を振るわせるだけで言葉を発そうとはしなかった。最初は、言うべき言葉が見つからないのだと思った。けれど、それは違ったのだ。彼は、とめどなく出てしまいそうな言葉の奔流を、なんとか押し留めようとしていたのだ。それが証拠に。

「先輩はどういう論拠で以ってUFOをありもしないと主張するんですか先輩そもそもUFOについてどれだけのウンチクを持っている人なんですかケネス・アーノルド知ってますかMJ-12文書知ってますかミステリーサークルが実はイギリス人の悪戯だって話も知ってますかたぶん知らないでしょうああ知らないに決まってるだつて先輩どう見てもUFO好きって感じじゃないものじゃあここで質問ですそもそもまったくUFOの知識を持たないにも関わらずどうして素人の先輩がUFOの实在をうんぬんできるんでしょうか！」

一息にここまで言った藤島君もすごいけど、ここまで正確に彼の言葉を記憶している僕もすごいと思う。とにかく、彼は大体二秒くらいでこれらの言葉を言い立てたのだ。

けれど、その言葉に、町田先輩は妙な顔をしていた。

「すまないけど、何を言ってるんだ、君は」

そう言つて、藤島君の顔を蔑むように見下ろしている。何を言ってるのか判らないのはしょうがないとして、蔑むような町田先輩のポーズだけは気に食わなかった。

「だから」

小声で言葉を返そうとする藤島君に、町田先輩は言った。

「聞こえないな。言いたいことがあれば大声で言うべきだね」

その一言に押され、藤島君は押し黙ってしまった。元々藤島君は口下手だけど、ああいう風に上から押し付けるような聞き方をされ

ては、どんな人でも押し黙ってしまうだろう。そんな風に押し黙った藤島君を、町田先輩は嗤った。

「まったく、言いたいことがないんなら、最初っから……」

こう先輩が言いかけたところで、僕が口を挟もうとした。いやに偉そうな町田先輩の言葉に反感を持ったからだし、そもそも藤島君は僕の友達なのだ。

そうして、口を挟もうと息を吸った瞬間だった。

「ふざけんな！」

僕より一瞬早く、啖呵があたりに響いた。

「なんだと？」

町田先輩の視線は、その声を発した人物へと向いた。その舐めるような視線は、まるで蝶のように僕らの間を舞った。僕の顔をかすめ、藤島君の首をかすめ、月本さんの胸辺りをしばらく舞ってから、その声の主へと目を向けた。

僕も町田先輩の視線に寄り添うようにして、その声の主の方を向いた。

町田先輩は、その声の主に言った。

「今のは聞こえたよ。“ふざけんな”、か。久し振りに聞く言葉だ」「ええ。言っただけど、何か？」

なんと、町田先輩に啖呵を切ったのは弥生さんだったのだ。

腕を組んで、明らかに町田先輩の顔を睨んでいる。けれど、どこかにはかんだような顔をしていたのも印象的だった。

「で？」町田先輩は抑揚も込めずに訊いた。「何が、“ふざけんな！”なんだい？別に僕は、何もふざけたことは言っていないがな」

「判らないなら言っただけよ」弥生さんは答えた。「うちの部の藤島が、町田先輩に言っただけですけど。“UFOの知識がない先輩に、どうしてUFOの存在を否定できるのか”って」

「決まってる。UFOなんてあるはずないだろう」

「だから、うちの藤島は、“UFOなんてあるはずない”っていう、



先輩の言葉を裏づける根拠を聞いてるんですよ」

「ふん、言うまでもないだろ？」町田先輩は、人を馬鹿にするような口調で続けた。「そんなもの、常識だからに決まってるだろう？」

「お話になりませんね、先輩」弥生さんは、髪をかきあげてから馬鹿にするように言った。「常識なんていうのは、すぐに移ろうものでしょ？　だって、この前までケータイ電話なんて非常識だったじゃない。…ウチの藤島は、常識なんていうバカバカしい尺度でしか物事を見ない先輩に、怒ってるんです」

「へえ？　では、どうしろと？」

「ウチの藤島に、謝ってもらえます？　先輩には悪意はなかったのかもしれないけど」弥生さんは語気荒げに続ける。「真面目にUF〇のことを調べてる人間には失礼だと思いますよ、ああやって“ありもしない”って言っちゃうのは」

弥生さんの言葉に、町田先輩は最初たじろいた。けれど、すぐにその色を隠して居丈高に言い放った。

「むしろ、謝るのは君だろう」

「は？」

「生徒会の書記、しかも先輩である僕に、説教を垂れるとは」

なんと、町田先輩、ついには権威を持ち出したのだった。そして、権威でもってこの場を乗り切ろうとしている。でもそれは、町田先輩が論理の面で負けていることを如実に示すものでしかない。つまり、町田先輩は気づいているのだ。自分が藤島君に対して言ったことが、とんでもなく失礼で的外れだということだということに。

「センパ―イ、こんなときだけ権威主義は不味いでしょ」

マサルがこう茶々を入れたけれど、先輩は華麗にスルーして、言葉を重ねる。

「ふん、ことと次第によつては、君たちの部を潰すのだって出来るんだぞ！　特に、君の部のように深夜徘徊をしているような部など、潰すのはわけないぞ！」

ついに、町田先輩が僕らに凄んだ瞬間だった。

『あれ？ あれ何かしら』

横に居たミス・エマーデイルが、僕のＴシャツの裾を引いた。取り込み中に何だよ、とばかりに顔を向けると、彼女は裾を引いていないほうの手で、北側の空を指していた。

え、なんだよ、とばかりに、北側の空に目を向ける僕の目には、異様なものが映った。

赤い光と、白いビーム。

まるで、夕焼けのような色をした赤い光と、スポットライトのように指向性のある白い光が、北側の空に浮かんでいるのだ。

「あの、お取り込み中あれなんですが…」

僕の一言を境に、さっきまで言い争いをしていた弥生さんも町田先輩も、北側の空に目を遣った。

赤い光は、しばらく空中の一点に止まっていた。止まっていることから考えて、飛行機でないことは確かだったし、音もないから、ヘリコプターの類でもないのは瞭然だった。かといって、それがなんなのか、という質問には答えがたい。夜の宵闇のせいで、その光点がどの位置に浮かんでいるのかもわからない。ただし、位置関係から考えて、今立っている丘と、向こうの山の間の空間のどこかに存在しているのは自明だった。

「な、なんだ、あれは…」

明らかに狼狽している町田先輩。

「決まってるでしょ？」 弥生さんは狼狽する町田先輩に追い討ちをかける。「UFOに決まってるでしょ？ 空中で音もなく止まっている物体。“非常識”でも、見ちゃったらもう信じるしかないわね？」

「ぐむむ…」

町田先輩は腕を抱えて黙りこくってしまった。

そんな頃、赤い光点は行動を開始した。

赤い光点が、急に右斜め斜め下に動き出したのだ。しかも、けっ

こうなスピードで動き出したのだ。そして、途中でつこの字を書くように急旋回して今度は左斜め下に降りていく。そして、またつこの字を書くように急旋回して、右斜め下に…という一連の旋回を3回繰り返し（つまりは急旋回を6回やったわけだ）、僕らの視界からそのUFOは消えた。

ほとんど、一瞬の出来事だった。

「ななな、なんだあれ…」

マサルは、アホ面を下げてポカーンとしている。

「ええと…UFO…だよな？」

困ったような顔をして、月本さんが呟く。

「ええ、そうみたい」

弥生さんも、うんうん、と頷く。

「バ、馬鹿な…」

狼狽が、最早誰の目にも明らかな町田先輩。

あのUFOは、皆に、そんな表情を与え、去っていった。

でも、そこまで皆の顔を眺めて、そういえばまだ藤島君の顔だけは覗いていないことに気づいた。藤島君は念願叶ってUFOを目撃できたんだから笑顔なんだろう、とあたりをつけて、僕は藤島君の顔を覗きこんだ。けれど、藤島君の顔は、僕のそんな予想を裏切った。

「……………」

北側の空を眺めて、両腕を組んで唸っている。まるで、考え事をしているかのようだった。その顔には、話しかけるのを憚られる強ばりがあった。きっと、感動で胸がいっぱいで表情にまで気が回らないんだろう、と思った僕は、そっとしておくことにしたのだった。僕は、いつまでもUFOが浮かんでいた空をただただ眺めていた。

## UFOの見える丘【17】

「ただいま…」

興奮冷めやらぬまま、僕は自分の部屋まで戻ってきた。

あのUFOの赤い光。そして、文集にあった通り、つ字を夜空に書いて降りていく光。まるでサーチライトのような、白い光。

あんなものを眼の前で見せ付けられたのだ。UFOを“ありもしない”と決め付けていた町田先輩など、明らかに肩を落としてウンウン唸っていた。そして、思い出したように「先に帰る」と言い捨て、去っていった。そして僕らも、まるでサーカスを見終えた子供のように、無言でUFOの見える丘をあとにした。そして、マサルたち通学組と別れて藤島君とハトムネ荘に戻ってきたところなのだ。きっと今頃、藤島君も自分の部屋でため息をついているころだろう。僕は、電気をつけた。

さつきまで真っ暗な中にいたこともあって、その光に目が慣れるのに時間がかかった。けれど、そのうち何の変哲もない僕の部屋が、持ち主である僕を出迎えてくれた。

『ふふん、あなた、腹立たしいくらいに楽しそうね』

「そうかな？」

とんでもなく機嫌の悪そうな、ミス・エマーデイル。そして、さつき見たUFOのおかげで、いまだに心が昂ぶったままの僕の会話は、どこか噛みあいが悪かった。そして、昂ぶった気分のまま、僕は彼女に言う。

「だって、すごくないか？ UFOだよ、UFO！」

『あんな光の、どこがすごいのか』

「だって、あるはずのないものがあるなんて、すごいじゃないか」  
『残念だけど』

ミス・エマーデイルは、さっきまでの不機嫌そうな顔が嘘だったかのように、急に満面の笑顔を見せた。その笑顔は、僕の昂ぶった気分、妙な予感を持たせるのに充分だった。だって、彼女が笑う、つまりは彼女が「フィール・ファイン」なときは、僕が退屈するときに他ならないからだ。

「…な、なんだよ」

『あの光点は、あなたたちが思っているようなものじゃないわ』

「な、なんだって？」

このあと、ミス・エマーデイルが語った言葉は、僕をえらく落胆させた。でも、ミス・エマーデイルの語る言葉は、まるで彼女の声色のように格調高く、そして破綻のないものだっただけに、反論も出来なかった。それに、あの光点を未確認飛行物体と決め付けるより、はるかに説得力があった。

そう。あの光点は、UFOではなかったのだ。僕らが見知っているものが、たまたまUFOっぽく見えていただけだったのだ。

「へえ、なるほどね」

次の日の昼休み。つまり、生徒会に出すレポートの締め切り日。あの、UFOについての調査書をまとめようとしていた席上で、僕と藤島君はあの光点の正体を説明した。

昨日、ミス・エマーデイルに“種明かし”をされたあと、居ても立ってもいられなくなつて藤島君の部屋を訪ねた。藤島君はさっきまでの考え事をしているかのような顔を崩してはいなかった。その顔のまま部屋のドアを開かれたものだから驚いたけれど、その場で思い切つて藤島君に“種明かし”をした。ただし、僕が気づいた、と嘘をついて。

もしかして、UFO好きの藤島君のこと、そんなことを言ったら怒り出すんじゃないか、と心配したけれど、その予想に反して、藤島君は僕の話最後まで聞いてくれた。しかも、所々で頷きながら、アゴに手を遣っていた。そして、僕の話が終わってから、彼はこう

言った。

「…うん。筋が通ってる」

藤島君は、僕を部屋に招きいれて、卓の上で地図を広げた。UFOの見える丘と、北側の山を交互に指してウンウンと唸る。地図の上で、藤島君の指先はUFOのように彷徨ったけれど、すぐにその指は止まった。

「…実はさ、僕も、そうじゃないか、とは思っていたんだ。UFOの誤認、っていうのはよくある話だから、ね。確かにあの光点は、飛行機じゃない。でも、あれはUFOでもなさそうだ」

そして、明日の朝、UFOの見える丘に行ってみた。そして、確信を持った僕らは、皆に昨日の光点の正体を説明した。

けれど、その正体に皆拍子抜けしたらしく、やる気無さそうにへなへなとしている。特に、マサルなんかは単純だからそれが顕著だ。まるで、海に漂うワカメか、と突っ込みたいくらいにへなへなしている。ワカメか。

「でもさ」弥生さんは言った。「まだ、信じられないな」

そりゃそうだ。最初にその結論を知った僕でさえ、信じられないでも、説明する側の人間がそんなことを言ったら、場が混乱するばかりだ。なので、それらの言葉をどうにか飲み込んで、弥生さんの言葉に答える。

「でも、信憑性は高いと思うんだ。UFOを持ち出すよりは、はるかにすつきりと説明できる。ね、藤島君？」

「…うん」

藤島君の答えに、あんまり残念さは滲んでいなかった。むしろ、事実を知った人間の清々しさがあった。

「じゃあさ」月本さんが言った。「とりあえず結論は置いといて、どうしてそういう結論になったか、教えてくれない？ じゃないと、とても信じられないよ」

「…うん、そうだね」

藤島君は、班になった机の真ん中に地図を置いた。そして地図の

一点、UFOの見える丘を指しながら、藤島君は言った。

「まず、位置関係をもう一度確認しよう。」

ここに、UFOの見える丘がある。そして、その丘の北側に川があつて、谷になっている。そして、その谷を挟んで大きな山がそびえている。まず、この位置関係は理解した？」

皆が頷くと、藤島君は続ける。

「つまり昨日僕らが見たUFOは、“UFOの見える丘”から、北側の大きな山の間空間にあつた、ってことでもいいはずだよな？」

「

それはそうよね」とは、月本さん。「もし、UFOが北の大きな山より向こうに浮かんでいたら、途中で見切れちゃうもんね」

「そう。まさにそう」僕が口を挟む。「ただし、僕らは大きな勘違いをしてたんだ」

「勘違い？」

「うん。僕らはあの光点を、空に浮いているものと勝手に決め付けちゃったんだ。それが、大きな勘違いだったんだ」

「正直、僕も騙されてた」と、藤島君。「“UFOの見える丘”なんて名前がついているもんだから、自分の目線より上にあるものを、勝手に空に浮かんでものだって勘違いしてたのさ。しかも昨日は新月だったから、周りのロケーションもよく判らなかつた、っていうのも敗因だけどさ」

「おいおい」判らない、という風に、マサルが声をあげた。「言っていることが、よく判らないんだけど…」

「つまり僕らは」僕は答えた。「実際は地面を走っている光点を、自分の目線より上だ、っていう理由だけで、宙に浮いているものと早合点しちゃったのさ」

「ちよつと待てよ、俺たちより視線が上なら、その先は空に決まってる…」と、ここまで言つたマサルだったけれど、ようやく答えが出たらしく、自分の言葉を訂正した。「ああ！ そうか！ 北側には山がそびえてるんだな！」

「そう！ あの光点は、北側にある山の山腹を走っていたんだ」僕は言った。

「でもさ」月本さんは言った。「その光点が、山腹を走っている証拠はあるの？」

「あるんだ。： 昨日のUFO、どういう飛び方をしてたか覚えてる？」

「え？」月本さんは首を傾げた。「たしか、こうして…」

月本さんの指は、クネクネと指を躍らせた。その指は、ヘアピンのような急旋回を何度も繰り返し、下に降りていく。

「その旋回、何かに似てない？」

「え？」

僕の言葉に促されるように、月本さんは首をさらに傾げた。けれど、答えは見つからないらしく、僕に視線を投げかけてきた。なので、僕は言った。

「じゃあ、日光の“いろは坂”って知ってる？」

「ああ！ あの曲がりくねった道だよな？」

「そう。ああいう道を、“九十九折”<sup>くじゅうしゅうせつ</sup>って言うんだ」

「それが、どうしたの？」

怪訝な顔を見せる月本さんに、僕は言った。

「地図を見て。僕らがUFOを見た方角に、何があるか」

僕が示した地図の先には、北側の大きな山があった。そして、その山に寄り添うように、ヘアピンが幾重にも重なったかのような線が書き込まれていた。

「この線は、国道なんだ。でも、国道って言っても街灯がないから、夜になったら真っ暗になっちゃうけど。で、ここが問題なんだ。

UFOが急旋回した回数と、この九十九折のカーブの回数が、同じ六回だったんだ」

「…しかも」藤島君が、僕の説明に補足する。「今日の朝、UFOの見える丘に二人で行って見たんだけど、九十九折のロケーションと例のUFOの軌道は、ぴったり同じだった。しかも、これで10



年前の目撃証言の説明もつく。：十年前のUFOと、現在のUFOが全く同じ飛び方をするなんておかしいから」

「ふんふん、それで、例の光点は国道を沿って走っている、っていう結論なわけね」

月本さんは納得顔でうんうん頷いている。

けれど、まだ弥生さんとマサルはよく分かっていないようだった。

## UFOの見える丘【18】

「でもさあ」弥生さんは言った。「あんな猛スピードで、九十九折を降りるなんて、ありえるかなあ？　だって、遠くからでもあんなスピードだったのに」

そう。僕がミス・エマーデイルに“種明かし”をされたとき、それだけが疑問だった。ミス・エマーデイルにその疑問をぶつけてみても、『それが事実なんだから、そうとしか言いようがないわ』と一蹴されてしまった。

でも、その疑問に対しては藤島君が明快に答えを教えてくれたし、この場でも、弥生さんに説明する。

「弥生さん、走り屋って知ってる？」

「もちろん！」弥生さんは答えた。「ドリフトとかをキメて、坂を下りる人たちでしょ？　あんまり、評判よくないらしいけど…あ！」

弥生さんも合点がいったらしい。腕を組んでうんうん、と噛み締めるように頷く。

「え？　弥生までわかってるのかよ！」一人、物分りの悪いマサルが騒ぐ。そして、答えをせっつく。「どうして、あのUFOの正体が車なんだよぉ！」

そうだったのだ。例のUFOの正体は、車だったのだ。

赤い光はテールランプ。そして白いビームは、照明灯。車が国道の九十九折を下りていただけだったのだ。けれど、周りが真っ暗なせいで丘の前にそびえる山はその姿を消してしまっているし、そもそも見る側もUFOを見に来ている。つまりは、最初から偏見をもった物事を見ていた、ということだ。

しかも、あの猛スピード。普通感覚を持っている人なら、“あんな猛スピードな上に急旋回、あれは地上のものじゃありえない”と思うだろう。けれど、普通の人間は知らない。九十九折を猛スピ

ードで降りる、という、命がいくつあっても足りないようなことを地上でやっている人間が、確かにこの日本にいるという事実を。…とか偉そうに書いているけれど、実は藤島君に教えてもらうまで僕も知らなかったという事実も、アンフェアのそしりを免れるために、一応明記しておこう。

とにかく、そういう旨をマサルに逐一説明して、ようやくマサルも納得顔で頷いた。

けれど、マサルは頭をかいて、こう言った。

「なんだか、つまらない結論だったなあ」

そうなのだ。結論がつまらない。本物のUFOを見たものとはかり思っていた僕らに突きつけられた事実は、なんのことはない、つまらない日常の穏やかな一コマだったのだ。

UFOが車だ、という結論を聞いたときも、僕はそう思った。事実、ミス・エマーデイルに突っかった。

「そんなつまらない結論なら、言わないで欲しかった！」  
と。すると、彼女は小悪魔な笑顔を振りかざして、言葉を返してきた。

『ふふ、そういうものよ。物事を始める、というのはいつでも楽しいものよ。でもいつかは終わる。そして終わった瞬間に、どこかつまらない気分に襲われるものよ。だってそうじゃない。人間の本当の姿は倦怠に包まれて生きる姿に他ならないのだから。面白い、っていうのは、人間にとって不自然な状態ではないの』

「面白い、っていうのは、人間にとって不自然な状態ではない」のだろうか。僕の疑問は、確かに渦巻いた。そして、僕を少しずつ損ねていく。

そして、この瞬間まで、解決しないしこりとして残っていた。けれど、その僕のしこりを、意外な人物が粉碎した。

誰あろう、藤島君だ。

藤島君が、一番落胆しているはずだし、一番落胆しているべき人物のはずだ。だって、彼はUFOを信じているんだから。けれど、

僕の目の前の藤島君からはそういう負の感情は感じられなかった。

藤島君は、マサルに言った。

「結論は、つまらないかもね」

「結論、は？」

「結論は確かにつまらない。でも、その正体に迫るまでは面白かったんだから、それでいいんじゃないかな。だってそうじゃない。面白い、って状態は、ずっと続くものではないはずだよ。例えば、テレビゲームだってずっとやってれば飽きちゃうでしょ？」

「ま、まあ、確かにな」マサルは不承不承頷いた。

「それと同じ。結局、楽しいものなんて、鮮度物なのさ」

そうなんだ、きっと。楽しいこと、っていうのは、すぐに色あせてしまう。人の手垢がついて汚くなるうちに、楽しいことというのはどんどんつまらなく変質していく。もしかすると、未だに見たことないもの、触ったことのないものこそが、面白いものの正体なのかも知れない。

でも、未だに見たことないもの、触ったことのないものを手にするために、なにがしかの代償が必要だ。お金、時間、そして、気力。そういうものを引き換えにして、僕らは面白いものを追いかけているのかもしれない。

「じゃあ、なんだな。今回の件は」マサルは言った。「しつかり生徒会に報告しなきゃな。査定を受けなきゃ。と、いうわけで……」

マサルは、皆を見渡す。皆、少し退屈そうに微笑みながら、マサルを見返す。

「報告書、書き上げるぞ！」

そのマサルの宣言を受けて、皆、目の前のレポート用紙にUFOの見える丘の真実を書き連ねるべく、ペンを持った。

カリカリ、というレポート用紙の上でペン先が踊る音をバックに、ペンを時折回しながら、僕は思った。

でも、面白いものなんて、求めなくてもいいんじゃないか、と。面白いものを追いかける、それは一見楽しいことに思える。でも、

追いかけたあとにはこうしてつまらない現実が控えている。面白かった経過があるせいで、つまらない現在が重く押し掛かるようにさえ感じる。結局、つまらない、っていう思いが押し掛かるなら、最初から面白いものなんて求める必要なんてないんじゃないか。

『そうなの』

僕のペン回しを、まるで独楽回しをはじめて見た子供のように面白そうな顔を浮かべて見遣っていたミス・エマーデイルは、僕の心を見透かしたかのように、突然相槌を打った。というか、ミス・エマーデイルは僕の倦怠が形を持ったものなのだ。きっと、実際に僕の心を読んだんだろう。

『結局、帰結点は一緒なのよ。だったら、ずっとつまらないままの方が、余計な幻影を見ない分、幸せってものなんじゃないのかしら？』

危つく彼女の言葉に頷きそうになる僕。けれど、なんとか彼女の言葉に頷きそうになる顎を無理矢理に押さえて、皆の顔を見遣った。皆、カリカリと真面目に書いている。けれど、弥生さんが突然伸びをした。きつと、ニコチン及びタールが切れてきたんだろう。そんな弥生さんは、横にいる藤島君の肩を、ちよいちよいと叩いた。

「ねえ、ここの、“アダムスキー型UFO”って何？」

どうやら、参考資料の中に、よく判らない単語があったらしく、分厚いUFOの本の一節を指している。藤島君は、自分のレポート用紙から目を上げて、答えた。

「…ああ、皆がよく想像するような、円盤型で、下部に3つ半円形のものぐくつついてるUFOのことさ」

「ああ、そうなんだ。ありがと」

「…どういたしまして」

その二人の会話からは、昨日まで横たわっていた“反目”の色がすっかり消えうせていた。きつと、UFOの見える丘の一件で、二人の間のわだかまりが解消されたのだろう。

もしかすると、僕が気を揉む必要なんてなかったのかも知れない。

なるようになる。そういうことなのかもしれない。とにかく、よかったよかった。と、僕は二人を眺めつつ、うんうんと頷いた。

「どしたの？」

横の席の月本さんに訊かれた。

「いや、別に？ どうして？」

「なんだか、いやに嬉しそうな顔してるから」

「そう？」

その瞬間、僕ら調査部という船に追い風を与えるかのように、南風が教室に入り込んできた。弥生さんが斜め読みしていたUFO本のページをパラパラめくって、その風は僕らの頬をなでていった。これからの調査部を、そして僕らのこれからを予見させるような、穏やかな風だった。

こうして、調査部の最初の調査は終わりを告げた。

## UFOの見える丘【18】（後書き）

これにて、「UFOの見える丘」終了です。

## 427号室の怪【1】

春の天気というのは、気まぐれだ。

「はい、調査部のミーティング、始めるぞ……」

放課後の教室、班を作った机を叩いて、マサルがそう宣言した。けれど、心なしかマサルの顔色が優れない。それに、声にも力が無い。いつもなら、ノートンキなくらいにうるさいマサルだけに、皆心配そうにマサルの顔を見遣る。

今日もダボダボとしたレイヤードファッションに身を包んでいる弥生さんは、マサルに訊いた。

「どうした？ ひよつとして……生徒会の査定、通らなかった？ 町田先輩、怒ったままだった？」

この前、UFOの見える丘の件で町田先輩に啖呵を切ってしまった弥生さんのこと、やっぱり町田先輩を怒らせたままなのか、と心配しているのだ。そして、自分が啖呵を切ってしまったことで、部に迷惑をかけているんじゃないか、とも心配しているのだろう。

けれど、マサルは手を振った。

「……いや、むしろ、町田先輩、機嫌が良かったよ」

そう答えて、町田先輩にレポートを渡したときの状況を説明してくれた。

いやあ、締め切りまであと30分、つてところまで頑張つて、何とかレポートを完成させたじゃん？ それで先輩に届けに行ったんだ。生徒会室にはもう町田先輩しかいなかったから、イスに座る町田先輩にレポートを渡したんだ。そしたら、イキナリ読み始めて、『ああ、なるほど……あれ、車だったのか……』って呟いたのかと思うと、立ち上がつてこう言ったんだ。『君たちの部は、なかなか有意義なことをしているみたいだね。……査定、合格だ』つてさ。



話を聞き入る一同が、胸を撫で下ろしたのは言うまでもない。そして、その安堵感に後押しされるように、弥生さんが口を尖らせる。「別に、困ったことは何もないじゃない！　むしろ、好都合じゃないのよ」

「いや、話に続きがあつてさ」

マサルは、話を続けた。

そしたらさ、町田先輩が変な書類を出してきたんだ。『これに、押印してサインしてね』って。

「押印？　サイン？　何かの念書みたい」

月本さんが呟いた。その言葉に、マサルは頷いて続ける。最初は、部の活動に関する書類かと思ったんだ。しかも、なんだか難しい単語がずらずら並んでるから読むのが面倒でさ…。

「…なるほど、読まずにサインしちゃった、ってわけだ」

と、呆れたように訊いた藤島君の言葉に頷いて、マサルは続ける。とにかく、サインしちゃったんだ。そうしたら、町田先輩、悪魔みたいな笑みを浮かべて、いきなりこう言ったんだ。『はい、これで、このレポートの著作権は、僕に委譲されるわけだね』って。もちろん俺はそんなことしたつもりないから、当然抗議したさ。でも、町田先輩、そのサインと押印された書類を掲げて、こう切り返してしたんだ。『だってこの書類、要約すれば、“熱血学園高校調査部有志が権利を有している、UFOについてのレポートに関する権利は、全て生徒会に委譲する”って内容なんだよ？　読まなかったのかい？　ま、読まなかったとしても、そんなことは関係ないけど。だって、こうして僕の手元には君のサインと押印があるんだから』このマサルの爆弾発言は、部のミーティングに波乱を巻き起こした。

「なんてことしてくれたのよ、マサル！」

「もう！　マサル君のバカ！」

「…そんな古典的な手に引つかかるなんて」

「う、うわ、弥生！　首絞めるな！　月本さん、目潰しって地味に

痛いから止めて！ あ、藤島！ みぞおちとか人中とか、そういう急所ばかり痛めつけるのマジでやめて！」

…最後の言葉が、マサルの悲鳴であることは言うまでもない。

そんなドタバタを少し離れた安全地帯から眺める僕は、むむむ、と腕を組んで唸った。

町田先輩め、なんて人だ。高校生の分際で、悪徳商法みたいなことして！ 騙されるほうも騙されるほうだけど、騙すほうも騙すほうだよ！

さて、そんな僕の心のモノローグが流れている間に、マサルは首を絞められ目を潰されみぞおちやら人中やらを痛めつけられて、まるでボロ雑巾状態なのだった。

「はあはあ…、死ぬかと思った」

「死ねばいいのよ！」

「や、弥生い！ それは言いすぎだよぉ」

ふん！ とばかりに横を向く弥生さんにすがるマサル。けれど、弥生さんはそんなマサルを邪険に振り払う。さすがにかわいそうになつてきたので、僕が助け舟を出す。

「まあまあ、弥生さん…。マサルだって悪気があったわけじゃないんだし」

「そうだよ！ 悪気があったんじゃないんだよぉ！」

邪険に弥生さんに振り払われたマサルは、しゅたつとばかりに僕の背中に回りこんで、まるでいじめっ子の後ろで威張る狐顔の金持ちの子供のように、ぎゃーぎゃーと言っている。でも、僕はいじめっ子ではないので、マサルに背中を貸す理由はない。なので、マサルに言った。

「でもさ、マサル。押印しなくちゃならないような書類くらい、中身を読んでくれよ」

「ガビーン！」

僕に指摘されたマサルは、「いいよ！ どうせ俺は馬鹿だもん！ 」と言い放ち、おろろろ〜ん、と、ものすごくく嘘臭い泣き声を

あげながら、まるで甲子園出場を逃した野球少年のような爽やかさを醸しつつ、教室から走って出て行ってしまった。後を追おうとして立ち上がった僕だったけれど、もう既に間に合わない判断してとりあえず立ち尽くした。

「だ、大丈夫かな…」

さすがに、月本さんも立ち上がって、心配そうにマサルの開けた戸を見遣る。けれど、席に座ったままの弥生さんがその心配を一蹴する。

「平気よ！ あんなヤツ、知らない！」

「本当に？」

「は？」

「本当に平気かしら」

月本さんは、思わせぶりな笑顔を弥生さんに向けた。“嘘ついちゃダメよ”とでも言いたげな、小悪魔な笑顔を。そして、弥生さんはそんな月本さんの笑顔に押されるように、どんどん顔を曇らせていく。しかも、心なしか弥生さんの顔が赤くなっていき、そして、遂にはそわそわし始めたかと思うと、こう呟いた。

「ちよつと言い過ぎたかも。…探してくる」

弥生さんまで、イスを投げ打って外に駆け出してしまった。その弥生さんの後ろ姿を目で追いながら、月本さんは呟いた。

「いいなあ、弥生ちゃん…」

何がいいのかよく判らないので、月本さんにその旨を問いただした。月本さんは心底ありえない、という顔を隠さなかった。

「え？ 気づいてないの？」

だから何を？ と訊く僕に、月本さんは、やれやれこれだから男の子は、と言わんばかりのため息をこれ見よがしについて、呆れ声で言った。

「マサル君もだけど、随分鈍いんだね」

「いや、だから何が！？」

その質問には、さすがに月本さんは答えてくれなかった。むむむ

…僕は腕を組んで唸る。そして、ふふふ、となぜか嬉しそうに微笑む月本さんの顔を眺める。そうやって月本さんの顔を見つめてみると、月本さんってけっこう可愛いんだ、っていう事実に気づいた。ミス・エマーデイルみたいに完成された可愛さではない。むしろ、子供から大人に至るメタモルフォーゼの途中に見せる、未完成な感じが儚さを誘う、そんな可愛さだ。ううむ…かわええ。

そう、オヤジ的な発想が頭を過ぎった瞬間、背中に妙な衝撃が走った。

大体パカパカタイプのケータイ電話を開いたくらいの大ささの楕円形のもので、背中を押されるような感覚。いや、その説明ではちよつと正確ではない。正確には、楕円形のものが、まるで暴れ牛のような勢いと重さで以って、ぶつかってきたような感覚。当然、僕の背中是一般人のそれではないんだから、暴れ牛の激突を食らったらたたじや済まない。当然、僕の腰は妙な音を立てるし、体勢を大きく崩すことになった。

そして。

パターン！

その衝撃に押され、僕は地面と熱いキッスをする羽目になってしまった。げふん。

「ただだ！ 大丈夫！？」

月本さんがうつ伏せに倒れてしまった僕に手を差し伸べる。背中になんだか重いものを感じつつも、何とか僕は月本さんの手を掴もうと手を伸ばす。けれど。

ごりっ！

今度は、伸ばした手の甲にさっき感じた衝撃が走った。そして、まるで手の甲に100トンハンマーが繰り出されたような衝撃と共に手も地面に吸いつけられた。けれど、背中のととは違い、その衝撃の正体をつぶさに観察することが出来た。僕の手には衝撃を与えたのは…。足。そう、足だった。真っ白くて細い生足、そして、まるで汚れない白い靴。とにかく、とてもこの世のものとは思え

ないほどにきれいな足が、僕の手を、まるで悪役が花を踏みしめるようにして踏み締めているのだ。

『ふふん』

まるでこの世のものとは思えないほどにキレイな声が、僕の頭上で響いた。

## 427号室の怪【2】

この声は…、ってことは、間違いない。ヤツの仕業だ。

『浮気なんて、ダメじゃない』

そう、ミス・エマーデイルの仕業なのだ。きっと、背中への一撃は飛び蹴り。そして、僕の体勢を崩した上で背中に乗って、僕の手を踏みにじっているのだ。

彼女は、僕の背中の上で続ける。僕には声だけしか届かないので、彼女の格調が香る言葉は、むしろ不気味さを感じさせた。

『あなた、さつき私以外の女の子に、“かわええ”って思ったでしょ？　そういう浮気、傷つくのよね。ああ、許せないわ、本当に許せない。どうして男ってこうなのかしら』

反論しようと思った僕だけど、今ここには月本さんや藤島君がいる。特に月本さん。まさか彼女の前で、「月本さんのことを“かわええ”なんて思っていないよ！」なんて反論してみる。きっと怒られる。怒られるだけならまだしも、目潰しを極められかねない。だから、黙っているしかなかった。

けれど、彼女は僕の背中から降りた。ようやく背中が軽くなった僕は、服を叩きながら立ち上がった。

「ど、どうしたの？」

怪訝な顔で僕の顔を見る月本さん。そして、僕にまるでウェディングドレスのようなレースで縁取りされたハンカチを差し出した。

「ほら、おでこから血が出てる」

思わず自分のデコをさすろうとして、それを月本さんの、ハンカチを持っていないほうの手で遮られた。そしてハンカチを僕のデコに当てた。

ふと、ハンカチのレースに視界を奪われた僕は、そのハンカチから漂う女の子の香りにちよっと幸せな気分になるのだった。

「うーん」

ちょっと背伸びをした月本さんは（僕より少し身長が低いから、多分デコが見にくかったのだろう）、うゝむむと首を傾げた。

「血が止まらない……」

「え、マジで？」

「うん、マジで」

月本さん、真顔でしたとさ。

「ど、どうしよう！ 眉間割られたら死ぬんだよね？！」

と、「デコの血が止まらない」という状況を、敵の刀で眉間を割られる、という剣豪小説にありがちなピンチになぞらえている僕に、月本さんは叫んだ。

「シャラップ！」

なぜ英語。

でも、そんな疑問に答えてくれるはずもなく、月本さんは自分のバッグを手元に引き寄せつつも、僕のデコをハンカチ越しに押さえた。そして、ハンカチで血を押さえつつ、バッグをまさぐる。そして、何かを探し当てたのか、バッグの中に突っ込んでいた手を引き抜いた。

「じゃじゃ〜ん」

妙な効果音を口で立て、月本さんは僕の眼の前に、探していたものを見せ付けた。それは、彼女の人差し指と中指の間でヒラヒラと舞っている。これは。

「絆創膏！」

そう、何の変哲もない絆創膏だった。それを示した月本さんは、ハンカチを傷に当てて持ってて、と僕に指示をした。当然従う僕。すると彼女は、両手で薄い紙に隠された絆創膏の白いガーゼをむき出した。そして、ちょっとハンカチを外して、と指示をした。ハンカチを外した僕のデコに、その絆創膏を手早く貼った。

「はい！ これで血が止まるね」

そう言って、彼女は僕に微笑みかけた。

さて、突然ですが、ここで問題です。僕はこのあと、どうなるで

しょう？

答えは、なんと、何の脈絡もなく吹っ飛んだのだ。

いや、正確には、蹴り飛ばされたのだ。もちろん…。

『だ・か・ら。浮気は良くないわよね？』

胸にまるで隕石がぶつかったかのような衝撃を感じた瞬間、僕の目に映ったのは、空手の達人みたいに見事な前回し蹴りを僕の胸に極めてそう呟く、ミス・エマーデイルの姿だった。その一瞬あと、まるで冷め切った恋人が駅でさよならするときよりも名残を残さず、床と僕の足がさよならしてしまった。つまり、ミス・エマーデイルのキックによつて、僕の体が浮かされたわけだ。そしてその勢いのまますっ飛ばされた僕はまたもや地面に倒れる。ただし、今度床とキスする羽目になったのは、僕の後頭部だったわけだけど。

「だああああ！ 痛つてええええ！」

「だだだ、大丈夫！？」

何がなんだかわからない、といった様子で月本さんが僕に駆け寄ってくる。けれど、ミス・エマーデイルの目から異様な殺気を感じた僕は、即座に上半身を上げて両手を振った。

「だだだつだだ、大丈夫だから！ 大丈夫だから！」

「ホントに？」

実は、僕にしか見えない女の子に蹴られまくっているという事実を知らない月本さんは、それでも僕に駆け寄って後頭部をさすってくれた。ああ、月本さん、あなたのその博愛精神は本当にありがたしい嬉しい。でも、博愛精神が、今裏目に出ているところなんだよ、という僕の心の叫びは、彼女には届かなかった。なにせ…。

『だ・か・ら。浮・気・は・だ・め・で・しょ・？ 何・度・言・つた・ら・わ・か・る・の・？』

例のカサカサ走りで僕に迫ったミス・エマーデイルは、僕に対し猛ラッシュをしかけてきた。一音節ごとに言葉を区切りつつ、急所を的確に衝いてくる。げふん。ぐふん。うふん。

そのせいで、僕は悲鳴さえ出せなかった、というわけだ。



「本当に大丈夫？」

「ああ、うん、本当に大丈夫だから、頼むから僕に寄らないで」

今にして思えば、明らかに失礼なことを言ったと思う。でもこの瞬間は、ミス・エマーデイルの猛ラッシュが怖くて、そんなことを口走ってしまったのだ。けど、理解して欲しい。ミス・エマーデイルの猛ラッシュは、女の子一人の博愛精神でカバーできるほどヤワなものではない、という純然たる事実を。

でも、そんな事情を月本さんは知らない。だって、彼女にはミス・エマーデイルの姿が見えないのだから。

当然、彼女がどういう反応をするかなんて、火を見るよりも明らかだ。

「え?!」

明らかに、ショックを受けている。そりゃそうだ。一瞬、何を言われたのか分かっていないのか、まるで石像のように動きを止めたけれど、すぐにまた動きを取り戻す。思い出したかのように僕と距離を取ると、さびしそうにこう言った。

「あ、ごめん…」

なんだか、色々なごめんが混ざって混沌としているごめんだった。

「あ、いや、そういうことじゃなくて…」

じゃあどうということなんだ、と言われても困ったかもしれないけれど、僕はとりあえず取り繕おうとした。でも、月本さんは、僕の言葉を訊くまでもなくバツグを抱えると、走って教室を出て行ってしまった。

教室に残された僕は、頭を抱えた。

「…あゝあ」

イスに座る藤島君は、イスを傾けて耳につけているヘッドホンを少し外した。そして、イスをまるでのこぎりの出す音のように軋ませながら、言葉を継ぐ。

「…なんで、よりもよって月本さんにあんなことを言っちゃうかな?」  
せめて、弥生さんに言えば許されることなのに。よりによっ

て月本さんなんだもの」

「どういうことさ？」

そう訊く僕に、藤島君は意味深な笑顔を浮かべつつ呟いた。

「君って、周りのことが全然見えないんだね」

「意味が判らないんだけど」

「意味云々じゃないよ。むしろ、君の目、節穴？」

そう言つて、藤島君は外の景色を眺めた。僕も、藤島君の視線に寄り添うようにして外の景色に目を遣る。

外は、雨だった。

ここ最近の晴れの天気とは打って変わって、まるで空全体にねずみ色の絵の具をばら撒いたように、外の景色はくすんでいる。ふと耳を澄ませば、まるでドラムロールのように窓を叩く雨音や、自転車が真つ直ぐ走っているときのような水音が響いている。

校庭には、青色の傘が一輪咲いていた。その傘は、まるで僕にあてつけるように、鮮やかな青だった。

「ああ、あれ、月本さんの傘だよ」

「え？ そうなの？」

「ああ、間違いない」藤島君は言った。「だって、朝彼女に会ったとき、持っていた傘と同じだもの」

「帰っちゃったんだ」

「……さらに付言するなら」藤島君は文字通り付言した。「マサル君も弥生さんも帰っちゃったと思う。ずっと校庭を眺めてただけけど、二人の傘が、並んで外に歩いてくのを見たよ」

「ああ、そう……」

脱力を感じた僕は、ふと手を見た。そこには、ウェディングドレスみたいなハンカチがあった。ただし、そのハンカチには、赤黒い汚れが染みになっていた。言うまでもなく、僕の血だ。その赤黒い染みは、僕のことを嘲笑う口のような形をして、僕の顔に対峙していた。その染みを眺めながら、月本さんにお礼を言いそびれた、という単純な事実に至った。



## 427号室の怪【3】

外の雨音が、僕の感情の波にノイズを与えた。

「どうする？」

「…月本さんの件？ 僕の知ったことじゃないよ。っていうか、君が考えなきゃ意味がないことさ」

「いや、そうじゃなくて」僕は言った。「調査部部員の内、5人中3人が欠席している今、ミーティングを開いている必然性なんてあるかな？」

しばらく考えるポーズをとってから、藤島君は言った。

「…無いね」

「まったく！ なんてことをするんだよ、ミス・エマーデイルは！」

「ふふふ、だって、余りに小憎らしいんだもの」

ハトムネ寮の四階、僕の部屋で、ようやく僕はミス・エマーデイルに話しかける。

結局、藤島君の「…無いね」発言の後、ミーティングは自然に打ち切られた。そして、二人で時間を潰そうか、という話になったのだけれど、「…どうやって？」というあまりに純粹で、あまりに核心を突いていた藤島君の発言によって、「二人で時間を潰す」という計画そのものも立ち消えになってしまった。そして、「…各自、自由行動でいいんじゃないかな？」という藤島君の至極もつともな意見が通り、藤島君は図書室へ、そして僕はハトムネ寮にまで帰ってきた、という次第なのだ。

「って言うかさ、何で蹴るのさ？」雨に濡れてしまったジーンズを脱ぎながら、僕は抗議する。「せめて、グーにしてくれないかな？」

『途中からグーに切り替えたじゃない』

「それはそうだけど、あんなラッシュをぶち込むなんてひどい」雨に濡れたＴシャツを脱ぎながら、僕は抗弁を続ける。「急所をそんなに叩くなんて」

『だって、小憎らしいんだもの、あの子が』

「あの子？」

『ええと、“つきもっこり”さんだっけ？』

「月本さんじゃなくて？」

『そうそう、その“まりもっこり”さん』もう既に、「つきもと」の内、「も」しか名残が残っていない、ミス・エマーデイルの言い間違いなのだった。

「…わざと？ 月本さんがどうして小憎らしいのさ？ それに、どうして僕に攻撃が向かうのさ！ おかしいじゃないか！」

すると、ミス・エマーデイルはしばらく考えこんだようなポーズを取った。そしてその表情を追いやってから、僕の脇に擦り寄ってきた。ちなみにこのときの僕の格好は、パンツ一丁である。…どうでもいいけど。

ミス・エマーデイルは、僕の顔を見つめ、答えた。

『だって、あなたにしか私は干渉できないんだもの。前から言ってるでしょ？ 私はあなたの倦怠が形になったものなの。“あなたの倦怠”は、あくまであなただけのもの。私は、あなたのためにしか存在できないし、あなたにしか干渉できない。つまり私は、あなたという存在を通してからしか、この世界と繋がれないのよ』

「でも、この前手紙を書いてたじゃないか」

『あれは特別。言っただでしょ？ あなたの私物ならば、私でも干渉が出来る、ってこと。でも、実はそれすらも、あなたっていう存在があつてはじめて出来ることなのよ』

「意味が判らない」

本心だった。

すると、ミス・エマーデイルはふふふ、と笑った。そして、僕の唇に指をぴとっと付け、言った。

『意味なんて、どうでもいいでしょ？』

そういうものなのかもしれない。そして、もしかすると、意味を問う、なんてこと自体、どうでもいいものなのかも知れない。

『私はここにいます。そして、あなたがいます。そして、私はあなたのことを愛してる。あなたはただ、その当たり前を受け入れればいい。そうすれば失うものなんてない。だって私は、ずっとあなたの側にいるもの』

甘い、ミス・エマーデイルの言葉。まるで、カモミールのような爽やかな芳香。ぬるいお湯の中に囲まれているかのような、不思議な感覚。そして、ミス・エマーデイルの桃色の唇。その唇に、僕は妙な気分を感じつつあった。

なんて、おいしそうな唇だろう。その唇が桃を連想させたのは、その色のせいだけではあるまい。完璧な笑顔の先から伸びるその唇は、きつともものすごく甘いのだろう。そして僕の脳を、そして僕の心をとろかしてくれるのだろう。僕を、無限の向こうにおしやつてくれるのだろう……。その瞬間、僕を取り囲む世界が、まるで渦を巻き始めたかのように歪み出した。そしてその歪みは、まるでエフェクターをかけたエレキギターのように、しっちゃんかめっちゃんにその色を変える。その形の定まらない歪んだ世界の中で、僕と彼女だけが対面している。そして、お互いがお互いを求め合うように、顔を寄せ合った……。

と、ここまでぼうつと過ごして、ようやく、不意に正氣に戻った。

「あ！ あぶねえ！」

『ち』

案の定、ミス・エマーデイルが僕の前に唇を伸ばしていた。僕が正氣に戻ったのに気づいたのか、明らかに不機嫌そうな顔をして、僕をじっとりした目で睨みつけた。

「何が、ち、だ！ まったく、今、何をしたんだよ！ 周りの景色がぐるぐるしてたぞこのヤロウ！」

と、見たままを言った僕に、彼女は微笑みかけた。

『これが、ミス・エマーデイルの色気ってやつかしら』

色気？ あれが色気？ あれは、もう既に色気ってレベルではない。なんつつか、もしアメリカがミス・エマーデイルの存在を知ったら、その色気を利用した新型兵器を作ってしまうんではないか、と言いたくなるようなレベルだ。うゝん、大量破壊兵器クラスの色気ってというのは、一体なんなんだろうか。

あわてて立ち上がった僕は、あわててタンスの前に立ってTシャツとジーンズを取り出して、いそいそと穿いた。ジーンズを穿く最中、彼女が残念そうに、あるいは僕をからかうように言葉をかけてきた。

『服、着ちやうのね』

『当たり前だよ！』

『それは残念』

その言葉の割に、あんまり残念そうな顔をしていなかったミス・エマーデイル。むしろ、いやに嬉しそうに僕の顔を見遣るものだから思わず視線を外した僕なのだった。

そんな頃だった。

『おい、居るか！』

部屋のドアがノックすらもされず、ドンガシャーンと開かれた。きつとあの音は、ドアの前に置いていた傘が折れた音だろう。そして、このダミ声は。

僕は言葉を返した。

『ああ！ 居ますよ！ 井上先輩！』

そう、あのダミ声は、間違いなく井上先輩だ。

『おう、そうかそうか、入るぞ！』

皆まで言う前にドストスという廊下が軋む音が聞こえたことから考えて、どうやら井上先輩は僕の都合など考えてくれないようだ。普通気の利く人なら、“入っていいかい？” くらいのことは言うはずだ。

『よう！ 探したぞ！』

部屋に入ってきた井上先輩は、Ｔシャツに手を通したはいいの、首まで通らない状態の僕に声をかけてきた。けれど、僕の姿を見て、こう突っ込んできた。

「おい！ なにジャミラをやってるんだ、お前！」

…ええと、説明が必要だと思うのであえてするけど、ジャミラ、っていうのは、某特撮ヒーロー物に出てくる怪獣というか怪人である。人の形をしているのだけれど、皮膚が粘土みたいに変質していることと、肩が無く、腕の上がすぐ頭になっているという特徴的なフォルムをしている。ここで今の僕の格好を思い出して欲しい。両腕は既に袖から出しているのに、頭はまだ首の穴から出ていない。まさしく、「ジャミラ」なフォルムなのだ。でも、こうやってジャミラの格好をするのは、けっこう定番のギャグである。

「あ、着替えてたんですよ」

ポン、と頭を襟から出して僕は答えた。すると、井上先輩は怪訝そうな顔を見せた。ま、ジャミラは置いといて。

「お前、部活動はどうした？」

井上先輩から部活動なんて言葉を聞くとは思わなかったけれど、そういえばこの前井上先輩にバドミントン部に勧誘された、ということ思い出した僕は、答えた。

「え、しっかり活動してますよ、調査部っていう部活で。だから…」

「いや、知ってるよ。じゃなくって、今日は部活動がないのか、って聞いてるんだ」

井上先輩は、ちょっとまどろっこしそうにして僕の顔を睨んでいる。

え？ 勧誘の件じゃないのか。僕はちょっと疑問を持ちつつも、井上先輩の疑問に答える。

「ええとですね、今日は事情があって早めに活動を切り上げちゃったんですよ。…で、それが何か？」

「ああ、なるほどなあ…。道理で学校中探しても、見つからなかったわけだよ」



そう一人合点している井上先輩。けれど、時々僕の顔をちらちら覗きこんでいる。それに気づいて視線をやると、視線を外す。…井上先輩がこういう仕草を見せるときは、「何があったのかを聞いて欲しい」というときなのだ。無視できれば楽なことはいんだけれど、無視を決め込んだら最後、一週間くらい嫌がらせを受ける羽目になる。この前も、「先輩が気に食わない」という愚痴を切り出す前に、そういう仕草をされた。つまり、井上先輩が僕の部屋に入ってきたのは、その手の“聞くほうにとっては口クでもないこと”を僕に聞かせたい、ということなのだろう。

## 427号室の怪【4】

ため息をついた僕は、言わされている嫌な感じを引きずりつつも、それを表に出さずに聞いた。

「…な、何か、あったんですかあ…」

…なんかこう、イヤな感じを思いっきり表に出してしまった。けれど、井上先輩は、そんなことを最初から気にしている風もなく、こう切り出した。

「いや、何があった、ってわけじゃないんだ。それに、ぶっちゃけ、俺にとつてはどうでもいい話なんだけどな。でも、これは四階生の問題だからな、放って置けなくてよ。実は、お前に、頼みがある」

あの暴虐無尽な井上先輩とは思えないほど、まっすぐな視線を僕に向けて、僕に頼んでいる。それだけの事実でさえ興味をそそられた僕は話を先に促した。すると、井上先輩は続けた。

「ま、お前に頼みがある、っていうよりは、調査部に頼みがある、ってことなんだけどな。…お前、ハトムネ寮に、開かずの間があるの、知ってるか？」

「開かずの間？」

「ああ、そうだ」井上先輩は大仰に頷いた。「しかも、この四階にあるんだ」

「そ、そうなんですか？」

知らなかった。入学して一ヶ月も経つというのに、僕はまだこのハトムネ寮のことをすべて知っているわけではない、という事実に少し驚いていた。でも、あることに思い至って、井上先輩に聞いた。「え、でも四階って、寮生用の部屋しかないじゃないですか。なのはどうして？」

ハトムネ寮は、一階に用務員のための施設や、遊戯室、あるいは食堂といった公共性の高い部屋が集中している。そして、二階・三階・四階は、寮生の部屋があるだけなのだ。そして開かずの間、と

いうものが存在できるのは、“別に空けなくても困らない”部屋が空かなくなつて放置されている、というパターンだ。そして、ここが重要なだけけど、“別に空けなくても困らない”という部屋（つまり、会議室とか、準備室の類だ）は、一階に集中しているのだ。そう、つまり、ハトムネ寮に空き部屋があるとするならば、それは一階だろう。

その旨を聞くと、井上先輩はこう答えた。

「ああ、ウチの学校、数年前に完全寮制が廃止されたからだろう？ 事実、三階の一部と二階の半分は使われていないからな。しかも、現在寮生はせいぜい80人くらいだから、部屋が足りない、ってこともないしな」

ああ、なるほど。つまり、今のハトムネ寮なら、どこが開かずの間になつていたところで、誰も困りはしない、ということか。

井上先輩は続けた。

「昔は相部屋だったらしいけど、今や一人一部屋だもんなあ。先輩達によく言われたよ、“お前たちは恵まれているんだ”ってな」

しまった、話が逸れている。なので、話の舵を少し目的地に傾ける。すると、“戦艦井上号”は目的地に舳先を向け、エンジンを駆動させた。

「ああ、話が逸れたな。とにかくだ。四階に、開かずの間がある。それは理解したな？」

「ええ」

「その開かずの間、何号室だと思う？」井上先輩は、急にニヤッと微笑んだ。

「え？ 何号室、って言われても……」

「判らないやつだなあ！」と、井上先輩は僕のことを、無粋なヤツだと言わんばかりに非難した。「こうやって聞く、ってことは、番号が覚え易いとか、あるいは語呂がいいとか、そういうことに決まつてるだろ！ 察しが悪いなあ！」

「スイマセン」

「まあ、いいけどよ。で、何号室だと思う？」

「え？」戸惑いながらも、僕は思いついた数字を言った。「44号室とかですか？」

「ああ、着眼点はいいいんだけど、不正解だな。…正解は、427号室だ」

427号室。し・に・な。死にな。うゝん、確かに語呂はいい。

語呂はいいけど、縁起が悪い。

「縁起悪いだろ？」

「ええ、まあ確かに」僕は曖昧に頷いておいた。

「でもな、その縁起悪い部屋番号のおかげで、その427号室には、ある噂があるんだ」

「ある噂？」

察しの悪い僕でも、なんとなくその噂の内容くらいは察しがついた。けれど、井上先輩の会話の流れをせき止めるのもあれなので、とりあえず話を先に促しておく僕なのだった。

井上先輩は、勿体つけもせずに話を継いだ。

「427号室に、男の幽霊が出るんだとよ」

出ました、ありがちな幽霊譚。ため息が出そうになるのを必死で抑えて、話を先に促す僕。

「一応言っておくが」井上先輩は、まるで言い訳するような口調で続ける。「俺だって幽霊なんて信じちゃいないよ。でも、一年に一度くらいは幽霊を見ちゃう人がいるところを見ると、もしかして、何か変なものがあるのかもしれないけどな」

「で？」僕は聞いた。「その、幽霊が出るとかいいう開かずの間、427号室がどうしたんですか？」

「いやな」井上先輩は言った。「お前、悠木って知ってるか？」

「ああ、426号室の悠木先輩ですか？」

井上先輩は頷いた。

悠木先輩というのは、二年生の先輩で、四階の副寮長という役目を拝命している人だ。「副寮長、なんて肩書きのある人間だから人

間が出来ているに違いない」とお思いの向きもあるだろうけど、そういう人は、あることを思い出して欲しい。その副寮長の上司、四階寮長が、あの井上先輩であるという事実を。高校生の肩書きなんてヤツは信用しちゃいけない。そういうことだ。

「で、悠木先輩がどうしたんですか」

「実はな、悠木がな、見たらしいんだよ」

「何を？」僕は、井上先輩に顔を寄せた。

「決まってるだろ？ 話の先を読めよ」井上先輩も、僕に顔を寄せ、まるでエクストリーム・にらめっこのような状況を作りつつも続けた。「幽霊だよ。アイツ、幽霊を見ちまったんだとよ」

「ハア？ 悠木先輩が？ 幽霊を？」

悠木先輩の性格からして、そんなものを見てしまうような人間ではない。あくまで個人的な印象だと断ってから書くけれど、幽霊というものを見る人は、他人の話に耳を傾けられるほど優しい人、幽玄なものに目を向けることの出来るほどに静かな人だろう。だからあの悠木先輩が幽霊を見たなんてガラにもない、とってしまったのだ。

まあ、そう意外そうな声を出すなよ、とか言いつつも、意外そうな口調で井上先輩は悠木先輩から聞いた話のあらましを説明した。

「その日、悠木は部屋でテレビを見てたらしい。言うまでもないけど、もちろん夜だ。でも、確か報道ステーションを見てたときだ、って言ってたから、10時台だろうな」

「10時台？ 夜2時頃じゃなくて、ですか」

「ああ。夜の10時ころ。…その頃、西側の壁のほうから、声が漏れ出てきたんだと」

ハトムネ寮は、南向きに立っていて、東西に長い構造をしている。そして、東西に部屋が並んでいる。今僕達がいる僕の部屋が、一番東の401号室。そして、西に行くに従って、番号が大きくなっていく。と、いうことは、悠木先輩の西側の壁の向こうにあるのは、悠木先輩の部屋より番号が一つ大きい部屋だ。そして、悠木先輩の

426号室より一つ番号が大きい部屋というのは。

「言うまでもないだろ？」井上先輩は言った。「427号室から声が漏れ出てきたんだ」

「でも、427号室とは限らないでしょ？」

「どういうことだ？」

僕は、以前テレビでやっていた騒音被害の実例を引いた。

「例えば、悠木先輩の部屋と427号室の間の壁に、パイプみたいなものが埋まって、そのパイプが下の階にも続いているとするじゃないですか。そうすると例えば三階で拾った音がパイプの中で反響して、四階でその音が響いた、みたいなことがあるらしいですよ？」

「いや、それはない」井上先輩は、即座に僕の意見を封殺した。「よく考えてみる、ウチの寮の壁がどういう壁か」

そう言われた僕は、部屋の壁を見遣った。

ウチの寮の壁、本当に薄い。まるでベニヤ板かトタンか、というくらいに薄い。それこそ隣の人の好きな音楽が丸判り、といった感じなのだ。ちなみに僕の部屋の壁には、某I先輩の手によってぶち抜かれた小さな穴がある。その穴を思い出してちよつと憂鬱な気分になりつつも、先輩の問いに言葉を返す。

「……ああ、こんな薄い壁じゃあ、パイプなんて入り込む隙がないですよね」

「それに、お前の部屋の壁をブチ破った俺だから知ってるが、あの壁には、音を反響させるような空間もまるでない。だから、悠木が“西の部屋から聞こえた”って言うからには、それは事実なんだろ」「説得力あります」ちよつと皮肉をこめた僕であった。

「で、だ」僕の皮肉に気づかなかったのか、井上先輩は続けた。「悠木は聞いたんだ。誰もいないはずの427号室から、“はははは”ってという笑い声をさ。悠木が言うには、イヤミのない、まるで子供みたいな声だったそうだ。だから、最初悠木は、隣の部屋のヤツがテレビでも見てるんだと思っただけ。多分、427号室が開

かずの間なことを忘れてたんだろうな。“ノッキング”をしたらしい”

“ノッキング”というのは、我らがハトムネ寮に伝わる、寮生たちのコミュニケーション手段である。やり方は至極簡単。ドアをノックする要領で、壁を叩くのだ。一回叩いたときは“部屋から顔を出せ”、二回叩いたときは“うるさいから静かにしろ”、三回叩いたときには“俺の部屋に來い”などと決まっているらしいのだけれど、実のところ僕は“ノッキング”をしたことがない。何せ、僕の隣人は、あの井上先輩なのだから。井上先輩にノッキングなんてしてご覧？ きつと一回叩こうが二回叩こうが三回叩こうが、きつと半殺しにされる。特に、二回ノッキングをしてやりたいことが非常に多いのだけれど、半殺しが怖いので、うるさい隣人に辟易しつついつも僕は布団をかぶっている。

## 427号室の怪【5】

そんな僕の苦勞も知る由無く、井上先輩は続ける。

「そしたらさ、返って来たらしいんだよ、ノッキングが。しかも、二回」

ノッキングの返事というのもノッキングで行なわれる。一回叩けばイエス、二回叩けばノー。つまり、悠木先輩にノッキングを返した人物は、悠木先輩のノッキングに拒絶の意思を示したわけだ。井上先輩は悠木先輩がどのノッキングをしたのかは明言していないけれど、“部屋から顔を出せ”にしろ“静かにしろ”にしろ“俺の部屋に來い”にしろ、それを拒絶されたいいい気分ではないだろう。

「もちろん、悠木は怒った。だから、呼び出そうとしたらしい。ノッキングを三回やった。それでも、返ってくるのはノックが二回。さすがに悠木も腹に据えかねたらしくてな、ついには恫喝のつもりで、一発ボン、って壁を殴った。するとな、向こうが、ノッキングをしてきた。一回だ」

一回ということとは、“顔を出せ”ってことか。

「悠木は思わずドアを開けたらしい。もちろん、“顔を出せ”って向こうが言ってきたんだからな。するとだ。向こうも、扉を開いたらしい」

「え？ ちょっと待ってくださいよ？ だって、“向こう”って……」  
「そうだ」苦々しげに井上先輩は言った。「“向こう”っていうのは、427号室のことだ。開かずの間なんだぞ？ でも、悠木はそんなことをすっかり忘れてたもんだから、疑問には思わなかったらしい。……でだ。ここからがハイライトだ」

「え？ どういうことですか？」

「悠木が言うには、427号室の扉から人が頭を出していた。見たことがないヤツだったらしい。ボサボサ髪で目が髪の毛で隠されていて、その風体はよく判らなかつたらしいがな。で、悠木がソイツ



に声をかけると、ははは、っていう笑い声を残して、また扉を閉めちまったらいいんだ。んで、悠木がその部屋の扉の前に立って、ノックしたときに、ようやく自分が叩こうとしている扉が開かずの間、427号室の扉だつてことに気づいたらしい」

「け、けっこう怖い話じゃないですか」

マジでビビッてしまった僕。けれど、井上先輩は僕のように動揺はしていないようだった。むしろ、面倒そうにゴリラみたいな腕を抱えていたのが印象的だった。

「ふん、幽霊なんかいねえよ。むしろ寮長の身としては、別の可能性を考えてる」

「別の、可能性？」

「ああ。実はあの部屋が開かずの間じゃない、っていう可能性だ。誰かが427号室の鍵を盗んで、開かずの間になった427号室を自分の物にしている、って可能性だ」

そこで、と井上先輩は前置きして、続けた。

「お前ら調査部で、427号室のことを調べてくれよ。んで、その結果を俺に報告しろ」

まさかの命令口調。

「あのう、井上先輩？ 僕ら調査部って…」

調査することを部の皆の合議で決めるんで、安請け合いを出来ないし、調査が出来ないかもしれないんですけど！ と反論しようとした瞬間には、井上先輩は既に姿を消していた。言うだけ言って、帰ったのだ。あのゴリラ、もとい井上先輩は。

困ったことになった。この件、引き受けないことにはきっと殺される。かといって、部の皆を納得させてこの件の調査に着手することが出来るのだろうか。むむむ…。思わずため息をついてしまった。『ふふん、つまらないことになりそうね』

さっきまで、つまらなそうに僕と井上先輩の会話を聞いていた（ついでに言えば、時折僕の視線に入っては、真顔でカトちゃんペをかましてきた）ミス・エマーデイルが言った。僕は座椅子に腰掛け

てから、彼女に言葉を返す。

「…ん、今回はかりは否定しない」

『あらそう？ 嬉しいわ』

「いや、でも、キスはしないから」

『それは残念』

ミス・エマーデイルは僕の横にチョコンと座った。そして、僕の顔を、世界の全ての色を混ぜ込んだかのように真っ黒な瞳で見つめる。その奥行きのある瞳の一番奥を覗きたい、その奥には何があるんだろう、という妖しい衝動に駆られそうになった僕だけれど、何とかその妄想を振り払う。

「…負けないぞ、僕は」

『負けるのよ、あなたは』

ミス・エマーデイルは、ふふふ、と不敵に、そして可愛らしく完璧な笑顔で微笑んだ。

窓の外は、ミス・エマーデイルの瞳の色をしていた。そして、この世界の全てを腐らせてしまいそうな雨が、まるで世界平和を歌うストリートミュージシャンのように、どこか気高く歌いながら降り注いでいた。

僕のメールボックスには、新着メールが一件も無かった。

「…と、いうわけなんだけど」

次の日、つまらない授業を必死に耐えた後に広がるオアシス、放課後。調査部のミーティング。そこで、僕は昨日井上先輩に聞いた話を披露した。すると、マサルと弥生さんは興味を持ってくれたようで、僕の話真剣に聞き入っていたけれど、藤島君だけはちよつと怪訝そうな顔をしながら窓の外の曇天を見遣っていた。

「つまり、427号室の幽霊騒動を調査したい、ってことかな？」

弥生さんの言葉に、僕は頷いた。

「うん、そう」

「でもさ」マサルが僕らの会話に割って入った。「その、悠木先輩だっけか？　その寮生

が皆を担いでる、っていう可能性はないのか？　あるいは、井上先輩がお前を担いでる可能性は？」

「ないと思う」僕は首を横に振った。

「なんで？」

僕は、悠木先輩と井上先輩の顔を思い浮かべながら、二人が決して僕を担ぐような人間でないことを再確認する。そして、再確認した二人の性格を、マサルに説明した。

「井上先輩は、その手の冗談が嫌いな人なんだ。それに、馬鹿にされたりとか担がれたりとかが嫌いな人なんだ。暴虐な人だけど、人を担ぐような人ではない、ってことさ。あと、悠木先輩って人は、井上先輩の腰ぎんちゃくみたいな人だから、井上先輩の意にそぐわないようなことはしない。絶対に」

「ってことは」マサルは言った。「その悠木先輩とやると、井上先輩がお前を担いでる、っていう可能性も自然に消滅するな。今のお前の話だと、悠木先輩は井上先輩の言いなりなんだろ？」

「うん。悠木先輩は、井上先輩の嫌がることは絶対にしない。それに井上先輩は人を担ぐようなことはしない。つまり、誰かが僕を担いでる、っていう可能性は見事に消滅」

「なら、調べる価値がありそうだな」マサルは頷いた。

「うん、私も同意」弥生さんも頷いた。

けれど、藤島君だけは窓の外の曇天を見遣ったまま、ずっと難しい顔をしている。たしか、藤島君は幽霊を信じないとか宣言していたのを思い出した僕は、藤島君が今回の件に乗り気じゃないのかなと心配した。だから、彼に訊いた。

「あのさ、藤島君？　今回の調査、どうかな？」

まるで、腫れ物に触るかのような僕の口調。けれど、意外にもこともなげに藤島君は言葉を返してきた。

「…あ、ああ。良いんじゃないかな？　幽霊は信じるか否かの存在

だけど、その背後には何らかの現象があるかもしれないし。この前の、UFO騒動みたいにさ」

まるで、話を半分聞き流してました、という感じの、藤島君の生返事。その生返事の原因を聞くと、彼は頭をかいて、理由を教えてください。

「…実はさ、今日、洗濯物を干してきちゃって。朝は晴れてたから、どうにかなるかな、とは思ってたんだけど。でも、この天気だと雨にやられちゃうかも」

「なあんだ」

藤島君はどうやら、外の天気に関心をしかめていたらしい。

確かに、外の天気は今にも雨が降りそうな空模様だ。朝は爽やかに晴れていたのに、昼頃から不穏な雲が立ち込め始め、放課後の時間帯には雨が降るか降らないかギリギリ臨界点、と表現するのが適当な空模様になっている。

「んじゃあ、決をとるぞ！」マサルが宣言した。「次の調査、ハトムネ寮に出る幽霊」の調査でいいと思う人！ 挙手して！」

藤島君、弥生さん、僕。三人が挙手した。

それを見届けると、マサルは言った。「よし！ じゃあ、満場一致で調査内容、決定！」

「…そういえば、さ」

不意に、藤島君が口を開いた。

「ん？」

マサルが藤島君の顔を覗きこむ。藤島君はメガネを上げて、続けた。

「…“満場一致”って言ったけど、今日一人休んでるじゃないか」

「ああ、そういえば」

マサルは、空席の机を見遣った。僕らも、思わずその空席を見遣る。

「そつえば、月本、どうしたんだろうな？」

マサルの言葉に、弥生さんがケータイ（ケータイを持ってはいけ

ないのはあくまで寮生だけなので、弥生さんのような“通学組”は  
こうしてケータイを持っている）を開きつつ、答えた。

## 427号室の怪【6】

「今日の朝、メールがあつたのよね。ええと…《風邪を引いたから休む》ってさ」

ケータイを開いたのは、月本さんから届いたメールを読むためだったのだろう。用が無くなってパタンと閉じようとする弥生さんを、慌てて藤島君が止めた。

「…待った！ 月本さんだってウチの部員なんだから、やっぱり彼女の意見を訊いてみないとまずいんじゃないかな？メールでもいいから意見を訊くべきじゃないかな」

その意見を、マサルが一蹴した。

「いや、今更月本が反対したって3対1の多数決で結局その調査をやることになるんだから、結果は一緒じゃないのか？」

けれど、そのマサルの言葉を、弥生さんが封殺する。

「そういう問題でもないでしょ！ 藤島の意見、採用ね」

弥生さんはそう言うのと、ものすごい勢いでケータイのボタンを打ち始めた。隣でその様子を見るに、ブラインドタッチをしているようだ。ケータイの画面には、ものすごい速さで漢字や平仮名、カタカナや絵文字、アスキーアートが埋まっていた。

「さ、こんな内容でどう？」

弥生さんが提示した画面には、月本さんの風邪の具合を心配する文面から始まり、僕が提案した調査についての概要、そしてその調査に賛成するか反対するか意見を表明して欲しい、でも急がないから、という旨で締められた文面が広がっていた。所々よく意味の判らない単語や、どういう文脈なのかわからないけれどハートの絵文字、そして妙なアルファベットの羅列がちりばめられていた。

「じゃあいいわね、送るわよ」

いいよ、という前に、既に送信ボタンを押している弥生さん。彼女も、けっこうせっかちなのだ。

「さて。“急がなくていい”って書いたし、それに多分今頃寝てるだろうから返事遅れると思うわ」彼女はケータイを折って、そのままバッグに放り込んだ。「でさ、その幽霊、特徴はどういう感じなの？」

「ああ」

突然話を振られた僕は、少し言いよどんでしまった。その合間に、マサルが軽口を叩く。

「え？ 女の子だろ？ 幽霊といえば、髪の毛長い女の子っていうのは基本だろ？」

「いや」

僕は即座に否定した。ちえ、残念な、とても言いたげなマサルにグーを繰り出そうとしている弥生さんを手で制しつつ、僕は続ける。

「男の子だろう、って。ボサボサ髪で目が髪に隠れてるらしいけど」

「でも」藤島君が不思議そうな声をあげた。「427号室が開かずの間だなんて、初めて聞いたな」

「それは僕も……」

と、僕が相槌を打ちかけた頃、突然甲高い音が鳴り響いた。

ピロピロピロ！ピロピロピロ！

電子音。不快ながらも、じめじめした空気すらもつんざく高音。

これは……

「あ、私のケータイだ」

思い出したかのように、弥生さんはバッグをまさぐる。けれど、彼女がまさぐっている間に、その電子音は止まってしまった。けれど、彼女はバッグをこれでもかこれでもかとまさぐって、ようやくケータイを探り当てた。ケータイを器用に片手で開き、そしてボタンを幾つか押して、画面を食い入るように見ている。

「……月本さんからでしょ？ なんだって？」

藤島君の言葉に、弥生さんは答えた。

「うん、そう。サキから。でも……」

「でも？」

マサルの問いに、弥生さんは続けた。

「様子がおかしいわね」

そう言って、画面を皆に見せた。

《 あ、元気だよ。

調査部の件、了解しました。調査の件は、別にどうでもいいです。お任せします。

それじゃあね。》

こんな内容のメールだった。

「様子、おかしいかな？」

画面に視線を落としてつつも、僕は訊いた。その意見に、藤島君もマサルも同意した。けれど、そんな僕らのことを非難するかのよう  
に首を振った。

「おかしいわよ」

弥生さんは、画面を指差しつつ続けた。

「まず、あの子は絵文字を沢山使う！なのに、このメールには一切そういうのがないでしょ？」

確かに。このメールには、絵文字どころか、顔文字さえ使われていない。僕はあまりケータイを使ったことはないにせよ、コンピュータでメールくらいは打つから、月本さんの書いたメールには装飾性がまるでない、言い方を替えれば事務的な形式であることくらいはわかる。

「それに、別れの挨拶のテンションが低い！」弥生さんは続けた。

「“それじゃあね”一言で済ますなんて、基本的にありえない！」  
思わず僕は首を傾げた。“それじゃあね”なんて、ベストな別れの挨拶だろう。これ以上のものを求めるというのはちょっと酷というものだろう。それとも、一般的な高校生というものは、これ以上のコミュニケーションを身につけているというのか。思わず戦慄する僕なのだった。



「でもね、正直、そんなことは瑣末なことよ」と、弥生さん。「もつと、おかしいことがある」

「な、なに？」

僕の問いに、弥生さんは答えた。

「サキが、“どうでもいい”なんて言葉を言う、いや、書くこと自体がおかしいわ」

「どうということさ」

「だってあの子、優しい子だもん。それに、人の気持ち分かる子だから、“どうでもいい”っていう言葉が人を傷つける、ってこと自体知ってるはずよ」

確かにそうだ。どうでもいい、という言葉には、とんでもない棘がある。どうでもいい、というのは、無関心、という謂いだ。場合によっては、「嫌い」よりもはるかに棘のある言葉に化けかねない。そう考え込む僕の顔を覗きこんだ弥生さんは、しまった、という顔を浮かべたかと思うと、僕に頭を下げた。

「ごめん、あんたの前で言うべきじゃなかった」

「いや、別にいいよ」

僕は慌てて手を振った。そう、月本さんが「どうでもいい」と宣言したのは、僕が持ってきた調査についてなのだ。つまり月本さんの紡いだ「どうでもいい」という言葉に潜む棘は、僕をターゲットにしているのだ。

「考えすぎだよ」マサルは笑った。いつも通り、ノーテンキな笑い方だった。「月本は風邪を引いてる。で、熱に浮かされてそこまで考えが回らなくて、気心知れた友達から来たメールに、つつけんな返事を返しちゃった。そういうことでいいんじゃないのか？」

「まあ、そう言われればそうなんだけど」

弥生さんが首を傾げる横で、マサルは続ける。

「じゃあ、そんな悪い方向に物事を考えないほうがいいんじゃないか？ 何事もレトリックビー、インシアラーにケセラセラでしょ！」

確かに、マサルの言う言葉は正しい。でも、それらの言葉は場面を選ぶ。レットイットビーの精神で駆け抜けていいのも、インシアラーって叫んでいいのも、ケセラセラって誤魔化していいのも、とき場合のはずだ。詰まる話、今がその場面なのか、僕は判らないでいたわけだ。と、いうわけで、レットイットビーのインシアラーのケセラセラな気分にはとてもなれないのであった。

けれど、こうして調査部の第二回調査の内容が決まった。

カタカタカタ…（タイプライターの音）。キラリーン！

「ハトムネ寮の四階にいるという、幽霊の正体を調査せよ！」

チャラチャラチャラチャラツチャツチャツチャ

…どうでもいいけど、この演出が、某お猿さん顔の大泥棒漫画が元ネタであることは、言うまでもない。

とは言うものの、調査方法について、まるで決まらなかった。

と、いうのも、僕らはそもそも調査部を名乗ってはいるものの、ぶっちゃけ調査に関してズブの素人だ。唯一UFO絡みでそういうノウハウを持っていると目された藤島君も、「…いや、幽霊の調査なんてやったことないし、何度も言うけど幽霊っていうのは信じるか否かの代物だからなあ…」と、明らかに及び腰なのであった。

どうやって調べるかについて話し合いが持たれたのだけれど、皆「さあ？」と首を傾げるしかなかったわけだ。

そうして皆の間に妙な空気が流れ始めたころ、マサルがすつくと立ち上がった。

お、さすが調査部部长。さすがにここで何かビシッと決めてくれるのか?! 部員達のそういう期待を一身に浴びながら、調査部部长はこう言い放った。

「ええい！ 調査法なんてどうでもいい！ ケセラセラのレットイットビーだコンチクショウ！」

…なんと、調査法の議論を丸投げしてしまったのだ。部長なのに、けれど、これ以上の名案が浮かばずもなく、調査法は「各自が

思いついた方法で、為すがままに調査せよ！」「という、マサルの言葉を借りるなら「ケセラセラのレットイットビー」な方法に落ち着いた。

## 427号室の怪【7】

そして僕は思いついたがままの行動を取っている。

ここは、ハトムネ寮。

そして、その管理人室前。

ハトムネ寮のことを一番知っているのはハトムネ寮の関係者だ。それにその関係者の中で、一番ハトムネ寮のことを知っているのは管理人さんだろう。そう思い至った僕は、ハトムネ寮に帰り、寮の管理人、藤原のじいさんに話を訊こうとここまでやってきたのだ。けれど…、なんて聞けばいいんだろう？

ここまでケセラセラな勢いで来てしまったので、まるで能書きを考えていなかった僕は、用務員室前で固まってしまった。むむむ。用務員室、とプレートに書かれた扉の前でウムムム、と唸る僕。

そんな僕を、後ろに控えるミス・エマーデイルは笑った。

『そんなところで唸ってても、何も変わらないわ。だったら部屋でのんびり過ごしましょうよ。わ・た・し・と』

とりあえず、彼女の言葉にスルーを決め込みながら唸る僕なのだった。

そんなこんな唸っているうち、突然眼の前の扉に変化が起こった。突然、扉が僕に押し掛かるようにして迫ってきたのだ。

え！ 眼の前に扉がそびえる僕は、ただただ大きくなっていく扉を眺めていた。

と…。

コッソ。

地味な音を立てて、扉は止まった。いや、正確には、扉は僕のデコにぶつかって止まったのだ。けれど、僕のデコには昨日怪我した切り傷がある。しかも間が悪いことに、扉はその切り傷の上にスマッシュヒットしてしまった。

「いってええええええ！」

思わずうずくまる僕。デコがジンジン痛む。ああもうチクシヨウ。  
「ん？ あれ？ どうしたんだい？」

僕の頭上から、間延びした声が響いた。痛みをこらえながら頭上を見ると、そこには扉を少し開けた隙間からちょこんと顔を出す、管理人・藤原のじいさんの姿があった。

そのじいさんの顔を見た瞬間、ようやくどうして僕がこんな痛い思いをしたのかがわかった。

管理人室の扉は蝶番式の扉で、廊下側に開くようになっていた。そして、その扉には特に小窓などはない。だから、部屋側からも廊下側からも向こう側の様子がわからない。だから、部屋側にいた藤原のじいさんは何の疑問も差し挟まず、扉を開け放ったわけだ。けれど、実はその扉を挟んだ向こうには、ウムムム唸る僕がいたというわけなのだ。

間が悪い。まさに間が悪い。

藤原のじいさんもようやく事情が飲み込めたらしく、うずくまる僕に手を差し伸べた。

「ただだ、大丈夫かね？ ああ！ 怪我してる！」

「え！？ 本当ですか？」

「…ああ、デコに絆創膏が…」

「ああ、それは今の怪我じゃないです」僕は首を振った。

「なあんだ」

「なんだじゃないですよ！ ああ、痛い！」

「ああ、スマンスマン、とにかく、こんなところでうずくまっているのも何だから」

藤原のじいさんは、扉を開いて僕を招じ入れた。もちろん、僕はそれに従った。

管理人室の中は、意外なほどがらんとしていた。パソコンが一台置かれているネズミ色の机が一つ部屋の奥、つまりは窓側に置かれて、そして手前に軽い応接間のように背の低い卓と安そうなソファ―が置かれている。本棚とか書類の類は一切見られない。調度品の

レベルを別にすれば、まるで校長室のような趣だ。

「まあ、座りなさいな」

藤原のじいさんは、背の低いソファを指した。言われたまま、僕はソファに腰をかけた。外見のボロさとは裏腹に、バネの利いたすわり心地のいいソファだった。そして、僕の横に、ミス・エマーデイルが座った。けれど、ソファのバネが軋む音は一切聞こえなかった。すっかり忘れていたけれど、彼女というのは僕にしか見えない女の子なんだな、というのを改めて認識した。

「さて、よつこらしよ」

藤原のじいさんは、ねずみ色の机から救急箱を取り出すと、卓を挟んだソファに腰をかけた。緑色の十字がいやに目立つ救急箱を卓の上に置くと、突然じいさんは口を開いた。

「で？ 何の用だい？」

「え？ 判るんですか？」

「そりやそうだよ」じいさんは笑った。「君のようにああやって扉にぶつかってしまうのは、扉の前で入ろうか入るまいか逡巡しているからだろうから」

「シユンジユン？」

「ぐずぐずとして、ためらうことだよ。字は辞書で調べてご覧。…それに、生徒会の町田君から君の話聞いたからねえ」

「え、町田先輩から？」

生徒会書記の町田先輩は、ハトムネ寮の三階寮長を勤めている。きつと、四階寮長の井上先輩と馬が合わないのは、そういう所も影響しているのだろう。

でも、町田先輩が僕のことを喋るなんて、少し意外だった。

「いやあ、あの町田君がね、褒めるんだよ」じいさんは嬉しそうに語る。「“最近出来た部で「調査部」っていう部があるんだけどなかなか見所のある連中が揃っている。調査部の奴ら、僕すら騙されたUFOの正体を見抜いたんだ”ってね。それで、寮生の君と、藤島君の名前を出したもんだから」

そうか、町田先輩は生徒会だから、調査部の部員名簿や寮の名簿を閲覧できる立場にある。だから、僕の名前を知っているのか。

「そういえば、この前、確か君が知りたいことがある、って卒業文集をひっくり返していただろう？　だから、今回も聞きたいことがあるのかな、と思ってるねえ」

「図星です。実は、調査部として聞きたいことが…」

「へえ、なんだい？」

とりあえず、本題から入らずに、搦め手から攻めることにした。

「ハトムネ寮の開かずの間、ってご存知ですか？」

「開かずの間？」その言葉を反芻したじいさんは、がっはっは、と笑った。「そんなもの、沢山あるよ。使わないから、って鍵をかけたままの部屋も多いんだよ？　例えば、この前君が調べ物に入った、資料室だってほとんど開かずの間みたいなものさ」

「あ、そうだったんですか？」

その割に、資料室はそこまで汚くはなかったな、と僕は資料室の中のことを思い出していた。

「で？」じいさんは悪戯っぽい微笑の中に、鋭い視線を浮かべて訊いてきた。「君は、どの開かずの間の話を聞きたいのかな？」

おっと、じいさんに、完璧に見透かされている。むむむ…。

「ほれ？　どうした、そんな難しい顔して？」

「実は…、427号室のことについて…」

「427号室」

じいさんは、そう呟いた。まるで、何かを思案しているかのような顔を浮かべながら、僕の顔を覗きこんでいる。その思案顔には、どこか妙な強ばりがあった。その顔に妙なものを感じた僕は、次なる言葉を継ぐことが出来なかった。

「すまないが」長い沈黙の末、じいさんは口を開いた。「427号室については何も知らない。そういえば、427号室って開かずの間だったかな？　よく事情を知らんものでなあ」

「え？　知らないんですか？」

「ああ、ワシ、五年前からここで働いているものでな。それより前のことは判らないんだよなあ」

「え、そうだったんですか？　じゃあ、寮母さんに聞こうかな」

そう、呟いた瞬間だった。じいさんが、僕の顔に顔を近づけてきた。そのあまりの近さに思わず仰け反ったのだけれど、背もたれのせいで逃げ切れず、結局じいさんと顔を突き合わせる羽目になった。

「な、なんですか」

思わず聞く僕に、じいさんは言葉を返した。

「…君たち調査部が、どういうことを調べようとしているのかは知らない。でも、この件からは手を引いてくれないかねえ？」

僕が言葉を返せなかったのを受け答えと見たのか、じいさんは言葉を重ねた。

「ワシは427号室について知らない。でもな、管理人として知っていることがある。それが何か、わかるかい？　…427号室の件は誰もが触れてはいけない、っていう不文律だ。実は五年前、前の管理人から言われたんだよ。“427号室の件、知ってるか”って。ワシは首を横に振った。すると前の管理人さん、“ならいい”ってそれっきり。ワシは知らないが、きっと何か触れちゃいけないことがあるんだろうねえ」

じいさんは、まるで僕を諭すように続ける。

「何度も言うが、ワシは427号室の事については何も知らない。でも、触れちゃいけないことなんだ、ってことくらいは判る。それでな、そういう“触れちゃいけないこと”っていうのは、大抵は誰かの思いを守るためのものなんだ」



## 427号室の怪【8】

「誰かの思いを、守る？」

「うん、そう」じいさんは頷いた。「君たちはまだ子供だから判らないだろうがね、世の中っていうのは無慈悲なものさ。決して美しいもの、きれいなもの、楽しいことだけが溢れているわけじゃないでも、かといってそこまで絶望的なものでもない。醜いもの、汚いもの、つまらないことだけが溢れているわけじゃない。世の中っていうのは、割と平均的なものなのさ」

おや？ 僕は心の中で首を傾げた。

いや、僕はてつきり「無慈悲なものだ」で話を切るとばかり思ったのだ。で、悪いことばかりを子供に言い立てるものとはかり。でも、じいさんはそういうアンフェアな真似をしなかった。

だからこそ、次の言葉が気になった。

じいさんは続ける。

「けれど、世の中には“平均的”じゃない出来事がある。ものすごく美しいもの。ものすごくきれいなもの、ものすごく楽しいもの。逆に、ものすごく醜いもの、ものすごく汚いもの、ものすごくつまらないもの。少しだけれど、確かに存在するんだ。…そして人は、それを隠す」

「なんで、ですか？ 無慈悲なものを隠すのは判りますけど、どうして美しいものを隠してしまうんですか？」

僕の質問は、管理人室の空気に溶けた。しばらくその余韻を楽しむ風に目を瞑って微笑んでいたじいさんだったけれど、思い出したかのように口を開いた。

「どちらも、目の毒なのさ」

「え？」

「とてつもなく悪いことっていうのは、人の心を苦しめる」じいさんは、まるで世界の秘密を語る仙人のように、言葉を選ぶ。「けれ

ど、とてつもなく良いこともまた、人の心を病ませる。何故なら、良い事にせよ悪い事にせよ、どちらもパワーが大きすぎるからだ。人が受け止めるには、力が強すぎるんだね」

「意味が、判らないんですけど」

「判らんでいいよ」じいさんは言った。「大人が子供に語る言葉は、常にわかりにくいものさ」

わざと判りにくく喋っているんだ、と言いたげなじいさんの言葉に、僕は少し辟易したけれど、話を先に促した。

「とにかくだ」じいさんはこう締めくくった。「隠されたもの、っていうのには、隠されるだけの理由がある。そして何かを隠す、っていう行動は、常に善意が後ろに控えてるものさ」

それからもう427号室の話題は切り出せなかった。

確か、どうでもいい茶飲み話と、どうでもいい雑談をだらだらと繰り返し、そして何も得ることがないことに気づいた僕が胡乱に立ち上がった。おや、もう行くのかね？ というじいさんの言葉にもそこそこの言葉を返し、部屋を辞した。

けれど、廊下を歩く僕は納得していなかった。

「絶対に何か知ってるな！ あのじいさん！」

僕の横で、ミス・エマーデイルはくすくす笑っていた。

だって、おかしい。何も知らない人間が、あんな思わせぶりなことは言えない。それに、本当に何も知らない人間は、ああして知らないという事実を殊更に主張しないものだ。はつきり言えば、じいさんの受け答えは、どこか白々しいのだ。むむむ、あのじい。

すると、ミス・エマーデイルがまるで僕の事をなだめるかのように言葉を継ぐ。

『でも、あのおじいさんの言うことは、正論だわ』

「どこが」

『全部よ』ミス・エマーデイルは僕の横を歩きつつ続ける。『けれど、一つだけ事実誤認しているけれど。それだけが残念と言えば残念』

どういうこと？ と訊くと、彼女は口角を上げながら言った。

『あのおじいさんは、“何かを隠すのは、常に善意によるもの”って言ってたけれど、それは間違いよ』

「悪意で人は物を隠す、って言いたいの？」

『違うわ』ミス・エマーデイルはかぶりを振った。

「じゃあ、どう間違いなんだよ」

その僕の質問に、ミス・エマーデイルは顎にピトンと人差し指を添えるポーズを見せた。まるで、数学の証明問題に挑む高校生のような顔だった。そして、考えがまとまったのか例の表情を追いやって、宙に漂わせていた視線を僕に向けた。

『この世界には、善意も悪意もありはしないわ。あるのは常に事実だけ。事実の背後には何も無い。そういうことよ』  
「意味が」

判らない、と言おうとしたのだけれど、ミス・エマーデイルが僕の唇に人差し指をくつつけたせいで、次なる言葉を発するタイミングを外してしまった。ふと、子供の頃よく言われた「お口にチャック」を思い出してしまったのだ。

『善意や悪意というのは、あくまで受け手がおもんばかり物。たとえば、送り手が何がしかの感情を込めたとしても、受け手には関係がないものよ』

そう言って、ミス・エマーデイルは笑った。

今日も、僕のメールボックスには新着メールが無かった。

メールボックスに溢れている未開封のメールを開いてみようか、とも思ってたけれど、どうせバカバカしい言い訳しか書かれていないだろう。そう思い至って、結局開封しないままインターネットの接続を切った。パソコンの電源を落とした瞬間、遊戯室の闇が、一層深くなった。

次の日、タバコが恋しくなった僕は休み時間を見計らって学校の

屋上に向かった。

最近雨続きだったから、生徒達の喫煙室である屋上も、事実上使用が出来なかった。いや、雨の日でも屋上は開放されているけれど、いくらニコチン及びタールが足りない不良高校生も、雨の中で吸うほどニコチン及びタール不足というわけではないのだろう。久し振りの屋上は、きれいだった。

雨がタバコの灰や吸殻を見事に洗い流して、床のくすんでいた緑色が、夏の山の木々のような爽やかな色になっている。そして、なんとなく残っているかつては雨粒だった水滴が、空に輝く太陽の光を反射して僕の網膜を焼いた。鼻腔を刺激する風は、湿り気を帯びつつもどこか清浄な香りを運んでいた。

けれど、その風の中に、ニコチンの香りを見つけた僕は、辺りを見渡した。右、誰もいない。左、誰もいない。後ろ、暗い階段が見えるばかりで誰もいない。あれ？ もしかして、僕も相当ニコチン中毒なんだろうかと苦笑いするしかなかった。

「まったく、ドコ見てるのよ」

突然、頭上から声が落ちてきた。頭のまったく上ではなく、むしろ斜め上から聞こえてくる感じ。

僕の後ろは校舎へ続く階段だ。学校の屋上というものをイメージしてもらえればわかると思うけれど、屋上への階段は雨の侵入を防ぐために屋根や壁で守られている。屋上から見れば、ちよこんと小屋が建っているようなイメージだ。つまり、僕はその小屋を背に立っている。つまり、僕に声をかけた人物は、その小屋の屋根の上から声をかけていることになる。

そう見当をつけた僕は、小屋の屋根に向かって振り返った。

「よ」

案の定、屋根の上には弥生さんが立っていた。

「どうしたの？」

「どうしたの、じゃないよ」僕は言った。「決まってるでしょ？」

僕は、ピースサインを裏返した。言うまでもなく、タバコを吸う

ポーズだ。すると、弥生さんは煙を吐きながら、はっと笑った。まるで、魔女のようだった。

「じゃあ、こっちに上がっておいでよ。気持ちいいんだ、ここ」

「え？　どうやって上がるの？」

弥生さんは後ろを指した。

「後ろに梯子があるから」

弥生さんの言葉を待たずに、僕は小屋の裏に回った。すると確かに梯子らしきものがあつた。“らしき”と表現したのは、僕の目の前にあるそれが梯子とはとても思えないからだ。所々赤錆が出ているのできつと金属製のだろうけど、それ以外の事はよく判らない。二本の平行した棒に、直角に短い棒が無数に渡されているからきつと梯子なのだろうけど、こんなボロいものが人の体重を支えるとはとても思えなかった。

けれど、きつと弥生さんも昇れたんだから、と若干失礼なことを考えつつ、梯子に手をかけて昇った。赤錆特有の嫌な香りが手に染み付きそうで不快だった。

「あら、遅いじゃない」

ようやく昇りきると、弥生さんが振り返って僕を見据えていた。

「この梯子、サイテーだね」

梯子に文句を言う僕に、弥生さんは言った。

「でも、あの梯子のおかげで、この特等席は私だけのものなんだから、梯子様様ね」

屋根の上は、屋根、と形容すべき性質のものではなかった。屋上と同じように緑色の塗装がされている。人二人が居られる程度の広さしかない。プチ屋上、とでも名づけたい感じた。しかも、このプチ屋上には、無粋な柵がないし、そもそも学校で一番高い位置にある。だから、開放感も抜群だ。確かに、独占したいロケーションではある。

「あ、特等席だったんだ」

とか言いつつも、ちゃっかりプチ屋上の床に座る僕に、弥生さん

は笑いかけた。

## 427号室の怪【9】

「特等席にそうやってどっかり座るなんて、肝が座ってるじゃないでも、大丈夫。ここ、調査部のために開放しようと思ってたから」  
「そうなんだ」

僕の言葉を訊くや否や、弥生さんは僕にタバコを差し出した。箱から一本頂戴して、ライターで火を点けた。ジュジュ、という紙が焼けるような音と共に、煙が肺に入っていく。

「本当においしそうに呑むのね」

弥生さんは呆れた、という風に呟いた。僕は息を吐き出した。白い息が、最初は確かなイメージで以ってそこにあったのに、すぐに屋上という空間に、独特のにおいを残して拡散してゆく。

「ああ、たまにしか呑まないから。それに、ずいぶん久し振りだし」  
僕は答えた。

しばし、妙な沈黙が割り込んできた。まるで、お互いに次なる言葉を紡ぐと探ってはいるものの、けれどそのとっかかりがないときのような胡乱な感じ。あるいは、お互いに言いたいことがあるんだけど、どういう角度で話そうか、どういう風に切り込もうか悩んでる、結果黙ってる、そういう性質の沈黙だった。

タバコの煙と火だけが、メトロノームのように時間経過をクレバ―に教える。

タバコの灰が、ぼろっと落ちた。

「…ねえ」

沈黙が、壊された。僕ではない。弥生さんだった。僕はただ、弥生さんの口火を吹き消すような真似はせず、ただ話を先に促す。

「今日もサキ、学校休んでるんだ」

「…そうなんだ」

「そうなんだ、って…」

「だって」僕は言った。「事実確認に対する答えはそれしかないで

しょ？」

「それはそうだけど」

不満そうに口を伸ばす弥生さんの横で、僕はタバコを吸った。けれど、もうそろそろ指を焼くほど短くなってきていた。しょうがないので、床で火を揉み消した。

またもや沈黙が滑り込んできた。けれど、今度の沈黙は前回のそれとは違い、すぐに壊れた。

弥生さんは言った。

「サキと、何かあった？」

「え？ 月本さんと？ …ああ、お礼を言いそびれた」

「お礼？」

頓狂な声をあげる弥生さんに、僕はあの雨の日にあったことを説明した。ただし、ミス・エマーデイルの件は伏せた上で。

「ふーん、そんなことが」

道理で、とても言いたげな弥生さんの顔。彼女は本日二本目のタバコに火をつけた。僕にも勧めてきたけれど、僕は手振りで断った。「っていうかさ、謝ったほうがいいよ、サキに」

「やっぱり？」 僕は弥生さんの提案に賛成した。「確かに、誤解されかねないことを言っちゃったし、あれは謝らなくちゃって思ってる。でも、学校に来ないんじゃないじゃあ謝りようがないじゃないか」

弥生さんはため息をついた。まるで、僕のことを非難するように。

「なんだか、あんたらしくないよ」

「僕らしくない？」

「あんたは私に教えてくれた」弥生さんはちよつと熱っぽく続けた。「人と関わるには、ちよつとは冒険が必要だ、ってこと。なのに、どうしてあんた自身はそうなのよ。何であんた自身は捨て身になれないのよ」

「は？」

弥生さんの言っていることが全く判らなかつた。

僕はそんなことを弥生さんに教えた覚えもないし、捨て身になる



必要性も感じなかったからだ。

「まあ、いいわ」

弥生さんは諦めたようにかぶりを振った。ちょっとバツが悪そうに髪の毛をいじりつつ。

「いいの？」

すると、弥生さんは言った。

「きつとあんたは判ってるはずだから。私の説教なんか聞くまでもなく、どうすべきかきつと判るはずだから。だって、あんたは私を変えてくれたんだもの」

弥生さんを、変えた？

変えたつもりも無ければ、これからどうすべきかも判らない。買いかぶられたもんだ。

その旨を伝えると、弥生さんは笑った。

「まあいいわ」

それだけ言うと、彼女は梯子を降りて行ってしまった。小屋に入る直前、目の合った僕に少し手を振って、彼女は校舎の中に消えた。『まったく、ミステリアスな子ね』

ミス・エマーデイルが呆れたように呟いた。

「いや、ミステリアスは君の方がはるかに上だと思うけど」

『それは残念』

何が残念なんだ、と聞きたかった僕だけど、とりあえず黙っておいた。

すると、ミス・エマーデイルは不意に言った。

『…あなたって、びっくりするくらい鈍いのね』

「は？　どういうことだよ」

『秘密』

ミス・エマーデイルはふふふ、と笑った。

ふと、僕は空を眺めた。頭上の空は雲ひとつないとはいかないまでも、それなりに晴れている。きつと、あと数時間は天気が崩れないだろう。けれど、遠くの空には、明らかにおかしい色をした雲が

広がっていた。

『夕方には、降りそうね』

春の天気というのは、きまぐれだ。

金曜日というのは胡乱だ。

半休になる土曜日ほど嬉しくはないにせよ、けれど週末特有の高揚感がある。その高揚感は、授業を受ける者にとっても授ける側にとっても胡乱の一言なのだ。しかも、今週の金曜、つまり今日はちよつと事情が違う。実は、今週の土曜は学校の定める休みなのだ。なので、本当にその金曜日は胡乱だった。

胡乱に授業の時間は走り去っていき、気づけば放課後になっていた。いや、「胡乱に」とは書いたものの、けっこう色々があったのだ。三時間目の英語の時間は、おもわず大あくびをして、田村先生に怒られた。「そもそもお前は……」と。四時間目の体育の時間では、跳び箱を跳ぼうとしてつつこんでしまった。体育の藤森先生に怒られたのは言うまでもない。とにかく、そういう風に、どこか運の無い一日だった。でもそういう日々も、俯瞰してみれば、ただの平凡な一日なのだろう。そう気づいた瞬間、隣に佇むミス・エマーディルは微笑んでいた。

授業が平凡でつまらないのはしょうがない。でも、放課後こそは！ と、妙な気負いをもって部の会議に出席している僕なのだけけれど、どうやら皆は僕のそういう気負いに付き合ってくれるような気配はなかった。

「雨、降ってきたなあ」

マサルが窓の外を眺めながら、そう呟いていた。

タバコを吸いにいったときにはまだ晴れていたのに、お昼ころには黒い雲がかかり始め、放課後には降り始めたのだ。霧雨ほど細かくはないけれど、どしゃ降り、と形容するには弱い、そういう類の降り方だった。パラパラ、と窓の外のトタンが鳴っている。そのトタンのドラム音に皆の生気を奪う力があるかのように、皆その音に

聞き入りながら眠そうにしている。

けれど、マサルはその空気を壊そうとしているのか、言葉を継ぐ。  
「な、なあ、皆、眠そうだなあ、どうした？」

つつか、既にマサルも眠そうだ。けれど、伏し目がちにしていた  
弥生さんが答えた。

「いや、ただ単に、眠い」

「…激しく同意」

藤島君も手を挙げた。

いかん、このままではこんな空気に皆押しつぶされてしまう！  
そう焦った僕は、手を叩いた。

パンパン！

皆、眠そうだった顔をどこかに追いやって、僕の方に向いた。

「はじめようよ、会議」

僕の言葉に、マサルが応じた。

「おう！　じゃあ、会議、始めるぞ！」

「おおーおおお…」

尻つぼみになっていく弥生さんと藤島君。二人の顔がどんどん元  
の眠そうな顔に戻っていく。そんな二人に危機感を覚えたのか、そ  
の二人の眼の前で、マサルはねこだましをした。

ねこだまし、っていうのは、お相撲なんかでよく使われるテクニ  
ックで、敵の鼻先で手を叩くことで相手を驚かせたりあるいは一瞬  
の判断を奪ったりする技だ。不意に決まればけっこう驚く。

## 427号室の怪【10】

二人とも、ねこだましに驚いたのか、きりつと背を伸ばした。

そんな二人にうんうん、と頷きかけて、マサルは弥生さんに調査の進捗を聞いた。

すると、彼女は答えた。

「私は、インターネットで調べてみた」

彼女はバッグから何枚もプリントを取り出した。きつと、これはプリントアウトしたものだろう。

「で、ウチの高校のOBがやってるOB会のホームページに行き当たったの。で、BBSを覗いてみたの。そしたら、案の定あったわ」  
彼女は、紙を机に置いた。

「これ、そのBBSの該当部分をコピーしたんだけどさ」

こういう、内容だった。

《 NO・132 平和畑を耕した人

そっぴやお前ら、ハトムネ寮の427号室って

覚えてるか？

NO・133 名無しの平和畑

>132 ああ、覚えてる。確か、幽霊が出る、って噂の

ヤツだろ？

NO・134 霸王平和畑

>132 ああ、実は俺、見たことあるよ

ぼお、って浮かんできてさ。怖いんだよ

あれは絶対に男だな

NO・135 名無しの平和畑

>134 自演乙。

NO・136 霸王平和畑

いや、本当に見たんだってば。 ……》

こんな感じで、427号室の幽霊を見たという“霸王平和畑”というハンドルネームを名乗る人と、その人の発言を嘘だと言い張る人たちによる、平行線の上グダグダでどうしようもない議論が交わされていた。

「どう？」

弥生さんの言葉に、藤島君が応じた。

「なるほどね。そういうことか」

二人は、うんうんと頷き合っている。

「あのう、どういうこと？ 説明して欲しいんだけど？」

そのマサルの質問には、藤島君が答えた。

「…このBBSの中で交わされている情報が、信憑性があるか否かは判らない。でも、少なくとも、427号室の幽霊譚っていうのは、先輩達に共有されている“物語”だ、ってことなんだ。つまり、つい最近ポツと出たようなものじゃないんだ」

「ふうん？」

「あとね」弥生さんはプリントを指した。「ここからも興味深いわ」

《 NO・236 化石化卒業生

>132 「427号室の幽霊」って、そもそも何？

NO・237 平和畑を耕した人

>236 え？開かずの間の427号室に幽霊が出る、っ

て噂のやつですよ。

NO・238 化石化卒業生

>237 俺が居たころは、427号室は開かずの間じゃ

なかったよ

427号室に友達が入ってて、そこでよく麻雀

したし

NO・239 平和畑を耕した人

>238 すいません、何年度の卒業生さんですか？

NO・240 化石化卒業生

>239 あんまり年齢を明かしたくないからな …でも卒業したのは確か15年くらい

前。

やべえ、年取ったな俺www …》

「15年前の卒業生は、427号室の幽霊を知らないんだね」  
僕の言葉に、弥生さんは頷いた。

「そう、そしてこのことは、あることを示唆してる」

「あること？」

マサルの声に、弥生さんは答える。

「その幽霊譚っていうのは、少なくとも15年前には無かったし、その舞台になる427号室も開かずの間じゃなく、普通の部屋だった、ってことよ」

「…つまり、今から15年前までのいずれかの年に、427号室は開かずの間になって、そして幽霊が出る、っていう噂が出た、ってことだね」

藤島君は顎を触りながら結論を述べた。

「ちよつと待つて！」僕が口を挟む。「実は、あともう少し427号室が開かずの間になった年を狭めることが出来るよ」

「え？ マジかよ」

「うん」マサルの言葉に頷いてから、僕は続けた。「実は僕、ハトムネ寮の管理人さんから話を聞いたんだ。管理人さん、五年前からハトムネ寮にいるらしいんだけど、管理人さんが赴任して来たときには、もう427号室は開かずの間だったらしいから…」

「ってことは」弥生さんは言った。「5年前から15年前までの10年間のいずれかの年に、427号室は開かずの間になった、ってことよね」

「そういうこと」

僕は頷いた。すると弥生さんは、私の調査はこんな感じ、と答え、自分にはもう語ることが何もない、というスタンスを見せた。そのスタンスに追い立てられるように、藤島君が代わりに口を開いた。

「僕は、とりあえずこの地方の言い伝えを調べた。言い伝え、っていうのは、都市伝説の類とすぐ親和性が高いんだ。“口裂け女”っていうのだって、最初は一地方の恋物語みたいな言い伝えが発祥だった、っていうし」

口裂け女と恋物語、その二つの単語がどという風に結びつくのか、よく判らなかつた。頭の端っこで、“今度藤島君に聞いてみよう”という言葉が浮かぶ僕なのだった。その僕の視線を受けつつ、藤島君はメガネを上げて続ける。

「でもね、見つからないんだ。ここらへんに伝わる言い伝えってけっこう多いんだけど、今回の幽霊譚みたいに、男の人が主人公の話自体が少ないからね。だからきつと、今回の幽霊譚はここらへんの言い伝えが変質したものではないと思うんだ」

藤島君の言葉は、皆の顔を傾がせた。まるで、稲穂を揺らす風のように。その空気に気づいたのか、藤島君はさらに補足説明を加える。

「…人が語る出来事っていうのは、必ず裏づけがあるんだ。例えば、事実っていう裏づけ。でも、こういう幽霊譚とか妖精譚とかいった現実的にありえなさそうな事例の場合、別の可能性を疑うべきなんだ。それが例えば言い伝えなんだ。でも、その可能性が低い、ってさつき僕は言った。つまり…」

その言葉に、一番察しがいい弥生さんが応じた。

「今回の幽霊譚は、事実の裏づけがある、ってこと？」

「…おおむねそういうこと」藤島君はメガネを光らせながら続ける。「でも、誤解しちゃいけないのは、必ずしも幽霊譚が事実そのものじゃない、ってことだ。例えば、幽霊に見えたものは、実はカーテンがゆれていて、それを幽霊に誤認していた、ってこともあるから」「UFOの正体が、車だったっていうのに似てるわね」

「ま、とにかく僕は」弥生さんの軽口をかわして、藤島君は続ける。「今回の幽霊譚、なんらかの事実があつて、それを下敷きに成したフオークロアだと思つてゐる」

藤島君はそう言い切ると、マサルの顔に目を遣つた。きつと、マサルの番だと暗に言いたいのだろう。マサルはその視線に気づいたのか、指を自分の顔に向け、

「俺？」

などと言っている。もちろん僕らはうんうん、と頷く。

けれど、マサルは頭をポリポリ遣りながら困つたようにはにかむばかりで、自分の調査結果を口にしようとしなない。おいおい、まさか…。バツの悪い沈黙の中、皆の頭の中では、きつと同じ予感が過ぎたことだろう。

マサルは、言いくそうに口を開いた。

「ご、ごめん！」

その瞬間、マサルは両手を合わせて頭を下げた。

このシチュエーションで、「ごめん」と謝るということは、つまりそれは。

弥生さんが、僕の心の中を代弁するように、口を開いた。

「調査をしてない、つてこと？」

声色は優しい。でも、その言葉を発する弥生さんが、ものすごく怖い。普段表情がうるさいほどにころころ変わる弥生さんが、無表情なのだ。しかも、普段抑揚をつけた喋り方をする弥生さんが、そつけなく言葉を発したのだ。怖くないはずがない。



#### 427号室の怪【10】（後書き）

今回ばかりは、（演出の関係上）横読みを推奨いたします（まあ、矢車の文章をわざわざ縦読みしてくれている方なんていないような気がします）。もし縦書きでこの駄文を読まれている方がいましたら、この場を借りてお詫びいたします。また、読まれている環境によっては妙な文字配列になってしまうかもしれないのですが、その点についてもお詫び申し上げます。

## 427号室の怪【11】

もちろん、その弥生さんの殺気に、マサルが気づかないはずがない。だから、マサルは出来るだけ弥生さんを刺激しないように言葉を選んだ。

「いやあ、昨日は反町さんとデートしちゃってさあ！ で、家に帰りついたのが夜の10時くらいだったから、結局調査が一切出来なかったんだよ！ ゴメンゴメン」

うーん、ごめん。マサルってば、言葉を選んでなんかいなかった。いつも通りの軽口で、しかも反町さんとデート、なんていう話の本筋とは一切関係のないことを、っていうか神経逆撫でなことをさうつと言ってしまうマサル。大物というか、頭の中身が足りないというか。

当然、場の空気は荒れに荒れた。

「ふざけんなマサル！」

「……いい度胸してるじゃないか、マサル君」

弥生さんと藤島君が、まるで地面を蹴るようにして立ち上がった。そして、マサルに一步一步にじり寄る。にじり寄るたび、まるで大地が割れるような音がしそうなほどのにじり寄りに、傍から見ている僕は少し戦慄した。けれど、所詮は他人事なので笑って見ているのだけだ。

「ちょ、ちよつと……！ ちよつと待って！」

マサルは、まるで外国のゾンビ映画でよく見る、「ゾンビから逃げようとするものの腰が抜けて、後ろ手をついたまま逃げようとする人」のポーズのまま、二人から距離を置こうとする。でも、そのうちマサルの背中が壁についてしまった。逃げ場がないのを自覚したのか、マサルは後ろについていた手を前に出し、両手を広げて振った。“待ってくれ”という謂いだろ。けれど、そんな謂いを嘲笑うかのように、藤島君と弥生さんがマサルに飛びかかった。

「ぎゃあ！」

マサル短い悲鳴。まるで、漫画のドタバタシーンのような光景。  
「藤島！ お前サブミッションをかけるんじゃない！ 弥生！ 首を絞めるのはマジで止めて！ 死ぬ！」

マサルの言葉そのままに、藤島君はサブミッションを足にかけているし、弥生さんは両手でマサルの首を絞めていた。

そんなドタバタを眺めるのに飽きて、僕は窓の外に目を遣った。まるで空から無数の線が落ちてきているかのような雨の軌跡。校庭にある大きな水溜り。空の色を写した水溜りは、まっくらだった。

「ちよ！ マジで……ぐふっ」

その声を最後に突然部屋の中が静かになった。部屋の中で動きがあったようだ。僕は視線を暗い外から教室に移した。

教室の中では、マサルが泡を吹いていた。真っ青な顔をして、しかも白目を剥いている。マサルの首を握っている弥生さんは、“あ、やつちやつた”とでも言いたげな顔をしている。藤島君は、“あ、やべえ”とでも言いたげな顔をしてマサルの顔を見遣っている。

「ちよ！ 二人とも攻撃やめて！ マサルが死んじゃう！」

僕がそう言つて駆け寄ると、弥生さんは“ようやく突っ込んだか”と言いたげな安堵顔を浮かべて、マサルの首を極めている手を離れた。マサルは、地面に崩れた。

「げほっげほ！ 殺す気か！」

首から手が離れてしばらく経つて、ようやく顔が元の色に戻ったマサルは不満を口にした。意外な元氣さに皆呆れつつも、とりあえず弥生さんは言った。

「ああ、殺す気でしたけど何か」

しれっとそう答える、能面のような顔をした弥生さんに皆が戦慄したのは言うまでもない。

そんなこんなと荒れに荒れ、結局ほとんど進まない部のミーティング。でも、結局「明日から週末だから、とりあえず各自調査」と

いう、議論をする意味があったのかよと言いたくなりそうな結論に至った。結論が出れば後は行動しかない。僕は、調査を続けると告げて、三人を残した教室をあとにした。ミス・エマーデイルはくすくすと笑いながら僕に続いた。

「おーい！」

帰ろうとして靴箱から靴を取り出して履いたところで、誰かに呼び止められた。振り返ると、そこには二カつと笑って佇むマサルの姿があった。どうしたの、と訊くと、ヤツは二カつと笑ったままの顔を僕に寄せて、右手を衝立のように僕の耳にそばだてる。

「あのさ、明日座山に遊びに来ないか？」

まるで“秘密基地”の位置を教えるどこぞのガキのようにマサルが言うもんだから、懐かしくて思わず噴き出しそうになった。

「座山に？ …何するんだ？」

正直、僕は都会の座山に魅力を感じていない。いや、確かに焼きそばパンが美味しい店がある、とか本屋が大きいとかこまごまとした魅力はあるものの、でも足を向けるに足るほどのインセンティブが座山にはない。

けれど、マサルは続けた。

「なんでもいいさ。カラオケでもゲーセンでもマンキツでも。明日暇なんだろ？ …なら遊びに来いよ」

「でも…」

調査があるじゃないかと言いかけたところで、マサルが口を挟んだ。

「もう何でもいいからオツケーしてくれよ！ …じゃないと、俺が弥生に…」

「え？ …弥生さんがどうしたの？」

そう訊くと、マサルはぴりぴりとわざとらしく口笛を吹いてから、なんでもないなんでもない、でもとにかく明日午前10時に座山駅な！ と一方的に宣言して、廊下を走って行ってしまった。

結局自分のスタンスを示せなかった僕は、次の日は座山に行くしなくなってしまった。

横で、ミス・エマーデイルがくすくす笑っていた。いつもどおり、『つまらないことになりそうね』と僕の耳元で呟きながら。

僕は答えた。

「つまらないことになり“そう”なんじゃなくって、つまらないことになっ“てる”んだ」

ミス・エマーデイルは笑った。

『いい傾向ね』

ミス・エマーデイルの木漏れ日のような笑い声は、本当に雨の音によく映えた。雨の音がドラムの音だとしたら、彼女の笑い声はリードギターのような旋律を支配していた。ベースもベースギターもない奇妙なバンドが奏でる音楽。そこには、確かに僕の居場所があるように感じられた。僕は、そこでボーカルを勤めるべきなのだ、という妙な予感が、僕を放してくれなかった。

僕は、外の景色の奏でる音を、ただ聞いた。ミス・エマーデイルの奏でる音を、ただ聞いた。そして、それらの音に自分の音が絡まったときの恍惚を思い浮かべた。

背中がぞくつとした。

でも、その背中感覚が、逆に僕を現実に戻した。

僕は頭を振ると、雨が打ちつける外に向かって歩き出した。ミス・エマーデイルが、僕に続いた。

次の日、僕は朝早くハトムネ寮を出た。

その余りの早さに、寮母さんは目を白黒させた。

「あら、めずらしいねえ！ アンタがこんなに早起きなんてねえ」  
座山に遊びに行くんです、と告げると、納得したように寮母さんは頷いた。

「そりゃそうだよねえ。…やっぱり、休みの日に高校生が部屋に籠ってるなんておかしいもんね。遊び盛りなんだから」

薬用石鹸の、ハーブっぽい清潔な香りを辺りに漂わせて、寮母さんは僕の前に朝ごはんを用意してくれた。心尽くしの朝ごはんを一気にがつこんで、寮から出た僕は自転車乗り場に急いだ。

今日は、曇りだった。けれど、真夜中まで降り続いた雨のせいで、足元には水溜りが点々とあつたし、空気もどこか瑞々しかった。瑞々しいというよりは、湿っぽかった。

『ふあゝあ。こんな朝早く出るなんて』

ミス・エマーデイルの不満を、僕は握りつぶす。

「だったらミス・エマーデイルは寝てて良かったんだ」

僕の言葉に、彼女は反論する。

『私はあなたの倦怠なの。つまり、私はあなたを離れては存在できないのよ』

そんな会話をかわしつつ、僕は自転車乗り場に置いてあるマウンテンバイクに跨った。

その後20分も自転車漕ぎ、最寄り駅の平和畑駅にまで達した。そして駅で切符を買って（僕以外にミス・エマーデイルの姿が見えないのをいいことに、一枚しか買わなかった）、電車で揺られること30分、ようやく座山に到着した。

座山は、都会だ。

駅を降りた瞬間、まず目に付くのはビル群だ。もちろん、新宿とか原宿とかの光景には負けるものの、けれど熱血高校近辺と比べるべくもない都会だ。ビルが、まるでそり建つ壁のように僕の前に立ちはだかつて、視界を狭める。その狭められた空の下に、無数の人々がてんでバラバラに動いている。以前生物が何かの授業で、微粒子が細かく震える“ブラウン運動”とかいう映像を見せられたことがあったけれど、まさにそんな感じに僕の眼の前を歩く人々は振舞っている。いや、別に震えているわけではない。個々のてんでバラバラな感じが、微粒子の振る舞いを連想させるだけの事だ。

『退屈な光景ね』

「そう？」

ミス・エマーデイルは続けた。例の、格調高い口調で。

## 427号室の怪【12】

『だって、ああやって歩いている人々は、あなたに何の影響も残さない。かといって、これからあなたに影響を与えることもない。でも、あの歩いている人から見れば、こうして街を見渡しているあなただってそう見えるはずよ？ つまらないじゃない。まるでこれじゃあ、主役不在の三文劇みたいなものよ。そう、この世界には主役がないのよ。……いいえ、この世界は皆が主役なのかも。けれど、一方で皆が脇役で、皆が悪役で、皆がエキストラで、皆が背景で、皆が大道具で、皆が小道具なのよ』

なんとなく、彼女の謂いが判る気がした。

オリンピックで金メダルを取った日本人選手がいたとする。その選手は確かにオリンピックでは主役を演じた一人だろう。でも、その選手が主役でいられる場面は限られている。その選手は“オリンピック”という舞台では主役かも知れない。でも、“日本”という舞台では、脇役なのだ。物語の主役のように、いつまでも“主役”というものを堅持できる人間は、この世界のどこにもいないのだ。

ミス・エマーデイルは僕の思考に滑り込むようにして続ける。

『でも、倦怠は違う。だって、倦怠っていうのは、その人だけのもの。その人の心の中に、その人だけの舞台がある。その人だけのために光るライムライトがある。そう、倦怠っていうのは、言うなれば一人芝居なのよ。いつまでも主役で居られる、そういう世界を作るもの、それが倦怠なの』

そうなのかも知れない。倦怠に長く浸っていた僕には、彼女の謂いに真実性があることに気づいていた。倦怠、という世界には、僕しかない。でもそれは、僕がその世界の主役である、という事実と裏返しになっている。倦怠の世界の中では確かに倦怠しか感じない。けれど、その中に、倦怠に蝕まれながらも、“僕”という主役が誰よりも雄弁に、誰よりも活動的に存在感を放っている。上手く



行かない外の世界で主役になるよりもはるかに簡単に、そしてはるかに長い間、倦怠の世界は僕らに“主役”を用意する。

そう思い至った瞬間、僕の心に、何かが入り込んだ。いや、入り込んだ、という言い方はおかしい。まるで心の一部が驚掴みにされて切り取られたかのような、あるいは心の一部がいきなり崩落して、すっぱり穴が開いてしまったような。ともかく、僕の心に、巨大な空白が生まれた。

僕は、ミス・エマーデイルの瞳をぼおつと見つめた。

ミス・エマーデイルは気の強そうな黒い瞳を、僕に向けた。

あとはもう、言葉は要らなかった。

ミス・エマーデイルは僕の首に腕を絡めてきた。ニノウデのやわらかい感触が、僕の耳に触れる。彼女の胸のふくらみが、僕の薄い胸板にぶつかる。彼女のカモミールの香りが、僕の鼻腔を刺激する。でもそのうち、そういった全ての感覚が、脳にビリビリ響く心地よい痺れに変質していった。まるで、ぬるい風呂に浮かんでいるかのような感覚。その中で、彼女は笑った。

『さあ、目を閉じて？』

僕は彼女の言う通り目を閉じた。もう、立っているのさえ億劫だったけれど、それを彼女は許さなかった。彼女は僕の体をぎゅっと締め上げるように抱きしめ、つかえ棒でもするように僕を立たせている。

ぐるぐる回る世界。

闇の中で、彼女の声が聞こえた。

『さあ、行きましょう？』

僕は、蜜の香りに導かれる蝶々のように、戸惑いながら唇を伸ばした。

くす、と笑うと、彼女は僕の頭を撫でた。

『いい子ね』

そして僕が、顔を彼女の顔がある位置に近づけようとしたその瞬間だった。

「おい、お待たせ！」

緊張感のまるでない声。その声が、僕とミス・エマーデイルだけの空間を粉々に粉碎した。そして、僕の目の前には座山の風景が取り戻されていく。さっきまで存在感を失っていた街行く人々も、まさに林立するビル群も、まるで自分が主役であるかのように己の色を主張し始めた。そのころ、視界の端で『ち』と舌打ちするミス・エマーデイルの姿があっただけだ。

頭の回りに渦巻いている変な感覚を振り払おうと、僕は頭を振った。

「おい、お前、チュー直前みたいな顔して、どうしたんだ？」

その声は、マサルだった。僕の顔を、怪訝な表情を隠さずに見下ろしている。なんでもないよ、と答える僕に、マサルは重ねて質問してきた。

「なあ、お前、“空飛ぶ夢”を見ないか？」

「え？ 寝るときに見る夢？ いきなりなんだよ」

マサルは僕の質問に答える代わりに、かぶりを縦に振った。

「あ、ああ、よく見るかもしれない」

僕がそう答えると、マサルはこれ以上ないくらいニヤけた。やっぱりな、おまえらしいよ、と意味深に一人頷くものだから、さすがのようにしてマサルに質問の真意を聞いた。すると、マサルはプププ、と笑いをこらえながらも答えてくれた。

「“空飛ぶ夢”っていうのは、欲求不満の象徴なんだよ。プププ」  
なるほど。マサルは、僕の事を欲求不満だと思っているわけか。

まあ確かに、一人で唇を伸ばしている友達を見たら、誰だって欲求不満だと思うだろう。でも、僕は断じて違う。僕の眼の前には確かにものすごく魅力的な女の子がいて、しかも僕を誘惑してくる。このときほど、ミス・エマーデイルが僕にしか見えないという事実がイヤになったことはなかった。

「で、何をして遊ぶ？」僕は気を取り直して聞いた。

「そうだなあ」マサルはちよつと天を仰いだ。

「決めてないの？」

「いや、決めてはいるんだけど」

「じゃあ、言ってみてよ」

「ああ、じゃあ、お言葉に甘えまして。…これ、行こうぜ」

マサルは胸の前で、右手のひらをまるでブランデーでも持つように天に向け、小刻みに振った。そして、左手を、モールス信号でも打つようにトントンとやっているような仕草を見せた。

「お、いいね」

僕は、マサルの提案に乗ることにした。

提案しただけはあつて、マサルは迷わずにゲームセンターまで僕を案内した。途中、ちよつと小路に入ったりしてビルとビルの間を潜む闇を歩いた。そして、ビル風なるものが、これほど強いものだったのか、というのも味わった。そして、その小路から出た瞬間、半ば唐突にゲームセンターが僕らの前に姿を現した。小路を通つてきたこともあつて、場末のゲームセンターかと最初は思ったのだけれど、田舎にありがちなタバコと埃で薄汚れた感じのそれではなく、まるでテレビの向こう側にある、黒光りするピンボールとか、赤く輝くスロットマシンなんかが整然と置かれて、その向こうにはポーカー台とかルーレット台とかが置かれているようなアメリカ社交界御用達力ジノみたいに、小奇麗でさっぱりと垢抜けた外観だった。

「さ、入ろうぜ」マサルは中を指した。

「へ、平気かな？」

「何が？」

「いや、お金が…」

僕の想像の中では、この建物は“アメリカ社交界御用達のカジノ”なのだ。当然、僕は社交界に顔が利かないし、成金というわけでもない。有り体に言ってしまうえば、敷居が高そうだと感じたのだ。

けれど、そんな僕の気持ちを察知したのか、マサルは笑った。

「大丈夫！ 外はなんだか小奇麗だけど、中は普通のゲーセンだよ」  
「そうなんだ」

ようやく胸を撫で下ろした僕は、マサルのあとについて、中に入った。

確かに、普通のゲーセンだった。入り口近くにはネズミやアヒルのぬいぐるみや、きわどい格好でポーズングした女の子のフィギュアなどが山積みになっているUFOキャッチャーが並んでいる。そして、その並びを抜けた先には麻雀ゲームや将棋ゲーム、パチスロ移植機が並び、そして一番奥に、目的の対戦格闘ゲームのコーナーがあった。

「さ、やるか？」マサルは言った。「ギルド・ギガ」でいいか？」

「うん、いいよ」

僕らは、誰も並んでいない“ギルド・ギガ”のアーケードマシンの前に立った。

記憶のいい人なら覚えているかもしれないけれど、僕の部屋にも“ギルド・ギガ”がある。ただし、家庭用ゲーム機への移植バージョンだ。本来、“ギルド・ギガ”はゲーセンのアーケードゲームだったものが、余りの人気ぶりに家庭用ゲームに移植されたのだ。ゲームに詳しくない人は首を傾げるかもしれないけれど、格闘系アーケードゲームでは日常茶飯事だったりする。

さて、ゲームが始まった。

マサルが操るのは、赤い色がトレードマークの主役キャラだ。一方の僕は、トレンチコートをまとったキャラを選ぶ。画面の中で、その二者が激突した。いや、正確には、僕が一方的にやられた。マサル（の操るキャラ）の出した炎とか、とんでもない跳躍力のあるキックとか、これは無いだろうって言いたくなるようなアップラーをもろに食らって、僕（の操るキャラ）は手も足も出ない。で。

あっという間に、僕はやられた。

「はは、お前、弱いなあ」

マサルはアーケードマシンの向こうで、カラカラと笑った。

「うるさいなあ！」

僕がそう返してもう一回勝負をしようとお金を入れようとしたとき、背中に気配を感じた。気づけば僕の後ろに順番待ちをしている人たちが暇そうな顔を浮かべて並んでいた。

## 427号室の怪【13】

ゲーセンには、こまごまとした決まりがある。その中の一つに、「後ろに人が並んだら、ゲームが終わり次第後ろの人に譲る」というものがある。なので、僕はお金を入れるのをやめ、後ろの人にアーケード機を譲った。後ろの人は、それがさも当然の事であるように（当然のことなだけど）アーケード機の前に立った。名残惜しかったけれど、アーケード機から離れた。

マサルも同様だったようだ。マサルもアーケード機から離れて僕に駆け寄ってきた。

「まあ、こうなるわな」マサルは人がわんさか群がるアーケード機を少し見遣った。「“ギルド・ギガ”は人気作だからなあ。朝一番しか出来ないのは当たり前さ」

「次は何をやるのか？」

「そつだなあ」

マサルは辺りを見渡した。けれど、どれもマサルのお眼鏡に適わないらしく、浮かない顔をしている。しょうがないので、僕も辺りを見渡す。するとどうしたわけか、僕の双眸にはある台が大きく映った。

丁度玉突きの台くらいの高さ。つまりは腰くらいの高さだということだ。そしてその台は、まるでテニスのコートのように板で区切られていた。ただ、その板は指二本分くらいの隙間がある。けれど、そんな外形の特徴以上にその台は僕を捉えて離さなかった。それは、台が持っている奇妙な沈黙のせいだろうか。大きな電子音や、人々の歓声とは無縁なところにぽつんと佇んでいるような、そんな台だった。

僕がその台に目をやっているのに気づいたのか、マサルは不意に言った。

「なんだ？ エア・ホッケーじゃないか」

マサルは僕に目を向けつつ続ける。

「あんなのやりたいのか？」

「うん」僕は大きく頷いた。

しばらく考えるようなポーズを取ったマサルだったけれど、表情を元の笑顔に戻した。「ま、いいか。どうせやるものがないんだし。それに、ああいう単純なゲームの方が燃えるだろうし。それにお前、案外アーケード系が不得意らしいからな」

僕ら是对局する形で、誰も居ないエア・ホッケー台の前に立った。お金を入れると、意外にきびきびと台は活動し始めた。電光掲示板には0 - 0と数字が浮かび、二昔前のゲームのように間抜けた電子音の音楽が流れた。それに、ぶうんというエア音が響いた。けれど、どうしたわけだろう。このエア・ホッケー台の持つ静寂が、一層深くなったように感じた。

「さて、やるか！」

向こう側に居るマサルの声も、イヤにクリアに聞こえた。

間抜けた音楽が鳴り終わったところ、ようやく円盤が台から飛び出てきた。その円盤はマサルの方に流れた。当然、僕の方はとりあえず防戦に回る。

「でりゃあ！」

マサルは決め技を打つヒーローのように、円盤を放ってきた。その軌跡はマサルの性格そのままに、まっすぐな軌跡だった。僕は、その軌跡に先回りして、ハエでも払うように払った。円盤は壁にぶつかりながらマサルの陣地に入った。壁にぶつかるたびにポビュン、という電子音を響かせながらマサルが守るゴールに迫る。

「おわわ！」

マサルは最初の一撃を放つのに体勢を崩していたせいで、簡単にゴールを許してしまった。

電光掲示板には、0 - 1と表示され、間抜けたファンファーレが響いた。

「しまったあ！ 今度こそ入れるからな！」

びしつと指を僕に向け、そう宣言するマサル。

またもや、台から円盤が飛び出てきた。その円盤は、マサル側の陣地に滑った。学習したのか、マサルはその円盤をマレットで止めた。

不意に、マサルは口を開いた。

「なあ、お前、さ」

マサルのくせに、言葉を選ぶような口調だった。

「なに？ ハンデはあげないよ？」

僕がこう軽口を叩くと、マサルはこう返した。

「月本と、喧嘩したんだって？」

思わず硬直する僕。そして、喧嘩なんかしてない、と言おうとした瞬間、不意にファンファーレが響いた。見ると、電光掲示板の表示がいつの間か1-1になっていた。あれ、とばかりにマサルの手元を見遣ると、既に円盤はマケットの下には無かった。

きつと、僕の気が逸れた瞬間を狙って、マサルが円盤をゴールに叩き込みやがったのだ。

「おい！ マサル！ 不意打ちは卑怯だよ！」

僕の文句を、マサルは聞き流す。

「さあね、しーらない」

「…コノヤロウ」

「ま、冗談はさておき、だ」マサルは続ける。「月本と喧嘩してるんだろ？」

「喧嘩じゃない。でも、僕が一方的に怒らせたみたいだ」出来るだけ平静を装いつつ、僕は続ける。「ちよつと酷いことを言っちゃったんだ。でも、悪気があったわけじゃない」

「悪気、ね」マサルは困ったように笑った。「悪気があってあんなことを言ったのなら、俺はお前を殴ってるところだけだな」

「何を言ったか、知ってるの？」

円盤が飛び出して、僕の陣地に着陸した。それを僕は弾く。けれど、芯に当たらなかったのか、いまひとつ力が伝わりきらず、へ口



へ口な円盤がマサルに返った。

マサルは、なははは、と呆れたように笑いながらその円盤を難なく返す。その円盤は、僕を守るゴールに吸い込まれた。また、マサルのためのファンファーレが響いた。

「ああ、月本のケータイ番号知ってるからさ。月本から聞いたよ」

「やつぱり、まずいことを言ったよね」

「でもさあ」マサルは首を傾げた。「なんでお前、月本に“僕に寄らないで”なんて言っただ？ あんな言葉、お前じゃなかったら、悪気があるようにしか聞こえないぞ」

どう答えよう？ 僕は思った。

僕にしか見えない女の子がいて、その女の子がどうしたわけか僕と月本さんが仲良くしているのが気に食わないらしい。それで、月本さんと接触しようものなら格闘ゲームもびつくりの猛ラッシュを仕掛けてくるものだから、“寄らないで”ってなったんだ。

…なんて言ってみろ。きっと信じてもらえないし、笑われる。

また、円盤が僕の陣地に滑り込んできた。

円盤を叩くのと同時に、僕は言った。

「色々あるのさ」

けっきょく、誤魔化すことにしたのだ。

僕の放った円盤は、マサルのマレットに当たったあと、ゴールに吸い込まれた。電光掲示板は2-2と表示が変わり、僕のためのファンファーレが盛大に響いた。

「色々あるのか。大変だなあ」

マサルは、間延びした声で応じた。けれど、その言葉には揶揄や非難の色はこもっていなかった。本当に、“色々ある”という言葉額面どおりに受け取り、そして“大変だなあ”と応じている。よく言えば飄々としている、悪く言えば適当なマサルの性格だけれど、こういうときには本当に助かる。

けれど、僕のそんな気持ちを知ってか知らずか、マサルは言葉を投げ超越した。

「でもさあ、そういう“色々”っていうのは、説明しなきゃ周りに伝わらないもんさ。それって、まずくねえ？」

「あんまりそうは思わないけど？」

また、円盤が滑り落ちた。その円盤をマサルは叩いた。その円盤を僕は叩き返す。今度はけっこうラリーが続いたのだけれど、その途中、マサルがまた口を開いた。

「まずいんだよ」

余りに真面目な声だった。あのマサルの声なのか、と疑いたくなるほどに。僕が黙って円盤を跳ね返すと、マサルはそのままの調子で続けた。

「だって俺たちは、一つの世界で生きてるんだから。この世界は、俺もお前も、月本も弥生も藤島も、そのほかに挙げればキリがないほどに沢山人がいる。その人たちがいっぱいいる中じゃあ、自分の心の内を形にしないとダメなんだ」

「…仮に、だけどさ、一人で生きる、っていう選択肢は無いの？」

「無いね」マサルは言い切った。「だってそうだろ？ お前は一人じゃないんだから。お前は、一人ぼっちになりたいのか？」

僕はアクションを起こせなかった。この会話中、跳ね返し合っていた円盤は、僕を守るゴールに滑り込んだ。マサルは、ファンファ―レにも構わずに続ける。

「俺さあ、子供の頃、親が居なかった時期があるんだ」

「え？」突然の告白に、僕は戸惑った。

「小学校の高学年の頃だったかな、オヤジが脳梗塞で倒れたんだ。で、お袋がオヤジの看病に病院に泊まってた時期があつてさ。元々ウチの親って、駆け落ち同然に結婚したから親戚と疎遠でさ。しかも、俺、一人っ子だったんだよな。だから、数ヶ月一人で家にいたんだ。しかも、タイミングが悪いことに夏休み。友達も皆帰省しちゃったり遊びに行っちゃったりしてたし、そもそもその当時、俺、友達が少なかったからさ。結局、夏休み中は一人だった」



#### 427号室の怪【13】（後書き）

##### 【蛇足】

マケット：エアホッケーの円盤を打つ、円形の道具のこと。テニスでいうラケットに当たる道具ですね。

##### 【蛇足の蛇足】 9 / 11

すいません。「エアホッケーの円盤を打つ、円形の道具」は“マケット”ではなく、“マレット”です。謹んでお詫び申し上げます。

## 427号室の怪【14】

僕は、何も言えなかったし、台から出てきた円盤を弾くこともできなかった。マサルもそういう家庭環境だったなんて、初耳だったし意外だったのだ。だって、そういう影みたいなものがないから。

「夏なのに、家の中はひんやり冷えてるんだよな。本来いるはずのものがいない、っていうだけで、ものすごく怖いんだ。家の中に横たわる空白、ってヤツが、迫ってくるみたいでさ。そういう体験をしたことないヤツは“一人だから気楽だ”って言うかも知れないけど、一人はやっぱり怖いもんだ」

けっきょく。マサルは続けた。

「あのとき、“人は一人じゃダメなんだな”って教わった気がする」僕は、円盤を打った。

マサルは、その円盤を難なく返す。

「お前はさ」マサルは言った。「一人になっちゃダメだ。この世界を見渡せば、確かに自分ひとりだけで生きていける人間も居るのかもしれない。でも、お前は、そうじゃないだろ？」

「ごめん」ようやく僕は口を開いた。「実は、それが判らないんだ」「そっか」

僕はまた円盤を打った。その円盤を、まるでパンチでも繰り出すようにマサルは弾いた。そしてその円盤は、ものすごい勢いで僕を守るゴールに入っていた。入った瞬間、まるでガラス細工を割りつけたようなガシャン！という、とんでもない音が響いた。

「そりゃあ、甘えだろ」

「え？」

マサルは続けた。「一人で生きていけるヤツは、お前みたいに悩んだりしないよ。だって、一人で生きていけるヤツっていうのは、人に興味がないんだから。でも、お前は悩んでる。つまり、結局お前は、都合のいいときだけ“一人でいいんだ”って引きこもって、

都合が悪くなると“一人じゃ生きられない”ってわめくんだ」

「違うよ」

「いいや、違わないね」僕の言い分を、マサルは封殺した。またもや、ファンファーレを無視して。「確かに、皆と足並みを揃えるのは大変だ。100%自分本位には生きられないから。でも、俺も前も、人と関わらないとダメな人間は、なんとか足並みを揃えるしかないんだよ。そして、出来るだけ自分の意見を声高に叫ぶしかないんだよ」

言っていることは判る。でも…。

「僕は、どうしたらいいんだよ」僕は訊いた。

「さあな」

「さあな、って何だよ！　ここまで怒っておいて！」

「お前、勘違いしてる。俺は怒っているんじゃない。勧告しているんだ。でも」マサルは不意に普段のにやかな笑顔を引つ張り出てきた。「オレとしては、まずは月本に謝ってほしいな。で、どうしてそういうことを口走ったのか、理由を話すべきだな」

「…その理由が、相手にとって到底信じられないような理由でも？」

「

「ああ。そうだな」

突然、エア・ホッケーの筐体から、今までにないファンファーレが鳴り響いた。どうやら、時間切れらしい。得点板には、赤い数字で4-2と書かれていた。マサルの勝ちだ。

「あらら」マサルが元の声色に戻った。「もう終わりか。もう一回やるか？　この一回は、なんだか話し込んだから身に入らなかったし」

「…おう！」

結局このあと5回対戦して、5回とも僕が勝った。

「お前、強いなあ」

マサルが、呆れたとでも言いたげな口調で僕に声をかけた。

僕は謙遜する代わりに、マサルに訊いた。

「なあ、マサル、月本さんの家って、どこにあるんだ？」

この言葉を聞くや、マサルはこれ以上ないほど微笑んで、待つてましたとばかりに言葉を継いだ。

「ああ、それはな……」

マサルに訊いたとおりに座山の街を歩くうち、ビル群はいつの間にか消えうせ、いつの間にか閑静な住宅街に変貌していた。座山というところはターミナルションとしての性格と、東京のベツドタウンとしての性格を持ち合わせているのだ。だから、少し歩けば住宅街に入る。

けれど、住宅街とは言っても、新興住宅地のように区画整理されてはいない。古くからある道を残したまま、古い家を壊し、その上に現代住宅を建てている、そんな街並だ。

こういうところは、先達が居ないと迷ってしまう。けれど、今の僕には先達がいなかった。

月本さんの家の行き方を聞いた後、不意にマサルは思い出したかのように言った。

「あ！　しまった！　人と約束があるんだった！　…スマン、月本の家へはお前だけで行ってくれ！」

と、どこまでも唐突に宣言し、マサルは座山の喧騒に消えたのだ。　　  
　　つた。　　そもそも、今日は僕と遊ぶ予定だったはずじゃないのか、と　　  
　　不審に思ったけれど、その疑問が口から出る前にマサルは僕の前か　　  
　　ら姿を消していた。

と、いうわけで、座山の住宅地を一人さ迷い歩くことになった僕なのだった。

でも、住宅地、っていうのは静かだ。

午前の11時くらいの頃だったと思ったけれど、子供の喧騒も、主婦が布団を叩く音も聞こえなかった。まるで、曇りという天気が街の活動を凍りつかせているかのようなだった。そして、何も無い空間には、ツンという冷たさだけが残る。

『ふふ、いい感じね』

ミス・エマーデイルが僕の横で呟いた。

「だろうね」

不機嫌に返すと、本当に嬉しそうにミス・エマーデイルは微笑んだ。

『ええ。この風景、まさに私の住む世界にそっくり。いいえ、私とあなたが住む世界に、だけれど。誰もいない。けれど、誰もあなたのことを無視しない。あなたの意見に異を唱えない。だって、その世界には、あなたと私しかないんだもの』

「それが」僕は歩きながらも訊いた。「倦怠？」

『そう』

ミス・エマーデイルは不意に足を止めた。僕も、つられて足を止めた。

足を止めた瞬間、妙な違和感を覚えた。まるで、行ったことのない街なのに“この光景、見たことある”って感じたときの、居心地が悪い気分に似ていた。あるいは、グルグルその場で回ったあとに道を歩いているかのような足のもつれにも似ていた。魚眼レンズで世界を覗き込むような感覚にも似ていた。そして、魚眼レンズで歪んだ世界の真ん中に、ミス・エマーデイルはただ立ち尽くしている。「でも！」僕は負けまいと少し強い口調で言った。「僕は一人じや生きていけない。マサルだってそう言ってた。僕は皆と生きたいんだ」

すると、ミス・エマーデイルはくすくす、と鈴の音のような笑い声を発した。でも、歪んだ世界の中で、ミス・エマーデイルの瞳だけは、僕の事を捉えて離さなかった。

『それは、誰に対する嘘？』

「え？」

彼女の言葉は、いつも僕の心の一番柔らかいところ、あるいは一番無防備なところを衝く。鎧に守られたものと安心しきっているときに、その隙間から矢を射すくめられるかのように、彼女の言葉は



的確だった。

『僕は一人じゃ生きていけない？　今まで一度も一人で生きていないあなたが、どうしてそんなことを言えるのかしら？　僕は皆と生きたい？　そんなの、マサル君の借り物の言葉じゃない。あれは確かにマサル君の言葉ではある。でも、あれはあなたの言葉ではないはずよ？』

僕は、答えることが出来なかった。

『そうよね？　あの言葉は、あなたが心の奥底から紡いだ言葉じゃないはずよ？　だってあなたは依然として、倦怠を求めている。そして、私を求めている』

ここから逃げ出したかった。でも、僕の体は枷をはめられているかのように、ちっとも動かない。

『じゃあ、なぜ、あなたは嘘をついたのか』ミス・エマーデイルは、まるで獲物を狙う猛禽のように、じわじわと僕を追い詰め始めた。

『理由は簡単。　“独りでいる状態は好ましくない”　っていう社会が定めるルールに、あなたが従いたいからに過ぎないわ。だってそうでしょ？　一人でいることの何が悪いというの？　あくまでそれは好みの問題のはずなのに』

彼女の言うことに、まるで否定できなかった。

皆はどうかわからないけれど、僕は確かに独りを求めている。

だって、誰かと関われば、当然のことのように悩む。そして、当然の事のように譲歩して、当然の事のようにおもねらなくてはならない。時には誤解され、時にはぶつかって、悩まなくてはならない。他の人はどうか知らないけれど、僕にとっては痛いんだ。たまらなく。その痛みで二度と立ち上がれなくなりそうになる。

でも、そんな僕でも、“独りじゃまずい”　っていう気持ちがある。その気持ち、ミス・エマーデイルの言うように、“独りでいる状態は好ましくない”　っていう社会のルールに従いたい”　という理由に基づいているのか、それとも他の原因によるものなのか、僕自身判別できなかった。

ミス・エマーデイルは僕の耳元に寄った。そして、呟いた。

『なら、いいじゃない。社会のルールなんて、破っちゃえばいいじゃない。だって、あなたは独りを求めているんだから。ねえ、違う？』

彼女の言い分に、違ふところなんて見つからなかった。僕は、空を向いて目を閉じた。空を向いた瞬間、真つ黒な雲が、一瞬歪んだ。それが、僕の周りで渦巻いている奇妙な感覚のせいなのか、それとも涙のせいなのかは、まるでわからなかった。目を閉じた闇の中で、ミス・エマーデイルは僕に囁きかけた。

『私の、勝ちね』

## 427号室の怪【15】

そのあと、しばらくの記憶が定かではない。

時間経過や周りの状況などを考えるに、僕はしばらくどこかをうろつき回っていたようだ。けれど、月本さんの家にまで足を伸ばすことはなかったようだ。途中雨に降られたらしく、服はじつとりと濡れていた。

そして服に濡れた僕は電車に乗り、平和畑まで帰ってきたらしい。そして駅前の駐輪場の自転車を雨だというのに漕ぎ出したようだ。

僕の記憶が回復しだすのは、自転車を漕ぎ始めた頃からだ。けれど、とは言ってもその記憶は断片程度のものだ。

雨に沈む農道を、黙々と自転車を漕いでいる。農道の横で、まだ成長していない苗たちが雨に打たれて沈み込んでいた。不思議なもので、そのときの感覚や心持は一切覚えていない。ただ、見たものだけを黙々と記憶する僕がいた。

やがて前方に、赤や黄色などの色が躍る看板が唐突に現れた。雨だというのに、その看板だけは存在感を放っていた。

「ああ、激烈屋か」

僕は呟いた。そして、呟いた瞬間に、ようやく喋る、という行動を取れるということを思い出した。ようやくこの頃、僕の思考も回復しつつあった。

雨の中に浮かぶ激烈屋は、とにかく毒々しかった。人と関わることなしには存在できないもの。その代表のようにさえ思えた。けれど、なぜかは今になっても判らないけれど、自転車を激烈屋の駐車場に滑らせ、停めた。

店の中に目を遣った。店の中には案の定、客は誰もいなかった。

いつぞや話をした店員さんが、つまらなそうな顔をして外の景色を眺めているばかりだ。

僕の体に反応して、自動ドアが開いた。その瞬間、ピンポンというつまらない音が響いた。

「いらっしやいませ…っておい！ どうしたその格好は！」

店員さんに指摘されてはじめて、僕は自分の服がとんでもなく濡れていることに気づいた。まるで洗濯したばかりの洗濯物のように水が滴っている。

「おい、ちょ、ちょっと待て！」

店員さんは奥に消えたかと思うとすぐに戻ってきた。手には白いバスタオルが握られていた。

「これ、使え」

バスタオルが、投げ寄越された。いいんですか、と訊くと、店員さんは苦笑いを浮かべた。

「いや、その格好で店に入られるほうが迷惑だ」

わかりました、と答えて、僕は頭を拭いた。手を拭いた。胸を拭いた。そして足を拭いた。けれど、全身を包む水っぱさと、僕の周りに広がる倦怠だけは、どうしても振り払うことが出来なかった。

「おい、どうした」

僕のほうをずっと見ていた店員さんは、僕にそう訊いてきた。

「え？…何がですか」

僕が訊くと、店員さんはレジの奥にあるドアを指した。

「ま、とりあえずこっちに入れや」

店員さんの指した先には、店員が使っているのだらうロッカーやハンガー、そして発注などに使うのだらう電話やコンピュータが置かれた部屋があった。きつと、更衣室兼事務所のように使っている部屋なのだろう。

店員さんは僕に椅子を勧めると、部屋の真ん中に置かれた灯油式ヒーターに火をつけてくれた。椅子に座りながらも、僕はそのヒーターに赤い火が灯っていく様子をただただ見ていた。

「あの、店、いいんですか？」

「はは、大丈夫だよ」店員さんは笑った。「客が入ったら、ピンポイントで鳴るようになってるし。それに、こんな雨の日に、客なんて来やしないさ」

僕の体に、ヒーターの熱が届き始めた。少しずつ、冷たかった体を温めていく。そして、服の水気が少しずつ僕にさよならしてゆく。座りながら丸くなっている僕を、店員さんは下目使いで眺めつつ、両手を組んで立っていた。

「あの、店員さん……」

「ああ、悪いな」店員さんは言った。「俺はこの店のオーナー兼店長なんだ」

「すいません」

謝ると、不意に“店員さん”は笑った。なんで笑うのか、その理由を聞くと、答えてくれた。

「ま、とは言っても、俺以外に店員は三人しかいないから、あんまりオーナーらしくはできないけどな」

「そうなんですか、ええと……オーナーさん？」

僕が“店員さん”を何て呼ぶのか悩んでいるのが判ったのか、彼は自分の左胸を指した。

「名前で呼んでくれればいいよ」

彼の左胸には、名札がぶら下げられていた。その名札は写真付きのもので、今の彼よりも少し幼い顔の横に、平仮名で「まるめ」と書いてあった。

「ええと……まるめ……さん？」

僕が上手く漢字変換できていないことを見透かしているのか、“まるめさん”は説明した。

「丸いに目玉の目で丸目。珍しい苗字だろ？」

「はい、珍しいですね、丸目なんて」

けれど、“丸目”という苗字、どこかで見たことがあったな、とデジャヴに襲われている僕なのだった。けれど、そんなことはとり

あえず置いておいて、訊いた。

「丸目さんって、どうしてこんなトコで店をやっているんですか？」

「

「こんなトコとは挨拶だな！」丸目さんは語尾を荒げたけれど、

それはどこか滑稽さを狙っているように見えた。だから、余り怖い感じはしなかった。「ここは、元々オヤジとお袋の土地だったのさ」

「オヤジ？ お袋？」

「ああ。俺の家は元々ここら辺の農家なんだ。んで、ここの土地も本来は親父の土地だった。高校を卒業してからは家業の手伝いをするはずだったんだけどさ、どうしてもそれがいやでさ」

「なんでですか？」

「農業なんて、つまらなかったから」丸目さんは言った。「いや、農業を否定するつもりはないよ。きつと広い世の中だ、農業にとんでもないやりがいを持てる人間もいるんだろう。でも、俺はそうじゃなかった。子供のころから田植えとか草刈とかやらされてみる？

きつとお前だっていやになる」

そうかもしれない。僕は思った。

「で、だ」丸目さんは続ける。「高校を卒業してから、親父に頼み込んだ。“後払いで土地を少し売ってくれないか”ってな。親父、オッケーしてくれたよ。んで、その土地に俺はコンビ二を立てたんだ。それが、ここ、激烈屋なんだ。実は俺、平和畑学園男子高校、今は熱血学園高校とか言うんだっけか？ あそこの卒業生なんだ」

「え？ 卒業生？」

「ああ。家があんなに近いのに、寮に入れられたのにはさすがに驚いたけどな。…ほら、あの高校、周りに何も無いだろ？ だから、高校生が気軽に使えるようなコンビ二を作ったんだ」

そんなことはさておき、と丸目さんはその会話を打ち切った。

「何があつたんだ？」

「え？ なんでですか？」

「そりやお前、そんな浮かない顔をしてるもんだからさ」

丸目さんに指摘されてはじめて、自分の顔がどういう風に周りに映っているのかを理解した。僕は、頬に手を遣った。

「なんだ、女に振られたか？ それとも友達と喧嘩したか？」

「友達と、喧嘩しました」僕は白状した。

「そうか。苦しいよな」

「…はい」

「でも」丸目さんは言った。「苦しいからって、投げるなよ」

それってどういうことですか、と聞く前に、丸目さんは答えを喋りだした。

「人間、楽なほうに流れがちなものだからな。“まあいいや”で投げちゃうことだってできる。でも、投げちゃダメだ。経験者は語る、ってヤツだ」

「経験者？」

「俺さ」

丸目さんは自分の胸を親指で指した。けれど、その顔は、えもいわれぬ負の感情が押し隠されているように感じた。

「ああ、俺、卒業前に友達と喧嘩しちゃってな。で、仲直りしようとしたんだけど、結局出来ないままお別れしちゃったんだよなあ」

「後悔、してますか」

「後悔してるに決まってるさ」頬を掻きながら、丸目さんは言った。

「だからこうしてお前に話してる。いいか、友達と仲直りしろよ…」  
その、瞬間だった。

ピンポン。

自動ドアが開く気配がした。

「あゝはいはい、いらっしやいませ！」

丸目さんは売り場の方に駆け足で出て行った。僕は丸目さんの後ろ姿を目で追いながら、あの人は退屈していないんだろうか、とふと思った。

## 427号室の怪【16】

僕にとっては農業も激烈屋も、同じく退屈な仕事にしか思えなかった。でも、丸目さんは農業を嫌い、暇なコンビニを設立した。丸目さんにとって、農業とコンビニを分かťものが何なのか、僕には釈然としなかった。

声だけしか聞こえないけれど、丸目さんは激烈屋の店員として今入ってきたお客さんの商品をレジ打ちし、お金を貰い、そして独特の節回しのありがとうございました、までの一連の流れを慣れた感じでやっていた。お客さんが出て行ったのか、ピンポン、と電子音が鳴った。

「おい」

売り場の方から、丸目さんがぬつと頭を出した。

「今、雨が上がったみたいだ。でも、またそのうち降るかも知れないから、今の内に帰ったほうがいいと思うぞ」

どうやら、服も乾いてきたようだった。その意味でも、頃合と言える。

「すいません、ありがとうございました」

「ああ。あと、あそこ」丸目さんは事務所の奥に乱雑に置かれた傘を指した。「あの傘、持っていていけ。雨に降られると面倒だろ」

いいんですか？ と訊くと、丸目さんは笑って応じた。

「いいさ。あれ、一週間以上問い合わせがない客の忘れ物なんだ。あんなの、廃棄処分にするしかないから。むしろ、持って帰ってくれたほうがコストダウンになるから助かる。まったく世知辛いよなあ、ものを捨てるのにもコストがかかるなんてさ」

「それじゃあ、頂いていきます」

丸目さんの愚痴をかわしつつ、僕が傘を手に取りうとしたとき、また丸目さんは言った。

「あと、そのヒーター、消して行ってくれ」



「はい」

僕の返事を聞き終えると、丸目さんは首をぬつと引つ込めようとした。けれど、僕がそれを手で制した。丸目さんは怪訝な顔を浮かべて僕の顔を覗きこんだ。

「あの、丸目さん、また、ここに来ていいかな」

「ああ、もちろん。この通り、この店は暇だからな。こうして話す相手が欲しいんだ」

比較的キレイな黒い傘を選び、ヒーターを消した僕は、激烈屋の後にした。激烈屋の外は、まるで神様でも降りてきそうな天気だった。雲と雲を割って、光が僕の頭上に降り注ぐ。その光は激烈屋の毒々しいカラーリングも、遠くの山々の輪郭も、横に停めてある自転車も、そして僕の体の輪郭さえ奪っていた。

僕は、自転車に跨ると、ハトムネ寮に向かって漕ぎ出した。

その日の夜のこと。

夕飯も食べ終わり、どうしたわけか毎日のように僕の部屋にやってくる井上先輩がその日に限って来なかったので、比較的まったりと部屋で過ごしていた。窓の外にふと目をやると、部屋の光に反射して雨粒が落ちていくのが見えた。きれいだったけれど、どこか不吉な印象を持った。

「なあ、ミス・エマーデイル？」

部屋の床に寝転びながら窓の外を眺めていた僕は、横に座るミス・エマーデイルに訊いた。

『なにかしら。もしかして、キスしてくれる気になった？』

「ちがうよ！」

『それは残念』

「……なあ、聞いていいかな？」僕は、ミス・エマーデイルの受け答えを待たなかった。「幽霊って、実在するのかな？」

その質問にキョトンとした顔を見せた、ミス・エマーデイル。まるで、何かを思案しているようだった。けれど、すぐに口を開いた。

『いないわ』

キツパリと、彼女は否定した。

「どうしてそう思うの？」

あまりに彼女がはつきりと否定するものだから、その本意を聞きたくなつたのだ。すると、彼女は答えた。

『だって、あなたたち人間が仮定する“魂”なんてものが実在しないんだもの。だって、人間というのは、有機物の塊でしかないから。そしてその有機物の複合体の中に、“魂”なんてナンセンスなものを仮定する理由が思い浮かばないもの。そして、そんな仮定の段階からして怪しいものが、飛びまわるなんてナンセンスの極みよね』  
「じゃあ、君はなんなんだ？ 僕からしたら、ミス・エマーデイルだって十分に説明不能なものんだけど？」

『いいえ、それは違うわ』と、ミス・エマーデイル。『確かにあなたは有機物の複合体。そのあなたに、“魂”を仮定することは出来ない。そこまでは平気かしら？』

「うん」

よくは判らなかつたけれど、ここで躓いたら彼女がこの話を切り上げてしまふかもしれない、という懸念があつたから、とりあえず頷いておいた。

『でも、有機物の複合体のあなたには心が宿っている。それは紛れもない事実なのよ。そして、人の心というものは、時折形を持つことがある。私みたいな“倦怠”だけじゃないわ。強い心でさえあれば、どんな感情でも体と分離しちゃうの。それは、私の立場からすれば既に知られた事実なのよ。あなたの側から見たって、私という存在を認めているんだから事実として認定されるはずよ？』

「ええと、ごめん、よく判らない」

僕の白旗に、ミス・エマーデイルは呆れたようにため息を吐いた。  
『語弊があるほどに簡単に言うわ。』

…幽霊は存在しない。けれど、私は実在する。それをあなたは受容するしかない。疑問を差し挟まず、ただそうなんだ、って信じる

しかない。そういうもののなの』

「そういうもののなの？」

『そういうもののなの』

この、ミス・エマーデイルの言葉は、427号室の幽霊の謎を解く鍵にもなったし、後に僕の運命を変えることにもなった。けれど、この会話を交わした当時は、まるでそんな認識はないまま、「へえ、そういうものなんだ」とって聞き流していた。

そういえばあの時、ミス・エマーデイルはいやに嬉しそうに微笑んでいた。けれど、その笑顔の裏に彼女なりの策略が隠れていたなんて、知る由もなかったのだ。

今日は、メールボックスにメールが来ていた。でも、件名を読んだ瞬間、開く気が失せてしまった。結局、中身を読まずにパソコンの電源を落とした。

次の日、僕はハトムネ寮の資料室にこもった。

藤島君を誘おうと思ったのだけれど、既に外出していたので叶わなかった。でも一方で、外出してくれてよかった、と胸を撫で下ろしている僕が確かにいて、その事実には愕然とする一幕もあった。なんて嫌なヤツなんだろう、僕は。

相変わらず、資料室は埃っぽかった。けれど文句を言うわけにはいかない。ここにあるはずだ、という予感もあった。

しばらく資料室を漁った。卒業文集をどけたり、意味深に置かれたダンボールを開いた。棚の上にある缶箱を下ろそうとしてバランスを崩し、思いつき転んで、ミス・エマーデイルに大笑いされたけれど、めげずに探す。僕の探しているものは、あるとするならば管理人室か、ここにある。けれど、あの閑散とした管理人室のこと、あれは置いていないだろうな、という目算も立った。

そうやって探し続けること30分、ようやく部屋の隅に置かれたダンボールから、例のあれを見つけた。

例のあれとは、「ハトムネ寮の名簿」だ。

どういう組織にも、名簿というものはある。組織というものを形作るのは、その構成員なのだから。ハトムネ寮もその例に漏れず、しつかり名簿を残す。しかも、ウチの寮の場合、どの部屋に誰が入っているか、という情報も書き入れる。たとえば僕の場合、僕の名前の横に、僕の部屋番号である401という数字が書き加えられる仕組みになっている。それは、今年、入寮のときにそういう形式で書いた、という僕の経験に裏打ちされているわけだけれど。

では、なぜ僕がそんなものを探していたのか。

おとといのミーティングの際、427号室の幽霊というのは、15年以上前には存在しなかったらしい。しかも、その当時開かずの間の427号室は普通の部屋だったという。そこで、僕は考えたわけだ。「もしかして、427号室が開かずの間になったのと、幽霊話が出るようになったのは、ほぼ同時期なんじゃないか」と。いや、誰でも考えそうな話ではあるけれど。

とにかく、この幽霊話を解き明かすに当たって、427号室が開かずの間になったその瞬間を特定するという行為が何らかの糸口になるかもしれない、という予感があつたし、打算もあつた。

『ふーん、考えたじゃない？』

はやし立てるような口調の、ミス・エマーデイル。

「僕だって、頭が悪いわけじゃないんだ」

頭を自分の右手で小突いてから、僕は手の中にある名簿に目を落とした。

そうやって調べてみたところ、427号室は、10年前まではしつかり使われていた。けれど、9年前の四月に作られたと思しき名簿では、既に427号室の入寮者はいなかった。つまり、9年前の四月から427号室は開かずの間だったのだ。

「九年前……」

僕は、九年前の卒業文集を手についた。前回のUFO騒動のときにも、いいネタ元として活躍してくれた卒業文集だった、というこ

ともあり、もはやセオリー気味に卒業文集に頼る僕なのだった。

## 427号室の怪【17】

けれど、そんな僕の期待は、見事に裏切られた。

なんと、まるで幽霊のゆの字も出てこなかったのだ。

九年前の卒業文集には、「こんな素晴らしい高校、卒業したくないよ」式の文章ばかりが並んでいて、幽霊を見た、とかそういう類の情報は出てこなかった。

「むむむ……」

『あらあら、面白いことになってきたわね』

ミス・エマーデイルの声が、せまい資料室の壁にぶつかっては僕の耳に迫った。

メールボックスには、新着メールが入っていた。その件名には“母より”と書かれていた。けれど、僕はそのメールをゴミ箱に移した。

「で？ 結局サキに謝りに行かなかったわけか」

次の日の休み時間、屋上にて、弥生さんにそう訊かれた。その日の空は、薄曇りだった。

「うん、行けなかった」

そう呟いた僕にあてつけるように、弥生さんは月本さんの近況を話し始めた。

サキ、ようやく学校には来てるんだ。でも、部活には出ない、つて。ちょっと話したんだけどさ、普段の元気がなくてさ、なんだかいたたまれなかったわよ。

「…どうしろ、っていうのさ」

話を先に促した僕を、弥生さんは笑った。

「それくらい、アンタだって判ってるでしょ」  
認めるしかなかった。

「…判つてる」

「じゃあ、やるべきことをやりなさいよね。まったく、アンタらしくもない」

僕らしくもない？ 僕は周りからはどう見えているのだろう？

僕は、やるべきことがわかっていながら、結局何にも出来ないヤツでしかないのに。

そう思いを巡らしている僕に、弥生さんは何かを投げ寄越した。

その四角い何かは、淡い放物線を描いて僕の胸にぶつかった。痛くはない。でも、なんでだろう。ものすごく痛かった。何度も言うけれど、痛くはなかった。でも、胸の内側からせりあがるような痛みには僕はただ戸惑った。

その四角い物は、僕の胸に当たると床に落ちた。反射的に拾い上げてはじめて、それがタバコであることがわかった。

「あげる。なんだか、その銘柄、飽きちゃった」

「…そう」

その銘柄は、僕に合わせて買ってくれていたタバコのはずだ。手の中にあるタバコに目をやりながらもぼおっとしている僕に、弥生さんは言った。

「もし、そのタバコがなくなるまでにサキと仲直りしなかったら、きっと私はアンタの事を許せないと思う。だって、アンタには仲直りできるだけの力があるもの。仲直りする力のない人が、そうやってグズグズしているのはしょうがないことだと思う。でも、アンタみたいに力があるのに出し惜しみするヤツ、私は嫌い」

そう言い捨てると、弥生さんは屋上から消えた。

その後ろ姿を目で追いつつ、僕は弥生さんの投げ寄越したタバコに手を遣った。箱の中にはタバコが三本と、百円ライターが一本入っていた。タバコを三本吸う間。つまるところ、弥生さんが僕に与えた猶予、それがタバコ三本分なのだ。

僕は、一本目に火を点けた。そして、一口だけ思いっきり吸った。なんだか煙臭くて、不味かった。思わずタバコを投げ捨て、足でも

み消した。

白い煙を天に届かせるばかりに吐き出すと、僕も屋上を後にした。

『あらあら、珍しいじゃない？』

「なにが」

不機嫌な声で返すと、ミス・エマーデイルは僕の横で髪の毛を掻き揚げて微笑んだ。その瞬間、カモミールの青い香りがあたりに広がった。その香りは、どこか眠りを誘う香りだった。

『最近、放課後も部活動とかで学校にいるのに』

「いるのに、何？」

さらに不機嫌そうな声を寝転びながら放つ僕。その声にさらに機嫌を良くしたかのようにミス・エマーデイルはさらに弾んだ声を発する。

『こんな時間に、寮にいるなんて』

結局、弥生さんの言葉が心の澱になってしまい、部に顔を出しづらくなってしまった。かといって、学校をぶらぶらしているのもアレなので、自分の部屋に帰ってきたのだ。部屋の天井の、木目が何か見たことのない化け物の顔のように僕を見下ろしていた。

『なつかしいわね、この学校に入ったころのあなたが、まさにこんな感じだった』ミス・エマーデイルは、まるで生き別れた恋人を歌う吟遊詩人のように言葉を継いだ。『毎日毎日、つまらなそうに学校に行つて、つまらなそうに寮に戻ってくる。そして、つまらなそうにゲームをやつて、時間になればつまらなそうにご飯を食べるの。そして、つまらなそうに風呂に入つて、つまらなそうに布団を敷いて、つまらなそうに眠りに落ちる。そして、つまらなそうに夢を見る。そんなあなたが、ようやく、帰ってきた』

「…そんなわけ、あるか」

『そんなわけあるのよ』ミス・エマーデイルは珍しく、語尾に感情が籠っているようでさえあった。『私にはわかる。あなたはまた、どんどん倦怠に近づいている。あなたの中にあるエマーデイルが、



どんどん成長しているのが判るのよ』

「エマーデイル？ 僕の中にある、エマーデイル？」

僕の言葉に、彼女は答えた。

『そう、エマーデイル。あなたの中にある私の故郷。倦怠の吹きさぶ、懐かしいあの谷。私はあの素晴らしい世界を、あなたの心全体に広げたい。そして、そんなあなたと私は生きるの。考えるだけで嬉しいわ』

もう、考えるのも億劫だ。彼女の語る言葉は、よく言えば深遠、悪く言えば意味不明。どっちにしろ、僕の事を眠くさせる。思考を奪う。そして、僕から翼を密やかに奪っていく。

「僕は」

思わず、声を上げた。けれど、その声は速やかに遮られた。

『何も考えなくていいのよ』ミス・エマーデイルは釘を刺した。『だって、考えるだけ苦しいでしょう？ …… 苦しいことは我慢しないでいいのよ』

「そうやって、逃げろ、って？ 現実から？」

『逃げる？』ミス・エマーデイルは僕の言葉を鼻で嗤った。『その言葉を選んだ時点で、あなたは世界に毒されているのよ』

「どういうこと？」

すると、ミス・エマーデイルはさらに言葉を継いだ。

『だって、“逃げる”って言葉は、負けた者が行なうことよ。じゃあ訊くけれど、“負け”ってなあに？ …… あら、わからない、って顔をしてるわね』ミス・エマーデイルは僕の顔を完璧な笑顔を湛えつつ見下ろした。『“負け”っていうのは、誰かと誰かが戦って、退けられてしまった側の状態を指す言葉のはずよ？ さて、ここで問題』

ミス・エマーデイルは僕を指差した。

『そもそもあなたは、誰かと争っていたのかしら？』

「え？」

逃げる、という言葉の裏には“負け”という言葉が隠れている。

そして、負ける、という言葉の横には、確かに勝者の姿がチラつく。そして、誰かと誰かの争い、何かと何かの争いが示唆されている。…僕は何気なく、「逃げる」という言葉を使った。でも、そもそも僕は、誰から逃げるのだろうか？ 何に負けたのだろうか。どこで、戦っていたのだろうか？

『そう、これがこの世界の恐ろしさなの』彼女は続ける。『誰と戦っているわけではない。誰に負けたわけじゃない。どこで争ったわけでもない。でも、どうしてかしら、この世界はあなたに“勝負”を強いる。あなたの意思に関係なく、残酷にね。けれど、それはあくまでこの世界で生きるためのルールに過ぎないの』

「ルール？」

『そう、ルール。けれど、そのルールは、“この世界で生きる”という条件で適用されるルールに過ぎないわ。だから、倦怠の世界に入りさえすれば、そんなルールは適用されない』

「でも、死ぬのはイヤだ」

『あらあら？ 死ぬのがイヤ？』まるで、赤ん坊の駄々に手を焼く母親のように、どこか悠然とミス・エマーデイルは続けた。『でも、あなたは死んだことがない。つまりは未経験な出来事のはずよ？ じゃあ訊くけれど、どうして一回も経験していないことを恐れるの？』

「それは」

『そうよね、それはただの食わず嫌い』ミス・エマーデイルは僕の言葉を遮って続けた。『ただ単に、やったことがないから怖いだけなのよ』

「それは違うよ、ミス・エマーデイル」

ようやく、僕は反論できた。

『なんですって？』

#### 427号室の怪【17】（後書き）

すいません。本頁にて環境依存文字を使ってしまった。その箇所を直させて頂きましたのでご了承ください。

## 427号室の怪【18】

困惑するミス・エマーデイルを横目に、僕は立ち上がった。頭のモヤモヤを振り払うように、二、三回頭を振ると、視界の隅のミス・エマーデイルもまたブルブル揺れた。モヤモヤを振り払った気になりながら足を出そうとした僕に、ミス・エマーデイルは言葉を寄越した。

『どこに行くの？』

まるで、考え抜いたかのような言葉だった。彼女のその言葉には額面どおりの意味の上、話を途中で切り上げる僕に対する非難も籠っていたし、反論をした僕への反発をも含まれていた。そしてそれらの言葉が当たり前のようになった一語に凝縮されていた。それだけに、彼女の言葉は強烈だった。でも、僕も負けるわけにはいかなかったのだ。

「座山」

それだけ答えると、僕は部屋をあとにした。

自転車に乗り、電車を乗り継ぎ、座山にまでやってきた。座山は今日も曇りだった。

座山の駅を降りると、きらびやかな店やレストランなどが群集する街をわき目も振れずに抜け、住宅街に続く道に入った。この頃になると、ようやくミス・エマーデイルも事情が飲み込めたようだった。

『ふーん、なるほど？ 結局まりもっこりさんに謝りに行くつもりなのね』

「……月本さん、ね」僕は訂正した。

そう、僕は月本さんに謝りに来たのだ。だからこそ、こうして住宅街をゆっくりとした足取りで歩いているのだ。

『でも、どうして？』

「どうして、って…」

突然、ミス・エマーデイルは僕の肩を持った。そしてそのまま、強引にその肩を引き寄せ、僕の目を覗き込んだ。彼女の亜麻色の髪が、一瞬揺れた。

『だって、別にいいじゃない。私と倦怠の世界に生きていけば、それでいいじゃない』

その瞬間、以前ここで味わったような、圧倒的な倦怠が僕に襲った。風景全体がグニャッと歪む。そして、どんどん渦を巻いていく。その只中を漂う僕に寄り添うようにして、その流れを漂うミス・エマーデイルは僕の瞳を見つめている。その瞳の黒い色のように、周りの風景もどんどん黒ずんでいく。重い空気が、僕の肩を押しつぶしてゆく。

でも、僕はそんな倦怠を振り払うようにしてミス・エマーデイルを見据えた。

「よくないんだ」

『え？』信じられない、という風に、僕の顔を見遣るミス・エマーデイル。

「だってさ、ミス・エマーデイル。僕はまだ、この世界で知り合った人たちと別れたくないんだ。僕は、皆が好きだよ。マサルも好き。藤島君も好き。弥生さんも好き。もちろん月本さんも好き。井上先輩だって好きだし、寮の管理人さんも好き。みんな皆、大好きなんだ」

『だから、別れたくない？』

「うん」僕は、大きく頷いた。

『あらあら、あなた、もう忘れてしまったのね』

間髪をいれず、そう言葉を継いだミス・エマーデイル。けれど、その言葉は話の方向を変えるに十分な横槍だった。何をだよ、と訊くと、彼女は続けた。

『あなたは一度、“人間なんかいらない”って思ったことがあったはずよ？』

その言葉は、僕の心の一番底にある古い傷をズタズタに切り裂いた。悲鳴が出そうだった。思わず地面にうずくまりたい衝動に駆られた。でも、僕は緩みそうになる自分の足を何とか立たせた。

「そんなこと、思ったことないよ」

『そうかしら』彼女は、思わせぶりに続ける。まるで、古傷を踏みにじるように。『知ってる？ 倦怠、っていうものは、この世界との不調和によってもたらされる感情だつてことを。人間という生き物は、自分の思い描いている世界と、実際の世界とにズレを感じているときにつまらないという気分を感じるの。そして、あなたは間違はなく一度、周りの世界に違和感を覚えたことがあったはずよ』  
「そんなはずはない、と思いたかった。けれど“そうなのかも知れない”という不安もまた僕を締め付ける。

『具体的に』ミス・エマーデイルは続ける。『あなたは、あなたが思い描く“人間”の形と、その実際形との間に違和感を感じているのよ。“友達”ってこうあるべきだ、“家族”はこうあるべきだ、っていう想像と、実際に接している光景が、まるで違うんでしょ？』

『そうだった。指摘されてはじめて、僕は思い至ったのだ。』

誰にも彼にも友達がいます。そして、家族がいます。そして皆、“友達”や“家族”という関係を当然のことのように受け入れ、維持している。でも、僕は疑問だったのだ。なんで、皆はそんなに容易くそういう関係を維持していけるのだろう、と。少なくとも、僕には人との関係を維持し続けることなんて出来ないし、現在おかれているような、つまらないことになってしまう。

でも。

僕は出来るだけ丁寧に答えた。

「そうだね」

『なら、諦めちゃえばいいじゃない』

「よくないんだ」

『え？』ミス・エマーデイルは頭を振った。『…理解できないわ。』

どうして？」

「僕にだって、何でかは判らないんだ。でも、僕は人と関わってきたい。人と話したい。確かに、倦怠の世界には悲しさもないのかもしれない。でも、僕は楽しさを追っていきたいんだ」

『でもそれは』ミス・エマーデイルは抗弁した。『あなたに出来ることかしら』

彼女の言葉は、まるで研ぎ澄まされたナイフのように、僕の内臓をえぐる。心をえぐる。その傷口から弱気な自分の声が漏れ出てくる。でも、負けるわけにはいかない。

「出来るんじゃない、やるんだ」

僕は言い切った。はつきりと。

瞬間、体を支配していた倦怠が、すうっと抜けていった。周りの景色も、どんどんもとの景色に戻っていく。全ての景色が色を取り戻してゆく。住宅街の窓も、傾いた電柱も、ちよつとくすんだ壁も、本来の色を思い出していった。

『ち』

ミス・エマーデイルは舌打ちした。

「舌打ちってどういうこと？」

僕の質問に、苦々しげに彼女は答えた。

『けっこう強い外圧を与えたはずなのに、それを跳ね返すなんて』きつと彼女の言う“外圧”とは、さっきまで僕を押しつぶしていた倦怠の事だろう。きつと僕の倦怠であるミス・エマーデイルはある程度僕の感情に働きかけることが出来るのだろう。でも、なんてヤツだ。

ようやく月本さんの家の前にまでやってきた。

一軒家。しかも、けっこう小洒落た、“ちよつと西洋風”とでも形容できそうな家だった。昔からここに住んでいる、という感じではなく、最近どっかの会社の中間管理職が終の棲家に建てました、という風な佇まいだった。

けれど、その佇まいがいやに印象的なのは、きっとその家の周囲が、普通の垢抜けない日本家屋に囲まれているからなのかもしれない。昭和な住宅街の真ん中に建つ、ちよつと洒落た家。どこか、滑稽だった。でも、当時の僕は滑稽さよりも、むしろ異様さを感じた。「ふふ、どうしたの？」

無言のまま家の前に立ち尽くす僕に、ミス・エマーデイルは口火を切った。

「いや、なんでもないよ。ただ、どう謝るべきか判らない」

「ふふ、やっぱりあなたは一人で生きるべきなのよ」

「いや、それはない」

僕は、ピシヤリとミス・エマーデイルの言葉を否定した。

でも、いつまでもこうやって家の前に立ち尽くしているのも不毛なのは事実だ。とにかく、今の僕に必要なのは考えることなく、一步を踏み出すことなのだから。

インターフォンに指を伸ばし、押した。ピンポン、というオーソドックスな音が、家の中で反響した。でも、中で人が動いているような気配はなかった。

もう一度押した。でも、気配がしなかった。

そういえば、月本さんの家には、明かり一つついていなかったし、駐車場と思しき空間には車がなかった。しかも、門もしっかり閉められている。思えば、人がいる気配がない。

もしかして、留守だろうか。

そう僕が諦めだしたところ、予想しない角度から声をかけられた。

「あれ？ ……どうしたの？」

振り返ると、そこにはキョトンとした顔で僕の姿を見ている、月本さんの姿があった。いつも通りの清潔そうな服を着て、健康そうな顔を僕に向けていた。その顔には眩しい笑顔の色があったものの、また顔を曇らせた。

「…何の用？ そっちから“寄らないで”って言ったくせに」  
あちゃあ、まだ怒ってる。



僕はとにかく頭を下げた。ごめん、そんなつもりで言った言葉じゃなかったんだ。あれは言葉のあやというやつで、別に月本さんのことを突き放すために言った言葉じゃなかったんだ。本当にごめん。…確か、こんな言葉をしどろもどろになりながら言ったはずだった。

## 427号室の怪【19】

すると、月本さんは、くすくす、と笑った。どこかで聞いた笑い方だった。

「うん、判った。それに、わざわざ謝りに来てくれたんだもの、受けないわけにはいかないよね。でも」

「でも？」 頭を上げて、僕は訊いた。

「ちよつと腹立たいいから、ご機嫌取りしてもらおうかな。…どこか、遊びに行こうよ」

月本さんは明るい笑顔を浮かべながら、ふふ、と笑った。僕の横にいるミス・エマーデイルは、月本さんとは対照的に不機嫌そうな舌打ちをした。

遊びに行こう、と言われても、正直な話、座山で遊んだことがあまりない。だから、どこに行ったらいいかわからない。しかも、相手は女の子だ。女の子の喜びそうところなんて、ぶっちゃけ知らない。やっぱり、最近の女の子なんだから、コーヒーシoppとかでダラダラ話するのが好きなんだろうかと考えた僕は、とにかく駅に行こう、と提案した。すると月本さんは「うん、それでいいんじゃないかな」と同意してくれた。ちなみに、「反対！」とミス・エマーデイルがわめいていたけれど、華麗にスルーしたのは言うまでもない。とにかく、僕らは駅に向かって歩き出した。

「あのさ」

「ん？ なに？」

駅に向かう途中、住宅街の終わり頃に、月本さんに話しかけられた。月本さんは、僕の顔を少し怪訝な顔で覗き込みながら、更なる言葉を継いだ。

「どうして私の家を知ってるの？」

「え？ ああ…」僕は正直に答える。「マサルがさ、教えてくれたんだ」

「マサル君が？」

「うん、あいつに怒られたんだ。“月本と仲直りしろよ”って。それで、月本さんの住所を聞いたんだ」

「そうだったんだ」

けれど、月本さんのその言葉からは、意外、というニュアンスは籠っていなかった。

「意外だったよ」僕は言った。「マサルって、けっこう適当なヤツじゃん？ だから、あんな風に人を叱るなんて思わなかった」

その言葉を、月本さんは笑った。いつの間にか、住宅街を抜けていて、信号を渡れば座山の街に至る、というところに来ていた。けれど、前の信号は赤だった。僕らの眼の前の道は、とんでもないスピードで車が通り過ぎてゆく。

あゝあ、この信号長いんだよな、と、どこか他人事のように月本さんは呟いた。

「ねえ」僕は訊いた。「なんで笑ったのさ」

「え？ 笑ったっけ？」

「ほら、“マサルは適当だ”って話のあと」

「あ、ああ！」「思い出した、という風に、月本さんは続けた。

「マサル君は、適当なんかじゃないよ？」

「え、まさかあ！」

「あ、いや、全てのことに於いて適当、ってわけじゃない、って言いたい」月本さんは前の発言を少し修正してから続けた。「マサル君は確かにズボラだし、すんごくだらしないときも多いけど、でも肝心なところは凄い几帳面なんだよ。じゃなくちゃ、部活を自分で立ち上げる、なんてこと出来るはずないよね」

「立ち上げる、というよりは、円満に乗っ取った、っていう方が正しいらしいけど」月本さんの言葉に補足してから、僕は月本さんに訊いた。「そういえば、月本さんってどうしてこの部活に入っただの？」

ブロロロ、と黒い煙を吐き出しながら、トラックが僕らの前をか

すめていった。そのトラックが抜けたあとに信号を見ると、ようやく青に変わっていた。僕は足を前に出す。

「そうだな」前に歩き出しながら、月本さんは答えた。「最初は、何の気なしで入ったの。中学校のころは何の部活もやってなかったし、でもウチの高校は強制入部でしょ？　だから、楽らくそうな文科系の部を探したら、マサル君の立ち上げた、いや、円満に乗っ取ったんだっけ？　とにかくマサル君の部に行き着いたの。最初にあたしが部に顔を出したとき、確か部室に居たの、君じゃない？」

そう言いながら、月本さんは僕の顔を指した。

そうだった。確か、四月の初めの頃、マサルの部に入りたての頃だった。あの頃はまだ部員が僕とマサルしかいなかったけれど、当時から僕のクラス、H組を詰め所に使っていた。確か、その頃だった。月本さんがやってきたのは。

「あのときは放課後だったっけ。そういうば、あのときは凄い緊張したな。“どういう人がいるんだろう？”とか、“仲良くできるかな”って。でもそういう気持ちを全部飲み込んで、H組の扉を開けた。そしたら拍子抜けしちゃった。だって、教室に、独りしかなかったんだもん」

「本当は、もつと沢山いると思ってた？」

「うん」月本さんは頷いてから続けた。「たった一人、男の子が窓の外を眺めながら座ってた。ちよつと退屈そうに。でも、私のことに気づいたみたいで、振り向いた。最初その人は、“ウチのクラスの人？　忘れ物？”って声をかけてきた」

そうだった。僕は人の顔をおぼえるのが不得意で、知らない女の子が入ってきたものだからH組の生徒が忘れ物をしてそれを取りに戻ってきたものとばかり思っていたのだ。と、いうのも、部員募集の張り紙をしたのにも関わらず、誰も詰め所に使っているH組にやってこなかったからだ。

「私はとにかく、ここを詰め所に使っている部活があるはずなんですけど、って訊いたの。そうしたら、“ああ、仮入部！？　ようこそ

” っ て返してきた”

で、と月本さんは僕の顔を指した。

「あのとき、なんて言ったか覚えてる？」

「え？」

なんか言ったっけか？ 僕は首を傾げた。確か、仮入部を申し入れてきた月本さんに椅子を勧めて、かといって部活の説明なんかできようはずもないから、とりあえずダラダラと喋ってたはず…。

「覚えてないんだ？」

月本さんが、眉にシワを寄せて僕の顔を睨んでいる。ちょっと残念そうに。

「ごめん、覚えてない」

すると、月本さんはため息をついた。でも、スイッチでも切り替えるように顔を笑顔に変えた。

「…ま、いいや。でも、あの一言のおかげで、私はこの部に入ったんだ」

まるで、大事な宝物を恐る恐る手の内から広げて見せるかのような、月本さんの言葉だった。

え？ そんな凄いことを言ったのかな？ 僕自身、そういうつもりは全然なかった。こうやって記憶がないんだから、きつとダラダラと雑談めいた話をしていたのだろうし、頭を回転させて言ったような言葉でもないんだろう。

「きつと、君にとつてはそんな大事な言葉じゃなかったんだよ」と、月本さん。「でも、私にとつては大事な言葉。きつと、言葉つてものは、訊いた人、受け取った人の中で力を持つものなんだよ、きつと。でも、確実に言える。私は、あの言葉をきっかけに部に入ったの」

そういうものなのか。

「きつと、ね」月本さんは控えめに言った。「言葉、っていうのは、何気ない一言のほうか、きつと心に残るものなんだろうね」

結局こんな話を続けただけで、僕があの時月本さんに何を言った

のか、その一番知りたいことを月本さんは喋ってくれなかった。

それからしばらく歩いた。いつの間にか背景の街の姿は住宅街からビル群に変化していて、待ちゆく人たちの活気も数も、住宅街とは比べるべくもなかった。『まったく、面白いわね』と、ミス・エマーデイルが苦々しげに呟いている。いい傾向だ。僕の隣を歩く月本さんも、時折僕の方を振り向いて笑う。まるで、ご主人の遅い歩行ペースに合わせて少し前で待つ子犬みたいだ。

「ねえねえ」

月本さんに、不意に呼び止められた。なに？ と訊くと、彼女はビル群の一角を指した。

「あそこ、入ろうよ」

指差した先には、アメリカ社交界御用達のカジノみたいな建物だった。あれ？ これって……。そうだ、土曜日に、マサルと入ったゲーセンじゃないか。僕はイヤに豪華なゲーセンの外観を見上げた。

「え？ 月本さんってさ、ゲームやるの？」

彼女は首を横に振った。

「あんまり。でも、男の子ってこういうの好きでしょ？」

あれ、こちらが氣を使うはずが、どうしたわけが使われてる。むむむ、女の子ってやっぱり大人なんだなあ、とどうでもいい感想を持つ僕。けれど、一応僕も氣を使ってみる。

「いや、でも、月本さんが面白くないんじゃ、しょうがないからさ」「大丈夫よ」と月本さん。「最近のゲーセンって、体を使うやつも多いから」

そう言つと、月本さんは駆け出した。そして、5mくらい離れたところでまるで子犬のように振り返り、僕に向かっておいでおいでをかます。しかも、爛漫な笑顔で。

むむむ、かわええのう。

僕が思わずそう思った瞬間だった。

『あらあら、面白いことになりそうじゃない』

という無機質な声が不意に耳に届き、なぜか頬に激痛が走った。

こう、まるで弾丸のように横回転のかかったものが、僕の頬を粉砕する感じ、と言えはいいだろうか。丁度、ボクシングの高等テク、右のコークスクリューを頬にぶち込まれたような。

…というか、まさに上記のことを、ミス・エマーデイルにやられたわけだけれど。

「痛いな！ もう！」

月本さんに聞こえないように小声で抗議する僕。僕の横でシュッシュ、とシャドーボクシングをしながら、目を光らせるミス・エマーデイル。あまりに完璧な彼女のシャドーぶりにこれ以上の抗議が無駄であることを悟った僕は、とりあえず口をつぐんだ。

## 427号室の怪【20】

『ふふん、賢明ね』

頬の痛みをこらえつつ、僕はミス・エマーデイルの言葉に一言返した。

「賢明じゃないと、君に殺されちゃうから」

『それは残念』

ミス・エマーデイルはニヒルに口角を上げた。

「ねえ！ 早くおいでよ！」

月本さんが、不思議そうな顔をして僕の事を窺っている。あ、しまった。

「うん、今行く！」

月本さんの下に駆け寄ろうと、僕は足を一歩踏み出した。

ゲーセンの中は、意外に空いていた。

ウィークデーということもあるにせよ、もう夕方の五時を回っている。この時間のゲーセンというのは、学校帰りの高校生や中学生が屯したり、あるいはネクタイ締めたサラリーマンたちが麻雀ゲームをしてたりする空間のはずだ。なのに、そういう人たちがまるで見当たらなかった。

「案外、空いてるね」

見たままを言う月本さん。

「うん、そうだね」

月本さんの言葉を追認する僕。

『面白そうね』

いやに不機嫌に、ゲームたちの筐体きょうたいを睨むミス・エマーデイル。彼女は僕の倦怠が形を持ったものらしいから、きつと暇つぶしに一役買っであろう“ゲーム”というものに嫌悪感のようなものを持つのだろう。



「どれやろうか？」

僕は月本さんに訊いた。すると、月本さんは答えた。

「うーん、私、あんまり格闘ゲームとかレーシングゲームとかは得意じゃないんだよね。やっぱり、体を動かすようなゲームが……」

「じゃあ、あのパンチングマシーンは？」

そう言って、僕はフロアの端っこの方に置かれたパンチングマシーンを指差した。“お前のパンチ力は何キロだ？”と赤い文字で大書されていて、アフロヘアーのボクサーのイラストが描かれている。その筐体に赤いサンドバックがぶら下がっている。このサンドバックの動きで、パンチ力を測るのだ。その全体の装いを見るに、純粹にパンチ力を測るだけのヤツだ。

実は、この提案は冗談だった。だって、女の子がこんなのをやりたがるとは思わなかったからだ。

でも、月本さんは僕の想像を軽々と超えて見せた。

「いいね！ やろうやろう！」

なんと乗り気なのだった。しかも、「力比べしようよ」とまで提案してきた。ここで断るのもなんだか空気が読めてないし、そもそも提案したのは僕なのだからこの勝負、受けるしかない。

じゃんけんで負けた僕が、先にパンチ力を測ることになった。コイン入れてから筐体に繋がっているパンチンググローブを右手にはめ、筐体の前に立って、ファイティングポーズを取った。そして、GOサインが出たところでスウツと息を吸い込み、腰をひねりつつ、思いつきりサンドバックを叩いた。

ちやらりーん。

間の抜けた効果音とともに、僕の結果が出た。

127キログラム。

まあ手ごたえもあったし、ぼちぼちといったところだろう。負けることはあるまい、とすっかり安心して、僕はグローブを隣の月本さんに渡す。

「127キログラムかあ、むむむ、負けないから！」

パスパス、とグローブをはめた右手を左手で受ける月本さん。そうやって待っていると、やがて、筐体からGOサインが出た（一応ここで補足しておくけれど、実はこのパンチングマシン、二回で100円だったのだ。普通は二回とも同じ人がやるものだけれど、今回は一回勝負という条件で勝負している。お金の節約というヤツだ）。月本さんは、すこし構えて右手を突き出した…。

「うりゃああああ！」

えーマジかよー。

まるで世紀末覇者のような野太い声をあげ、月本さんは右手のグーを繰り出した。そのグーはサンドバックに突き刺さり、グアッシヤン！ と大層な音を立てた。

チャララリラチャラリラチャラリン！

さっきよりも明らかに気合の入った効果音。数字を思わず見ると…。

…ええと、申し訳ない。その数字を、ここで書くわけにはいかない。何でかというと、月本さんに口止めされているからだ。ただ、ここで言えることは、“月本さんのパンチ力の方が僕のそれよりはるかに強い”、という単純な事実だけに過ぎない。きつと、もし書いてしまったなら、彼女のパンチが僕の頬に突き刺さることであろうから。

「へっへ、勝っちゃった」

へっへ、じゃない。…そう突っ込みたかった僕だけれど、必死で我慢する。

そんな僕をよそに、グローブを脱いだ月本さんは辺りをきよきよと見渡した。まるで、投げられたボールを見失った子犬のような、ランランとした目をかざしながら。

やがて、そのランランとした双眸は、何かを捉えたらしい。一点を見つめ、固まった。そして、視線を動かさずに、月本さんは言った。

「ねえ、あのエアホッケー、やろつよ」

月本さんが指したのは、以前マサルと打ち合ったエアホッケー台だった。いつぞやのときと同じように、喧騒に溢れているはずのゲームセンターの中であって、どうしたわけか静寂を保っていた。まるで、その一点だけ底なしの洞窟のように、外の音を吸い込んでいるかのようだ。

「うん、いいけど？」

でも、反対する理由もない。

「じゃあ、やる？」

僕の答えを聞く前に、月本さんはホッケー台に走り出していつてしまった。僕も、苦笑いしながら月本さんに続く。そして、台の上のマレットをぎゅっと握る月本さんの、台を挟んで向かいに立った。「でもさあ」僕は、台越しに言った。「僕、けっこうホッケー得意なんだけど？ マサルとやって5対1で勝ってるし。ちなみに、それって点数じゃないよ？ ゲーム数で5対1だからね？」

しかも、負けた1ゲームはマサルのスピリチュアルアタックによるものなのだから、僕の方が確実に強いのだ。

「ってことは」月本さんはマレットを手でもてあそびながら答えた。「手加減してもらわないとちょっとキツイかもね」

マレットを手にとつて、僕は提案した。

「じゃあ、左手でやろうか？」

「うーん、なんだかそれじゃあつまらない？ ありきたり過ぎる」

「じゃあ、月本さんは両手でやっていいよ」

重ねて提案する僕の意見を、月本さんは速やかに却下する。

「それもありきたり過ぎ」

「……じゃあ……」

思いあぐねる僕。そんな僕のことを嗤うかのようにため息をついてから、月本さんはちよつと僕のそれとは毛色の違う提案をしてきた。

「じゃあさ、お喋りしながらエアホッケー、っていうのはどう？」

「お喋り？」

思わず聞き返した僕に、月本さんは妙に得々として説明を加えた。「正確にはインタビュ―。私がずっと質問するから、その質問に答える。ただそれだけ。でも、けっこう頭を使う質問をするから、けっこう難儀するはずよ？　しかも、答える前に円盤を打たなくちゃダメ」

え？　けっこうヤバイルールじゃないか。ご存知の通りエアホッケーというゲームは円盤がゴールまで到達する時間が短い。しかも、そもそもエアホッケーの打ち合いのスピードじゃあ、質問だって出来ないだろうに。

その疑問を口にするのと、月本さんは答えた。

「いや、そうならないように、弱く打つから弱く返して」

なんだかそれは最早エアホッケーというゲームじゃないんじゃないか、という疑問が湧いたものの、空気を読んで口をつぐんだ。ともかく。

月本さんはお金をホッケー台に入れた。すると、エア―が台から噴き出し、電子画面が赤く点滅した。

「やるよ！」

月本さんの陣地に円盤が滑り落ちた。それを月本さんはマレットで止める。

「さあ来い！」

僕はマケットをゴール近辺で左右に振りながら、月本さんのショットを待つ。

「じゃあ、質問！」　月本さんは言った。「12の二乗は！？」　パシユン！

妙な電子音と共に、円盤が月本さんのマケットに弾かれた。けれど、そのスピードはとんでもなくノロノロで、今やっているのは本当にエアホッケーなんだろうか、と思ってしまうほどだった。

けれど、僕は気を取り直して答えた。



## 427号室の怪【21】

「144！」

パシユン！

そんな豪快な電子音とは裏腹に、ノロノロとした円盤を返した。

「じゃあ！」月本さんは次なる質問を紡ぎ出した。「13の二乗は！？」

パシユン！

またもやノロノロとした円盤が僕に返される。っていうか、なんで二回も“ 13の二乗はいくつだ ”って問題を出すんじゃない、とふと疑問が湧きつつも、僕は答えた。

「169！」

パシユン！

ノロノロとした円盤を返す。けれど、月本さんはその円盤を見つめるばかりで次なる質問をぶつけて来ない。やがてあわあわと焦りだしながらも、けれどルールがあるので、円盤を打てずにいる。そしてぐずぐずしているうちにその円盤は月本さんが守るゴールに落ちていった。

「ありやりや、しまったな」月本さんは1-0と表記された得点板を見遣った。「13の二乗なんて、絶対に答えられないと思ったのになあ。あてが外れちゃった」

「まあ、20の二乗くらいならどうにかなるよ」

「だったら、別の質問を考えなくちゃなあ」

台から飛び出した円盤が、月本さんの陣地に滑り落ちた。それをマレットで止めた。そして、まるで思案するかのように天井を仰いでいた。けれど、思案がまとまったのか、彼女は僕の方に視線をやった。

「じゃあ、次なる質問！ 行くよ！」

「さあ、来い！」

「質問！」月本さんは円盤からマケットを離した。「どういう女の子が好み？」

パシユン！

イキナリ質問の方向性が変わったな、と思った。けれど、正直に答えた。

「ぼんきゅっぼん！」

パシユン！

「サイッター！」

パシユン！

月本さんが思いつきり振りかぶって打った円盤は、さっきのパンチングマシンの勢いそのままに、僕のゴールに吸い込まれた。そのあまりの速さに、手が出なかった。

「ちよつと待った！」僕は抗議した。「“サイッター”って、そもそも質問じゃないじゃん！しかもそんなスピードの円盤、返せないよ！」

すると、彼女は舌をペロつと出した。

「ごめんごめん、でもサイッター」

反省の色が無さそうな月本さんだった。

「何が！？」

「あのねえ」月本さんはマレットの底を、まるで捜査令状を突きつける警察官のようにして向けた。「女の子がいるところで、そういう答え方ってどうかと思うんだけど？」

「でも、その手の質問って正直に答えないと面白くないじゃないか」そう抗議した僕に、月本さんは耳を貸さなかった。

「男の子同士ならいいけどさ、でも女の子にそういうセクハラまがいの事を言うのはどうかと思うよ？」

「むむむ……」

「じゃ、気を取り直しまして」

月本さんの台詞に合わせるかのように、ホッケー台から円盤がタイミングよく飛び出してきた。その円盤は音も無く僕の陣地に滑り

込んできた。僕はマケットで円盤を抑える。

「で、どうしたらいい？」

「じゃあ」月本さんは言った。「さっきの質問を、私の言葉を踏まえて答えて」

「ええと」僕は一応訊いた。「“どういう女の子が好み”って奴？」

困った。非常に困った。いや、だって、僕の好みはどう答えようとしても「ぼんきゅっぼん！」の一言で済んでしまうのだ。なのに、月本さんは「ぼんきゅっぼんはダメ！」と、のたまう。どう答えたもんか。むむむ。

「さあ、早く！」

急かされた僕は、しょうがなく言った。

「バスト80センチ以上の人！」

パシュン！

結局、「ぼんきゅっぼん」の言い換えをした僕であった。

「サイッター！　つつか女の敵！」

パシュン！　がこつ。

けれど、月本さんは許してくれなかった。さっきよりもはるかにすさまじいショットをブチ放ち、円盤を僕のゴールにぶち込んだ。あまりの勢いに、電子音とは比べるべくも無い、円盤がゴールの奥壁にぶつかる生身の音が聞こえた。

「だ・か・ら・さ。そういうことを言うのはどうかと思うんだけど？」

月本さんの、口調は優しい。いつもの優しい月本さんだ。でも、何かが違う。月本さんのオーブのようにしなやかで細身の体から黒々としたオーラが流れ出てくるのを感じる。そのオーラが、とぐろを巻いて僕の咽喉元を引きちぎろうと様子を窺っている。そして、僕を戦慄させている。

さすがに空気を読んだ僕は、頭を下げた。

「ごめんなさい」



「よろしい」

「またもや、僕の陣地に円盤が滑り込んできた。」

「こんどこそ、空気読んでね？」

「繰り返すけど、さっきから月本さんの口調は優しい。でも、態度がまるで優しくない。」

「ええと、つてことは…さっきの質問をもう一度？」

「言葉を返す代わりに、うんうんと頷く月本さん。」

「さすがに、ぼんきゅっぼん関係のことを言うわけには行かない。」

「きつと、もう一度それ関連のことを言えば、きつと僕はミス・エマーデイルに魅入られるよりもはるかに早く、月本さんの手によってあの世行き確定だろう。」

「と、この瞬間、ふとあることを思い出した。」

「ミス・エマーデイル、どこにいるんだろう？」

「そう、さっきまで僕のまわりでつまらなそうにしていたはずのミス・エマーデイルが見当たらない。ふと周りを見渡してみても、周りに彼女の影はない。」

「どうしたの？」

「あ、いや…」

「まさか、「実は僕にしか見えない女の子がさっきまで僕らについてきていたんだけど、姿を消しちゃったみたいなんだ」とは口が裂けても言えない。」

「なので、ちよつと誤魔化した。」

「ああ、首が痛くて」

「大丈夫？ 休む？」

「心配そうに僕の顔を伺う月本さんに、僕は笑って健康ぶりをアピールした。」

「それから、とりあえずミス・エマーデイルのことは忘れて、奇妙なルールのエア・ホッケーが繰り返された。」

「月本さんの質問は、どこまでも恋愛系のネタだった。「彼女いるの？」とか、「好きな人いるの？」とか、「付き合うなら年上」

？ 年下？」「とか、「タイプの女性芸能人は？」「とか。

僕はそれらの質問にひたすら答えた。彼女？ いるわけないじゃん。好きな人はいないよ。年上も年下も微妙だね、やっぱり年下かな。みたいな感じに。ちなみに、「タイプの女性芸能人は？」「という質問には、最近飛ぶ鳥を落とす勢いのアイドルの名前を挙げておいたのだけれど、月本さんはそのアイドルを知らないらしく、「ふうん？」「と曖昧に頷いていた。

結局、そんなよく判らないエアホッケーの試合を延々と繰り返した後、なぜか満足そうな顔をした月本さんが、「もうそろそろ帰ろうか」と提案してくれたおかげで、妙なエアホッケーの試合は切り上げられた。ゲーセンを出ると、「今日は楽しかったよ、じゃあね！」「とか言つて、家路を急ぐ座山の人々の間に月本さんは消えた。独り座山の街に残された僕。月本さんが見えなくなってもなお、彼女が消えた方向をずっと見遣っていた。

後ろ髪引かれるような感覚を覚えつつも、さて、帰るか、と座山の駅に足を向けた瞬間だった。

『随分楽しそうだったじゃない』

カモミールの香り。そして、遅れてやってくる格調高い声。間違いない。

「ミス・エマーデイル」

彼女は、僕の後ろに立っていた。さっきまで、姿が見えなかったというのに。

「どこに行つてたんだよ？ さっきから姿が見えなかったから、心配してたんだ」

『嬉しいわ。私の心配をしてくれるなんて』彼女は、言葉にある棘を隠さなかった。『私は、あなたの倦怠。つまり、あなたが楽しいと感じているときには、存在感が消えてしまうの。判る？ 私は、あなたの有り様によつてはこの世界に存在できないのよ』

彼女の亜麻色の髪が、座山のコンクリートジャングルから吹き降る風に揺れた。彼女の白いワンピースも、同じ方向に揺れた。髪

は風に撫でられ、めちやくちにその流れを乱す。ワンピースは、風に引つ張られて彼女の細い体のラインを強調する。けれど、彼女の黒い目だけは、あの、世界中の色を混ぜ合わせて作ったかのような混沌とした色の瞳だけは、まるで揺れずに僕のことを見つめている。

## 427号室の怪【22】

『ねえ、お願いよ』哀願というより、むしろ脅迫に近いような言葉を、ミス・エマーデイルは紡ぎ出した。『私には、あなたしかいないの。こんなことを言うのは重荷になる、ってことだって判ってる。でもあえて言うわ。私には、あなたしかいないの』

余りに重い言葉だった。

こうやって文字にしてしまえばわずか数十文字の言葉。そして、口に出して繰り返してもわずか数秒の間で速やかに空気に溶けてしまふ言葉。なのに、それらの言葉は僕の心の上に乗っかって、さかんにその存在感をアピールする。

僕は、無言で立ち尽くすしかなかった。

街が、停止したままの僕を残して運行してゆく。家路を急ぐ人々の波が。その波間でティッシュを配ったり客引きをしているお兄さんたちが。そして、周りの風景までもが僕を残して運行してゆく。

結局、僕は何も言えないまま、座山の駅に向かった。時折ミス・エマーデイルを見遣ると、まるで道に捨てられた子犬のような目をして、僕の事を見返してきた。その瞳に吸い込まれそうで、思わず目を背けた。そんなことを数回繰り返しながら、僕は座山の街を歩いた。

何か、忘れてないか。

布団の上に寝転がっている状態で目が覚めた僕は、天井を眺めながらそう思った。いつも見慣れた天井の木目。ハトムネ寮の僕の部屋だ。眠気ではやけたまま顔を左右に振る。けれど、僕の目に映る風景はいつもどおりの僕の部屋だ。

ふと、体を起こす。いつもどおりの僕の部屋。そして、窓からは久し振りに燦々と太陽の光が注ぎ込んでいる。けれど、そんなことは些細なことに過ぎない。それに「久し振りに外が晴れている」と

いう事實は、忘れている、という言葉で説明される出来事ではないはずだ。

何を忘れているんだろう？ 僕の中にある奇妙な空白に思いを致しつつも、頭をかこうとした瞬間、手の中に何かがある、ということに気づいて眼の前で開いた。

手の中には、妙な金属製の棒が二本あった。

ステンレス製なのか銀色に輝いていて、そして端っこには何かのねじ穴が掘られていた。ええと、これはなんだろう？ 僕は、眼の前でそれらの棒を手で弄んだ。

その疑問には、ミス・エマーデイルが答えてくれた。彼女は、僕が起きたことに気づいたのか、部屋の隅に置かれていた椅子から立ち上がり、僕の横に立って、僕の顔を見下ろした。さも、不服そうな顔を浮かべて。

『それ？ ステップ』彼女は、手短に答えた。

『ステップ？』

『ほら、自転車の後輪のところに取り付けて、後ろに乗る人の足場にするヤツよ』

ああ、二人乗りするように改造するパーツね。100円均一ショップなんかでもよく売ってるよね。と心の中で合点してから、次なる疑問が湧いた僕。なんで僕、そんなものを持つてるの？

その疑問には、またもやミス・エマーデイルが答えてくれた。

『昨日、あなたが買ってくれたんじゃない』

『は？ 買ってくれた？』

『そう、私に』

ミス・エマーデイルは自分の顔を指した。驚くほどに可愛らしく微笑みを浮かべて。

「買った覚えが」ないんだけど、と言おうとした瞬間に、ようやく昨日、僕がステップを買った経緯を、眠気が覚めるのと一緒に思い出した。

昨日、月本さんと別れた後、僕は座山の駅に向かった。その途中、

100円均一ショップを発見したのだ。そういえば、高校に入ってから一回も入ってないや、懐かしいなあ！とばかりに、僕はその100円均一ショップの扉を開いた。久し振りの100均は、とんでもない魅惑の空間だった。うわ、CD-ROMが100円！？　そういえば、ハンガーが欲しかったんだよなあ、というんな商品を物色するうち、ふと心配になって、僕はミス・エマーデイルの顔色を窺った。もちろん、直前にあんな発言があったものだから、ちよつと不安になったのだ。

やっぱり、ミス・エマーデイルは沈んでいた。まるで、床の木目の数を数えているかのように、下を向いて後ろを歩きながら押し黙っていた。

どうしたもんか、とため息をついたころ、突然ミス・エマーデイルはある棚の前で立ち止まった。

「どうしたんだ？」

訊くと、彼女は答えた。

『…ねえ、これが欲しいんだけど』

そう言っ指したのが、例のステップなのだ。

最初は、なんで彼女がそんなものを欲しがるのか、その理由がまるでわからなかった。だから、思わず訊いてしまった。

「そんなもの買って、どうする気なのさ」

すると、ミス・エマーデイルは何訊いてるの？　とでも言いたげな顔を浮かべた。

『自転車のステップを、あなたは背中を搔くのに使うの？　』  
なるほど、つまり。

「僕の自転車に、取り付ける気だな」

『あら、察しいいじゃない』と、ミス・エマーデイル。『だって毎日毎日、学校についていくときに隣を走るのは疲れるんですもの。学校に行くときくらい楽をさせてもらいたいものだわ』

断っても良かった。でも、なんだかミス・エマーデイルの沈んだ顔を見るのに嫌気が差して、ついそれでご機嫌取りをしてしまおう

としたのも事実だった。結局、ミス・エマーデイルの要求通りにレジにステップを持っていった僕なのだった。

「ああ、そういえばそうだった」

ステップをまじまじと見ながら、僕は昨日の行動を思い出して嘆息した。

『さ、早く取り付けてね』ミス・エマーデイルは言った。『自転車のステップは、背中を掻くためのものじゃないんだから』

「朝ごはん食べたらね」

その後、僕は着替えて朝ごはんを食べ、いつもより早めに自転車置き場に出た。もちろん、ステップを取り付けるためだ。でも、その間中、僕の頭の中には、何か違和感があった。

何か、忘れてないか？

そうなのだ。既にステップの件は解決したはずなのに、なぜか頭の中でモヤモヤが残っている。そのモヤモヤに名前をつけるとするなら、それは「何か、忘れてないか？」なのだ。

「なあ？ 何か忘れている気がするんだけど」

自転車置き場でステップを取り付けながら、僕はミス・エマーデイルに訊いた。ミス・エマーデイルは答えた。

『あら、そう？ 気のせいじゃないの？』

いいや、そんなはずは無い、そんなはずは……。でも、思い浮かばない。何か、大事なことを忘れている。いや、でも何を？ ステップをねじに回しこみながら小首を傾げる僕。けれど、頭の中には座りの悪い空白が浮かんでいるだけで、その空白が何なのか、という端緒はまるで見当たらなかった。

だが、次の瞬間、僕はその空白を埋めるものを思い出すことになる。しかも、最悪の形で。

「おいお前、今日は朝早いな、どうした？」

後ろからかけられた声に思わず振り返ると、そこには学校指定の真っ青なジャージ姿で立ち尽くす、井上先輩の姿があった。

「井上先輩こそ、早いですね」

「おうよ」井上先輩は首にかけた白いタオルを両手で握った。「朝連があるからな。それで、ウォーミングアップに学校まで走ろうと思ってな」

見ると、背中にものすごく重そうなかばんと、ものすごく軽そうなバドミントンのラケットを背負っていた。

「んじゃ、いつてらっしやい」

僕は、早々に話を切り上げようとした。それは、ステップの取り付けがまだ終わっていないからでもあるし、それ以上に井上先輩とこれ以上話をしたくなかったから、というのもある。けれど、僕のそんなささやかな意図を、井上先輩は汲んでくれなかった。

「おい、なんで二ケツ用のステップなんか付けてるんだ？」

まさか、“僕にしか見えない女の子にねだられて”とは口が裂けても言えない。口の軽い井上先輩の事、きつとあることないことを言いふらされまくるに決まってる。

なので、僕はこう答えた。

「あ、部の方で使うんですよ」  
もちろん、嘘だ。

でも、この嘘が不味かったのだ。“部”という言葉を出してしまったこと、これが間違いだったのだ。

「部……？」

井上先輩は、まるで魚の骨が咽喉にひっかかっているかのような顔を浮かべながら、その場でウンウンと唸りだした。そして、空と僕の顔を交互に見比べている。けれど、そんな往復を数回繰り返した頃、短く「あ」と嘆息した。

「どうしたんですか？」

正確には、この僕の問いは全部言い切ることが出来なかった。と、いうのも、とんでもない剣幕で井上先輩がまくし立ててきたからだ。  
「おい！　そういえば！　前に頼んだ調査の件、どうなった！？」



## 427号室の怪【23】

「え？ 調査？」

僕は、頓狂な声を上げてしまった。

正直に言ってしまった。正直僕は、この時点ですっかり調査部の活動のことを忘れていたのだ。月本さんとの関係修復に忙しくて、すっかり記憶から抜け落ちていたのだ。

「おい」

井上先輩は、短く僕のことを呼んだ。言葉にすればわずかな文字。時間にすればわずかなコンマ数秒。けれど、そのわずかな言葉の中に、異様な威圧が籠っていた。

「……ななな、なんでしよう」

それから、説教が始まった。

まずは一喝。そして、くどくどと怒られ続けること一時間。その間に、井上先輩は実に多くを語った。井上先輩が僕に依頼した調査の内容、あらまし、そして調査を心待ちにしている悠木先輩の様子などを、感情移入が難しいほどに大音声で怒鳴り続けた。

そのおかげで、427号室に幽霊が出て、そしてそれを悠木先輩が目撃したこと、そして、427号室の件を調べている、ということ、ようやく思い出す僕なのだった。

「……はあはあ。んったく、お前ってヤツは……」

肩で息をしながら、ようやく井上先輩は満足げな顔を浮かべた。きつと、怒鳴るだけ怒鳴って気分が晴れたのだろう。でも、一時間も怒鳴り続けるなんてまったく凄い高校生もあったものだ。

「はあ、なんとしても調べますから……、それに、部の仲間が調べているはずですから……」

まるでデパートの店員のように、ぐぐぐつと頭を下げた僕。けれど、井上先輩は僕の謝罪に応ずる気配が無かった。おかしいな、とばかりに頭を少し上げて様子を窺ってみると、井上先輩はまるで遊

園地でトイレを探す子供のように、辺りをきよきよと見回している。その井上先輩の少し動揺した目が、僕の目と合った瞬間、井上先輩は僕に訊いてきた。

「おおおい！ 今、何時だ！？」

え？ ああ。僕は胡乱に頭を上げると、のんびりと腕時計に目を遣った。

「は！？」

思わず、僕は悲鳴をあげた。

なんと、時計は八時半の一分前を指していたのだ。

熱血学園高校の始業ベルは八時半きっかりに鳴る。当然の事だが、それ以降に校門をくぐった者は、遅刻者の烙印を押されるわけだ。つまり…。

「遅刻だな」

僕の腕時計を見つめて、いやに落ち着いた声で呟く井上先輩。

「…そうですね」

時計から目を離して、井上先輩と顔を見合わせる。けれど、井上先輩と顔を見合わせたところで、時間が遡るわけでもない。でも、そうするしか僕にはやるべきことが無かった。それは井上先輩も同様だったようだ。結局、そんな奇妙なならめっこはしばし続いた。

チツチツチツチツチ、チーン！

けれど、時計の表記が八時半きっかりを示したところ、思い出したかのように井上先輩は叫んだ。

「おい！ 遅刻じゃねえか！」

「ででで、ですね！」

結局、ミス・エマーデイルのために取り付けたはずのステップは、最初に井上先輩に使われる羽目になった。つまり、僕が自転車を漕ぎ、井上先輩を後ろに乗せて学校まで急ぐ、という半ば地獄絵図な羽目になったのだ。

「おら、急げよ！」

後ろに座る井上先輩に、ごつごつとどつかれながら。

結局、学校には着いたものの、当然遅刻だ。まずは門の前に立つ先生に思いつきり叱られ、学年主任の先生にどやされた。ようやく学年主任から解放されたあと恐る恐る教室に顔を出すと、案の定教室でホームルームを開いていた担任の田村先生に怒られた。

「あのなあ、そもそもお前は…」

それほど熱くもないのに、汗をぐいぐい拭きながら僕を叱る田村先生。教室の椅子に座るクラスメイトたちは、僕の顔をニヤニヤ顔で眺めている。ちくしょう、見世物じゃないんだぞ。

そんな目を合わせづらいクラスメイト達から視線を外した僕は、田村先生の肩越しに見える、毒々しいまでに晴れた空を眺めた。

「おい、そもそも、どこ見てるんだ！」

“そもそも”の使い方を間違えている田村先生は、窓の外を眺める僕を、“不真面目だ”とホームルームの時間中かけて叱りつけた。クラスメイト達は、人の不幸はなんとやら、とばかりにくすくす笑っていた。

とにかく、いつもとはちょっと違う始まり方をした一日だったけれど、案外平凡な一日になってしまった。

つまらない古典の先生の昔話を聞き流したり、世界史の先生の世界史ウンチクに耳を傾けたり、現国の先生の自慢話に辟易したり…。内容は少しずつ違うとは言っても、いつもと同じような一日が過ぎていった。そんな変わり映えのしない日々の中で、僕はただ時間を消費してゆく。つまらないけれど、それもまたしょうがないことなのかもしれない。けれど、僕があくびをつくたびに、机の横に立つミス・エマーデイルがくすつと微笑むので、なんとかあくびを我慢した。

そして、そんな一日を消費してゆくうちに、気づけば放課後になっていた。

「コホン」

マサルが、咳払いをした。いかめしく咳払いをしたつもりだった

のだらうけど、顔がまるでいかめしくない。まるで、お祭が開かれる日を指折り数えて待つかのような笑顔だった。だから、どうにも場がしまらない。でも、僕たち調査部は、こんな感じが丁度いいのかもしれない。

「さて！ 調査部のミーティング、始めるぞ！」

「はい！」

部員達は、マサルという言葉に応じた。

僕の、斜め前の席の弥生さんが。横の席の藤島君が。僕が。そして、僕の前に座る月本さんが。

いつもの位置に、前と変わらない笑顔を湛えたまま座っている。彼女が部に顔を出さなかったときの空白は、見事に埋まっていた。きつと、調査部において、月本さんという人の占めるウエイトは案外大きいのだろう。

「えー、で、月本」マサルは月本さんに話を振った。「もう大丈夫か？」

「うん、もうすっかり」

月本さんが笑顔で応じた。すると、マサルはウンウン、と感慨深げに頷いた。

「やっぱり、俺たちは五人で調査部だもんな。月本がいないとどうにも落ち着かないんだよな。いや、月本だけじゃないか」

マサルは仰々しく皆の顔を見渡した。

「ここに居る五人、誰が欠けても“調査部”じゃないんだな。と、いうわけで、だ。突然だけど、部の決まりを一つ作ろうと思う」

あまりに唐突なマサルの言葉に、皆アクションを取れていなかった。僕も当然その一人で、心の中でマサルの言葉を反芻するばかりで、こういう風な言葉をかけていいかわからなかった。多分、皆同じような心持だったのだろう。

マサルは、そんな皆を見渡して、言い放った。

「“退部は認めない”…部長権限で、この決まり、決定ね」

そう宣言した後、マサルは二カつと笑った。けれど、一瞬、ひん

やりとしたすわりの悪い空気が僕らの間に滑り込んだ。

「アンタが部長だったなんて初耳だけど」

最初に口を開いたのは弥生さんだった。最初はちょっと皮肉っぽく言葉をつむぎ始めたくせに、すぐにその色は消えていき、弥生さんの優しい、素の言葉だけが残った。

「いい決まりだと思うよ？ ま、マサルが考えたにしては、だけど」

「…僕も賛成だな」藤島君は控えめに微笑んだ。「この調査部は、あくまで僕ら五人のものなんだから、五人のうちだれが欠けても、部としての活動は出来ないだろうし」

弥生さんと藤島君は、僕の顔を眺めた。まるで、僕の言葉 wait ているかのように。しょうがないので、僕も自分のアクションを示すことにした。けれど。

「私も賛成！」

なんと、月本さんに先に言われてしまった。ちょっとタイミングがずれていることを自覚しつつも、僕も控えめに言った。

「さ、賛成…」

これをもって、僕ら調査部に、最初にして唯一の決まりが出来上がった。「退部を禁ず」。なんてすさまじい部の決まりだろう。けれど、それもまた、僕らの部には丁度いいのかもしれない。

マサルは手を叩いた。

「さて。調査部の活動に入るか」

ああ、忘れてた。皆そういう言葉を言いたげな顔をしていた。けれど、その表情をすぐに追いやって、ちゃんと背筋を伸ばす。そんな様子を見届けて、マサルは司会進行を続ける。

「週末は、例の427号室の件について、一人ひとり適宜調査をするようにお願いしたと思うんだけど…。と、いうわけで、一人ひとり調べた結果を報告してくれ。…そうそう、月本たちはいいいよ」

そう言って、マサルは月本さんと僕を指した。

## 427号室の怪【24】

月本さんはわかる。でも、なんで僕まで特別扱いされているんだろ？ と、僕は首を傾げた。

月本さんはこの前まで部に出ていなかったんだから、調査なんてできなくて当たり前。だから、報告なんて出来るはずがない。でも、僕がそうやって特別扱いされる理由は無い。でも、実際問題この土日は色々あつて忙しくて、調査のことを忘れていたくらいだから都合だったことは言うまでもない。

さて、と前置きして、マサルは藤島君を指した。

「藤島、お前からだ」

「ああ、いいよ」

藤島君は、用意していた紙を机の上に乱雑に広げた。紙質を見るに、どうやらコピーらしい。そのコピーを一枚手にとってから、藤島君は続けた。

「僕は、ちよつと聞きこみをしてみた」

「聞き込み？ 藤島にしちゃ珍しいな」

「…うん」マサルの言葉に頷いてから、藤島君は続けた。「実は僕、兄貴もこの学校の卒業生でね。…あ、とは言つても、まだこの学校が男子校だったころの卒業生なんだ。10年前に卒業したんだけど、週末、ゲームを取りに家に帰ったときに、兄貴に427号室について訊いてみたんだ」

その言葉に、マサルが不思議そうに噛みつく。

「あれ？ 確か、寮生は家に帰るとき、許可を貰わなくちゃいけないんじゃないかったか？」

我が熱血高校の寮には、夏休みなどの長期休み以外に実家に帰ってはいけないという決まりがある。マサルはそのことを言っているのだ。けれど、藤島君はそんなマサルの言葉に答えた。

「…はは、あんな決まり、あつてないようなものだから」

その答えに納得したのか、マサルは話を先に促した。すると、藤島君はスウツと息を吸ってから言葉を継いだ。

「…兄貴、妙に血相を変えたんだ。それで、“知らない”の一点張り。普段、クールな兄貴だけに、ちょっと不思議だったんだ」

で、ここからが僕の調査結果なんだ、と藤島君はコピーを掲げながら続けた。

「…きつと、兄貴は427号室について何かを知っている。でも、それが何かは教えてくれない。ってことは、だ。もしかすると、兄貴が在学している頃に427号室で何かがあったんじゃないか、って」

「で、調べてみたわけか」

「…最初は、ほとんど山勘だったよ。でも」藤島君は胸を張った。「大当たりだった」

藤島君は、乱雑に机の上に置かれた紙の中から、新聞がコピーされたものを選び出した。日付は10年前の3月のものだった。その新聞には、もう既にこの世にいない首相の顔写真が、大きく載っていた。

「…そこじゃないよ」

汚職で野党から追及を受けている、今は亡き首相の写真を見ている僕に、藤島君は釘を刺し、自分が見せたいポイントを指で指した。藤島君が指したのは、首相の記事なんかとは比べるべくもないくらいに小さい、わずか数行の記事だった。

「…ここ、小さいんだけど、一応全国欄で報じられたみたいだ。当時、高校生のこういう事件が多かったらしいから…。読み上げるよ？」  
“高校生・寮から飛び降り自殺、受験ノイローゼか？”

新聞曰く。

本日の昼12時頃、東京都 市にある平和畑学園高校の寮で、飛び降り自殺と思われる転落事故が発生した。飛び降りたのはその日卒業式に出席していた寮生・A君（18）。病院に運ばれたが、まもなく死亡した。A君は卒業式に出席したあと、寮の4階にある

自分の部屋に戻り、その部屋に付随しているバルコニーから落ちたものと見られる。遺書が発見されていないため動機は未だ不明なもの、A君は未だ進路が決まっておらず、そのことを苦に自殺を図ったものと見て警察は捜査している。

「自殺…」

うげえ、とでも言いたげな顔で、マサルが呟いた。

「寮で、そんな事件があつたなんて」

弥生さんも、ちよつと顔をしかめた。

「…で、ちよつと調べてみたんだ。その“寮生A”の部屋がどこなのか」藤島君は、ニヤツと微笑んだ。「そしたらビンゴ。427号室だつたんだ。さらに、その事件があつてからすぐ、その部屋が開かずの間になったことも判つたんだ」

「すぐに？」

聞き返す月本さんに、藤島君は応じた。

「…うん。すぐに。」寮生A”が死んだのは、3月の終わり頃だつた。そして、どうやら次の年度には、427号室は開かずの間だつたらしいよ」

整理しよう。

10年前の3月下旬、427号室でその部屋で生活していた少年が飛び降り自殺を図り、不幸にもその試みが成功してしまった。そして、それから数週間後には、427号室は開かずの間になっていた。少年の自殺、という明らかに非日常の出来事が起こつてすぐ、427号室が開かずの間になった。

と、いうことは…。

僕の思考を先回りして、藤島君は結論を述べた。

「…この寮生の自殺と427号室が開かずの間になったという事実には、なんらかの関係があつたと考えるほうがすつきりする気がするんだ。むしろ、その二件の間に関係がないほうが、むしろ不自然だと思う」

でもよお、とマサルが割つて入る。



「どういう関係が？」

すると、藤島君はまるで被告を追い詰める検察官のように不敵に微笑みをたたえ、言葉を継いだ。

「427号室を開かずの間にしたのが、寮を管理する側の人間、つまりは管理人だった、っていうのが有力だと思う。だって、自殺のあった部屋だよ？ 皆気味悪がって使いたがらないだろうって管理人が考えて、427号室に誰も入居させずに鍵を下ろした。その結果あの部屋は開かずの間になった、って考えるのが適当だと思うんだ」

「ふむふむ、筋は通ってるね」と、月本さん。「でもさ、そういう経緯がわかったところで、これからどうすべきなのが見えてこない。どうすべきなんだろう？」

「簡単さ」藤島君は続ける。「鍵を手に入れて、427号室の中に入る。それだけさ」

「え？ それでいいの？」

「ああ、平気だよ」藤島君は自信たっぷりに続ける。「だって、今回の調査は、“427号室に出た人影が何なのか”っていうものなんだ。ってことは、427号室に踏み込んで、その中に人が入った痕跡があるかないかを調べれば、それで事足りるはずだよ。もし427号資質に誰かが入った痕跡がなければ、“427号室には何者の痕跡もありませんでしたとさ。終わり”で済むから」

「そっか」

「決まったな。ってことは」マサルは言った。「とにかく、どこかにある鍵をゲットして、427号室に忍び込む。そして、人の入った痕跡があるかないかを調べる」

「でもさ」弥生さんが疑問を差し挟む。「誰が？」

しばし、会議に沈黙が訪れた。皆、“お前がやるんだろ？”と、目くばせあっている。けれど、どうしたわけかその目配せはやがてある人物に集中していった。その人物とは……僕だ。

「ま、寮生だしなあ」

「だしねえ」

「ま、せいぜい頑張りなさい」

「…僕、鳥目だから」

皆、自分勝手なことを言ってそっぽを向いてしまった。どうやら僕という人間は、そういう星の元に生まれた人間らしい、ということに、この瞬間にはじめて思い至った。

「わかったよ」僕はわざと呆れた風の声を出した。「僕が鍵を探して、で、427号室に踏み込むから」

でも、それはそれで面白そうだと、僕は心の中でほくそ笑んだ。

夜の寮は、闇に沈む。

それは、夜な夜な遊戯室のパソコンに向かうのが日課の僕なら重々承知なはずだった。でも、そのびは一層闇が深かった。普段は月明かりでなんとなく輪郭の見える廊下が、今日に限ってまるで見えない。どうしたことだろうと窓を見ると、月が浮かんでいるはずの空に、深い雲がかかっていた。

だから、しょうがなく昼の光景を思い出しつつ、抜き足差し足で一階の廊下を歩く。

けれど、こんな緊張の場面で、抜き足で歩く僕の横を優雅に歩きながら、茶々を入れるヤツがいた。

『ふふふ』

そう、ミス・エマーデイルだ。

“別についてこなくてもいい”といったのに、『あなたの行くところならどこでも行くわ』と、まるで将来を約束した恋人みたいなことを言っについてきているのだ。

「なんだよ、何がおかしいの」

小声の僕の問いに、彼女は答えた。

『だって、抜き足差し足をしているのに、足音がするんだもの』

言われてみれば、一步一步踏み出すたびにカツンカツンと足音が響く。じゃあ抜き足なんかやる意味がないか、と思い至り、結局い

つも通りの足音で歩いた。

やがて、目的地の前に着いた。

管理人室。

藤島君に、こう言われたのだ。

「……きつと、管理人さんが鍵を隠している可能性が高いと思うんだから、夜に管理人室を家捜ししてみてくれない？ 大丈夫。管理人さんは三階の空いた部屋で寝ているから、きつとバレないよ」  
確かに、同感だった。

管理人・藤原のじいさんと427号室について話したときに持った、妙な違和感。まるで、何かを庇うようにして427号室について言葉を選ぶじいさんの顔。その顔が、僕の脳裏に残っていた。そして、“きつとこのじいさんは何かを知っているんだろうな”という、予感のようなものも同時に感じていたのだ。

## 427号室の怪【25】

管理人室のドアを、ゆっくりと開いた。鍵はかかっていなかった。そういうときに限って、蝶番がまるでヘタクソなバイオリンのような音を立てるから不思議だ。部屋の中に入ると、またしてもヘタクソなバイオリンのような音を響かせながらも、扉を閉じた。

管理人室は、静寂の中にあつた。応接間に置かれているようなソファーや卓も、きわめて個性のないねずみ色の机も、椅子も、昼間のような存在感は闇に塗り消されていた。そんな、まるで個性が消えてしまった家具類に注意しながら、僕はあるところに急いだ。

それは、玄関の様子を見ることの出来る、来客用窓の傍らにある鍵置き場だ。鍵置き場、といっても、ベニヤ板のような板にフックが無数につけられていて、そこに鍵がぶら下がっているような、そんなものだ。そこには、いろんな鍵がかかっている。資料室の鍵、食堂の鍵、応接室の鍵、倉庫の鍵。そして、階毎に括られている、各部屋の合鍵。

『へえ、合鍵なんてあるのね？ で、どうするつもり？ 』

ミス・エマーデイルの問いに、僕は答えた。

「決まってる」

四階の合鍵の束を手にとってみた。じゃらじゃら、と、鎖をぶつけるような音がした。鍵には、取っ手のところに部屋番号が刻印されている。“401” “402” “403” …といった具合に。用意しておいたボールペン型懐中電灯を点けて口にくわえると、とにかく、“427”を探した。

けれど、というべきか、やはり、というべきか、“427”の合鍵は見つからなかった。

なんとなく想像はしていたこともあって、さして驚かなかった。だって、あの部屋は十年近く開かずの間だったのだ。合鍵のある部屋は普通、“開かずの間”とは言わない。

じゃあ、机の中でも探すかな、と気を取り直した丁度その時、僕は  
はることに気づいた。

足音がするのだ。

コツ、コツ、コツ、コツ。

どうやら、廊下を誰かが歩いているようだ。急ぐでもなく、さりとてゆったり歩くでもない、言うなれば“事務的に歩く”といった風の歩き方だ。

『あらあら』ミス・エマーデイルはどこか他人事に言った。『足音ね』

思わず、口にくわえていた懐中電灯を消して、ポケットに突っ込んだ。そして、ドアの前に移動して、廊下に耳をそばだてた。

コツ、コツ、コツ、コツ。

その足音は、どんどん近づいてきている。一切の気負いも見せない、まるで今この時間に歩いているのが当たり前じゃない、とでも言いたげな足音だった。でも、今はもう夜の11時。消灯時間はどうに過ぎていて、自分の部屋からの外出は禁じられているはずだ。

どんどん近づいてくる足音に、いやな予感を感じた僕は、部屋を見渡した。どこか、隠れる場所を探したのだ。けれど、管理人室は思いのほかに死角が少なく、体を隠す場所は少なそうだった。

『絶対絶命かしら』

「うるさいよ」

ミス・エマーデイルの言葉に反論しつつ、僕は頭をフルに回転させて、隠れられそうなところを探していた。でも、どんなに思いあぐねても思い浮かんだのはただ一箇所だった。どうやら、足音もほとんど近づいている。時間がない。とにかく、僕はその場所に滑り込んだ。

その場所は、思いのほか狭かった。体育すわり、という座り方があるけれど、まさにあんな感じで座りながら、とにかく息を殺す僕。そんな僕を、ミス・エマーデイルは下目使いで見据えている。

『ねえ』ミス・エマーデイルは呆れたかのような声を出した。『結

局、そこしか思い浮かばなかったの？」

声を出すわけにも行かないので、僕は首を縦に振った。体育すわりのような姿勢のせいで、首がよく動かなかったけれど。

『それは残念』

ふふふ、と笑いながら、彼女は僕を見下ろした。

不意に、外の足音が止んだ。

しかも、管理人室の扉の前で、だ。確証はないけれど、足音の気配からして、そんな感じだろう。

そして、一拍置いて、キイイ、とまるで下手なバイオリンのよ  
うな音が僕の耳に入った。そう、その足音の主が、管理人室の扉を  
開いたのだ。

しまった、と思った。

もしかして、僕が鍵を探しているのがバレたのだろうか。まずは、  
その可能性が頭を掠めたから、余計に動悸が高まった。

とにかく、息を潜める僕。僕の中で高まった動悸を、まるで耳元  
で鳴るドラムのように聞きながら。

コツ、コツ、コツ。

足音は、部屋の中を歩き出した。ゆっくりと、けれど、まるで迷  
いも無く。そして、僕の隠れているところにまで遣ってきた。さす  
がに、このときばかりは息が止まりそうだった。

けれど、意外なことに、その人影は僕の隠れている手前で止まっ  
た。そして。

がらつ。がらつ。

机の横にある、鉄製の棚を開く音。そして、閉じる音。まるで、  
棚の開け閉めが目的だったんですよ、と言わんばかりの速さで開閉  
を繰り返した後、その足音は次第に僕から遠ざかっていってしまっ  
た。そして、その足音は管理人室から出て行ってしまった。

思わず、安堵のため息をついた。

『ふふ、何をそんなにビクついているの？』

「そりゃそうだよ！　もしバレたら……」

『というか』ミス・エマーデイルは言った。『もう、そんなところから出たら？』

ああ、そうだった。

ミス・エマーデイルに言われて初めて、もう隠れている必要がないということに気づいた僕は、そろそろミス・エマーデイルの足元に這い出た。

『ちよつと聞いていいかしら』ミス・エマーデイルは狭いところから這い出てきた僕を見下ろしつつ言った。『あなた、姿を隠すのに“机の下”なんていうベタなところしか思い浮かばなかったのかしら？ もっと、気の利いた隠れ場所は思い浮かばなかったの？』

そうなのだ。僕は、よりもよって、机の下なんていうベタな所に体を隠したのだ。まるで、避難訓練のときのように、頭を抱えてささつと。きつと、注意して見られていたなら、向こうから僕の足が見えていたことだろうし、回り込まれた日には、きつと何かに怯えるように体育すわりをしている僕の姿が見られたはずだ。

少々バツが悪かったので、話を逸らすことにした。

「なあ、今入ってきた人、棚をいじってたけど、何をしてたんだ？」

「

すると、ことも無げに彼女は応じた。机の脇にある棚を指しながら。

『ああ、鍵を持って行ったわよ』

「なんだって！？」

その棚を、そろりと開いてみた。その中には、生徒の名簿やら、“管理人心得”という冊子やら、とにかく比較的重要そうな紙類が雑然と入っていた。つまり、鍵なんて入っていきそうな棚ではなかった。ある確信を持ちつつ、僕は棚を閉じた。

「なあ」僕は訊いた。「鍵を持っていった人が、どこへ行ったか判る？」

『さあ？』

首を横に振るミス・エマーデイル。

「僕は、判るんだけどな」

『なんですって？』

「きつと、427号室に行つたはずさ」

『どうして？』

「簡単さ」僕は言った。「紙類しか入っていない棚に入っていた鍵。普通この寮の鍵は、その鍵置き場に全て置かれているはずなのに、その鍵だけはそんなイレギュラーなところに置かれている。そして、そんな“イレギュラー”な鍵を、夜に抜き取る人間。その二つを、427号室に結び付けるのはそんなに突飛なことじゃないと思うんだけど」

『なるほど？ でも山勘ね』

そうミス・エマーデイルに指摘されるまでもなく、今の推論は山勘程度のものでしかない。でも、予感のようなものがあつた。いや、予感、というよりはもっと鮮明なものが、僕の中できらめいていた。そして、そのきらめきは僕の足元を照らそうと、こうこうと輝く。

彼女の言葉に答えず、僕は管理人室のドアを開いた。

案の定だつた。

427号室の前まで行くと、その部屋の扉が少し開いていた。普段はまるで刑務所の大門のように閉ざされている扉が、風に揺れるんじゃないか、ってくらいに儚げに開いていた。

「ビンゴ」

思わず僕は呟いた。

『ふん、つまらないわね』

ミス・エマーデイルは悔しそうな顔を隠さなかつた。

暗い廊下。月明かりさえないその下で、闇は圧倒的な存在感をもつて僕らの住む世界を包む。子供のころには恐ろしいものだったけれど、こうして慣れてみれば大したことでもない。



## 427号室の怪【26】

廊下から427号室の中を窺ってみた。かすかに開いた扉の隙間からは、廊下よりもお深い闇が控えていた。いくら目を慣らそうとしても、まるで慣れてくれない。

『あらあら、中に、人がいるわ』

僕の耳もとで、ミス・エマーデイルが囁く。見えるの？ と訊くと彼女は答えた。

『私、これでも目はいいの』

それはそれは、で、部屋の中にいる人は何をしてるんだ？ と中の様子を聞いてみた。すると、彼女は隙間からじっと中の様子を窺った。

『ただ、部屋の中で立ち尽くしてる』

『は？ そんなわけ…』

こう言いかけたところで、突然扉が開いた。思わず開いた扉のせいで僕は体勢を崩し、部屋の中に倒れこんでしまった。それから一瞬遅れて、扉が閉まる音がした。どうやら僕は、427号室の中に閉じ込められたらしい。

「しま」

った、と言おうとしたのだけれど、何者かの手に口をふさがれて、思いのような声が出なかった。ただ、ふぐふぐと間抜けな声をあげるばかりだ。闇の中、しかも、その中で正体不明の誰かに口を塞がれている。その状況に、パニックにならない人間はいない。当然僕も、パニック寸前だった。…やばい、殺される！　しょうがない、叫ぼう！

けれど、そんな僕より一瞬早く、僕の後ろから、優しい声が響いたせいで、叫ぶのをためらってしまった。

「ちよつと、静かにしなさい」

まるで、母親のような口調だった。まるで、ぐずる子供をあやす

母親のように、僕のことをなだめた。不思議なもので、僕もその声になだめられてしまった。それはきつと、さつきから漂う石鹸のにおいのせいだろうか。

その優しい声は、続けた。

「あんだだつて、夜にこんなところを出歩いているのがばれたら、大変なんですよ？」

長い言葉を訊いてはじめて、その声の主が結構年嵩のいった女の人だということが分かった。中年女性特有の微妙な節回しと、微妙なしわがれ声を聞き取ったのだ。そう思い至ってみれば、確かに僕の口をふさいでいる手だつて、皿洗いとか洗濯とかの水仕事をして、カサついてしまった“母親”の手だった。

そして、ここまで思い至つて、ようやく僕はその声の主の正体に見当がついた。絶対に僕に危害を加える存在ではない、ということを確認しているので、とりあえず両手を上げ、“これ以上騒がない”というポーズを見せた。すると、口を塞いでいた手を緩めてくれた。

僕は、小声で訊いた。

「なんで、427号室なんかにいるんですか、寮母さん」

「あら、察しがいいじゃない」

その声の主・ハトムネ寮の寮母さんは、呆れたように言った。

「思えば、高い声を訊いた時点で僕は気づくべきだったんです」僕は言った。「この寮は女人禁制。女の人とは原則いはず。でも、唯一の例外がある。それが……」

「寮母だった、ってわけだね？ ……で？ あんたはどうしてここに？ うるさくしちゃったかねえ？」

僕は向き直つて、寮母さんの質問に答えた。隣の部屋の悠木先輩が、427号室に入る人影を見たこと。そして、それを僕が所属している調査部に、調査依頼が入ったこと。そして、それを調べているうちに、たまたま427号室の鍵が開いていて……と、前半の方は本当の事を正直に言い、後半の方は微妙に嘘を交えた。それは、

管理人室に忍び込む、というヤバイことをしてしまったから、という危ない橋を渡ってしまったこともあり、なんとなく言いにくかったからだ。

ふんふんなるほど、と寮母さんは頷いた。どうやら、僕の嘘には気づかなかったようだ。

「で、今度はこっちの番ですよ」

僕は切り出した。何が？ と、とぼけているのか或いは本当に話の流れを理解できていないのかわからない寮母さんに、僕は続けた。「なんで、寮母さんはこの部屋に入ったんですか？」

その質問に、寮母さんは表情を変えた。さっきまで穏やかな表情をしていたのに、突然顔をしかめたのだ。その表情の変化は、暗い中でもありありと見て取れた。でも、その顔は、見ようによっては泣き出しそうな顔だった。

けれど、寮母さんはその表情を追いやった。まるで、能面を外すように容易く。

「まあ、こんなところで話もなんだから」

寮母さんは、僕を奥に促した。

部屋の奥は、十年間開かずの間だったとは思えないくらいにキレイだった。十年間ほったらかしだったなら、もっと埃っぽいかなと思っていたのだけれど、僕の部屋なんかよりもはるかにキレイに整頓されているようだ。吸った空気もはるかにキレイだった。まるで部屋のデイトールはわからなかったけれど、でも、暗い中でも、そのキレイさは瞭然だった。

突然、周りの闇が消えた。突然明かりがついたのだ。

え？ 思わず振り返ると、寮母さんが明かりのスイッチを押していたところだった。寮母さんは、いつものようにエプロンをして、いつもどおりのオバサンパーマ姿だった。電気を点けたりしたらまじいんじゃないですか！？ と思わず訊くと、寮母さんはこともなげに言った。

「ああ、平気だよ、だって雨戸もしっかり閉じてあるから」

けれど、僕はそんな寮母さんの言葉を聞いてはいなかった。

部屋の中の光景に、思わず声を失っていたからだ。

「ああ、驚いただろ？」まるで自分の事のように寮母さんは胸を張った。「こんなすごい草原、そうは見れるものじゃないよ」

闇が去ったあとの部屋には、家具はほとんど無かった。ただ、座卓とキャンパス、パレットだけが置かれている。テレビさえない。けれど、そんな閑散とした部屋構成が気にならないくらいに、この部屋の壁が異様な存在感を放っていた。

一面、草原なのだ。

いや、正確には、僕を包む四方の壁に、草原の絵が書かれているのだ。前を見ても横を見ても、後ろを見てすらどこまでも続く草原が、僕の目の前に広がっていた。じゃばらな雨戸にすら、まるでそれが当然のことであるかのように草原の風景が描かれていた。

でも、不思議なことなのだけれど、その草原は、全て青系統の色で描かれていた。それなのに、この草原の絵は自分が本物の、果てのない草原の中に立っているのかと疑ってしまいたくなるほどに、リアルな光景だった。あともう少しだけ待ってみれば、草原から立ち上る青い香りが巻き上がるのではないか、と思わせるほどだった。絵というものにはじめて圧倒された僕は、言葉を失っていた。けれど、そんな僕の代わりに寮母さんは言葉を紡ぎ始めた。

「これ、きつと北海道の草原なんだよ」

言われてみれば、日本でこんな果てのない草原なんて、北海道以外にあるまい。

寮母さんは続けた。

「きつとあの子にとって、北海道の草原はこんなにも印象に残ってたんだねえ」

「あの子？」

僕の問いに、寮母さんは問いで返した。

「あんだ、427号室の事を調べていたんだろ？　ってことは、この部屋で何があったのかも知ってるだろう？」

僕は首を縦に振った。

「はい。…自殺があつたんですね」

「あらら」寮母さんは困つたような顔を隠さなかった。「そこまで知れているならしょうがないねえ。じゃあ言つちまうけどさ、いい？ けっこう爆弾発言なんだけど」

軽い口調だったけれど、でも、その軽さは心の奥底にある重いものを、必死で隠すためのものに思えた。だから、僕は身構えて、頷いた。

「ありがとうね」寮母さんはなぜかお礼を言ってから、続けた。「この部屋で自殺したのは、私の息子なんだよ。たった一人の、大事な息子だったんだ」

「え？」

僕の戸惑いをよそに、寮母さんは続けた。

「ときにあんた、ここで死んだ子の名前、調べ済みじゃないのかい？」

「え？ 新聞には載つてなかったから、知らなかったんです」

「ああ、そうかもね」寮母さんは続けた。「ここで死んだ子の名前、宮原拓斗って言うんだ。それで、私も十年以上前は、宮原だった」

宮原。どこかで聞いたことのある苗字だな、と思つたけれど、どこで聞いたものか思い出せなかった。

「あたしと息子は、元は北海道で住んでたんだ」と、寮母さんは遠い目をしながら朴訥と続けた。「昔は、北海道であたしと息子、そして息子の父親の三人で暮らしていたんだ」

“息子の父親”というよそよそしい響きに、僕は戸惑った。大人という人間は、子供をいつまでも子ども扱いする。でも、子供というのは大人が思うほどに幼稚な生き物ではない。

寮母さんは続けた。

「子供とは縁が切れないけれど、夫とは縁の切りようがあるのさ」言葉の端々は、どこか寂しそうだった。「別に、何が悪いわけじゃなかった。別に、夫が暴力を振るつたわけでもなければ、家庭を顧

ないような人だったわけでもない。でも、なぜか夫と上手くいなくてねえ。きつと、それは相性みたいなものだったのかもしれないね。でも、私はこらえ性が無かった。だから、離婚した。あの子が中学三年の頃だったかねえ」

離婚した。重大な言葉のはずなのに、まるで日めくりカレンダーの数字のように、どこか事務的な言葉の羅列でしか僕の耳に響かなかった。きつとそれは、あまりに淡々と言葉を紡ぐ寮母さんの姿に、僕がどこか違和感を持っているからなんだろう。

## 427号室の怪【27】

「離婚してから、あたしは息子連れて、東京に出て来たんだ」と、寮母さんは続ける。「別に理由は無かった。しいて言えば、息子が東京の学校に進学したい、って言ったから。私はもう元の姓に戻ってあの子は宮原の姓だったけど、親子の縁が切れるわけじゃないから。それが十数年前のことよ」

きつと、親権が父親に渡ったのだろう。そしてその息子が東京の高校を志望して東京に移ったのを期に、自分も東京に移ったのだろう。「息子を連れて」とか言うてはいたけれど、実のところ息子について東京まで出て来たのだろう。何度も言うけれど、子供だってそういうややこしいことを理解できないほど幼稚ではないのだ。

「あたしは、とりあえず東京で働いたわ。皿洗いとか、コンビニの接客とか。東京って、北海道と比べると働くところは多いけれど、でも物価が高くてね。でも、そんな生活でも、時折息子に会うときだけは、ものすごく嬉しかった。だってそうじゃない。あたしにとってはたった一人の、心通じる家族なんだものね」寮母さんは、昔語りのように言葉を継いでゆく。「でも、あの子もあたしの前から消えちゃった」

寮母さんは、オバサンパーマのかかった髪を、ささっと跳ね除けた。そして、懐かしそうに壁の草原の絵を見遣りながら、続ける。

「まさに、青天の霹靂、だったわね。いえ、今にして思えば青天の霹靂でもなかったのかもしれない。だって、あの子、卒業式の日になっても、進路が決まってなかったんだもの。きつと悩んだ。それこそ、夜も眠れないくらいに悩んでいたはずなのに。でも、あの子はそんなことをおくびにも出さなかった。卒業式の前日に会ったときだって、“どうにかなるさ”って笑ってて、こっちがもどかしかったくらいだったんだもの。……でも卒業式の日、寮から飛び降りて、そのまま死んじゃった」

彼女の語る言葉は、最早完全に風化していた。そのことに、ようやく気づいた。彼女の言葉から、生の感情は既に枯れ果てている。彼女の言葉の奥底に残っているのは、かつて生だったはずの感情が干からびて出来た、残滓のようなものでしかないことを。でも、そんな残滓でも、人の心を痛ませ続ける。そして、聞く者の思いを揺さぶるくらいの力は残っている。

「なんで、気づいてやれなかったのかね」寮母さんの目が潤み始めた。「あの子の痛みを、どうして気づいてやれなかったのかね？」

どうして、わかってやれなかったのかね、親なのに」

親だからじゃないのか、と僕は思ったけれど、口にはしなかった。

「あたしが時折ここに来るのは、息子の声を聞くためなの」

「息子の声を？ 訊く？」

「ええ」力強く、寮母さんは頷いた。「そもそも、あたしがここに就職したのは、息子がどうして死んだのか、そのわけを知りたかったからなのよ。息子は私に何の言葉も残してくれなかったし。そして、この寮に潜り込んでから、息子のことを調べ始めた」

僕はふと、「遺書は残っておらず」という、新聞記事の一節を思い出した。

「最初は、いじめにでも遭っていたのかと思った」と、寮母さん。

「でも、冷静になってみれば判ることだけど、仮にいじめにあっていたんだとしたら、そのいじめっ子と縁が切れる卒業式に自殺なんてありえないものね。それに、息子は友達にも恵まれていたようだった。じゃあ、学校の先生とソリが合っていないのかとも思った。でも、それも違ったようだった。……最初は誰かが息子を追い詰めたんだと思ってたんだけど、それは違ったみたいだった。卒業文集とかアルバムの写真を見ていて、それはすぐに判った」

でもね、と寮母さんは続ける。

「息子は、本当に高校生活を楽しんでいるようだった。そして、本当に楽しそうに、次の生活に足を踏み出そうとしてた。“絵描きになりたい”なんて子供みたいな夢を、卒業文集にデカデカと書いて



たのに。なのに、なんの前触れもなく死んだ。

…あたしには、どうしても理由がわからないの。だから、時折此処に来て、その理由を考えるようにしているのよ。息子の描いた、この草原を見ているとね、なんだか息子が囁きかけてくれるような気がしてね。そうすると不思議なものでね、何度かこの絵を見ていると、確かにこの絵が描き込まれていつているように感じ始めたの」「え？」

最初は、比喻かと思った。でも、彼女は続ける。

「最初はこの絵は、下手くそで何が描いてあるのかさえよく分からないような絵だった。でも何度か見ているうちに、まるで誰かが描き足しているみたいに景色が完成して行っただの」

「そんな馬鹿な」

僕の言葉をものともせず、寮母さんは続ける。

「でも、本当なんだもの、しょうがないじゃない。…でもね、そうやって描き足される絵は、息子が何かを語っているかのようなだったわ」

開かずの間になっているはずの部屋の絵が、描き足されるはずもない。下手な怪談のようだったので、額面どおり信じるわけには行かない。でも、とりあえずそれを承服したふりをして、訊いた。

「で、理由はわかりましたか」

僕の質問に、彼女はかぶりを振った。そして、力なく答えた。

「いくら考えてもわからない。わかるはずもない」

そうですか、と力なく答えたあと、僕は訊いた。

「ひょっとして、427号室の合鍵を隠していたのは、寮母さんだったんですか？」

すると、寮母さんはかぶりを振った。

「いいえ。管理人さんが隠していたの」

「管理人さんが？」

もっとも、と前置きしてから、寮母さんは続けた。

「オリジナルの鍵は、随分前になくなってしまったらしいけれど。」

管理人さんが言うには、いつなくなったのかは判らないけれど、とにかく今はもう失われているんだ、って」

寮母さんは、僕に鍵を投げ超越した。

「その鍵、元のところに戻しておいてくれないかね？」

「いや、僕、その鍵がドコにあったか知らないんですけど」

既にドアのところにまで足を進めている寮母さんに、僕は声をかけた。すると寮母さんは振り返り、ふふふ、とまるで誰かさんのように微笑んだ。

「さつき、管理人室で見たでしょが！」

どうやら、僕が管理人室に居たことはバレていたらしい。

寮母さんは僕に手を振ると、扉を開いて出て行ってしまった。独り残された僕は、鍵をまじまじと見遣ってため息をついた。

「あらあら、ため息なんて、なかなかいい感じじゃない？」

そうだった。僕は、一人になんかなれないのだ。だって、僕の周りには、まるで衛星のように僕にとりつく、ミス・エマーデイルがいるのだから。

「なんだか、解せない、って顔してるわね？　どういうことよ」

だって、と歌でも歌うように節をつけて前置きしてから、ミス・エマーデイルは続けた。

「427号室に出るといいう幽霊は、十中八九、寮母さんの姿を見間違えた、ってことでいいんじゃないのかしら？　これ以上、なんの疑問が？」

ミス・エマーデイル。僕の倦怠が形を持ったもの。さすがに、僕の感情の機微や、思考のよどみを計るのは上手らしい。僕は答えた。

「だって、おかしいじゃないか。寮母さんが、悠木先輩の見た幽霊の正体だとしたら」

『何でよ』

「だって、悠木先輩は件の幽霊を少年だった、って言ってるんだ。あの寮母さんを、いくら暗がりとはいえ、少年に見間違えたりはし

ないでしょ」

『…まあ、確かにね』

きつとミス・エマーデイルは寮母さんのエプロン姿とオバサンパ  
ーマを思い出しているのだろう。不承不承ながら頷いた。

「それに、“絵がどんどん描き足されている”っていう寮母さんの  
言葉。あれだつておかしいだろ？　もしかして、本当に誰かが描き  
足しているんじゃないか…」

『それは、ちよつと飛躍が過ぎると思うけれど』

と、此処まで言つて、ミス・エマーデイルは口を突然つぐんだ。

そして、耳の横に広げた手を衝立のように立てた。まるで、小さな  
音を聞き逃すまいとしているかのようなうだった。そして、まるで軍事  
リーダーのように首を左右に振った。

「どうしたんだ？」

『しつ、黙つて』

彼女は、部屋の隅から隅を、耳を澄ませるポーズのまま見回した。  
まるで、見えないなにかを探しているかのようなうだった。

『どうやら、あなたの読みは当たりみたいね』

突然、ミス・エマーデイルは言った。

「どういうこと？」

僕の疑問に、彼女は答えた。

『あなたの言う通り、つてこと。つまり、この部屋には、何かがい  
るわ』

「何か？　幽霊か何か？」

『あのねえ』ミス・エマーデイルは僕のことをなじった。『前にも  
言つたでしょう？　幽霊なんて存在しないわ。…この部屋にいるの  
は、私の同類ね』

「同類？」僕は言った。「つまり、誰かの倦怠が形を持ったもの  
？」

『惜しいわね』ミス・エマーデイルは続ける。『きつと、ここに  
いるのは、倦怠が形になった奴ではないわ』



## 427号室の怪【28】

「どういうことさ？」

『簡単よ』ミス・エマーデイルは言った。『倦怠意外の感情が、形を持ったもの。それが、確かにいる。…確か以前あなたに話したと思うけれど、強すぎる想いつてもものは、その主から抜け出して、ひとりで動き出してしまうときがあるの』

そして、と前置きしてから、彼女は続ける。

『きつと、この部屋にも隠れている』

「なんだって？」

ミス・エマーデイルはスタスタと歩き出し、あるドアを指した。

このドアは、トイレに続くドアだ。

『ここに隠れているわ』

「トイレに？」

そんな馬鹿な。トイレに変なものが？ そんな、妙な気分を持ちつつも、半信半疑でトイレのドアを開いた。

その瞬間だった。

僕がちよつとばかり開いたはずのドアは、まるで蹴破られたかのように勢いよく開いた。その勢いにのけぞった僕だったけれど、確かにその時、ドアの隙間からなにか黒いものがひゅつと飛び出していくのが見えた。その黒いものは、草原が描かれた部屋に向かって飛んでいってしまった。

「あれが？」

『そうね、あれがそう』

僕らはその影のあとを追って、草原が描かれた部屋に入った。その影は、まるで僕らの事を待っていたかのように、僕らを見据えて立っていた。

その影は、男の子だった。

白いTシャツに黒いハーフパンツ。そして、白いタオルをまるで

バンダナのようにして頭に巻いている。ぱつと見た感じは、中学生のようないでたちだ。でも、きつとそんな印象を持ったのは、その服をまとっている“少年”があまりに屈託なく微笑んでいるからだろうか。

でも、この世のものとは思えなかった。何せ、その少年にはほくろとかそばかすとか、そういう綻びがまるでなかったからだ。そういう意味では、僕の横にいるミス・エマーデイルと近い。

「なあ、コイツは一体…」

思わず訊く僕に、ミス・エマーデイルは驚きを隠さなかった。

『あら？ あなた、もしかしてコイツの姿が見えるのかしら？ おかしいわね？ コイツは主のほかには私みたいな“同類”にしか見えないはずなのに…』

「しつかり見えるよ」僕は言った。「男の子だろ？ あ、今、コマネチをやった」

コマネチをした男の子は、突然部屋の隅にあるパレットと絵筆を手を取った。そして、座卓の上に置かれていた青い色の絵の具をパレットに載せてから、それを絵筆に絡め、壁にそれを塗り始めた。そうやってその男の子は、草原の風景をさらに濃密なものにしていく。

その姿を見て、ようやく判った。悠木先輩が見たのは、この少年だったんだ。

「何をしてるんだ？ あいつ…」

『見て判らないの？ 絵を描いているのよ』

「それは判る。でも、何のために？ それに、アイツは何なんだ？」

絵を一心に描く少年を眺めながら、僕はミス・エマーデイルに訊いた。するとミス・エマーデイルは、少年の後ろに立って、彼の後頭部にぴとつと額をくつつけた。まるで、本を読んでいるかのような難しい顔を浮かべて。けれど、すぐに頭を上げて、僕の質問に答えた。

『この子は、ここで死んだ男の子の、“享樂”が形になったものよ』  
「キョウラク？」

聞きなれない言葉を思わず聞き返した僕に、彼女は続けた。

『そう。“楽しいな”“面白いな”っていう想い。それが、形になったもの。それが、この男の子なのよ』

「倦怠が形になった、ミス・エマーデイルみたいに？」

ミス・エマーデイルは頷いた。

『そう。…え？　なんですって？』

ミス・エマーデイルはまるで誰かに呼び止められたかのように振り返った。絵を描き続ける少年の方を。そして、まるで話を聞き入るように少年のほうを見遣っていた。そして、彼女は不意に口を開いた。

『どうやら、この男の子、“ドニスト”っていう名前らしいわね』

「え？　彼、喋ったの？」

『え？　あなたは聞こえないの？　姿は見えるのに？』

ものすごく不思議そうな顔を見せるミス・エマーデイル。そんな彼女に、僕はかぶりを振った。

『あら、姿までしか見ることができないのね、それは残念』

「で、さ」僕は本題を切り出した。「この、ドニストくん、だっけ？　この子は何をしてるんだ？」

すると、ミス・エマーデイルはアハン、と鼻を鳴らした。

『絵を描いているのよ』

僕が聞きたいのは、そういうことじゃない。僕が聞きたいのは…  
「その行動に、何の意味があるんだよ？」

『ふん、意味なんて、ありはしないわ。この子は、死んだ少年の享樂のままに、こうやって絵を描き続けているに過ぎないわ。…享樂が形をもった者たちっていうのは、その主が何に享樂を抱いていたかによって、まるでその性格や行動が違うの。つまりドニストの主である、ここで死んだ少年は、絵を描くことが楽しくって楽しくってしょうがない人だったんでしょね』

「でも、主が死んでもなお、こうやって活動し続けるものなの？」  
『いいえ、順序が逆じゃない？』

彼女の言葉の意味が判らず、僕は首を傾げた。まるで、そんな僕の事を咎めるような視線で射すくめたミス・エマーデイルは、自分の紡いだ言葉の種明かしをして見せた。

『主が死んでもなお、活動しているわけじゃないの。主が死ぬことで、ようやくドニストはこうやって絵を描き続けることができるのよ』

まだ、意味が判らない。話を先に促すと、ミス・エマーデイルはさらに話を噛み砕いてくれた。

『ドニストは、死んだ少年の享楽が形になったものなの。でも、享楽という感情は、すぐに色あせてしまうものなの。いいえ、享楽だけじゃない。どんな感情も、霞みたいに儚げで、いつかは消えてしまうものなの。でも、それは、私達にとっては恐ろしい話よ？ だってそうじゃない、私達は、そんな儚げなものの上にしか存在できないんだから。だから、私達は永遠を望む。感情の永遠を』

「感情の、永遠？」

『そう、感情の永遠』

ミス・エマーデイルは、僕の顔を見据えて、微笑んだ。僕は、思わずはっとしてしまった。それは、彼女の顔が、あまりに美しかったからだろうか。それとも、彼女の真つ黒な瞳の奥に、五千万年以上の奥行きで広がる悲しい孤独を読み取ってしまったからだろうか。彼女は、僕の顔からちよつと視線を外して、続けた。

『感情が揺れるのは、その人間が、外の世界と繋がっているからよ。だから、私達は、自分の主を外の世界と隔絶させる。そして、二人で生きることが望む。でも、それでも感情は揺れるもの。だから、私達は次の一手を打つのよ』

「次の一手？」

『主を、殺すの』ミス・エマーデイルは、昏く微笑んだ。『そうすれば、感情がぶれることもないまま、私達は存在してゆける。そし



て、主と一緒に生き続けることができる』

「ちよつと待つて！ でも、主を殺したら、“主と一緒に生き続ける”なんて、できないじゃないか」

『出来るのよ。だってよく考えて？ 私は、“あなたの倦怠が形を持ったもの”なの。こう言うては何だけど、私達はこの世界に生をうけた瞬間に、あなたを内包しているの。だから、あなたが死んでも、私達はあなたと生き続けることができる。それに、あなたは永遠に生き続ける』

一息ついてから、ミス・エマーデイルは続けた。

『ここにいるドニストは、その成功例なのね、きつと』ミス・エマーデイルは言った。『主と共有した、“享楽”の世界を守るために、彼は主を突き落としたのでしょーうね』

「つまり」声が震えるのを自覚しつつ、僕は訊いた。「ドニストがこの部屋にいた少年を殺したの？」

『概ねはそうね。でも、あなたが想像している事実とは、少々異なるんだけど』と、ミス・エマーデイルは前置きして続ける。『きつと少年は、ドニストに誘惑されて、自ら死を選んだのよ。それは、厳密には“殺した”ことにはならないわ』

「誘惑？」

『そう。私が、あなたがするのと同じように』

と、いうことは、十年前この部屋から飛び降りた少年も、今眼前で絵を一心に描き続ける少年と、なにがしかのゲームをしていたのだろうか。男同士だから、まさか「キスしたら負け」なんてルールじゃないはずだろうけれど。でも、十年前、少年は負けてしまった。誘惑に。

『誘惑したのが罪というのなら』ミス・エマーデイルは言った。『確かに、ドニストは少年を突き落としたことになるわ。でも、これだけは判つて欲しいの。少年は飛び降りる瞬間、享楽に包まれて幸せだったはずよ。だって、そうじゃなかったら、ドニストはこの世界に存在できないんだもの』

壁に向かって絵筆を塗りたくるドニストは、本当に楽しそうだった。たった一人、壁の絵を完成させる作業。きっとそれは、生前に少年が着手して、それを引き継いだものなのだろう。それは、確かに少年とドニストとの共同作業に思えた。

## 427号室の怪【29】

ふと部屋の隅を見ると、既に中身を搾り出されてしまった様々な色の絵の具チューブが雑然と置かれていた。きつと、この絵を描き続けるうちに、使い切ってしまったのだろう。きつと死んだ少年も、青い色彩が好きだったのだろう、青いチューブばかりが沢山置かれていた。そのせいで、草原の景色が青みを帯びて僕の目の前に広がっているのだ。

でも、ふと見ると、この部屋にはもう青いチューブさえほとんど存在しなかった。今ドニストが手に持っているチューブだけ。それを使い切ってしまったら、もう絵の具は果ててしまう。

ドニストは、どうする気なんだろう。

427号室という、閉じられた空間の中、絵の具さえ尽きてしまったとき、ドニストは今のよう笑顔でいられるのだろうか。

ふと、ドニストに言葉をかけてみたい衝動に駆られた。けれど、彼にかけるべき言葉が見つからなかった。

『さあ、行くわよ』

ミス・エマーデイルは、古い詩を並べるかのように続けた。

『この部屋は、ここで死んだ子とドニストの二人のもの。たとえこのまま朽ち果てようとも、私達が邪魔することなんて出来ないのよ。私達に出来るのは、ただ傍観するだけ。見届けるだけ。そして、悼むだけ』

ミス・エマーデイルに誘われるがまま、僕は427号室をあとにした。

「へえ、で、結局お前はここまで辿りついた、ってか？」

激烈屋のバックルーム。その埃っぽいパソコンの前で、丸目さんは頭を掻いた。

この日は雨だったこともあり、激烈屋はどこまでも空いていた。

雨が運ぶ湿気が、バツクルームにまで浸食してくる。そして、僕らの心にまで浸食してくる。でも、湿った話を聞くにはおあつらえ向きな陽気とも言える。

「はい。辿りつきました」

「ここまで話を聞いて、だ」丸目さんは言った。「427号室に、何かがある、っていうことは判った。でも、それでどうして俺のところに来た？」

僕は丸目さんに全ての事情を説明した。427号室に亡霊が出るという噂がある、という事実。そして、その部屋ではかつて自殺があったこと。実は427号室には、その自殺した生徒の感情が、ひとりでに抜け出して残っている、ということ。そして、今のハトムネ寮の寮母さんは、その自殺した生徒の母親だ、ということ。僕が喋らなかつたことはただ一つ、“僕も、実は僕にしか見えない女の子に付きまとわれている”という事実だけだつた。

でも、それを差し引いたとしても、かなり荒唐無稽な事実であることに変わりは無かつた。なのに、丸目さんは僕の言うことの一切を受け止めてくれたようだった。おかげで、話を先に進めやすかつた。

僕は、丸目さんに訊いた。

「丸目さん、あの部屋で自殺した宮原さんの、友達だつたんですよ？ 正確には、親友みたいな関係だつたんですよ？」

「……」しばし、考えるようなポーズを取りながら、椅子の背もたれに寄りかかる丸目さん。けれど、すぐに口を開いた。「…なんで判った？」

「まずは、“宮原”という名前、あれに覚えがあつたのが始まりでした。でも、僕に“宮原”なんて知り合ひはいませんでした。でも、確かに覚えがあつたんです。そんなわけで、心当たりを当たりまくりました。そうしたら、あつたんですよ。“宮原”の名前。どこだと思います？」

丸目さんは答えなかつた。妙な沈黙が滑り込む前に、僕は続けた。

「卒業文集だったんです。丸目さん、“UFOの見える丘”ってご存知ですよ」

その問いかけに、丸目さんは答えた。

「ああ、知ってるよ」

「ですよ。だって、あなたの友達の一人が、卒業文集に書いているんですから」僕は続けた。「その文集の中に、あったんです。“宮原”の名前。そして、“丸目”という名前も。“宮原”はともかく“丸目”なんて苗字、すごい珍しいですから。それに、その“丸目”なる人の文集も読ませてもらいました」

「読んだのか」にがにがしく微笑みながら、丸目さんは続けた。「で、なんて書いてあったんだ？」

「“農家を継ぐのがイヤだ。楽しい仕事がしたい”って」

「はは」丸目さんは笑った。「初志貫徹、だなあ」

「とにかく、あなたが卒業したのが10年前。そして、そのあなたは死んだ宮原さんと友達だった。そこまでは判ったんですよ」

「ん、いかにもそうだ」丸目さんは過ぎ去った日々を懐かしむように言った。「俺と宮原とは、よくつるんだ友達だった。でも、死んだじまったんだよ、俺たちに何の相談もなく」

伏し目がちの丸目さんに、僕は訊いた。

「もしかして、丸目さんが言ってた、“喧嘩したまま別れちゃった友達”って……」

「ああ、宮原のことさ」と、丸目さんは難なく答える。「あいつ、卒業になるっていうのに、進路が決まっていなかったんだ。もともとフワフワした雰囲気の人だったから、本当に心配だった。俺も藤島も猿渡も心の隅では心配だった。でも、言いくいのも事実だった……で、俺が宮原に言ったんだ。“これからどうするんだよ！”って」

僕は黙って頷いて、話を先に促した。

丸目さんは続ける。

「その言い方が不味かったのかもしれない。あいつ、怒り出しちゃ

つてさ。そのまま喧嘩別れ。で、修復する間もなくアイツはお空に飛んでった」

最後の一言が軽口なのかそれとも心の奥にある混沌を漏らさないための予防線なのかを測りかねた僕は、口をつぐんだ。けれど、丸目さんはそのあと黙りこくってしまった。僕らの間に、沈黙が滑り込んだ。

「で、お聞きしたいことがあるんです」ようやく僕は、本題を切り出した。

「なんだ？」

「427号室の、マスターキーはどこにあるんですか？」

「マスターキー？」

丸目さんは、心底驚いた、とても言いたげな顔を浮かべた。

「はい。どうやら、あの自殺の直後から、あの部屋は開かずの間になつていたみたいなんです。だって、宮原さんのものと思しき私物が置かれたままでしたから。きっと、自殺の直後、その騒ぎのドサクサに、誰かがその鍵を隠したんじゃないかな、って思ったんですけど」

正直、これは憶測だった。もしかしたら、自殺騒ぎのドサクサに、マスターキーが紛失したのかもしれない。それに、あの部屋は、厳密には開かずの間ではなかった。なにせ、スパキーがあつたのだから。もしかすると、あの部屋を開かずの間になったのは、“鍵が失われたから”なんて事務的な理由ではなかったのかもしれないのだ。

けれど、僕の言葉に何か思うところがあつたのか、丸目さんは椅子を回転させて机の引き出しを開けた。そして、その奥をしばらくまさぐるとまた引き出しを閉め、僕に向き直った。

「まったく、お前の推理力には負けるよ」

丸目さんは、僕の眼の前で右手を広げた。その中には、古ぼけた鍵が一つあつた。そして、その鍵には“427”と刻印されていた。「うん、427号室の鍵を隠したのは、俺だ。いや、正確には、俺

「ただ」

「俺たち？」

僕の言葉に、丸目さんが応じた。

「ああ。俺と、藤島と、あと猿渡ってヤツの三人。つまりは、U F Oの見える丘に連れ立っていったメンツでやったことなんだ」

丸目さんは、その鍵をもてあまし気味にひょいと投げた。鍵は、くるくると回りながら、放物線を描いてまた手の中に落ちた。

「宮原が死んだ。あれは」丸目さんは言った。「仲間内ではショックだった。だってよ、18だぜ？ 18の頃なんて人生もバラ色で、何にも悩みなんてない頃だ。なのに、あいつは悩んでいたんだろう。だから、自殺なんてしたんだろう」

「いいや、実は彼は……、と言おうとして、留まった。いくら丸目さんとは言えど、「彼は“享楽”に殺された」なんて事実、信じてくれないだろう。」

丸目さんは続けた。

「俺たちは、口には出さなかったが、後悔してたんだろうな。“なんで、あいつの痛みを理解してやれなかったんだろう”って。で、アイツの葬式に出たあと、気づいたら“鍵を盗む”って話になってたんだ。“そうすれば、アイツが死んだことが風化しないから”って、藤島が言っただけな。とにかく、鍵を盗んだんだ」

「そうだったんですか」

「理由なんてなかった」丸目さんは、しみじみと言った。「でもよ、死んだ人間に線香を焚いたり、手を合わせたりするのだって、科学的な理由なんてないはずだろ？ “今にして思うと” だけどさ、あれは、俺たちなりの“追悼”だったんだ。アイツの部屋を、生前のまま取っておくことで、アイツを悼もうとしていたんだろうな」

でも、と前置きして、丸目さんは手の中の鍵を見遣った。

「もう、10年も経つのか。不思議だな、もう10年も経つていうのに」丸目さんは下を向いた。「悔しさ、っていうのは残るものなんだな」

丸目さんはもはや、18歳の少年ではなかった。けれど、427号室にいたのは、紛れもなく少年だった。そして、丸目さんの奥底には、まだ18歳の少年が佇んでいた。そうということなんだろう。

一瞬の沈黙。

その沈黙を、またもや丸目さんが壊した。

「なあ、頼みがあるんだが」

「なんででしょう？」

「あの部屋のことは、内密にしてくれないか？」丸目さんは頭を下げた。「お前、調査部なんだろう？　ってことは、あの部屋の秘密を暴いて、それで公表するのが任務のはずだ。それは判る。でも、頼む。あの部屋は、あのままにしておいて欲しい」

僕は笑った。

「安心してください」

実は、今回の調査結果を、公表する気はさらさら無かったのだ。

だって、今回の話を公開することで、悲しい想いをする人間が少なからずいる。藤原のじいさんの言葉じゃないけれど、「善意によって隠された」事実を、無理矢理に公開する必要なんてない。

だから、僕はちよつと捏造をした。



## 427号室の怪【30】

僕の部屋を適当に荒らして写真を撮って、調査部部員たちや悠木先輩、井上先輩に見せたのだ。「ほら、この通り、427号室には何もありませんでした。しかも、誰かが入った形跡はなし。なんで、今回悠木先輩が見たものは、少なくとも人間ではないはずですよ」と井上先輩はそれで納得した。「ああ、俺は、427号室が悪用されてさえないればいいんだ」とか言っていた。調査部部員と悠木先輩はそれで納得しなかったけれど、「でも、幽霊の实在が怪しい以上、その正体を幽霊と決め付けろのはいかなものか」と煙に巻いておいた。調査部部員たちも悠木先輩も、むむむ、と唸るしかなかった。というより、それ以外の反論を一切許さなかったという方が正しい。

「そうか」

僕の言葉を理解したのか、丸目さんは笑った。

結局、こんな感じで、この調査は幕を閉じた。

調査部の活動の中で唯一、「未解決・再調査無期延期」のレッテルが張られ、迷宮入りした調査だった。ちなみに、そのレッテルを半ば強引に張ったのが僕であった、という事実は、あえて言挙げするまでのこともないだろう。

たぶん、これから427号室は開かずの間であり続けるのだろう。

そして、427号室の奥では、青い絵の具で風景を描く少年が、楽しそうに微笑んでいるのだろう。

そして僕は、その様を想像しては嬉しい気分になる。時折暗い気分にもなるけれど、あえて考えることをせずに、僕はその絵が完成する日を、ただ待っている。

#### 427号室の怪【30】（後書き）

これにて「427号室の怪」終了です。

というか「427号室の怪」【30】、尺が短すぎですね。スイマセン。

## 祭りの明暗【1】

「ちょっと、いいかな」

楽しい知らせ、というのは、いつも突然やってくる。

まるで、一陣の風のように。あるいは、空を飛ぶツバメのように。どちらも、気づけば僕のことを追い抜かしてゆく。そして僕に囁きかける。“もう、春は来ているんだぞ？”と。僕はいつも、一陣の風が巻き起こる瞬間を感知することが出来ないでいるし、ツバメが南から帰ってくる時期を思い出せないでいる。

繰り返すけど、楽しい知らせというのは、いつも突然にやってくる。

そんなことを頭の片隅で考えていた僕の顔を、月本さんが覗き込んできた。

「どうしたの？ 呆けちゃって」

「ああ、いや、なんでもない」

変な物思いに沈んでいたせいで、今自分が立っている所とか、どいうシチュエーションなのかも忘れてしまっていた僕は、辺りを見渡した。そこは、何の変哲もない学校の廊下だった。ふと右手を見る。右手には化学の教科書とノート、あとは筆箱が握られていた。ふんふんなるほど。ようやく、思い出した。

僕は化学室へ行こうと思っていたのだ。次の時間が化学の時間で、実験があるから教室移動があるのだ。そして、その教室移動の途中、月本さんに呼び止められたのだ。

きつと、僕はまたしても呆けた顔を晒していたのだろう。月本さんは、僕の眼の前で手を振った。

「おーい、だいじょうぶ？ なんだか意識が遠いよー」

「へ、平気だつてば」

「うんうん」月本さんは、まるで赤べこのように首を振った。「…」

…ところでさ、今日、部活の放課後ミーティングに出る気あった？

「

いきなり、ぶしつけな質問だな、と僕は思った。

ウチの部・調査部は、ミーティングがとてつもなく好きな部である。昼休みと放課後の都合二回。それを、日曜日を除く毎日やっている。土曜は授業が半日だから、午後の間はずっとミーティングをやっている。しかも性質の悪いことに、ミーティングとは名ばかりで、実はただの雑談が八割を占めている。これだけ雑談、もといミーティングばかりだと、“調査部”なんて看板を外して、“会議部”とか、“トーク部”とかに部名をすげ代えたほうがいいんじゃないか、と思うことも多いのだけれど、部員の反感が怖くて口に出さないでいる。

こんな説明をしたのにどういう意味があるのかといえば、調査部員たるもの、ミーティングには絶対に出るべし、という不文律が調査部員の間に広がっていたことを明言したかったのだ。調査よりもむしろミーティングの方がウェイトの大きい部である調査部にとって、“ミーティング”というのはサッカー部におけるシュート練習、吹奏楽部における合わせ練習に匹敵する活動なのだ。で、ある以上調査部員である僕が、何の理由もなしにミーティングをサボることなんてありえない。

「うん、出る気だったけど？」

この日も、特に用事がなかった。だから、ミーティングに出ないという選択肢のなかった僕はそう答えた。すると、月本さんは大げさなくらいに、文字通り胸を撫で下ろした。どうでもいいけど、そんな動作のせいで、月本さんの絶壁のような胸を意識せざるを得なかった。

そんな僕のことなど知る由もない月本さんは、胸を撫で下ろした訳を喋り始めた。

「実はさ、今日のミーティングで、調査したいことのプレゼンをしたように思っただけど……」

「思っただけど？」

僕が話を先に促すと、月本さんは続けた。

「ちよつと、頼みたいことがあるんだよね」

「た、頼みたいこと？」

その頼みごとの内容を聞く前に、既に及び腰になっている僕だった。今まで16年しか生きてきていないとはいえ、他人からの頼みごと、というものの90%が“くだらないこと”“面倒くさいこと”“バカバカしいこと”で占められていることを理解できないほどに子供ではない。

けれど、そんな僕に構わず、月本さんは続けた。

「ちよつと秘密な話だからさ、耳貸して？」

「秘密？」

ちよつと訝しく思いつつ、僕は耳を貸した。

「あのね……」

廊下の真ん中で、僕に耳打ちをしだした月本さん。思えば、こんなに盛大な耳打ちなんてそうそう見れるものではないだろう。

でも、そんなことを考える暇がないくらい、月本さんの語る言葉には、センスオブワンダー、というか、発見、というか、そういうものにあふれたものが隠れていた。

彼女が、僕の耳から口を離れた。

「え……！ そうだったの？ まさか、やよ……」

思わず、内容を口走りそうになっていた僕に、月本さんは慌てて両手を振った。

「ちよつと待つて！ その話は秘密の話なの……」

そう言つて、辺りを見渡す月本さん。けれど、僕らの話に聞き耳を立てるほど暇そうな生徒は廊下のどこにもいなかった。ただでさえ、教室移動で忙しい時間に、廊下の真ん中で立ち話に興じる生徒。そんな二人の会話なんて、誰が興味あるうか。

けれど、月本さんが口止めするのもわかるくらい、少々スキャンダラスで面白い話だ。

「で？」僕は好奇心をもつて訊いた。「とりあえず事情はわかった。でも、僕はどうしたらいいの？」

すると、月本さんは答えた。

「今日のミーティングで、私の出した案に賛成して欲しいの。そして、例の二人が帰ったあとにも、教室に残って欲しいの」

「え、つまりそれは……」

「ふふん」月本さんは、ない胸を張った。「敵を欺くにはまず味方から！　っていうじゃない」

いや、その格言の使い方、微妙に違うんじゃないか、と思いつつも、話の腰を折るのもアレなので、とりあえず黙っておいた。

「んじゃ、そんなわけで！」

言うだけ言つて、月本さんは自分のクラスに入っていつてしまった。

一人、廊下に残された僕は、月本さんの後姿を目で追いつつもため息をついた。

『ねえ』

突然呼びかけられた。振り返ると、ものすごく不機嫌そうに、苦々しげな顔を浮かべるミス・エマーデイルの姿があった。

『人の前でひそひそ話なんて、失礼もいいところじゃない』

「ああ、ごめんごめん。でも」僕は言った。「ミス・エマーデイルなら、話していた内容くらい、手に取るようにわかるんじゃないの？」

『どういうことよ？』

「だって、ミス・エマーデイルは、僕の心を読めるんだろ？」

これは、今までのミス・エマーデイルの行動から導き出した、僕なりの結論だった。ミス・エマーデイルは、肝心な場面で僕の心を読んでいる。そして、僕の心理状態を言い当て、さらに深いところへ誘おうとするのだ。

けれど、ミス・エマーデイルはかぶりを振った。

『いいえ、あなたの心なんて、読めはしないわ。もともと、あなた

が倦怠を感じているその時だけならば、あなたの心理状態を類推することは可能だけど』

と、いうことは、今の僕は少なくとも倦怠を感じていない、ということだ。

なんだか嬉しくなった僕は、ミス・エマーデイルに冗談ぽく言った。

「へっへ、残念でした」

『何がよ』ミス・エマーデイルは明らかに不機嫌な顔を隠さなかった。

「さ、化学室に行くぞ」

ミス・エマーデイルの質問を流して、僕はまた廊下を歩き始めた。  
『ちよ、ちよっと！』

狼狽しつつ、ミス・エマーデイルが僕に続いた。

「あのね、調査したいことがあるんだ」

放課後。調査部のミーティング。普段のように、どうでもいい雑談類（ちなみに僕は、マサルが喋る反町さんを讃える言葉を聞き流しているばかりだった）を繰り広げている部員達の中で、月本さんは手を挙げた。そして、上記の言葉を発した。すると、調査部員たちのどうでもいい雑談類は、そのトーンを最小にまで落としていった。

「え？ 調査？」

まるで、自分たちが調査部であることを忘れているかのようになり、調査という言葉に驚き返したマサル。けれど、マサルばかりを非難するわけにも行かない。だって、月本さんと僕を除く皆、“調査”という言葉に違和感を覚えているようだった。藤島君はテクノ系音楽の専門誌から目を上げながら「？」「な顔を浮かべていたし、弥生さんは頬の横に垂れ下がる髪の毛をくるくるとやりながらも、「？」「な顔を浮かべていた。」

そんな皆の顔に、少し呆れたような顔を見せつつも、月本さんは

続ける。

「あのさ、私達、調査部だからさ、調査したいことがあるんだけど！」

珍しく、語尾を荒めに発言する月本さんに皆、妙な迫力を感じているようだった。マサルをはじめとして、調査部の面々は皆、月本さんの方に向き直った。



## 祭りの明暗【2】

「……月本さんが発案なんて、珍しいね」読んでいたテクノ系雑誌を置いてから、藤島君は言った。「で？　どういう調査をしたいの？」

「おい！　それ、部長の俺の役目！」おどけた口調で、マサルが藤島君を牽制する。「で、どういう調査したいんだ？」

「あんたを部長って認めた覚えは無いけど」弥生さんは、いつものようにマサルに少し噛み付いて、返す刀で月本さんに聞く。「で、サキはどういう調査がしたいの？」

都合三人にその内容説明を求められた月本さんは、少したじろいたようだった。そりやそうだ。さつきまで、「ハア？　調査ア？」みたいな反応をされていたのに、いきなり食いつきがよくなったらそりやタジろくというものだ。

けれど、月本さんはけなげにも続ける。

「ええとね、皆、平和畑神社、って知ってる？」

平和畑神社、というのは、熱血高校近辺にある神社の名前である。近辺、とは言っても、自転車で30分はかかる。学校から行く場合、コンビ二激烈屋のある十字路を右に曲がってしばらく自転車を漕ぐと着く。ちなみに、その十字路を右に曲がらずまっすぐ進むとハトムネ寮に、左に曲がると平和畑駅へと続く。

でも、正直、あえて行くようなところでもないし、やつぱり遠いので、結局行くこともないままになっている所の一つだったりもする。

「でね、その神社で、今度の日曜にお祭があるらしいの」

「ふんふん、お祭ねえ」最初は、どこか他人事に月本さんの言うことを繰り返しただけのマサルだったけれど、やがて自分の繰り返した言葉が、重大な意味を持っていることに気づいたかのような表情を浮かべ始めた。「な、なんだって？　お祭？　お祭だって？」

「うん」

「なんだとお！」マサルは立ち上がった。「俺、祭りって死ぬほど大好きなんだ！綿飴だろ？型抜きだろ？杏飴だろ？お面屋だろ？ああもう血が騒ぐ！」

どうやら、マサルは祭りみたいな晴れがましいところが好きなんだろう。……ま、むしろ、イメージ通りと言えばイメージ通りだけれど。とりあえず、コーフンしているマサルを抑えてから、月本さんは続ける。

「ってわけでね、そのお祭の調査をしたいと思うの」  
「……調査？」

藤島君は、口角を上げて訊いた。まるで、“本当に調査？”とでも訊きたいかのような、皮肉が見え隠れした笑顔だった。月本さんは、そんな藤島君の笑顔に圧されたのか、白状した。

「いや、調査っていうのは、あくまで口実だよ。……要は、“部の皆で祭りに遊びに行かない？”っていう提案なの。そういえば、皆で遊びに行ったことがないし」

「……なるほど」

藤島君は、少し笑った。それは、皮肉が混じっているような黒い笑顔ではなく、明るい笑い方だった。

でも、と前置きしてから、月本さんは続ける。

「一応、調査はするけどね」

「調査？祭りの何を？」弥生さんは思わず訊く。

「そうね……」まるで、初めてそのことに思いを巡らすかのようにして、月本さんはくると人差し指を回しながら、言葉を紡ぐ。

「“平和畑神社の祭りの内容を調査する”っていうのはどう？なんだか、民俗学的っぽくて、隠れ蓑には丁度いいと思うんだけど」

「うんうん、ミンゾクガクテキっぽくて良い！」

明らかにアクセントが違う“民俗学的”を口にしつつ、ウンウン頷くマサル。

弥生さんも藤島君も、マサルにつられるようにして頷いている。

これはもう、決をとるまでもないだろう。けれど、一応なのか、それとも空気が読めていないのか、マサルが一応決を採った。

「月本の案に、賛成なヤツは手を挙げて！」

言うまでもないけれど、全員挙手だった。

と、いうわけで。

カタカタカタ…、キラリ〜ン！

“平和畑神社のお祭を調査せよ！”

チャラチャラチャラチャラツチャツチャチャ

……と、いうのは、表向きの動きに過ぎない。ここまでは、藤島君も弥生さんも、マサルも知りえている事実なのである。ここから先は、月本さんと僕しか知らない。

「で、月本さん」

頃合を見計らって、僕は訊いた。すると、前を歩く月本さんは歩み続けながらも僕の方を振り返った。けれど、彼女はちよつと目を細めて応じる。

「ちよつと待つて！ まだ、ここでは話せないな」

まるで、犬におあずけするかのような感じでそう言うと、また前を向いてしまった。

すでに放課後ということもあり、人影がほとんどない廊下。わずかに、遠くの方から吹奏楽部の金管楽器の音が聞こえる。きつと、下の階で練習をしているのだろう。その金管楽器の音たちの中で存在感を放っている、間の抜けたぶおおという音は、チューニングのために出している音なのか、それとも演奏者の実力が低いからなのかは僕には判らなかった。けれど、少なくとも僕には、月本さんの廊下を歩く軽やかなステップの醸す足音の方が、はるかに芸術的に思えた。

と、そんなとき。

不意に、頬に妙な痛みを感じた。

まるで、洗濯ばさみでぎゅっとつままれているような感覚。そん

な感覚に襲われた。ちよつと月本さんと歩調をずらして距離を取ってから、僕は言った。

「なんふえ、ほんはこふおすふかは？」

頬をつままれているせいで、メリハリとした言葉を出すことが出来ない。けれど、“彼女”の気を引くだけは成功したようだ。僕の頬をつまんでいた“彼女”は、つまんでいた手を離してから、言った。

『なんて言ったのか、わからなかったんですけど』

言うまでもないけれど、僕の頬をつまんでいたのは、ミス・エマーデイルだった。僕は、出来るだけ小声で返した。

「なんで、こんなことするかな？ って訊いたんだ」

すると、ミス・エマーデイルは僕の背後からひょいっと顔を出して、答えた。

『あなたがあまりにニヤケ顔だったから、なんだか腹立たしくて』

ニヤケ顔？ 僕が？ そう聞き返そうとしたのだけれど、その僕の言葉を月本さんの声が遮った。

「ねえ、遅いよ？ どうしたの？」

既に月本さんは、10mくらい向こうで立って、僕の方を振り返っていた。位置的に逆光だったので月本さんの顔をうかがい知ることは出来なかったけれど、きつと笑顔だったのだらう。声色が、なんだか弾んでいた。

「ああ、ごめんごめん」

手を挙げて、月本さんの下へ急ぐ僕。そのとき、また頬に痛みが走った。やっぱり洗濯ばさみにつままれているような痛みだったけれど、あえて無視する。どうせ、ミス・エマーデイルがつまんでいるんだから、と心の中でため息をつきつつも。

けれど、次第に近づく僕を見て、月本さんは怪訝な顔をしだした。まるで、ダリの絵を目の前にした野球部員のような顔をしている。そして、眼の前に立った瞬間に、仏頂面だったその相好を崩した。

「え？ 何？ どうしたの？」

くすくす笑う月本さんに、頬が突つ張るような感覚に襲われつつも、訊いてみた。すると、彼女は僕の頬を指して、きゃはは、と笑った。

「なになに、どうしたの？」

重ねて訊くと、ようやく答えてくれた。

「ねえ、その洗濯ばさみ、いつの間に着けたの？」

「は？ 洗濯ばさみ？」

そう呟きながら、思わず頬を触ろうとしたとき、ようやく今の僕が置かれている状況が理解できた。なぜか、僕の頬が、本当に洗濯ばさみでつままれていたのだ。出来るだけ痛くしないように、ゆっくりと手にとつて見ると、その洗濯ばさみが、ハトムネ寮で支給されている、赤い洗濯ばさみであることが判った。

なるほどね。

僕は思わず振り返った。もちろん、ミス・エマーデイルが後ろでニヤニヤしていた。

きつと、ミス・エマーデイルが僕の部屋から洗濯ばさみを持ち出していたんだ。そして、こうやって僕の頬をつまんだんだ。もつとも、彼女がわざわざ洗濯ばさみを持ち出した理由や、それを僕の頬に噛ませる理由がわからないけれど。

けれど、月本さんの前で詰問するわけにもいかないのです、不思議そうな顔を見せている月本さんに向き直つて、言い訳気味に言つた。「……いや、最近、こういうギャグで有名になつてるお笑い芸人がいてさ。真似してみた」

もちろん、嘘八百だ。

こんな嘘が通じるとは思つてもいなかった。けれど、彼女はそれで納得したようで、軽く頷いてから僕を先に促した。月本さんは僕を先導して廊下を歩いた。廊下を歩き、階段を何段も上り、屋上まで歩いた。そう、彼女は何を思つたのか僕を屋上に連れてきたのだ。

### 祭りの明暗【3】

「ここなら」月本さんは屋上の緑の床に降り立って言った。「ようやく私の真の計画を説明できる」

「計画？」

「そう、計画」

月本さんは辺りを見渡した。そして手すりの方に狙いをつけるように見遣ると、その方向へ歩いていった。僕も、それに続く。

「でさ、月本さん」僕は、本題を切り出した。「計画、ってどういうことなの？ だって、調査がああやって出来るようになったんだから、それでいいんじゃないの？」

「いいえ」月本さんは仰々しく首を振った。「それじゃあダメですよ。お膳立てをしてあげないと。だって相手が相手だよ？」

お膳立て。そんなまるで仲人のような言い分に、僕は噴き出した。とにかく、と僕が噴き出したことを咎めるでもなく前置きして、月本さんは続けた。

「で、なんだけど、この話、人に知られちゃまずいから、男の子の方を“ウサギ”、女の子の方を、“リス”って呼んで、話をしましよう」

なんでそんなまどろっこしいことを？ と僕は訊いた。

だって、今回の話、“人に知られちゃまずい”話ではない。いや、当人からしてみれば、あまり周りに知られたくない話だろうけど、その内容は、高校生活を送る上で、これから何度も耳にする話なのだろうから、別に秘密にする必要もあるのか？ と思わず首を傾げてしまう内容だったのだ。

すると、月本さんは顔を上気させて答えた。

「だって、その方が面白いじゃない。なんだか、007みたいで……常に、人の色恋沙汰というのは、エンターテイメントとしてしか消費されないものなのだ。少し呆れ気味にため息をつく僕をよ

それに、月本さんは続けた。

「んじゃあ、一応だけど、おさらい」

そう言つて、月本さんはまるでドラマの筋を話すように、これまでの流れを説明した。

実は、“リス”、“ウサギ”のことが好きなの。でも、“リス”はあんな感じ。どうにも斜に構えちゃうところもあるし、なまじ“ウサギ”と仲がいいものだから、いまひとつ接近できない。

「で、ここからが肝要なの」と、月本さんは語る。

このままじゃ、埒が明かない。なんで、私達でその二人をくつつきたいの。

……そう。マジで月本さんは仲人役をやるうとしているわけだ。

「つまり、その二人を、祭りのときにくつつけようっていう算段なんだよね？」

説明をいくつかすっ飛ばして結論を述べた僕に、月本さんは頷いた。

「そ、そういうこと」

バカバカしくなった僕は、思わず手すりから、校庭のトラックの方を見遣つた。トラックでは、ギラギラ輝く太陽の下、陸上部が練習していた。もちろん、その陸上部のトラックには、噂の反町さんが走っていた。遠目にも目を引くくらい、彼女の走り方はキレイだった。どうやら彼女は200mの選手らしく、トラックのアールを、まるで舐めるように走り抜けていった。まるでチーターのようにトラックを走りぬけた彼女を待っていたのは、キヤイキヤイとうるさそうな取り巻きだった。

「あゝ、反町さんはいいな」

月本さんは僕の横の手すりに身を預けながら唇をすぼめて言った。なんで？ と訊くと、月本さんはしみじみと答えた。

「だって、あれだけ可愛いなら、なびかない人なんていないもん」  
月本さんも、誰かをなびかせたいのだろうか、“リス”のようにけれど、その質問は聞きそびれてしまった。だって、その時の月本

さんが、異様に塞ぎこんでいたからだ。

僕は、反町さんの様子をずっと眺めていた。月本さんに気の利いたことを言えないので、とりあえず何も言わずにいたほうがいいかな、と思ったのだ。けれど、月本さんはそんな僕の顔をいつからか苦々しげに見据えて、言った。

「バカ」

何がバカなのか、わからなかった。

『ふふん』

ミス・エマーデイルがいきなり鼻を鳴らした。

「な、なんだよ」

部屋着に着替えながら、僕は思わず聞く。

結局、その日は祭りの日の打ち合わせもせずに月本さんと別れた。そして、寮に帰り、夕飯を食べ、風呂に入ったりしたあと、部屋着に着替えている、という次第なのだ。時計の針は就寝時間をとくに過ぎていた。

『あなた、あんまり楽しくなさそうね』

「何が」

僕が棘を込めて訊くと、ミス・エマーデイルは続けた。

『何度も言うけど、私はあなたの倦怠が形をもったものの。……実は今日、どうしたわけかすごい調子がいいのよ。ってことは、あなたがとんでもなく倦怠を感じているんじゃないか、って想像するのは、決して突飛なことじゃないわ。だって、私のありようは、あなたの心理状態とリンクしているんだから』

確かにそうだ。ミス・エマーデイルの調子がいい、ということは、僕が倦怠を感じていることと同義というのは、確かに理解できる。けれど理解できないのは、僕が、何に倦怠感を覚えているのか、という点なのだ。

その理解できないで宙ぶらりんになっている倦怠が、僕を苛立たせている。敵の実体が明らかなら、こちらとしても手の打ちようも



ある。でも、敵の実体がつかめないのでは、どこに攻撃を加えればいいのかも、そもそもどう対応していいのかもわからない。

『あらあら』ミス・エマーデイルは言った。『どうやら、あなた、とんでもない相手を敵に回しているようね』

「は？ 敵？」

『私には、わかるのよ。あなたがどうという倦怠に襲われているのか、それこそ手に取るようにね』

それも、予想済みだった。そして。

「訊いても、教えてくれないよね」

ミス・エマーデイルは頷いた。

『当たり前じゃない。だって、私としては、あなたが倦怠の中に埋もれてくれたほうがいいんだから』

「まあ、そうだよ。言うと思った」

既に部屋着のジャージに着替えた僕は、廊下へ続くドアの方に向かった。その僕をミス・エマーデイルが不思議そうに咎める。

『あら？ どこに行くのかしら？ この時間は、もう部屋の中にいないといけない時間なんじゃないの？』

ミス・エマーデイルの言う通りだった。

もう、寮が定める就寝時間は過ぎている。だから、部屋から出てはいけないのだ。でも、僕は言った。

「あ、ああ、外の空気でも吸ってこようと思って」

『あら……』ミス・エマーデイルはまるで何でも知っている隣のオバサンみたいな声を上げた。『あらそう。なら、私はここに残っているわ』

「珍しいな」

不審に思いつつも訊くと、彼女は言った。

『なんだか、眠いのよ』

口に柔らかそうな掌を当てて、大げさなあくびをこくミス・エマーデイル。そんな、明らかにわざとらしい彼女の言葉を不審に思いつつも、けれどそっちの方が好都合なので、とりあえず何も言わな

いことにした僕は、あつそ、と胡乱な返事を残して、部屋を出た。扉を閉める瞬間、ミス・エマーデイルが僕に微笑みかけたように見えたとのは、気のせいだっただろうか。

廊下に出た僕は、いつものように遊戯室に入った。

そして、部屋の奥にあるパソコンを起動させ、メールボックスを確認する。

そこには、2件新着メールが入っていた。けれど、件名を見た瞬間、そのメールを開く気が一気にうせた。

“母より”

“元気か？”

こんなときだけ、“母”なんて、自分の属性を主張するなよ。それに、まるで父親みたいな顔して、“元気か”なんて、あつかましいにも程がある。

深海の底よりも深く、暗く、冷たい、怒りにも似た気分襲われた僕は、そのメールをゴミ箱に移した。

祭りの日は、足音を立てて近づいてきた。

祭りの前、というのは、どうしてこう心が騒ぐのだろう。普段と変わらない日々のはずなのに、なんだか生活が明るくなったように感じる。普段はただだるさだけの教室のざわめきが祭りの喧騒に聞こえてしょうがないし、音楽の時間に流されたモーツァルトも祭囃子にしか聞こえなかった。そして、頭の中が、祭り特有のモワンとした気分包まれた瞬間に、ようやく自分が浮かれていることに気づき、慄然とするような体たらくだった。

けれど、一方で、心の内に妙なしこりを感じているのも事実だった。

理由のない、妙な倦怠。

形の無い、妙な倦怠。

そのしこりを取り除こうと、心の中でもがくたび、そのしこりは姿を隠す。けれど、忘れた頃にまたぼつこりと存在感を示す。心の

中で繰り広げられるたちごっこは、僕の心の輪郭を少しずつ削り取ってゆく。

けれど、祭りが近づくにつれ、そのしこりが、「祭り」に付随するものだ、ということがなんとなく判ってきた。確かに、祭りが近づくにつれ、気分が高まってゆく。けれど一方で、心の奥にいかにも度し難い闇が広がっていくのも感じているのだ。祭りの事を楽しみに待てば待っただけ、その闇もまた比例して大きくなっていくような、そんな気分だった。

## 祭りの明暗【4】

僕はとにかく戸惑った。理由無き、倦怠に。

そして、さらに戸惑ったことがある。

ミス・エマーデイルが、変わったのだ。

どう変わったのか、それを言挙げするのは凄く難しい。それは、僕に語彙力がないからでもあるし、言い訳を許してもらえらなら、その変化が感知されづらいモノにかかる話だからでもある。それに変わったのはミス・エマーデイルではなく、僕の方なのかもしれないかった。

彼女が、とてつもなく魅力的に見えてきてしょうがなくなったのだ。

彼女の、細やかな腕も、きゅっと絞られた腰も。控えめな胸も、伸びやかな足も。すらっとした首も、すこしふくよかな尻も。全ては前のままなのだ。目の色も、鼻の形も、小さな耳も輪郭も、そして桃色の唇も前と変わらない。カモミールの香りさえ、前のままなのだ。

けれど、なぜか、そのミス・エマーデイルの立ち居姿に、いやに心をかき乱されるようになった。

「心をかき乱される」なんて、とってつけた言い方、止めよう。

彼女を、抱きしめたい。彼女に唇を重ねたい。

そんな、どうしようもない思いが、全身をめぐっているような感覚に襲われるのだ。理屈とか、感情というものではない。まるで、磁石がくつつきあうとか、木になった林檎が地面に向かって落ちるとか、そういう「法則」のようなものだった。

そんな僕を、ミス・エマーデイルは笑った。

『あらあら、もうすぐね』

何がだよ、と、彼女から発される磁力に逆らいながらも訊くと、

彼女は答えた。

『え？ 決まってるじゃない。お祭りの日よ』

と、次の日にまで迫った祭りの日付を、カレンダーで指した。でも僕には、もうすぐね、という彼女の謂いが、祭りの日のこととは、とても聞こえなかった。むしろ、もうすぐ、私に魅入られてしまうのね、嬉しいわ、とでも言いたげなミス・エマーデイルの表情にさえ、僕はぞくぞくと血を揺さぶる磁力を感じていた。

『ふふ、明日のお祭、楽しみだわ』

まるで、あなたが堕ちるのが楽しみだわ、とでも言いたげな、ミス・エマーデイルの言葉。でも、その言葉にさえ、脳漿がしびれるような、奇妙な陶酔を感じる僕。

そう。この時期の僕は、とにかく混乱していた。

一つは、祭りの前の陶酔に。

二つ目は、心の奥に残る、妙なしこりに。

三つ目は、ミス・エマーデイルの、蠱惑に。

そんな、どうにも相矛盾するかのような三つの嵐に巻き込まれ、流されているように、当時の僕は感じた。

でも、実はこの三つは、決して矛盾するものではなかったのだ。むしろ、まるで竹の地下茎のように、一つの根っこで繋がっている現象でしかなかったのだ。そのことに気づくのは、随分後のことになる。だから、当時の僕は、三つの感情を相手に戦っているような、四面楚歌な気分なのだった。

そんなこんなで、祭りの日がやってきた。

この日は、晴れだった。「晴れ」という形容をするのもバカバカしいくらいに「晴れ」だった。窓の外に広がる幸せそうな晴れの天気に、なんだかハッピーな予感をガラにもなく感じつつ、寝間着から外着に着替えた。

この日は日曜だったので、普段は寮生たちでこった返している朝の時間の食堂も、まばらな影しかなかった。けれど、その中に、藤

島君を見つけ出した僕は彼の背中に声をかけた。すると、藤島君は「……ああ」と、胡乱な返事を超越しながら、味噌汁をズズと吸っていた。

寮母さんからお膳を受け取って藤島君の横に座った僕は、もう一度声をかけた。

「おはよう、藤島君」

「……ん、ああ」

最初に声をかけたときには気づかなかったのだけれど、藤島君の目の下には真つ黒なクマがあった。まるで、徹夜でRPGでもやって、それで強いボスか何かに当たってハマッてしまい、そのボスの攻略法を考えているうちに煮詰まってしまい、それで気分転換に朝ごはんを食べている、という感じだった。

まさか、そんなことはあるまい。そう思ったのだけれど、藤島君は言った。

「……徹夜でRPGをやってたんだけど……（以下略）」

なんと、僕の想像通りの行動をしでかしていたのだった。しかも、藤島君、会話の端々でうつらうつらと首を縦に振っている。きつと、とてもなく眠いのだろう。

「あ、あのさ……」

僕が声をかけたときだけ、藤島君は目を見開いた。まるで、蛇のようにクワツと。けれど、その瞼は「何キ口あるんですか？」と訊きたくなるくらいに重たげだった。

そんな藤島君に、僕は訊いた。

「今日、部活動があるんだけど？」

「……うん。あるよね。……知ってる知ってる。うんうん。確か、ウンモ星人のUFOの、墜落現場に行くんだよね」

「いや、それはない」僕は首を横に振った。「平和畑神社のお祭に行くんですよ？」

すると、藤島君はいやにのんびりと茶をすすった。すすった、というよりは、唇を濡らしている、というほうがしっくりきそうな動

作だった。そして、その長い動作の末、唇から茶碗を放すと、藤島君は言い放った。

「……知らない！」

「は?!」

僕が、どうということだよ、と訊く前に、藤島君は言った。

「……体の調子が悪いんだよ、勘弁してよぉ」

……藤島君の、あの、クールな藤島君の。キャラが崩壊している……。眠気というのは、人間の尊厳まで奪ってしまうのだなあ、と妙な感想を持った僕だったけれど、そんなバカバカしい感慨を頭の隅に追いやって、同じ部の部員として、言わなくてはならないことを言った。

「藤島君! 調査部の部員が調査に来ないなんて部員失格って言われてもしょうがなくなっちゃうよ! ほら、そんな眠そうな顔しないで、行くぞ、藤島君」

僕の言い分をしばし咀嚼するかのように、考え込む藤島君。まるで、僕に何を言うべきか、その言葉を取捨選択しているようにさえ見えた。

そして、ようやく頭の中がまとまったのか、彼は言った。

「……それに、このことは、月本さんも了解済みだし」

「“このこと”、って今日、藤島君が調査に参加しない、ってこと?」

僕の問いに、藤島君は頷いた。

どういうことだ? 今日藤島君が調査に参加しないことを、月本さんが了解している? それ、どういうこと?

首を傾げる僕に、藤島君は慎重に言葉を選ぶようにして口を開いた。

「……了解している、というよりは、頼まれた、って方が近いかな」  
“頼まれた”という言葉を訊いてはじめて、なんとなく話が見えてきた。

きつと藤島君も、月本さんに頼まれたのだ。「ウチの部の、“リ

ス”と“ウサギ”をくつつきたいから、協力して？”と。この手の話というのは、本人達が知らないところで周りに広がっていることなのだ。きつと月本さんは、僕を味方に引き入れただけでは不安で、藤島君にも声をかけたのだろう。そして、協力を求めた。きつと、今日の調査に活動しない藤島君にも、二人をくつつけるための“役割”が与えられているのだろう。僕が知らないだけで。

そういう風に納得した僕は、一人うんうんと頷いた。

「なるほど、大変だね、お互いに」

僕が言つと、藤島君が返す。

「……そんな、大変なことでもないよ。それより」

藤島君は、膳を持って立ち上がった。もう、朝ごはんを食べ終わっただろう。そして椅子をしまうと、僕の顔を覗きこんで、しみじみと言った。

「……がんばってね」

「は？ 何を？」

「……さあ」

彼の割には大きな、そして彼の割には腹に秘めたものが無さそうな笑顔を僕に向けた後、藤島君はお膳を返却トレイにおいて、食堂から出て行ってしまった。

「意味が判らん」

そう呟く僕に、後ろに背後霊のように立つミス・エマーデイルが言った。

『……あなた、本当に鈍いのね。鈍いのもそこまで行くと、いつそ生きにくいと思うんだけど』

「何の話だよ」

『さあ？』ミス・エマーデイルは肩を、大げさにすくめた。『でも、そんな鈍いあなたが、本当に好き』

「ば、バカ言っなよ」

実は、なのだけれど、実はこのとき、僕は今まで感じなかった、ある変化を切実に感じた。



まるで、胸の一番奥をぎゅっと握られたような、痛いようなくすぐす  
ったいような、変な気持ち。あるいは、心の底にある井戸の底のよ  
うに静かな水面が、ふっと投げ入れられた小石によってかき乱され  
るかのような感じ。

## 祭りの明暗【5】

有り体に言おう。僕はこのとき、ミス・エマーデイルの“本当に好き”という言葉に、心を乱されていたのだ。前までは、そんなことは無かった。ミス・エマーデイルが僕のことを“好き”って言うたって、手を握られたって、キスをしそうになったその瞬間でさえ、こんなに心を乱されたことはなかった。確かに少しはどきどきしたし、それに色々と悶々とした気分に陥ったけれど、そんなときでも僕の心の奥底は静かだった。ミス・エマーデイルが僕のことを抱きしめてきたって、僕の心の奥底でどっかりと腰を下ろして、どこか冷淡に彼女の顔を見回していた僕がいたのだ。

けれど、この瞬間だけは、違った。

僕を観察している「僕」がいない。それが、怖かった。

そんな僕の顔を覗きこみながら、彼女はふふ、と笑った。

『もうすぐね』

「何が」

『……さあ？』

まるで、何かを焦らすかのように、ミス・エマーデイルはそっぽを向いた。

僕はふと、自分の目の前のお膳を眺めた。ご飯に味噌汁、おひたしに鮭。普通の、代わり映えの無い朝食だ。けれど、このときばかりは違った。

“もしかしたら、僕がこの味噌汁を飲むのは、今日で最後かもしれない”

そういう、嫌な予感が頭を掠めていた。

僕は、味噌汁の腕を手にとって、口に流し込んだ。死にたくない。そう思った。

味噌汁は、いやにしょっぱかった。

ゆったりとした、笛の音で作られたリフが、僕の耳に入ってきた。バンドなんかのハードなギターリフが耳に慣れている僕にとってみれば、その音はすごく眠たげで、それでいてどこか力強い、そんな相反する二つの要素が交じり合っているように思えた。自転車を押しているの、ただっ広い畑の真ん中に、ポツンと林が島のように立っているのが目の前に見えた。

僕の自転車が軋む音と、笛のリフが、不思議な和音を響かせていた。

「お、祭囃子」

僕の後ろで、“ウサギ”もとい、マサルが嬉しそうに言った。

「結構離れてるのに、意外に聞こえるのね。まあ、ここらへんって、音を遮断するようなものが何もないから、丸聞こえなのは当たり前かもしれないけどね」

月本さんが、畑一面広がる光景に、ため息をついた。

「っていうかさ、こんな朝早くから祭りってやってるもんなんだね？ 私の家の近くのお祭は、夜にやるからピンと来なかったけど」

そう、いつものように斜な発言をする“リス”もとい、弥生さんを、マサルが咎めた。

「言つたろ？ 平和畑神社のお祭は、朝から夕方までやるんだ。こいうとき、インターネットっていうのは便利だよなあ。チヨチヨイのチヨイ、で祭りの概要が分かったりするし」

「なあにが、チヨチヨイのチヨイ、よ！」弥生さんは噛み付いた。

「そうやって祭りのことを調べてくれたのは、サキなんだからね！」

「

「ま、まあまあ……」

なだめに入る月本さん。けれど、弥生さんは「黙ってて！」と月本さんを威嚇して、マサルに更なる文句を垂れる。

「大体アンタ、部長のくせに何もしてないじゃない！」

「まあほら、でもあれだろ？」マサルは言葉を返す。「部の長なんてもんは、いい加減なくらいが丁度いいんだよ。だってそうだと

？ 部長がモーレツな人だったら、やりにくいつたらないぜ？  
…むしろ君たちには“部長がこんないい加減なヤツでよかった”って感謝してもらいたいくらいだね」

「ああもう！」

「ぴ〜ぴ〜（口笛）」

こんな、マサルと弥生さんのやりとりにも、僕と月本さんは目を合わせて苦笑いを浮かべるしかなかった。

今日の朝、コンビニ「激烈屋」にて待ち合わせをしたのだけど、そのときから、マサルと弥生さんはこんな感じだったのだ。マサルのいい加減さに弥生さんが口辛く罵る。けれど、それを華麗なるフットワーク（戯言）でマサルにスルーされ、弥生さんのボルテージが上がる……。ま、いつも通りと言えばそうだ。

けれど、今日くらい仲良くしてはくれないものか。だって今日は“ウサギ”ことマサルと、“リス”こと弥生さんをいいムードにしてくっつけるという目論見が、水面下で進行している日なのだから。

「あのさ」

「うん？」

マサルたちに聞こえないように、小声で僕は月本さんに訊く。

「あんなんで、大丈夫かな？」

けれど、僕のそんな問題提起も、月本さんにかかれば想定範囲内のようなだった。彼女は、首を縦に振った。

「平気でしょ？ だって二人、いつもああじゃない」

ふと後ろの二人の様子を盗み見た。ぎゃあぎゃああと文句やら警句やらを発する弥生さんと、それを見事にスルーしながら歩くマサルの姿が目に入った。ちよつとうんざりした僕は、視線を前に戻して月本さんに訊く。

「ときにさ、弥生さん、マサルのどこがいいんだろうね？」

この物言いに、月本さんは笑った。

「友達に、“どこがいいんだろうね？”って言うのは、さすがに失礼なんじゃない？」

でも、僕は言葉を返した。

「いや、マサルは友達としてはすごくいいヤツさ。楽しいし、優しいし。それに、言うときには言うし、やるときにはやる。友達としては、100点満点つけてもいい」

月本さんが、目で話を先に促している。僕は、続けた。

「……でも、もし僕が女だったとしたら、マサルとは付き合わない。だって、絶対大変なもの」

「ふ〜ん」

月本さんは、まるで値踏みするように僕の顔を眺めた。けれど、その顔は僕を批判する、という風ではなかった。そしてしばらくはそのままだったけれど、不意に僕から視線を外して、月本さんは白状した。

「実はさ、私も、どうして弥生がマサル君の事が好きなのか、知らないんだ」

「え？ そうなの？」

後ろの二人に聞かれていやしなしかと不安だったので、後ろの様子を窺いながら訊く僕。どうやら、後ろの方は後ろの方でエキサイトしているようなので、話を聞かれている心配は無用なようだった。でも、と前置きして、月本さんは続けた。まるで、密やかな宝物を両手で差し出すかのように。

「でもね、“好き”なキモチの理由なんて、説明なんか出来ないんじゃないかな」

「え？」

「だってそうじゃない」きつと変な顔を浮かべて首を傾げているだろう僕のことを置いてけぼりにしたまま、月本さんは続ける。「好き、っていうのは、きつと本能だもん」

「そういうもんかな？」

僕の問いに、月本さんは力強く答えた。

「そういうものです」

そう言って、彼女は微笑んだ。ちなみに、この瞬間、僕の背中に

鈍い痛みが走っていた。もちろん言うまでもなく、僕の背中を、まるでお相撲さんの鉄砲突きの要領で、ミス・エマーデイルがバスバス掌低で叩いているからなのだけだ。『どすこい、どすこい、どす恋』という彼女の掛け声も聞こえる。時折、まるで食用蛙みたいな声を出しそうになったけれど、なんとかこらえた。

そんなこんなの中に、笛のリフ、つまりは祭囃子の音が大きくなっていた。あえて擬音化するなら、「パ行」が多そうな音の響かせ方をして、笛は歌う。そして、さっきまでは聞こえなかった、じゃっじゃ、という低い音が響いた。この音を聞いたことの無かった僕は首を傾げたけれど、マサルがその正体を教えてくれた。

「ああ、あの音？ ささらだよ」

「ささら？ なんだそれ？」

素直に訊く僕に、いかにも鼻高だかそうに、マサルは説明を加えた。

「大体長さ50cmくらいの竹の横つ腹に、洗濯板みたいな段差をつけて、それを棒で摺るんだ。そうすると、ああいう音が出るんだ」  
さすが、祭り好き。

やがて、そんなささらの音さえも僕らの耳に馴染んできたころ、ようやく僕らの行く手に大きな白い鳥居が姿を現した。白い、思っていたのだけれど、それは遠目に見ていたからで、近づいてみればそれが石を使って作られているからだということに気づいた。

そして、その鳥居の向こうには、こんもりとした林が控えていた。いや、“林”と表現するのは、神社に失礼というものだろう。鳥居の奥には、杜が控えていた。

鳥居の奥は、杜のせいで薄暗かったけれど、それでもその中から、どこか間抜けたような祭囃子が聞こえる。

「おお、祭囃子が俺を呼んでいる！」

マサルが、うずうずとしだした。まるで、辛抱たまらん、といった感じなのだ。

「さ、行くとしますか」

月本さんがそう呑気に宣言すると、マサルはうわーい、とても叫びそうなくらいに満面の笑みを浮かべ、僕の手を引いた。

「おいおい！ 早く行こうぜ！ じゃないと楽しめないぞ！ 祭り  
は」

「いや、自転車を置いてこないと……」

僕はマサルにそう言った。

## 祭りの明暗【6】

けれど、それは事実だった。神社の境内に自転車で入るわけにはいかないし、もし入ったとしても、ごった返す人波のせいで、動きが取れなくなってしまう。そもそも、往來の迷惑にも程がある。

けれど、マサルはそんなことお構いなしなようだった。

「おいおい！ そんなケチなことを言うなよお！」

「何がケチだ！」 僕は反論した。「それに、祭りは逃げたりしないんだから大丈夫だよ！」

すると、マサルは反論した。

「祭りは逃げないけど、時間はどんどん逃げてくんだよ！」

うむ、確かに。ちよつと納得しつつも、でも同意するわけに行かない僕は、マサルにすぐ戻る旨を約し、自転車を神社脇に特設されていた駐輪場に置いて、皆の下に戻った。

「さ、行くか」

僕の仕切りなおしに、皆「おー！」と同意した。

境内は、人でごった返していた。

拜殿に続く参道の両端に、綿飴や杏飴、金魚すくいやチョコバナナの屋台が並び、そしてその屋台を冷やかしたり、あるいは面白いものに興じたりする客でごった返しているのだ。身動きが取れないというほどではないにせよ、動くのには難儀しそうだ。

「うわあ、人が多いな」

そんな事実確認を、わざわざ面倒そうに口にする弥生さんを、マサルが咎めた。

「当たり前だ、祭りなんだからさ！」

「いや、まあその通りだけどさあ……」

なんだか、二人の関係が、境内に入った瞬間に逆転したらしい。いつもは弥生さんペースで話が進むはずなのに、今日この瞬間は、



マサルペースになっている。さすがお祭、マサルのホームグラウンドなのだ。

きつと、マサルという人間は、屋台のアンちゃんが醸す怪しい雰囲気や、裸電球の毒々しい光、規則的に吊るされた提灯、そして祭囃子やささらの音、そしてそんな祭りに浮かれた客の波といった“ジャングル”に、誰よりも適応している人間なのだろう。要は、ただの祭り好き、ってことなんだけど。

でもまあ、確かにコーフンしないこともない。

笑顔でものを売るアンちゃん。そして、そのアンちゃんが売る、明らかに健康に宜しくなさそうなものを買って歩き食いしている客たちの笑顔。その予定調和的な光景は、確かに割とクールな僕でさえ、高揚するものを感じずにはいられない。

ふと、僕の横を親子連れがすれ違った。

頭に戦隊ヒーロー物のお面をかぶり、綿飴を右手に持つ子供。その子の左手をそつと握って微笑む父親。そして、そんな二人の様子を本当に幸せそうに見遣りながら歩く母親。その三人が、屋台の裸電球に照らされていた。思わず、その家族を目で追ってしまった。

「おとうさん、今度はアレ買って！」

「え？ ダメだよアツちゃん、綿飴があるだろ？ それを食べちゃってから」

「パパの言う通りですよ」

「ぶう」

そんな、微笑ましい会話が、おぼろげに聞こえた。

それは、僕が知らない、“家族”の肖像だった。

「ねえ」

不意に、肩を叩かれた。振り返ると、そこには月本さんの笑顔があった。

「どうしたの？」

「あ、いや……」

僕は慌てて首を振った。そして、笑顔を作ろうとしたけれど、上

手く行かなかったようだ。

「本当にどうしたの？　なんだか、暗いよ？」

と、月本さんに指摘されてしまった。でも、こんなお祭の日に水を差すようなマネはしたくなかった。だから、僕は話を逸らす事にした。

「大丈夫だよ、全然。それより、あの二人を、どうくつつけるの？」

「

マサルと弥生さんを遠目に見ながら僕がそう訊くと、月本さんは即座にその答えを返した。

「簡単よ？　このまま、二人からはぐれちゃえばそれでよし」

「は？　二人をくつつけるのに、そんないい加減なやり方でいいの？」

僕のそんな疑問に対しては、ふふん、と鼻を鳴らして応じる月本さん。

「そもそも、こういう色恋沙汰、っていうのは、あんまり周りがしやしゃつてもしょうがないの。だから、二人つきりにさせてあげるのが、一番いいやり方なわけ」

正論は正論なのだけど、「マサル君と弥生をくつつけよう！」と一番騒いでいたのが月本さん本人である以上、その正論は、どうにもすわりが悪く聞こえた。

きつと、僕のそんな白けた空気を嗅ぎ取ったのだろう、月本さんは補足する。

「それに、やっぱり好きな人は自分の力で振り向かせなきゃ、だもん。だって、恋、っていうのは、あくまでその人だけしか持ち得ない感情だし」

まごうことない正論に、僕はただ頷くしかなかった。けれど、どうしたわけだろう。僕の心の奥底だけは、まるで海底に漂う砂のように、異様に冷たくなっていった。

そんな気分の僕の手を、月本さんが握った。

「さ、ここらへんで、私達は、姿を消すとしましょう？」

「

そう、誰に言ったのかもわからない言葉を発したあと、月本さんは僕の手を強く引つ張った。僕の体は月本さんの方に流れた。そして、参道の路端の、丁度屋台のプロパンが置かれていて空間が空いているところに滑り込まされた。

「ふふん、これで良し」

月本さんは、額の汗を拭くポーズを見せた。

ふと参道を見返すと、人の波が何重にも重なって、もう既にマサルたちの姿を見失っている。きつと、マサルたちが僕らとはぐれたことに気づくのも、随分あとのことだろう。

「なあ、月本さん」

僕は、月本さんに声をかけた。月本さんはケータイを広げて何か作業をしているようだったけれど、僕の言葉が耳に入ったのか、パタンとケータイを折りたたんだ。

「え？ 何？」

「本当に、こんなんでもいいのかな？」

すると、月本さんはケータイをバッグにしまいながら言った。

「本当に心配性だなあ、もう。きつと平気だよ。だって、サキさんも、肝心な場面ではびしつと決める子だよ、あの子。それに……」

「それに？」

僕に促された格好で、月本さんは言葉を継ぐ。

「そもそも、これだけお膳立てしてあげたのに何もできないんじゃない、どんなに周りが応援したってしょうがないと思うんだけど……」

まごうことない正論だ。僕は、参道の往来を眺めながら頷くしかなかった。

「……んで、なんだけどさ」

さっきまでの会話とは違って、ちよつと言いくそうにしながら月本さんが言葉をかけてきた。僕は、月本さんの顔に視線を移して、彼女の口から出る言葉を待った。

彼女は、話を促されていることに気づいたのか、続けた。

「……もうこれで、例の、“二人をくつつける”っていう計画は終

わったわけじゃない？」

「うん」

「……でも、まだ、本来の目的の、“調査”は一切やってないじゃない？」

「うん」

ここで、すわりの悪い沈黙が、僕らの間に滑り込んできた。僕は月本さんの言葉の続きを待っているだけなのだけれど、どうしたわけか月本さんに睨まれている。まるで、「アンタ、話の続きを察しなさいよ」とでも言いたげな顔をしている。けれど、そんな月本さんには申し訳ないことに、僕はそういう先読みが得意じゃないのだ。そんな気の利かないがゆえに黙っている僕に呆れたのか、彼女はため息を一つついてから、こう切り出してきた。

「……このお祭りの調査、二人でやらない？」

「いいよ」

即答だった。だって、特に反対する理由もないし、そもそも僕らはこのお祭りの“調査”に来たのだ。つつか、お祭に、遊びに来たのだ。

僕のその答えに、月本さんは大げさに微笑んだ。

「うん、ありがと！」

なにが“ありがと”がわからなかったけれど、でも“うん”とだけ返しておいた。

そして僕は、人ごみでいっぱい参道に入ろうとした……、のだけれど、その出鼻をくじかれた。もちろん、ヤツのせいだ。

『フフン』

そう、ミス・エマーデイルだ。

「な、なんだよ、ミス・エマーデイル」

月本さんに聞こえないように声のボリュームを落としてそう訊く僕に、ミス・エマーデイルは言葉を返した。

『あなたって、本当に鈍いのね』



## 祭りの明暗【7】

「お言葉だけど」僕は抗弁した。「その言葉、もう耳タコなんだけど」

『だって私、“鈍い” あなたが大好きなんだもの。好きな人の美点は何度口にしたって気分がいいものだわ』

そんな彼女の言葉に、恍惚にも似た妙な感覚を覚えつつ、僕は参道に入った。

参道の屋台の冷やかし。これが祭りの醍醐味というものだ。そのことを心得ている僕らは、ひたすら店の様子を物色した。金魚すくいに興じる人々の笑顔、綿飴を落としてしまった子供の泣き顔、杏飴を買ったはいいいけどどう食べようか悩んでいるカップル。型抜きに興じる子供の姿もある。

祭りというのは、ただ見ているだけでも面白いものだ。もちろん、参加できればなおの事なのだけれど。

「ねえねえ」

月本さんが、僕の手を引いた。

「あれ、凄くない？」

月本さんが指したのは、射的の屋台だった。正確には、彼女が指していたのは、その射的の屋台の、まるで雛飾りの段のようになっている棚の中央にドンと座っている景品だ。

その景品に目を向けた僕は、思わず目を疑った。

そこにあるのは、高さ20cmくらいのぬいぐるみだった。でも、あれはただのぬいぐるみではない。

版權を管理している会社が厳しく版權を適用している関係で、名前を出すのもヤバイ代物なのだけれど、とにかくその“版權物”のぬいぐるみだった。とてつもなく人気があるので、正規のルートで買っても、きつと諭吉さん一枚では済むまい。

なんと、そのぬいぐるみが、射的の景品なのだ。ふと値段を見る

に、「玉5発300円」とのこと。

「一回300円か……、月本さん、やる？」

「いや、私、あんまり射的得意じゃないし……」

とか言いつつ、そのぬいぐるみと僕を、交互に見比べている。目をきらきらさせて、僕の事を見るのだ。

しょうがない、と心の中で呟いてから、僕は言った。

「じゃあ僕、やってみるよ。手に入ったら、あのぬいぐるみ、あげるよ」

「え！ ホント？」

これでもかというくらいに大仰に驚いてみせる月本さん。けれど、彼女が本当に嬉しそうに微笑むものだから、上手く使われている不快感を覚えずに済んだ。

僕は、屋台の前に立った。

「へい、らっしやい」

明らかに堅気ではないオッサンが、つまらなそうに言った。そして、何回やるんだ？ と訊いてきた。ここで、“一回！” と言えればかつこいいのだろうけど、僕は申し訳ないくらいにビビリなので、

「に、2回……」

と弱々しく言った。

「へい、二回ね。600円だ」

600円を渡すと、店のオッサンはまるで人質交換のように、二つ皿を寄越した。するとオッサンは、仕切りの奥にあるスツールに腰掛けて、タバコに火をつけた。そんなオッサンを見るのを止め手元を見ると、アルミ製の皿の中には五個ずつコルクの玉が入っていた。つまり、僕の玉は10発。

「どう？ 狙えそう？」

後ろから、月本さんが顔を出した。

「うーん、どうかな」

店のオッサンの目を気にしながらも、銃身が曲がっていないかを

さりげなく確認する僕。どうやら、曲がっていないようだ。少なくとも、銃身に悪戯をするような野暮なマネはしていないらしい。

でもまあ、とにかく一回撃ってみないことには要領がつかめない。なので、コルクの玉を銃口にきゅっと込め、狙いをつけた。とりあえず、最初は本命の下においてある、お菓子の箱だ。

ちよつと身を乗り出して、引き金を引いた。

ポン。

そんな、シャンパンの栓を抜いたときのような間抜けた音が出た。そして、次の瞬間、僕が狙っていたお菓子の箱はバランスを崩し、台から落ちた。

「お、上手いね、ニイちゃん」

店のオッサンが、僕の横に、打ち落としたお菓子の箱を置いた。

「すつごい！……でも、あのぬいぐるみじゃないね」

そう残念そうに言う月本さんに、僕はまたコルクを込めつつ反論した。

「あれは腕慣らしみたいなものだから、次からはあのぬいぐるみを狙うよ」

今度は、本命のぬいぐるみを狙った。そして、引き金を引いた。けれど、そのぬいぐるみは落ちなかった。

玉が当たっていないわけではないのだ。でも、どうしたわけかびくともしない。射的、というゲームをやったことのない方にはピンと来ないかもしれないけれど、あのゲームは、景品を「撃ち落とす」ことではじめて、景品が手に入る仕組みになっている。つまり、玉を当てただけでは何の得にもならない。当てて、雛壇のような壇から打ち落とす必要があるのだ。

けれど、おかしい。何度撃ち込んでも、まるでびくともしない。普通、あれだけ撃ち込めばバランスくらいは崩しそうなものなのに……、と訝しくなってきた頃、突然、ミス・エマーデイルが口を開いた。

『あれ、イカサマね』



「え？　なんだって？」

ミス・エマーデイルは人形に目を遣りつつ、続けた。

『あの人形、服を着ているでしょ？　あの服の裏に針金を通して固定しているみたい。あれは最初から、落ちないようになっているのよ』

むむ、言われてみれば。足を投げ出して座っているあのぬいぐるみ、確かにちよつと不自然だ。背中に何か心棒でも刺してあるかのような立ち居姿だった。

『あゝあ、つまらないことになったわね』

嬉しそうに、同意を迫るミス・エマーデイル。けれど、僕はその同意に乗らなかった。

残り3発の玉。一発を込め、発射した。もちろん狙った的は、あのぬいぐるみだ。もちろん、コルクの玉はそのぬいぐるみに当たって、コロコロと転がった。

『何してるの？』クールなミス・エマーデイルには珍しく、やけに感情的に言葉をかけてきた。『あれは、絶対に落とせないのよ？』

そんなミス・エマーデイルの言葉を無視しつつ、けれどまたコルクを詰め、撃った。コルクはぬいぐるみに当たったけれど、ぬいぐるみに何の影響も及ぼさずに、地面に落ちた。

『ねえ、聞いているの？』ミス・エマーデイルは明らかに苛立った口調で僕に言った。『絶対に、あのぬいぐるみは落とせないのよ？　だったら、普通に落とせるお菓子とかを狙えばいいじゃない。どうしてあなたはそんなに意固地なのよ』

その質問に僕は答えなかった。いや、正確には、答えられなかった。だって、僕自身、ミス・エマーデイルへの答えを、用意できていなかったからだ。

とにかく、僕はあのぬいぐるみを狙うしかなかった。

結局、僕は無言で最後のコルクを銃口につめ、飽きもせずそのぬいぐるみを狙った。

そして、照準をあわせ、引き金を引いた。

「ごめん」

僕は、短く謝った。

「いや、謝られるようなことじゃないから！」

慌てたかのように、月本さんは両手を振った。

ミス・エマーデイルの指摘通り、あのぬいぐるみは落ちなかった。最後の一発も、見事にあのぬいぐるみが弾いた。けれど、その跳弾が、脇にあった小さな箱のお菓자에当たり、落ちた。結局、僕らの手に入ったのは、コンビ二で買えばせいぜい合計200円未満のお菓子が二箱だったのだ。

「でもさ」月本さんはちよつと顔をしかめ、射的屋の方を睨んだ。

「あのぬいぐるみ、絶対におかしいよ！」

「何が？」

あえて訊く僕に、月本さんは正直に答えた。

「だっておかしいじゃない」月本さんはブランコを漕いだ。「あんなに玉が当たったのに倒れないなんて、絶対に変だよ！ ねえ、あのおじさんに文句を言いに行こうよ！」

僕は首を振った。あの、明らかに堅気じゃないおじさんに、文句を言いに行こうというのか、この女の子は。剛毅というか、世間知らずというか。

僕も、ちよつとブランコを漕いだ。

射的が終わった後、「なんだか疲れちゃったね」と月本さんが休憩を申し出てきた。そこで、どこか休めるところは無いかと探しているうち、境内を出てすぐのところの小さな公園があるのを発見した。なので、境内から出て、その公園に入ったのだ。

公園、と書いたけれど、ブランコと滑り台しかないような、しみつたれた公園だった。細かい砂利が敷き詰められているようだけれど、その間隙をぬうように、いやに太い雑草が点在していた。ふと見ると、滑り台も所々赤錆が浮き出ている。ふと見回して、ベンチ

さえないとはどういうことなんだろう、と思わずため息をついてしまいたくなりそうだったけれど、月本さんの手前、そのため息を飲み込んだ。座るところもないから、と月本さんは滑り台よりはきれいなブランコに座った。僕も、それに倣い、月本さんの座った横のブランコで、休憩を取ることにした。そうして、上記の会話に至っている。

## 祭りの明暗【8】

誰もいないうらぶれた公園。ちよつと音の遠い祭囃子。漕ぐたびに軋むブランコと、赤錆の浮いた滑り台。その全てが、まるで獰猛な動物を囲い込む柵のように、僕らを包んでいた。それはまるで、空気のように柔で春の日のように優しい柵。けれど、逃げられない力押しで破ろうにも、その柔らかさにいなされてしまう、そういう性質の柵だった。

「ねえ」

月本さんは、ブランコを漕ぎながら、僕に言葉を投げ寄越してきた。

「なに？」

僕は、投げ返した。“会話はキャッチボール”とは、よくぞ言ったものだ。

「訊きたいことがあるんだ。前から、気になってたの」

「ん？」

月本さんは、ちよつと短く息をついて、口を開いた。  
「なんで、いつもそんな悲しそうな目をしているの？」

「え？」

突然のぶしつけな質問に、僕は面食らってしまった。

彼女は続けた。

「だって、あなたはいつもそうして、冷たい目をして周りの様子を窺ってる。それに、弥生とマサルをくつつける、って話をしたときに、なんだか複雑そうな顔してたよ？　まるで、“なんでそんなバカなことを”って言いたげな顔してたよ？　なんでなの？」

僕は、“冷たい目をして周りの様子を窺ってる”ように見えるのか。でも、それはそうかもしれない、と、僕は思った。きつと僕は、そういうヤツだからだ。正直、弥生さんとマサルをくつつける、という話をされたときに、白けた気分になったのも事実だ。実は、そ

ういう風に心が動くのにはあることが影響しているのだろうことは、想像がついていた。でも、そのことをあけっぴろげにするのもバカバカしいし、なんだか自分の境遇のようなものに負けてしまったかのようなやりきれなさも感じる。だから、僕は短く言った。

「生まれつき」

とにかく僕は、おちゃらけた言葉を選んだ。それは、もしかすると、僕のストッパーが発動したからかもしれない。ストッパー。それは、暴発を防ぐための安全装置。

「嘘」

月本さんは、僕のストッパーを取り外しにかかった。ストッパーの取り外し方は至極簡単。そのストッパーが、レトリックであることを指摘すればいいのだ。けれど、ストッパーというのは一つじゃない。

「じゃあ、今のこの世の中に憤慨して」

「それも嘘」

月本さんはまた、僕のストッパーを外した。

けれど、甘い。僕は、そういうストッパーをいくらでも持っている。僕が、次なるストッパーをかまそうとしたとき、月本さんがぶっ壊しにかかってきた。

「弥生が言ってたよ。“アイツはきつと、何でもないような顔をしてるけど、結構苦労しているんだ”ってさ」

あちゃあ、弥生さん、喋ったんだ。

これはあくまで独断と偏見に基づいた意見だけど、若いうちに苦労した人間、っていうのには、どうしたわけか“影”がある。その影は、普段は垣間見えないし、見えたとしてもおぼろげで見逃しがちなものだ。けれど、同じような境遇を過ごした人間には、その影を感じ取る事が出来る。

弥生さんは母子家庭だ。弥生さんも苦労した子供が持っている“影”を持っていて、僕の影をその鼻で嗅ぎ取ったのだ。

僕は、短く嘆息した。

「言わなきゃ、ダメ？」

「ダメ」

その月本さんの言葉には、僕を包む何かがあった。拒絶の意味の“ダメ”ではなくて、逃げ場を奪う“ダメ”でもなかった。僕を受け入れようとする、優しい“ダメ”だった。少なくとも、僕にはそう感じられた。

月本さんは、そういう包み方が出来る人だった。そのことを、僕はすっかり忘れていたのだ。最初から、月本さんの前においてはストッパーが無意味だ、ということを理解していなかったのだ。

「まったく、月本さんには敵わないな」

「そう？」

まんざらでもなさそうに、月本さんは微笑んだ。その笑顔にほだされていく自分をなんとなく自覚していた。けれど、それは心地のいい体験だったと同時に、どこか怖い体験だった。……もし、彼女が僕の言葉を受け止められなかったらどうしよう。もし、彼女が僕の事を理解してくれなかったらどうしよう。そんな想いが、月本さんの笑顔の裏に浮かぶ。けれど、そんな僕の疑念を吹き飛ばしたのは、ほかならぬ月本さんだった。

「……大丈夫だよ」

「うん」

きつと、このときの僕は、情けなかっただろう。声はまるで雨の中で佇む子犬のように震えていたし、返事そのものもまるで五歳児のような従順さだ。

「大丈夫」

もう一度、ゆっくりと言った月本さんは、僕を見つめた。その瞳には、全くブレが無かった。

その瞳に促されるようにして、僕は心の奥底にあるモノを喋りだした。

「どこから喋り始めたらいいいのかは判らないけれど、僕は、怖いんだ」

「怖い？」

「うん。怖いんだ」僕は自分の言葉に頷いた。「例えば、誰かに失望されること。例えば、誰かに嫌われること。例えば、誰かを好きになること。例えば、誰かに好きになってもらうこと」

「前の二つはわかる」月本さんは言った。「でも、どうして“好きになること”“好きになってもらうこと”まで怖いのか？ だって、すばらしいことじゃない」

「すばらしいことだとは思うよ、でも」僕は短く答えた。「少なくとも僕にとっては、怖いものでしかない」

「なんで、なのかな」

「きつとそれは」僕はちよつと間を置いた。「親のせいだ」

「親？」

「うん。親」未だに、“親”という言葉は何の感慨も込めずに口に出来ることに、妙な驚きをもちつつも、僕は続ける。「ウチの両親、どうしようもないんだ。父親は、仕事狂い。母親は、男狂い。どちらも変なんだ。父親は、仕事にしか興味の無い人だった。きつと、“家”を寝るところ程度にしか考えてなかったんじゃないかな。だから、僕は、父親に肩車してもらった思い出がないんだ。小学校の頃、しかも父の日の辺りになると、決まって父親を褒め称えるような作文を提出したじゃん？ あれだって、白紙で出してたくらい。ま、それは母親もそうか。母親は母親で、褒められるような人じゃない。五歳くらいの頃だったかな、母親が、夕飯を作って並べた直後に、おめかしを始めたんだ。まるで、新宿のデパートにでも行くみたいな余所行きの格好だったから、僕はてっきりデパートに行くもんだと思ってた。でも、今にして思えば、好意的に考えれば遊びに行ってたんだろうし、妥当な線を言えば、きつと浮気をしに行こうとしてたんだらうね」

月本さんは、頷いた。大丈夫。そう言っているように、見えた。僕は続ける。

「そんな両親だったけど、どうしたわけか波風は立たなかった。そ

れはそうだよ、父親も母親も、お互いに興味が無かったんだから。興味が無い相手同士じゃ、喧嘩のしようもないよね。でも、こう言ったらなんだけど、きつと、そんなどうしようもない親でも、僕は好きだった」

僕は、ブランコを少し漕いだ。

「別に、優しくしてもらった覚えもない。でも逆に、殴られたようなこともない。要は、父親も母親も、僕に興味がなかったんだろ？ ね。でも、子供だった僕は、そんな親を好きになるしかなかったんだ。だってそうだろう？ 子供は親を選べないんだから。そして僕は、親を好きになるしか、選択肢は無かったんだ」

キコキコ、と、ブランコが鳴った。もう、祭囃子は聞こえなかった。

「けど、どんどん判ってくるんだよね、子供ながら。だって、小学校の頃って、友達の母親とか父親とかが、一番身近にいる頃でしょ？ だから、どうしても他人の家の“父親”“母親”が見えちゃうんだよ。どこの家の両親とも、ウチの親たちは違った。友達の親が友達を、つまりは自分の子供を、見るその目に、僕は違和感を覚えた。最初はその目が、何を意味するのか判らなかった。あのまるで眠そうに子供を眺める目が何なのか、わからなかったんだ。でも、そのうちに理解できた。あれは……」

僕は言いよんだ。その先に待ち構えているのは、あまりに野暮な言葉だったし、陳腐な言葉だった。でも、言わなくてはならなかった。だから、そのまま言った。

「親の、愛情だったんだ」

不思議な事に、こんな野暮な言葉を吐いたにも関わらず、まるで白けた空気が流れなかった。それは、月本さんが僕の言葉を全て受け止めてくれているからだろう。僕はどこか安心を覚えつつ、続けた。

「それに気づいたとき、本当に驚いた。“ああ、あれが親の愛情ってヤツなんだね”ってさ。そして、その瞬間、ようやくわかったん



だ。僕はきつと、親に好かれていないんだな、ってことに。丁度、そのことに気づいたのが小学校の高学年の頃だったと思うんだけど、その頃に、両親がドタバタしたんだ」

月本さんは、話を先に促すポーズをとっている。僕は一息置いて、口を開いた。

## 祭りの明暗【9】

「どうやら、父親が、母親の素行を調べてたらしいんだ。要は、浮気調査だよな。それで、母親の浮気が発覚したみたい。それであとはお決まりのパターンさ。まずは夫婦喧嘩。“お前が悪い”“アンタが悪い”の応酬。正直、不思議でしょうがなかった。どうして、こんなにこの二人は喧嘩しているんだろう、って。だって、おかしいじゃない。前までお互いにお互いを興味無さそうにしていた二人だったのに、いきなり何かのきっかけで喧嘩しているんだもん。なんだか、それはそれで滑稽だった。そんな時期が、結局三年くらい続いたんだ。で、その次に待っていたのは、さらにお決まりのパターン、離婚の協議だったみたいだ。きつと、父親が提案したんじゃないかな。母親、離婚協議の出鼻の頃は、明らかに取り乱してたし。結局、お互いがお互い、離婚には同意していたみたい。でも、母親の方が、金の面で渋ったみたい。当時母親は主婦だったから、それは当然だったのかもしれないけど。でも、それについては父親の方が折れた。多分、一刻も早く別れたかったんだろうね」

でも、と僕は前置きした。僕の狙い通りに、月本さんは固唾を飲んだ。

「問題は、子供だったみたいだ」

子供。つまりは、僕。

ここに至って、月本さんが口を開いた。

「つまり、両親があなたの親権を主張した、ってこと？」

僕はゆっくりと頷いた。

「なら」月本さんは言った。「ご両親は、あなたのことを愛してるんじゃないの？」

愛してる。そんな、流行歌や恋愛小説の中でしか聞かれない言葉。けれど、そんな野暮な言葉でしか、「親子」というのは語れないのかもしれない。

僕は、首を振った。

「それなら、良かったんだけどね」

「どういうこと？」

月本さんに促されるがまま、僕は続けた。

「別に、父親も母親も、僕の事がかわいいとかそういうことじゃなかったんだ。父親は世間体をおもんばかって。母親は僕を養育することと割り当てられる養育費をそろばん勘定に加えて。……どっちにしろ、僕のことなんか、ぶっちゃけどうでもいいみたいだ。僕の意味なんか関係なく、二人はああでもないこうでもない、って、まるで猫の子の飼い主を決めるような要領で、僕のことを相談しだした。でも、上手く行かなかった。それでこと此处に至って、ようやく僕が登場することになる」

あの時のこと、いまだに忘れない。確か、中学校三年生の秋頃だった。受験が控えていることもあったけれど、とても他の友達のように塾に通いたいなんてことを親に頼めなかった僕は、しんとした家のリビングですっと勉強をしていた気がする。そのときに、あいつらは……。

「難問を吹っかけてきたんだ」と、僕は言った。「色々と言ってたけれど、要は簡単だった。『パパとママ、お前はどっちが好き？

好きなほうについていきなさい』……馬鹿げてる。自分たちで決着がつかないからって、子供にその決定権を押し付けたんだ。しかも、どっちにもつかない、って選択肢を僕から奪った上でね」

あの頃、本当に大変だった。そもそも、受験シーズンというのは、ただでさえナーバスなのだ。その時期に合わせてこんな話を押し付けてくるなんて、と心中で反発したのを、今の事のように覚えている。

「だから僕は、熱血高校を選んだ」と、僕は続けた。「あの高校には、すごく厳しい寮がある」っていうのは、けっこう有名じゃない？ しかも、その厳しいって言われる所以が、『外界との接触をあまりさせたがらない』からだ、っていうのもよく聞いた。ケータ

イさえ持たせてもらえない寮、僕にとっては、魅力的だった。僕はとにかく、親から離れたかったんだ。だから、僕は熱血高校に入ることにした。……この学校、そこまで頭がいいわけでもないから、入るのはさほど大変じゃなかったけど」

僕は、一度口をつぐんだ。それは、月本さんに考える時間を与えるためでもあったし、それ以上に僕自身が自分の語る言葉を理解するためでもあった。心の底に残ったままで流れ出なかった言葉というのは、吐き出してみてもあまり整合性もないし、意味づけもされていない。けれどこうやって吐き出してみても目の前で並べてみると、それらが僕の中でどういう風に動いていたのか、そしてどういう風に僕の心に干渉していたのか、なんとなくわかるのだ。けど、「吐き出せば楽になる」というその言葉に、そういう裏があるということを知ったのは、このときの事だった。

しばらく宙を見つめていた僕だったけれど、口を開いた。

「きつとね、マサルと弥生さんの件で僕が乗り気じゃなかったのは、きつと僕の中で、“バカバカしい”って思っているからだろうね」

「バカバカしい？ 恋が、つてこと？」

月本さんが、控えめに訊いてきた。けれど、僕は首を横に振った。「恋？ いや、もっと大きいもの」と、僕は言った。「例えば、人を愛すること。いや、これでもまだ小さいか。例えば、人と友達になること。もっと言えば、人と関わること。それが、バカバカしく見えるんだ、僕には」

「でも」

月本さんの言葉を、僕は遮った。

「だってそうだろう？ 僕の母親と父親だって、きつとお互いがお互いを愛し合って結婚して、それで僕が生まれたんだろ？ なのになんて、あんなことになってるんだ？ ……正直、身近な“失敗例”を見ちゃうとね、どうしても“人を好きになる”なんてことが、バカバカしく」

そんな僕の言葉は、遮られた。ただし、言葉で遮られたわけじゃ

なかった。

最初、何をされたのかわからなかった。ただ、眼の前がチ力チ力として、脳を揺さぶったみたいな振動を感じただけだ。でも、耳の奥に残る乾いた“パチーン”という音と、頬に残る痛みで、ようやく僕はビンタされたことに気づいた。

もちろん、ビンタをしたのは、月本さんだった。

「な、何を……」

文句を言おうと月本さんを見つめた僕だったけれど、言葉が出なかった。

月本さんは、僕の顔を睨んでいた。僕の頬を叩いた右手を、振り抜いた格好のままで、僕を睨んでいた。いつのまにか、月本さんはブランコから立ち上がっていたらしい。僕の顔を中腰で見据えるけれど、その目から、きりつとした目からは想像もつかないくらいに柔らかそうな涙がとめどなく流れ落ちていた。まるで、砂地を潤す雨のように、恩寵に満ちた、キレイな涙だった。

「バカ」

月本さんは、それだけ言った。

そう言い終えるが早いのか、月本さんはまるで枷を失ったマリオネツトのように、地面にへたり込んでしまった。そして、声をあげてしゃくりだした。そのうち、そのしゃくりは嗚咽に変わり、結局は赤ん坊のように騒々しい泣き声に変わった。月本さんは、決して僕に顔を見せようとはしなかった。まるで、これが自分のルールなの、と言わんばかりの、崇高な涙の流し方だった。

僕は、月本さんにぶたれた頬をさすった。

月本さんの泣き声が、いやに頬に響いた。

「……」

あぜ道で、無言で僕は自転車を漕ぐ。

どんどん、祭囃子が遠ざかってゆく。そして、型抜きとか金魚すくいなどのやりたかったことも、どんどん遠ざかっていく。僕は、

風を受けながら、畑の真ん中のあぜ道を走りぬけた。

「ねえ」

僕は、不意に声をかけた。すると、自転車の後方座席に座る月本さんは声を返してきた。

「何？」

涙声のせいで、何と言っているのかも釈然としない。けれど、月本さんはそんな状態でも、言葉を返してきてくれた。

結局、月本さんはあの後小一時間泣き続けた。どうにか宥めすかそうとはしたのだけれど、上手く行かなかった。さすがにお手上げだった僕は、涙を流す月本さんにこう提案した。「もう、帰る？」すると、彼女はウンウン、と首を縦に振った。そして、泣きじゃくる彼女を自転車の後ろに乗せて、こうして自転車を漕いでいるという次第なのだ。きつとまだ正午にもなっていない。それが証拠に、これから祭りに向かっていていると思しき人たちとすれ違った。ちなみにその中に井上先輩や悠木先輩、町田先輩とか管理人・藤原のじいさん、寮母さんといった顔見知りの姿があったけれど、僕のことには気づかないのか、あるいは気でも使ってくれているのか、皆僕に声をかけてこなかった。……いや、井上先輩だけは、きつと本当に気づかなかったんだろうけど。

まさか、自転車の後輪部につけたステップが、まさかこんな形で役に立つとは思わなかった。

僕は、自転車を漕ぎながら、月本さんに訊いた。

「どうして、あんなに泣いたの？」

「さあ、わからない」

彼女は、僕の腰に手を回し、背中に頭を埋めた。

「わからない、か」

僕は言った。すると、月本さんは顔を埋めたまま、呟いた。

「でも、わかる事もある」

「わかること？」

僕は思わず、振り返ってしまった。自転車を運転しているという

のに。

月本さんは、僕の顔を見つめた。背中に埋めていた顔を、僕に向けて。その顔には、どこか自信の色があった。

「あのね、私、あんまり口が上手いほうじゃないから、しっかり伝わるかどうかわからないけど」と、前置きして、月本さんは続けた。「人のことを好きになるのは、本当に凄い事だと思うんだ」

僕は前を向いた。

月本さんは、まるで僕の背中に語りかけるかのように、言葉を紡いでいく。

「いや、人を好きになる、だけじゃちよつと表現が狭いかも知らない。……人と関わる、ってことは、って言い直したほうが良いのかも知れない」

「……本当にそう思う？ 心から？」

まるで、子供のように素直に訊く僕がいた。彼女は、答えた。

「だって。もし、私がマサル君や弥生、藤島君とか、……あなたに出会わなければ、調査部の活動は無かったんだから。もし、部に入る前に、“人と関わるのがバカバカしいから”って避けていたら、きっとその先にあったものは手に入らなかったと思うんだ」

「でもさ」僕は反論した。「もし、そうやって痛い思いをしたのに、何も手に入らなかったら？」

「それはそれだよ」

月本さんは力強く言った。

「……は？」

月本さんは、意味のつかめていない僕に続けた。

「それはそれ、って言ったの。ダメだったら、今度は別のことを頑張ればいい。それだけのことじゃない」

「でもそれは」僕は棘を込めて言った。「痛い思いをしたことのない人が言う事だよ」

「そうかな？」月本さんは優しい口調で反論した。「きっと、皆だって痛い思いをしてるんだよ？」

「皆？」

「そう、皆」月本さんは言った。「きっと、皆が皆、この地球の上で悩んでる。それで、皆が皆、傷ついてる。でも、皆それでも、やっぱり未来にある楽しいことを信じてるんだと思うんだ」

「でもその言い分は」

本当に痛い思いをしたことのない人間の言葉だ、という言葉をつきそうになってから初めて、僕は自分の心の一番底にあるものに気づいた。

僕は結局、“被害者面”なのだ。

「僕は本当に不幸な思いをして、打ちひしがれている。だから、助けてよ」という本音を、恥ずかしいから、という理由で隠して周りと同じに見せているだけ。その本音は、周りに隠しているのと同じに、自分自身に対しても隠してしまった。だから、僕は勘違いしていた。「僕は、境遇にも負けずに頑張っているんだ」と。気づけば、自分の心は打たれ強くならないまま、今に至っている。そう、僕は、ただ自分の弱さを見ていなかったのだ。だから、周りの人のように、痛みが強くなれなかった。

「……そうだったのか」

思わず、呟いた。

「どうしたの？」

心配そうに、僕の顔を覗きこむ月本さんに、僕は笑顔で応じた。

「ありがとう」

「は？」

今度は、月本さんが素っ頓狂な声を出すほうだった。まるで、「何が？」とでも言いたげな声だった。事実、何でお礼を言われたのか判らなかつたのだらう。

僕は短く言った。

「いろいろ、だよ」

「……人を好きになることは凄い事、なんだよ」

月本さんは、まるで自分に言い聞かせるかのように、そう呟いた。





## 祭りの明暗【9】（後書き）

これにて、「祭りの明暗」終了です。

そしてもうそろそろ、このお話自体も終わりです。

## エピローグ【完結】

月本さんを駅に送り、ハトムネ寮に戻った僕は、遊戯室に直行した。

いつもは先輩方でムサイ遊戯室だけど、平和畑神社のお祭りのせいか、だれもいなかった。おかげで、何も気にする事もなく、パソコンの前に座ることが出来た。

カタカタとパソコンに短文を打ち込む。ただ、その音だけが僕を支配していた。けれど、その静寂の空気を壊しにかかるかのように、声が響いた。

『何をしてるのよ』

ミス・エマーデイルだった。いつもよりちよつと言葉の端が弱い気がした。けれど、彼女に視線を合わせることなく、僕はその質問に答えた。

「決まってるだろ？ パソコン」

『パソコンで、何をしてるのよ、って訊いてるの！』

彼女は、怒鳴った。そういえば、彼女が声を荒げたのは、前にも後にもこのときだけだ。けれど、その時の僕にはそんなことに構っている暇はなかった。彼女の質問に答えず、一心不乱にキーボードを叩き続ける。

そして、何度目か最早わからないエンターキーを押したところで、ようやく僕は答えた。

「親に、メールを送ったのさ」

『メール？』

「ああ。僕、親と色々あってさ。“どっちについていくかは判らないけど、とにかく話し合おう”って送った」

僕は振り返った。実はこのとき、何か彼女に言葉をかけようと思っていたのだけれど、その言葉はまるで出なかった。何せ、眼の前の光景に驚いて、言葉が出る暇も無かったからだ。

何せ、僕がミス・エマーデイルだと思って話しかけていたのが、三歳児くらいの少女だったからだ。白いワンピースに黒い瞳。カモミールの香りさえするのに、身長が僕の腰くらいまでしかない。

「……ミス・エマーデイル？」  
すると、その少女は答えた。

『ええ、そうよ。あなたの倦怠。そして、あなたそのものを、倦怠の底にまで誘うもの。私は、ミス・エマーデイルよ』

まるで、英国詩を詠唱しているかのような、格調を持った言葉。間違いない、ミス・エマーデイルだ。

「なんで、そんな姿に？ それに、今まで何処にいたんだ？」

僕の言葉に、ミス・エマーデイルは最初、無視を決め込んだようだった。窓の近くにまで歩を進め、そして窓の外を見遣って、時折自分の手をまじまじと見ているようだった。けれど、僕に、あの全ての色を混ぜ込んだかのような黒い瞳を向け、口を開いた。

『今までずっと、あなたのそばにいたわ』

「え？」

『私は、あなたの倦怠。倦怠は、常に人に寄り添うものよ。あなたが倦怠に蝕まれたその日から、私はあなたの近くにいた。そして、倦怠に蝕まれていくあなたを、ずっと見守っていた。なのに、なのに、あなたは倦怠を選ばなかった』

「意味が、わからない」

『本当にあなたは進歩がないのね』ミス・エマーデイルの言葉には、普段にない「熱」があった。『意味なんて、従属的なもの。意味なんて、考えるだけ無駄なものなの。あるのは常に、選択とルールだけ。そしてあなたは倦怠を選ばなかった。それだけの話』

「回りくどいよ、どういうこと？」  
「もう！」

ミス・エマーデイルは、地団太を踏んだ。けれど、またその顔を元の無表情に戻して、続けた。

『つまり、あなたは私とのゲームに勝ったのよ』

「それ、ホント？」

『ええ、ホント』

ミス・エマーデイルは、僕の声色を真似した。けれど、その表情は硬かった。

その表情に気づいた僕は、訊いた。

「……これから、ミス・エマーデイルはどうなるんだ？ まさか、死……」

ミス・エマーデイルは嗤った。まるで、この世の全てを呪うかのよう。

『死ぬわけ無いわ。だって、私はあなたの倦怠。倦怠は、いくらでも大きくなるし小さくなる。けれど、なくなってしまうことは無いの』

「そうか、良かった」

『でも、残念。でも、私の自我は失われてしまうの』

「え？！」

『それだけは、本当に残念だわ』

ミス・エマーデイルは、顔を歪めた。眉間にシワを寄せて、目を腫らして。もし、目から液体が流れていたら、泣き顔と言われるのだろう。その顔は、ミス・エマーデイルが初めて僕に見せた、人間的な表情だった。

『私はきつと、赤子に戻る。あなたの倦怠が、ほとんど0に近づくんだもの。いいえ、赤子なんて軟な変化じゃないかもしれない。もしかすると、原子の一欠片になってしまうのかもしれない。だから、あなたと過ごした日々を、きつと忘れてしまうの。それだけは、本当に残念だわ』

「ごめん」

『謝ることなんて、ありはしないわ』と、ミス・エマーデイル。『だって、私はゲームに負けたの。負けた者には、それなりのペナルティを。それは、当然の事だわ。でも』

「でも？」

『どうしてだろう』ミス・エマーデイルは、口の辺りを抑えた。『こんなにも、あなたのことが恋しくてしょうがないの。あなたのことを、忘れてしまいたくないの』

しばし、僕らの間に沈黙が流れ込んだ。僕からかけるべき言葉なんて、存在しなかった。だって、彼女の存在を認めるわけにはいかないのだ。でも、僕は、彼女に何かしたかった。だから、僕はポケットをまさぐった。

「ミス・エマーデイル！」

僕は、上着のポケットにあった箱状のものを、ミス・エマーデイルに投げ遣った。視線を下げていたミス・エマーデイルは、投げ越されたそれを、ぱしっと受け取った。

しばらく、ミス・エマーデイルは手の中にあるそれを見ていた。けれど、何かの拍子に、まるでギャグマンガの山場でも読んだかのように、ぷつと吹き出した。

「どうしたの？」

『あなた、変な人ね』

「今頃気づいた？」僕はあえて、おどけて見せた。

『暇乞いをする女の人に、あと数本しか入っていないタバコと、せいぜい100円のお菓子を投げ寄越すなんて、ロマンチックの欠片もないわ』

そう。僕が投げ寄越したのは、いつだったか弥生さんに貰った、残り二本のタバコの箱、そして、祭の射的で取ったお菓子だったのだ。ポケットには、それしか入っていなかった。

でも。

僕は思ったままを口にした。

「返してくれなくても困らない割に、けっこう思い出が染み込んでいるんだ。これ以上、15歳の僕を思い出させてくれるものは他にないよ」

『そうかもね』

ミス・エマーデイルはそっけなく同意した。彼女の目に、光るも

のがあったのは気のせいだっただろうか。

『さて』

ミス・エマーデイルは、ドアの方に、すたすたと歩を進めた。

「もう、行くの？」

『ええ。だって、これ以上ここにいと、私が赤子になるところを見られちゃう。さすがにそれは、恥ずかしいわ』

「そう」

不意に、ミス・エマーデイルは僕に微笑みかけた。その笑顔は、僕がよく見知っているミス・エマーデイルのそれだった。わずかに半月程度しか見なかった笑顔だけど、どうしたわけだろう、その笑顔が僕の中で急速に思い出になっていくのを感じて、ちよつと戸惑った。

『そんな、悲しそうな顔しなくてもいいのよ』

「え？」

僕は、頬をつまんだ。悲しそうな顔をしてるのか？僕は。

ミス・エマーデイルは、戸に手を掛けながら、言った。

『私は、ミス・エマーデイル。あなたを倦怠の底、“エマーデイル”に誘う者。倦怠は、あなたが望む限り、忠実な猟犬のようにして、何度でもあなたの元にやってくる。そして、私はその度に、あなたを倦怠に誘う。……わからない、って顔してるわね。つまりは』

ミス・エマーデイルは、言った。

また来るわ。

その一言を残して、ミス・エマーデイルは、僕の前から姿を消した。あの、仰々しい登場のときとは打って変わって、ものすごく静かな引き際だった。

カモミールの香りだけが、僕の周りに残っていた。

ミス・エマーデイルが去ってから、色々なことが少しずつ変わっていった。

それこそ細かいことと言えばキリがない。例えば、季節はあの初夏の頃から、気づけば真夏の盛り、八月になっていた。それに、いつの間にか部の顧問がウチのクラスの担任、田村先生になっていた。大きく、物事も変わっていった。例えば、反町さんが学校を辞めた。事情は知らない。でも、マサルが、ずっと残念そうにしていた。マサルと言えば、僕らの裏工作が多少実ったのか、それとも全然関係ないのかは知らないけれど、弥生さんと付き合い始めたのも変化の一つだ。

でも、僕の周りにはそんなに変わっていない。

父親と母親の離婚の件も僕がその議論に参加することで、少しはいい方向に進むんじゃないか、という期待もあったのだけど、父親も母親も結局は子供のような人なので自分の主張を曲げない。きつと、僕がどっちについていくかを表明すればどうとでもなるのだろう。でも、それは父親と母親のためにならない。だから、僕は黙っていることにする。

そして、僕自身は特に浮いた話もなく、八月になった今でも、涼しい図書室で一人、こうしてミス・エマーデイルのことを思い出すといった、非生産的な高校生活を送っているわけだ。

もちろん、図書館にいるのは何もミス・エマーデイルのことを思い出すためのものではない。調査部の活動のためだ。ちなみに今回の調査は、花火大会についての調査だ。今日の夜6時から、月本さんと行くことになっている。最近、そういう「遊び系」の調査に、マサルと弥生さんを誘いにくくなったのも事実だ。あいつら、恋人同士だしな……、と、なんだか呼びにくい空気になっている。そして、そういう「遊び系」の調査を、藤島君がサボりだしているのも変化の一つだろう。毎回、「……お腹が痛い」だの、「……頭が痛い」だの、「……変な声が聞こえる」だのと嘘臭いことを言って、サボりだしたのだ。だから、今日の調査は結局月本さんと二人で行くことになっている。

まばらにしか人のいない図書室の端っこで、僕は一人考える。



ミス・エマーデイルの、最後の一言を。

「また来るわ」

彼女は確かに、そう言った。

彼女は僕の倦怠が形をもったもの。そして、倦怠はなくならない、と彼女は言った。と、いうことは、彼女はまた戻ってくるのだ。カモミールの香りを振りまいて。

その時、僕は、彼女の誘惑をかわしきれんだろうか。

今なら、来られても大丈夫だ。今の僕なら、何とかなるだろう。

でも、これから、どうなるか判らない。

もしかしたら、これから先、僕がとんでもない倦怠を感じるときがあるかもしれない。そして、そのとんでもない倦怠を力にして、彼女は姿を現すのだ。そしてきつと今度やつてくるミス・エマーデイルは、今回の彼女とは比べ物にならないくらいに妖艶で、それでいてかぐわしいほどに美しいミス・エマーデイルなのだろう、という予感も頭を掠める。

だから、僕は、彼女に言わなければならない。

別れ際に僕が彼女に言わなければならないかった言葉。そして、この書き連ねてきた文章で、僕が一番言いたかった言葉。本当は言いたくもないような気もするけれど、言わなければならない。そう書きつつも、彼女の顔が頭を掠める。けれど、そのイメージを頭から振り払って、僕は言う。ちくちくと刺さるサボテンの棘がもたらすような、淡い心の痛みを抑えつつ。

「さよなら僕の、ミス・エマーデイル」

## エピソード【完結】（後書き）

今更ですが、「エマーデイル（＝Emerdale）」には元ネタがあります。スウェーデンのバンド「The Cardigans」のデビューアルバム名です。語感の可愛らしさから拝借してしまいました。

あと、最後になりますが、「さよなら僕の、ミス・エマーデイル」を最後までお読み頂き、ありがとうございました。今こうして（本編に水を差すような）蛇足を連ねつつ、読んで下さった皆様への感謝の気持ちでいっぱいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7288e/>

---

さよなら僕の、ミス・エマーデイル

2010年10月8日15時45分発行